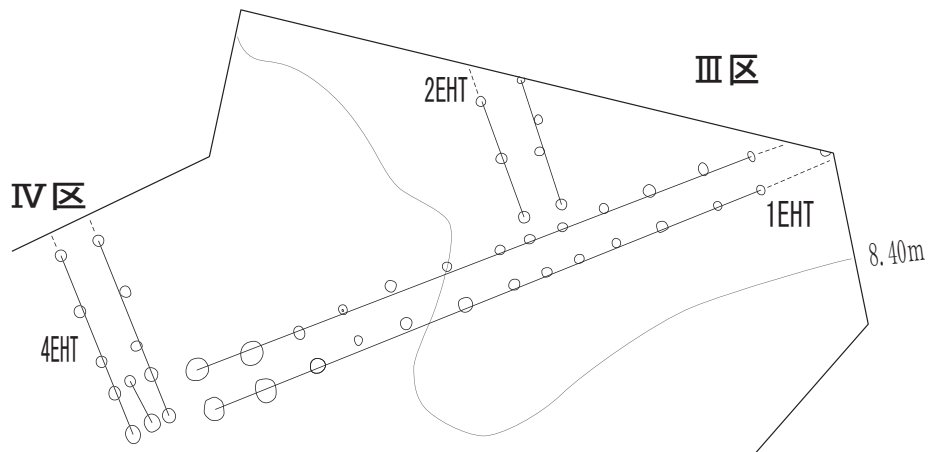


茨城県水戸市

水戸城跡 (第88次)

— 共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



2021

水戸市教育委員会

茨城県水戸市

水戸城跡 (第88次)

— 共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



2021

水戸市教育委員会



調査区空撮（東から）



Ⅱ区第1号近代礎石建物構築状況（西から）



Ⅱ区第7A号幕末明治土坑遺物出土状況（北から）



Ⅲ区第1・3・4号江戸掘立柱建物木杭検出状況（北西から）



Ⅳ区第1号江戸二面カワラケ集積遺構出土状況（南から）

口絵2



近代配管復元（土管・煉瓦 1KDH・1KRM）



推定復元井戸枠（8BMD）



漆器（7BBMD・調査区外・8BMD）



江戸前期カワラケ（1E2KS）



江戸後期カワラケ（7ABMD）



大堀相馬焼糞釉鉢（9BMD）



七面焼菓子鉢（7BBMD）



松岡焼土瓶・土瓶蓋（3BMD）



同安窯・肥前鉄絵青磁

ごあいさつ

水戸城跡は日本 100 名城のひとつにも数えられ、その起源は鎌倉時代の初め、常陸平氏の流れを汲む馬場資幹が、那珂川と千波湖に挟まれた台地の東端に居館を構えたことに遡ります。

その後、江戸氏、佐竹氏が水戸城を本拠地として城域を拡大し、江戸時代に水戸徳川家が城を整備して以降、周囲の城下町とともに、地域社会の政治・経済の中心地として発展してまいりました。

水戸城跡におきましては、これまでかつての水戸城二の丸内に位置する市立第二中学校の校舎改築工事や、北三の丸内の中山備前守屋敷跡地に位置する法務局改築工事等に際して多くの発掘調査が行われてきております。

近年、水戸駅周辺では、更なる市街地化が増す一方で、都市化と文化財保護との両立が行政としても大きな課題として懸念されるところでありますが、本市においてもその意義や重要性を踏まえ、歴史的風致維持向上計画に基づく重点区域の設定や文化財保護法並びに関係法令に基づき近世水戸城の景観保全や埋蔵文化財の保護・保存に努めているところです。

本書は、水戸藩家臣の朝比奈弥太郎の武家屋敷に推定されている場所において、共同住宅建設が計画され、記録保存を目的として実施した発掘調査の報告書です。今回の調査は、水戸市内の低地部に立地する武家屋敷の調査では市内で初めての調査事例となります。

発掘調査では、近世から近代の武家屋敷の築造にかかわる多くの建物や井戸跡、廃棄土坑（ごみ穴）が確認されるとともに、明治時代、水戸の近代化に大きな貢献を果たした川崎八右衛門が興した「川崎組」の倉庫群とみられる基礎遺構が当時の写真や絵図と全く同じ状況で姿を現しました。

こうした調査結果は、まさしく江戸時代から幕末、近代へと水戸が目まぐるしく変遷していく過程を今に伝える大変貴重な成果とすることができます。

最後になりましたが、発掘調査の実施に当たり、多大な御理解と御協力をいただきました野村不動産株式会社様や地域の皆様をはじめ、関係各位に心から感謝の意を表します。同時に本書が学術研究はもとより、市民の皆様の郷土愛を醸成し、水戸ならではの歴史を発信するための礎となれば幸いです。

令和 3 年 7 月

水戸市教育委員会
教育長 志田 晴美

例 言

- 1 本書は、共同住宅建設工事に伴う水戸城跡第 88 次調査の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、水戸市教育委員会による試掘調査に基いて、当該開発箇所が周知の埋蔵文化財包蔵地「水戸城跡（201－172）」に該当することから、1,166㎡を調査対象とした。
- 3 調査にあたり、野村不動産株式会社住宅事業本部、水戸市教育委員会、関東文化財振興会株式会社（代表取締役 宮田和男）三者で協定書を交わした。
- 4 発掘調査組織は下記の通りである。
調査担当者 河野一也（関東文化財振興会株式会社）
本多 清峰（水戸市教育委員会教育長・～令和 2 年 10 月 4 日まで）
志田 晴美（水戸市教育委員会教育長・令和元年 12 月 28 日から）
事務局
増子 孝伸（水戸市教育委員会事務局教育部長）
白石 嘉亮（水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化財課長・～令和 3 年 3 月 31 日まで）
小川 邦明（水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化財課長・令和 3 年 4 月 1 日から）
川口 武彦（水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化財課埋蔵文化財センター所長）
米川 暢敬（同主幹）
新垣 清貴（同主幹）
廣松 滉一（同文化財主事）
太田 勇陽（同文化財主事・～令和 3 年 3 月 31 日まで）
丸山 優香里（同埋蔵文化財専門員・～令和 3 年 3 月 31 日まで・～令和 3 年 4 月 1 日から同文化財主事）
松浦 史明（同埋蔵文化財専門員）
外山 綾乃（同埋蔵文化財専門員・～令和 2 年 5 月 30 日まで）
有田 洋子（同会計年度任用職）
昆 志穂（同会計年度任用職）
庄司 優（同会計年度任用職）
- 5 発掘調査は、令和 2 年 1 月 16 日から令和 2 年 4 月 24 日まで行い、整理作業、報告書作成は関東文化財振興会株式にて令和 2 年 5 月 12 日に開始し、令和 3 年 7 月の報告書刊行をもって終了した。
- 6 本調査における出土遺物及び実測図・写真等は水戸市教育委員会が保管している。
- 7 本報告書の執筆は第 1 章第 1 節、第 2 章は新垣清貴が、他は水戸市教育委員会の指導のもと河野一也が執筆した。なお、第 5 章第 4 節はパリノ・サーヴェイ株式会社橋本真紀夫、石田智也氏に依頼した。
- 8 本書の編集は河野一也が担当した。
- 9 出土陶磁器類の同定については、堀内秀樹、惟村忠志、水本和美、関口慶久の 4 氏にお願いした。
- 10 発掘調査から報告書作成まで、下記の方々や諸機関からご指導・ご協力を賜った。記して感謝申し上げます。（敬称略・順不同）

大橋泰夫, 小澤重雄, 小川貴行, 大澤伸啓, 川崎善保, 斎藤進, 坂上直嗣, 蓼沼香未由, 戸塚和美, 塚本和弘, 水野順敏, 山品尊, 株式会社アルファ, 合同会社あぐりサポートおぎや, 太平洋セメント, 東新建設株式会社, パリノ・サーヴェイ, 江別市セラミックアートセンター, 日新塾精神顕揚会

11 調査参加者（順不同）

（発掘調査） 阿部武夫 谷川明正 飛田けい子 鈴木めぐみ 三浦睦子 長峰和行
関沢昌宏 高野正行 坂場光雄 清水 昊 白戸和夫 佐久間弘美
石崎靖也 川崎剛史 菅谷末吉 角谷秀夫 郡司ゆき子 川又恵美子
高野航太郎

（整理作業） 大越恵子 平井百合子 遠藤香織 二戸捷幸 西川忠春 田口睦子
伊東美華 奥津万紀子

凡 例

- 1 本書に記してある座標値は世界測地系第IX系を用いている。方位は座標北を示す。
- 2 本文中の色調表現は『新版標準土色帳』2008年度版（農林水産省水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）を用いた。
- 3 標高は海拔標高である。
- 4 掲載した図面の基本縮尺は以下の通りである。
遺構図：水戸城跡周辺遺跡地図 1/25,000 全体図 1/400 遺構図 1/60 ただし、変則的な縮尺を用いた場合はスケールによってその縮尺を示した。
遺物図：原則 1/3 とした。ただし、種類や大きさにより異なる場合は個々に縮尺を表示した。
- 5 本報告書に用いた遺構及び遺物実測図等で使用した記号・表示は、下記のとおりである。
○：陶器 ●：磁器 □：土師質土器 ■：瓦質土器 ◇：かわらけ
◆：木製品 ▽：石製品 ▼：土製品 ■：瓦 ■：煉瓦 ●：土管
▲：金属製品 ×：ガラス・ビン ☆：舶載品
■ 20%：杭・I層（昭和20年空襲による焼土・炭化物層）
■ 40%：礎石
- 6 今回の調査では遺構面（生活面）が層位的に検出されることが予想されたため、遺構確認面と層と時代を想定して略称を使用した。遺物については基本的に位置図を作成したため略図を使用した。
- 7 遺物観察表の表記では（ ）は現存値 []は推定値を示した。材質については、「土器」は胎質で細分し、「土師質土器」「瓦質土器」とした。「炆器」は万古焼や無施釉の焼締陶器を目安とした。「陶器」と「磁器」については、分類したが種類に応じて「陶胎染付」と表示した。器種については、「かわらけ（カワラケ）」は平仮名が中世、片仮名が近世とした。陶磁器類は可能な限り、肥前や瀬戸・美濃等の生産地に分類した。

生活面と遺構名

	一面現代 (9.6 m)	二面近代 II層 (9.0 m)	三面幕末明治 III層 (8.6 m)	四面江戸一面 IV層 (8.2 m)	五面江戸二面 V層 (7.9m)	七面江戸四面 VI層 (7.2m)	
I区	現代整地層	4号K S T				造成遺構	
II区	1号GHD	1号K S T	1 A号BMD	1号EHR	1号E 2 S R	E4 ~ E 8面	
	2号GHD	3号K S T	1 B号BMD	2号EHR	1号E 2 K A		
	3号GHD	1号K S	2号BMD	3号EHR	2号E 2 K A		
		2号K S	3号BMD	4号EHR	3号E 2 K A		
		3号K S	4 A号BMD	5号EHR	1号E 2 K I		
		1号K D H	4 B号BMD	1号E M	2号E 2 K I		
		1号K R M	4 C号BMD	2号E M	3号E 2 K I		
		1号K H D	4 D号BMD	1号E D			
		2号K H D	5号BMD	2号E D			
		3号K H D	6号BMD				
		4号K H D	7 A号BMD				
		1号K M N	7 B号BMD				
		2号K M N	8号BMD				
		1号K H S	9号BMD				
			10号BMD				
		11号BMD					
		1号B M M					
		1号B M M S					
		1号B M K A					
		2号B M K A					
III区		2号K S T	1号B M R	1号E H T	1号E 2 H R	1号E4 S G	
		5号K S T	1号B M S	2号E H T	1号E 2 D	1号E4 Z	
		1号K S	1号B M D	3号E H T	2号E 2 D		
		2号K S		4号E H T	3号E 2 D		
		1号K H D		1号E H R			
		1号K K A		2号E H R			
		2号K K A		3号E H R			
				1号E M S			
			2号E M S				
IV区		6号K S T		1号E H R	1号E 2 K S		
		1号K S		2号E H R	1号E 2 K A		
		1号K I D		1号E I D	2号E 2 K A		
					1号E 2 K I		
				2号E 2 K I			
				3号E 2 K I			
略号	GHD (現代廃棄土坑)	K S T (近代礎石建物) K S (近代礎石) K I D (近代井戸) K D H (近代土管配管) K R M (近代煉瓦拵) K H D (近代廃棄土坑) K M N (近代理納遺構) K M S (近代理設遺構) K H S (近代配石遺構) K K A (近代小穴)					
		B M D (幕末明治土坑) B M M (幕末明治溝) B M M S (幕末明治埋設遺構) B M K A (幕末明治小穴) B M H R (幕末明治柱列) B M S (幕末明治礎石)		E H R (江戸1面礎石列) E D (江戸1面土坑) E M (江戸1面溝) E H T (江戸1面掘立柱建物) E M D (江戸1面埋設土坑) E I D (江戸1面井戸) E M S (江戸1面埋設遺構) E S T (江戸1面礎石建物)			
				E 2 S R (江戸2面礎石列) E 2 H R (江戸2面柱列) E 2 D (江戸2面土坑) E 2 K S (江戸2面カワラケ集積) E 2 K A (江戸2面小穴) E 2 K I (江戸2面杭)			
					E4 S G (江戸4面筋遺構)	E4 Z (江戸4面造成遺構)	

目次

ごあいさつ

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	2
1 発掘調査	2
2 整理作業	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
1 水戸城の沿革	3
2 水戸城跡周辺遺跡における歴史的環境	4
第3節 水戸城における既往の調査	8
第3章 基本層序と遺構面	15
第1節 基本層序	15
I区の基本層序	15
II区の基本層序	15
III区の基本層序	15
IV区の基本層序	15
II～IV区の様相	17
第4章 各面の遺構と遺物	21
第1節 現代面の遺構と遺物	21
第2節 近代面の遺構と遺物	24
第3節 幕末明治面の遺構と遺物	55
第4節 江戸一面の遺構と遺物	86
第5節 江戸二面の遺構と遺物	99
第6節 水戸城造成に関わる遺構と遺物	105
第7節 遺構外出土遺物	111
第5章 総括	112
第1節 出土遺物の様相	112
第2節 確認された遺構と生活面の様相	123
第3節 古地図からみた幕末から現代までの土地利用の変遷	127
第4節 自然科学分析	131
第5節 おわりに	157
遺構別土層説明	160
抄録	

挿 図 目 次

第1図 水戸城跡周辺の遺跡分布図 …………… 6	第42図 第1号近代配石出土遺物実測図 …………… 43
第2図 水戸城跡(第88次)調査区全体図 …… 14	第43図 第2号近代礎石建物実測図 …………… 44
第3図 基本土層Ⅰ区(1)…………… 16	第44図 第2号近代礎石建物出土遺物実測図 …… 45
第4図 基本土層Ⅰ区(2)…………… 17	第45図 第5号近代礎石建物実測図 …………… 46
第5図 基本土層Ⅱ区 ……………… 18	第46図 第1号近代礎石実測図 ……………… 46
第6図 基本土層Ⅲ区(1)…………… 19	第47図 第2号近代礎石実測図 ……………… 47
第7図 基本土層Ⅲ区(2)…………… 20	第48図 第1号近代廃棄土坑および第1・2号小穴実測図 …… 47
第8図 現代面全体図 ……………… 21	第49図 第1号近代廃棄土坑出土遺物実測図 …… 48
第9図 第1号現代廃棄土坑実測図 ……………… 22	第50図 第1号小穴出土遺物実測図 ……………… 49
第10図 第2号現代廃棄土坑実測図 ……………… 23	第51図 第6号近代礎石建物実測図 ……………… 50
第11図 第3号現代廃棄土坑実測図 ……………… 24	第52図 第1号近代礎石実測図 ……………… 50
第12図 近代面全体図 ……………… 24	第53図 第1号近代井戸実測図 ……………… 51
第13図 第4号近代礎石建物実測図 ……………… 25	第54図 第1号近代井戸出土遺物実測図(1)… 52
第14図 第1号近代礎石建物実測図 ……………… 26	第55図 第1号近代井戸出土遺物実測図(2)… 53
第15図 第1号近代礎石建物出土遺物実測図(1)… 27	第56図 出土煉瓦実測図(1)…………… 54
第16図 第1号近代礎石建物出土遺物実測図(2)… 28	第57図 出土煉瓦実測図(2)…………… 55
第17図 第3号近代礎石建物実測図 ……………… 29	第58図 幕末明治面全体図 ……………… 55
第18図 第3号近代礎石建物出土遺物実測図 …… 30	第59図 第1A・B号幕末明治土坑実測図 …… 56
第19図 第1号近代礎石実測図 ……………… 31	第60図 第1A号幕末明治土坑出土遺物実測図 …… 56
第20図 第1号近代礎石出土遺物実測図 ……………… 31	第61図 第2号幕末明治土坑・出土遺物実測図 …… 57
第21図 第2号近代礎石実測図 ……………… 31	第62図 第3号幕末明治土坑実測図 ……………… 57
第22図 第2号近代礎石出土遺物実測図 ……………… 32	第63図 第3号幕末明治土坑出土遺物実測図(1)… 58
第23図 第3号近代礎石実測図 ……………… 32	第64図 第3号幕末明治土坑出土遺物実測図(2)… 59
第24図 第3号近代礎石出土遺物実測図 ……………… 33	第65図 第3号幕末明治土坑出土遺物実測図(3)… 60
第25図 第1号近代土管配管及び第1号近代煉瓦 枘実測図 ……………… 34	第66図 第4A・B・C・D号幕末明治土坑実測図(1)… 61
第26図 第1号近代土管配管出土遺物実測図(1)… 35	第67図 第4A・B・C・D号幕末明治土坑実測図(2)… 62
第27図 第1号近代土管配管出土遺物実測図(2)… 36	第68図 第4A号幕末明治土坑出土遺物実測図 …… 63
第28図 第1号近代煉瓦枘出土遺物実測図 …… 36	第69図 第4B号幕末明治土坑出土遺物実測図 …… 64
第29図 第1号近代廃棄土坑実測図 ……………… 36	第70図 第4C号幕末明治土坑出土遺物実測図(1)… 65
第30図 第1号近代廃棄土坑出土遺物実測図 …… 37	第71図 第4C号幕末明治土坑出土遺物実測図(2)… 66
第31図 第2号近代廃棄土坑実測図 ……………… 38	第72図 第4D号幕末明治土坑出土遺物実測図(1)… 67
第32図 第2号近代廃棄土坑出土遺物実測図 …… 38	第73図 第4D号幕末明治土坑出土遺物実測図(2)… 68
第33図 第3号近代廃棄土坑実測図 ……………… 39	第74図 第5号幕末明治土坑・出土遺物実測図 …… 69
第34図 第3号近代廃棄土坑出土遺物実測図(1)… 40	第75図 第6号幕末明治土坑実測図 ……………… 70
第35図 第3号近代廃棄土坑出土遺物実測図(2)… 41	第76図 第7A・B号幕末明治土坑実測図 …… 71
第36図 第4号近代廃棄土坑実測図 ……………… 41	第77図 第7A号幕末明治土坑出土遺物実測図(1)… 72
第37図 第1号近代埋納遺構実測図 ……………… 42	第78図 第7A号幕末明治土坑出土遺物実測図(2)… 73
第38図 第2号近代埋納遺構実測図 ……………… 42	第79図 第7B号幕末明治土坑出土遺物実測図(1)… 74
第39図 第1号近代埋納遺構出土遺物実測図 …… 42	第80図 第7B号幕末明治土坑出土遺物実測図(2)… 75
第40図 第2号近代埋納遺構出土遺物実測図 …… 42	第81図 第8号幕末明治土坑実測図 ……………… 76
第41図 第1号近代配石実測図 ……………… 43	第82図 第8号幕末明治土坑出土遺物実測図(1)… 77
	第83図 第8号幕末明治土坑出土遺物実測図(2)… 78

第84図	第8号幕末明治土坑出土遺物実測図(3) …	79	第117図	第1号江戸井戸実測図 ……………	98
第85図	第9号幕末明治土坑実測図 ……………	80	第118図	第1号江戸井戸出土遺物実測図 ………	98
第86図	第9号幕末明治土坑出土遺物実測図 …	81	第119図	江戸二面全体図 ……………	99
第87図	第10号幕末明治土坑実測図 ……………	82	第120図	第1号江戸二面礎石列実測図 ……………	99
第88図	第10号幕末明治土坑出土遺物実測図 …	82	第121図	第1～3号江戸二面小穴および第1～3号 江戸二面杭実測図 ……………	100
第89図	第11号幕末明治土坑実測図 ……………	82	第122図	第1号江戸二面柱列実測図 ……………	101
第90図	第1号幕末明治溝実測図 ……………	83	第123図	第1号江戸二面土坑実測図 ……………	101
第91図	第1号幕末明治埋設遺構実測図 ………	83	第124図	第2号江戸二面土坑実測図 ……………	102
第92図	第1号幕末明治埋設遺構出土遺物実測図 …	83	第125図	第3号江戸二面土坑実測図 ……………	102
第93図	第1・2号幕末明治小穴実測図 ………	84	第126図	第1号江戸二面カワラケ集積遺構実測図 …	102
第94図	第1号幕末明治柱列・第1号幕末明治 礎石実測図 ……………	85	第127図	第1号江戸二面カワラケ集積遺構出土遺物実測図 …	103
第95図	第1号幕末明治柱列出土遺物実測図 …	85	第128図	第1・2号江戸二面小穴実測図 ………	104
第96図	第1号幕末明治土坑実測図 ……………	86	第129図	第1～3号江戸二面杭実測図 ………	104
第97図	第1号幕末明治土坑出土遺物実測図 …	86	第130図	江戸造成面全体図 ……………	105
第98図	江戸一面全体図 ……………	86	第131図	Ⅱ区江戸造成遺構土層図 ……………	106
第99図	第1～5号江戸柱列実測図 ……………	87	第132図	Ⅲ区江戸造成遺構土層図 ……………	107
第100図	第1～3号江戸柱列出土遺物実測図 …	88	第133図	江戸造成遺構出土遺物実測図 ………	108
第101図	第1・2号江戸溝実測図(1) ……………	89	第134図	第1号江戸四面藁殻遺構・粗朶遺構実測図 …	109
第102図	第1・2号江戸溝実測図(2) ……………	90	第135図	遺構外出土遺物実測図(1) ……………	110
第103図	第1号江戸土坑・出土遺物実測図 ………	91	第136図	遺構外出土遺物実測図(2) ……………	111
第104図	第2号江戸土坑実測図 ……………	91	第137図	土器・陶磁器類変遷図(1) ……………	114
第105図	第1号江戸掘立柱建物実測図 ……………	92	第138図	土器・陶磁器類変遷図(2) ……………	115
第106図	第2号江戸掘立柱建物実測図 ……………	92	第139図	土器・陶磁器類変遷図(3) ……………	116
第107図	第4号江戸掘立柱建物実測図 ……………	92	第140図	土器・陶磁器類変遷図(4) ……………	117
第108図	第3号江戸掘立柱建物実測図 ……………	94	第141図	煉瓦刻印位置図(1) ……………	121
第109号	第1号江戸柱列実測図 ……………	94	第142図	煉瓦刻印位置図(2) ……………	122
第110図	第2号江戸柱列実測図 ……………	95	第143図	遺構変遷図(1) ……………	124
第111図	第3号江戸柱列実測図 ……………	95	第144図	遺構変遷図(2) ……………	125
第112図	第1号江戸一面埋設遺構実測図 ………	95	第145図	遺構変遷図(3) ……………	126
第113図	第1号江戸一面埋設遺構出土遺物実測図 …	96	第146図	古地図変遷図(1) ……………	146
第114図	第2号江戸一面埋設遺構実測図 ………	96	第147図	古地図変遷図(2) ……………	147
第115図	第2号江戸一面埋設遺構出土遺物実測図 …	97	第148図	水戸城内における調査位置模式図 ……	158
第116号	第1・2号江戸柱列, 第1号礎石建物実測図 …	97	第149図	建物変遷図 ……………	159

表 目 次

第1表	水戸城跡周辺の遺跡一覧 ……………	7	第4表	煉瓦刻印一覧表 ……………	120
第2表	水戸城跡における既往の調査一覧 ……	11	第5表	遺物観察表 ……………	169
第3表	水戸藩関係窯業史年表 ……………	119	第6表	出土遺物集計表 ……………	181

写 真 目 次

<p>I 区土層（東から）…………… 16</p> <p>II 区西壁土層（東から），II 区南壁土層（北西から）… 17</p> <p>III 区南壁土層（北から），IV 区南壁土層（北から）… 21</p> <p>II 区現代面完掘状況（北東から）…………… 21</p> <p>II 区第 1 号現代廃棄土坑出土遺物…………… 22</p> <p>II 区第 1 号現代廃棄土坑土層（東から）…………… 23</p> <p>II 区第 2 号現代廃棄土坑土層（南東から）…………… 23</p> <p>II 区第 2 号現代廃棄土坑出土遺物…………… 23</p> <p>II 区第 3 号現代廃棄土坑完掘状況（東から）…… 24</p> <p>II 区第 3 号現代廃棄土坑出土遺物…………… 24</p> <p>II 区近代面完掘状況（北東から）…………… 24</p> <p>I 区第 4 号近代礎石建物基礎検出状況（西から）… 28</p> <p>II 区第 1 号近代礎石建物確認状況（北から）…… 28</p> <p>II 区第 1・3 号近代礎石建物構築状況（南東から）… 29</p> <p>II 区第 1・3 号近代礎石建物杭列検出状況（南東から）… 29</p> <p>II 区第 1 号近代礎石建物構築状況（西から）…… 29</p> <p>II 区第 3 号近代礎石建物確認状況（南東から）… 29</p> <p>II 区第 1 号近代礎石検出状況（北から）…………… 31</p> <p>II 区第 2 号近代礎石検出状況（北から）…………… 32</p> <p>II 区第 3 号近代礎石完掘状況（南から）…………… 32</p> <p>II 区第 1 号近代土管配管・第 1 号近代煉瓦枡完掘状況（北東から），II 区第 1 号近代土管配管・第 1 号近代煉瓦枡検出状況（北東から）…………… 33</p> <p>II 区第 1 号近代土管配管・第 1 号近代煉瓦枡出土状況（東から）…………… 36</p> <p>II 区第 1 号近代廃棄土坑完掘状況（西から）…… 37</p> <p>II 区第 1 号近代廃棄土坑遺物出土状況（西から）… 37</p> <p>II 区第 2 号近代廃棄土坑完掘状況（北から）…… 39</p> <p>II 区第 2 号近代廃棄土坑遺物出土状況（北から）… 39</p> <p>II 区第 3 号近代廃棄土坑完掘状況（北から）…… 39</p> <p>II 区第 3 号近代廃棄土坑遺物出土状況（南から）… 39</p> <p>II 区第 4 号近代廃棄土坑完掘状況（南から）…… 41</p> <p>II 区第 1 号近代埋納遺構検出状況（北から）…… 42</p> <p>II 区第 2 号近代埋納遺構検出状況（南から）…… 42</p> <p>II 区第 1 号近代配石出土状況（南から）…………… 43</p> <p>II 区第 1 号近代配石検出状況（南西から）…………… 43</p> <p>III 区第 2 号近代礎石建物全景（西から）…………… 43</p> <p>III 区第 2 号近代礎石建物杭検出状況（西から）… 45</p> <p>III 区第 2 号近代礎石建物大谷石出土状況（北から）… 45</p> <p>III 区第 5 号近代礎石建物検出状況（西から）…… 46</p> <p>III 区第 1 号近代礎石検出状況（南から）…………… 46</p> <p>III 区第 2 号近代礎石検出状況（北から）…………… 47</p>	<p>III 区第 1 号近代廃棄土坑・第 1・2 号小穴完掘状況（南から），III 区第 1 号近代廃棄土坑・第 1・2 号小穴遺物出土状況（南から）…………… 49</p> <p>IV 区第 6 号近代礎石建物完掘状況（北から）…… 50</p> <p>IV 区第 6 号近代礎石建物礎石構築状況（北西から）… 50</p> <p>IV 区第 1 号近代井戸側板検出状況（南から）…… 51</p> <p>IV 区第 1 号近代井戸確認状況（東から）…………… 51</p> <p>II 区幕末明治面完掘状況（東から）…………… 55</p> <p>II 区第 1 A・1 B 号幕末明治土坑完掘状況（北から）… 56</p> <p>II 区第 3 号幕末明治土坑土人形出土状況（南から）… 60</p> <p>II 区第 2 号幕末明治土坑完掘状況（東から）…… 60</p> <p>II 区第 3 号幕末明治土坑完掘状況（東から）…… 60</p> <p>II 区第 4 A～D 号幕末明治土坑完掘状況（東から）… 64</p> <p>II 区第 4 A・D 号幕末明治土坑遺物出土状況（西から）… 64</p> <p>II 区第 4 B 号幕末明治土坑遺物出土状況（東から）… 64</p> <p>II 区第 4 C 号幕末明治土坑遺物出土状況（西から）… 64</p> <p>II 区第 5 号幕末明治土坑完掘状況（南から）…… 70</p> <p>II 区第 6 号幕末明治土坑完掘状況・土層（東から）… 70</p> <p>II 区第 7 A～C 号幕末明治土坑完掘状況（南から）… 71</p> <p>II 区第 7 A 号幕末明治土坑遺物出土状況（北から）… 71</p> <p>II 区第 7 B 号幕末明治土坑遺物出土状況（南から）… 76</p> <p>II 区第 7 B 号幕末明治土坑出土カワラケ…………… 76</p> <p>II 区第 8 号幕末明治土坑完掘状況（東から）…… 76</p> <p>II 区第 8 号幕末明治土坑遺物出土状況（南から）… 76</p> <p>II 区第 9 号幕末明治土坑完掘状況（東から）…… 80</p> <p>II 区第 9 号幕末明治土坑遺物出土状況（東から）… 80</p> <p>II 区第 9 号幕末明治土坑遺物出土状況接写（東から）… 80</p> <p>II 区第 11 号幕末明治土坑土層（南から）…………… 82</p> <p>II 区第 1 号幕末明治溝完掘状況（東から）…………… 84</p> <p>II 区第 1 号幕末明治埋設遺構樽底検出状況（南から）… 84</p> <p>II 区第 1 号幕末明治小穴完掘状況（南から）…… 84</p> <p>III 区第 1 号幕末明治柱列・第 1 号幕末明治礎石完掘状況（西から）…………… 85</p> <p>III 区第 1 号幕末明治柱列確認状況（西から）…… 85</p> <p>III 区第 1 号幕末明治土坑完掘状況（南から）…… 86</p> <p>II 区江戸一面完掘状況（南東から）…………… 86</p> <p>II 区第 1～5 江戸号柱列完掘状況（北から）…… 89</p> <p>II 区第 1～4 江戸号柱列完掘状況（西から）…… 89</p> <p>II 区第 1 号江戸溝完掘状況（南から）…………… 90</p> <p>II 区第 2 号江戸溝完掘状況（南東から）…………… 90</p> <p>II 区第 1・2 号江戸土坑完掘状況（南西から）… 91</p> <p>III 区第 1・2・4 江戸掘立柱建物完掘状況（北西から）… 93</p>
--	---

Ⅲ区第1号江戸掘立柱建物B12完掘状況(南から) … 93	Ⅱ区第1号江戸二面小穴完掘状況(東から) …… 100
Ⅲ区第1・3・4号江戸掘立柱建物木杭検出状況(北西から) … 93	Ⅱ区第3号江戸二面小穴完掘状況(南から) …… 100
Ⅲ区第2号江戸掘立柱建物完掘状況(南から) … 93	Ⅱ区第1号江戸二面杭確認状況(南から) …… 101
Ⅲ区第4号江戸掘立柱建物完掘状況(南から) … 93	Ⅱ区第2号江戸二面杭完掘状況(南から) …… 101
Ⅲ区第4号江戸掘立柱建物A～C1土層(南東から) … 93	Ⅲ区第1号江戸二面柱列完掘状況(北から) …… 101
Ⅲ区第3号江戸掘立柱建物完掘状況(東から) … 94	Ⅲ区第1号江戸二面土坑完掘状況(南から) …… 102
Ⅲ区第3号江戸掘立柱建物A2掘方(南から) … 94	Ⅲ区第2号江戸二面土坑完掘状況(南から) …… 102
Ⅲ区第1・2号江戸柱列完掘状況(北西から) … 95	Ⅲ区第3号江戸二面土坑完掘状況(東から) …… 102
Ⅲ区第3号江戸柱列確認状況(西から) …… 95	Ⅳ区第1号江戸二面カワラケ集積遺構遺物出土状況(南から) … 102
Ⅲ区第1号江戸一面埋設遺構枳板検出状況(南から) … 96	Ⅳ区第1号江戸二面カワラケ集積遺構出土遺物(1) … 104
Ⅲ区第1号江戸一面埋設遺構枳底出土状況(南から) … 96	Ⅳ区第1号江戸二面カワラケ集積遺構出土遺物(2) … 104
Ⅳ区第1号江戸柱列完掘状況(西から) …… 98	Ⅲ区江戸四面拡張区全景(南西から) …… 105
Ⅳ区第1号江戸礎石建物完掘状況(南から) …… 98	Ⅱ区江戸造成遺構東壁土層(南西から) …… 105
Ⅳ区第1号江戸井戸完掘状況(南から) …… 98	Ⅲ区江戸造成遺構葦葎遺構遺物出土状況(西から) … 105
Ⅳ区第1号江戸井戸側板検出状況(北から) …… 98	セメント袋反転写真 …… 123
Ⅱ～Ⅳ区江戸二面完掘状況(西から) …… 99	Ⅰ区第4号近代礎石建物杭打ち込み下端 …… 157
Ⅱ区第1号江戸二面礎石列完掘状況(北から) … 99	Ⅱ区造成砂利層 …… 157

写 真 図 版

- 図版1 Ⅰ区切土整地面(南から) Ⅰ区切土整地土層(南東から) Ⅱ区南壁土層(北から) Ⅱ区西壁土層(東から) Ⅱ区北壁土層西側(南から) Ⅱ区北壁土層東側(南から) Ⅲ区北壁土層(南から) Ⅱ区東壁北側土層(西から)
- 図版2 Ⅱ区東壁土層南側(北西から) Ⅰ区第4号近代礎石建物盛土に打込まれた杭(西から) Ⅱ区第1号近代礎石建物・第1号近代煉瓦枱現代面状況(南東から) Ⅱ区第1号近代礎石建物近代面状況(南東から) Ⅱ区第1号近代礎石建物構築状況(南から) Ⅱ区第1号近代礎石建物西側建物内部(北から) Ⅱ区第1・3号近代礎石建物連結部(南から) Ⅱ区第1・3号近代礎石建物連結部大谷石立石(南東から)
- 図版3 Ⅱ区第1・3号近代礎石建物連結部枕木合わせ・松杭(南東から) Ⅱ区第1号近代礎石大谷石立石(北から) Ⅱ区第1号近代礎石松杭(西から) Ⅱ区第1号近代土管配管・第1号煉瓦枱検出状況(北東から) Ⅱ区第1号近代土管配管・第1号煉瓦枱連結状況(東から) Ⅱ区第1号近代煉瓦枱検出状況(上から) Ⅱ区第1号近代煉瓦枱底配石(上から) Ⅱ区第1号近代煉瓦枱基礎(上から)
- 図版4 Ⅱ区第1号近代煉瓦枱周囲白色粘土(東から) Ⅱ区第1号近代廃棄土坑遺物出土状況(南から) Ⅲ区第2号近代礎石建物現代面(西北から) Ⅲ区第2号近代礎石建物(北から) Ⅳ区第1号近代井戸上部コンクリート・第2号近代礎石建物(北西から) Ⅳ区第1号近代井戸掘方(西から) Ⅳ区第6号近代礎石建物松杭(北から) Ⅱ区第3号幕末明治土坑断面(東から)
- 図版5 Ⅱ区第3号幕末明治土坑遺物出土状況(東から) Ⅱ区第4C号幕末明治土坑遺物出土状況(東から) Ⅱ区第4C号幕末明治土坑摺鉢出土状況(東から) Ⅱ区第7A号幕末明治土坑遺物出土状況(上から) Ⅱ区第7B号幕末明治土坑漆器椀出土状況(上から) Ⅱ区第7B号幕末明治土坑陶器出土状況(上から) Ⅱ区第8号幕末明治土坑中層遺物出土状況(東から) Ⅱ区第1～5号江戸柱列全景(西から)
- 図版6 Ⅲ区第1・2・4号江戸掘立柱建物, 第1・2号江戸柱列全景(東から) Ⅳ区第1号江戸井戸枳断面(北から) Ⅱ区造成遺構設定(北から) Ⅱ区造成遺構東壁土層(北から) Ⅲ区造成遺構設定(北から) Ⅲ区造成遺構西壁土層(南東から) Ⅲ区造成遺構Ⅳ層葦葎遺構(西から) Ⅲ区造成遺構Ⅵ3層上面(西から)
- 図版7 Ⅲ区造成遺構Ⅵ3層遺物出土状況(北西から) Ⅲ区造成遺構Ⅵ3層上面(南西から) Ⅲ区造成遺構Ⅶ3①層上面(南西から) 江戸二面近代礎石建物杭列(東から) 江戸二面近代礎石建物杭列(西から) 江戸期蔵(上から) 調査区上空から二の丸を望む(南から) 出土遺物検討会

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成31（2019）年3月26日付けで、共同住宅建設に伴い、パラカ株式会社 代表取締役 内藤 亨から水戸市教育委員会（以下「市教委」という）あて、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」（教埋第1571）の照会があった。

照会地である水戸市三の丸三丁目21番1の一部地内は、周知の埋蔵文化財包蔵地「水戸城跡」の範囲内に該当しており、近世の水戸城周辺の古地図から水戸藩家臣の朝比奈弥太郎の屋敷地に比定される位置であった。平成31（2019）年4月5日付けで市教委は事業者あて、周知の埋蔵文化財包蔵地に該当しており、文化財保護法（以下「法」という。）第93条第1項の規定により茨城県教育委員会（以下「県教委」という。）あて届出を提出する必要があること、遺跡の発掘調査を必要とする場合には原因者の協力をお願いとする旨回答した（教埋第1571号）。

同時に市教委は事業者に地下に近世の武家屋敷遺構が存在する可能性が想定されることから、試掘調査の実施について協議を行い、令和元（2019）年6月18日から令和元（2019）年6月27日にかけて断続的に試掘調査を実施した。調査の結果、近代の倉庫の基礎遺構のほか、近世の土坑、礎石、盛土遺構が多数確認された。

市教委は、令和元（2019）年7月9日付けで、パラカ株式会社 代表取締役 内藤 亨（以下「事業者①」）あて試掘調査結果の回答を提出した（教埋第1572号）。

市教委は事業者①と確認された埋蔵文化財の保護措置について協議を数回に渡って行ったが、事業内容が高層階のマンションであり、構造上、改良工事が地中深くまで及ぶため、設計変更は困難であるとの結論に達し、原因者の費用負担による記録保存を目的とした本発掘調査を行う方向で合意が図られた。

その後、令和元（2019）年10月30日付けで事業者 野村不動産株式会社 住宅事業本部 事業開発四部長 橋本 忠治（以下「事業者②」という。）から埋蔵文化財発掘の届出が提出された。市教委はこの届出に意見書を付して県教委あて進達した。これを受けて、県教委から令和元（2019）年11月19日付け文第2412号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」にて工事着手前に発掘調査を実施すること、調査の結果、重要な遺構等が確認された場合にはその保存等について別途協議をする旨、勧告があった。

これを受けて事業者②は、令和元（2019）年12月18日に関東文化財振興会株式会社（以下「調査機関」という。）と発掘調査業務委託契約を締結するとともに、令和元（2019）年12月20日に調査機関及び市教委と発掘調査実施に係る三者協定を締結した。調査機関は法92条第1項の規定により、令和元（2019）年12月27日付け「埋蔵文化財発掘調査の届出について」（教埋第1024号）を県教委あて提出し、その後県教委から調査機関へ令和2（2020）年1月7日付け文第2938号「埋蔵文化財の発掘調査について（通知）」にて、適切に発掘調査を実施するよう指示があった。

以上のような経過のもと、当該調査を水戸城跡第88次調査として、令和2（2020）年1月14日から令和2（2020）年4月24日の期間に発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の方法と経過

1 発掘調査

調査区はⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区に区分し搬出の関係から水郡線側にあるⅠ区から開始し、搬出口のⅣ区を最後にし、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区の順に調査した。また、時代の重層する遺跡であることが試掘調査から想定されたため、基本層位も試掘調査のⅠ・Ⅱ・Ⅲ層を基本にした。基本層位の各面が出土遺物を含めて時代の生活面として捉えられるように配慮した。

Ⅰ区は令和2（2020）年1月17日から客土の掘削を開始したが大半が戦後の建物の解体によるコンクリート躯体により破壊されていた。唯一東壁に近代礎石建物の下部構造の打込まれた松杭が確認された。また、標準層序としての自然層が確認され、水戸城築城に関わる切土整地と盛土整地の境目と考えられる。3月12日に埋め戻した。

Ⅱ区は1月20日から客土除去を開始し、Ⅰ層の水戸大空襲の焼土層とⅡ層の近代整地層を除去した面を1面とした。焼土層を切込んでいる遺構を一面の現代面とした。Ⅱ層中に近代礎石建物の大谷石の天端、土管の配管・煉瓦桁が確認されたため二面の近代面とした。Ⅲ層上面では廃棄土坑を確認した。この面を幕末明治面とした。3月19日には幕末明治面を終了した。Ⅳ層は盛土した硬化面で上面を江戸一面とした。Ⅴ層上面も盛土の硬化面で江戸二面とした。4月6日に終了した。

Ⅲ区は1月22日から客土除去を開始した。Ⅱ区と同様で各層と生活面を考慮して調査を実施し、4月2日に終了し江戸三面の確認を行ったが遺構は確認されなかった。これによって下層は盛土整地による造成工事工程で生活面ではないことが分かった。

Ⅳ区は3月17日から客土除去を開始した。出入口であったため、Ⅳ層上面の江戸一面生活面を確認した。Ⅴ層上面の江戸二面の硬化面からカワラケが纏まって出土した。遺構としての掘り込みはなく整地層の上に廃棄されていた。この行為は造成工事の所業であろう。したがって生活面としては江戸一面までと考える。4月8日に終了した。

4月8日からはⅡ・Ⅲ区に土地造成の状況確認のための試掘坑の調査を行った。Ⅱ区では江戸八面まで確認した。以下は崩落等が危険なため機械により掘削し現地表面から約5.0m下のシルト質基盤層を確認した。Ⅲ区は江戸八面まで記録し、江戸四面では造成に伴う技術的な葺殻遺構や造成過程やそれに伴う遺物が出土した。

4月24日には埋戻しを完了し調査を終了した。

2 整理作業

整理作業は、令和2（2020）年5月1日～令和3（2021）年7月29日で実施した。

整理作業の経過は、コロナ禍のため業務調整をしながら、遺物洗浄・注記・接合を5月1日から7月31日まで、これと並行して遺物実測を6日5日から8月21日まで、遺構図面の修正を9月2日から10月23日まで、原稿執筆を5月11日から2月26日まで、遺物写真撮影を10月5日から12月21日まで、版下作成とトレースを10月7日から2月22日まで、レイアウトなど図版編集を2月8日から2月26日まで、校正を3月1日から7月29日まで行った。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

水戸市は関東平野の北東部に位置する。市域の北部には、八溝山地を横切り、鷺子山塊と鶏足山塊とを南北に分ち、西から東へ流れる那珂川とその支流による沖積低地が広がり、これに沿うように東茨城台地が太平洋に向かって突き出している。東茨城台地はその西端で八溝山地の外縁にあたる丘陵へとつづいている。

その下流域右岸の大半を水戸市域とする那珂川は、栃木県的那須連峰を源流として、八溝山地の西縁を南へ流れた後、烏山の南から方向を東に変えて八溝山地を横断し、今度は御前山を背にして南東へ方向を変えて那珂台地と東茨城台地との間を太平洋に向かって流れ出る。この那珂川の存在により、栃木県域に広がる那須野原や喜連川など内陸部と太平洋沿岸部とが、水上交通に結ばれることから、歴史的に水戸市域が交通の要衝地になることが多かった。

東茨城台地のうち水戸市域にあたる部分を水戸台地と呼ぶことがある。水戸台地は支谷によって北西から上市台地、見和台地、千波台地、吉田台地と呼称される。

水戸台地の地質は、しばしば水戸層と呼ばれる第三紀層（凝灰岩質泥岩層）を基盤岩とし、その上部に、砂、礫、シルトで構成される見和層、上市礫層が続く。上市礫層は、約12.5万年前の最終間氷期最盛期における、いわゆる下末吉海進からの離水過程で堆積したものである。これらを最下部に赤城水沼テフラ群を伴う火山灰で構成されたいわゆる関東ローム層が被覆し、現在の台地が形成された。

水戸城跡はいわゆる上市台地の南東端に立地する。ここは、那珂川とその支流である桜川との間に挟まれた舌状に突き出た突端にあたる。面する沖積低地との比高差は25.0 m程である。この低地から樹枝状に入り込んだ谷地形を巧みに開削し城郭を構成している。今回の調査地は西側の千波湖に面している。

第2節 歴史的環境

1 水戸城の沿革

水戸城は12世紀末から13世紀初頭頃、常陸平氏の惣領大掾氏一族の馬場資幹が、上市台地の突端に居館を構えたのが嚆矢とされる。資幹は大掾氏嫡流の多気義幹が建久4（1193）年に失脚後、建保2（1214）年に常陸大掾職を襲い、名実ともに常陸平氏の惣領となって常陸府中と馬場（水戸）に拠点を築いたといわれる。

応永23（1416）年に起こった上杉禅秀の乱で、当主の大掾満幹は上杉禅秀側に加担したが、幕府側に就いた江戸通房に敗れた。応永33（1426）年に河和田城を本拠として勢力を拡大していた江戸通房が満幹不在を狙って水戸城を奪取し、水戸地域の覇権を握った。それ以後7代（約160年間）続いた。江戸氏は水戸城二の丸の整備に着手したらしく、

江戸氏の居館しての本丸を「内城」、一族重臣の屋敷地と「市」の設けられた二の丸を「宿城」と呼称した。

永正7（1510）年、江戸通雅・通泰親子の時代には主家と同格の地位を得たが、江戸氏は度々主家である佐竹氏と対立し、常陸南部にも進出し府中を脅かすまでになった。

天正18（1590）年、豊臣秀吉による小田原攻めの際に江戸通房は北条氏側に加担し、佐竹義重・善宣親子は秀吉軍に参陣した。これにより佐竹氏は秀吉から常陸一国54万石を安堵された。義重・善宣親子は籠城する江戸氏を攻め、江戸通房を敗走させた。常陸一国を統一した善宣は、それまでの居城であった太田城から水戸城に本拠を移した。善宣はすぐに城郭と城下の大規模な普請を行ったという。近世城郭の水戸城の原型ができあがった。このとき、城名も馬場城（馬場館）から水戸城に改めたといわれる。

慶長5（1600）年の関ヶ原の戦いでは、善宣は曖昧な態度を示したため、慶長7（1602）年徳川家康より出羽国久保田藩（秋田）に転封を命じられた。家康は奥州を睨む好地として五男の武田信吉を15万石で入城させたが、翌慶長8（1603）年嗣子無く没したので、十男頼将（頼宣）を20万石で入城させた。慶長14（1609）年、頼宣に駿府藩50万石を与え、末子で十一男の徳川頼房が下妻城より25万石で入城して以降、廃城まで水戸徳川家の居城となった。

頼房は城と城下町を拡充し二の丸に居館（御殿）を構えた。天守は構えず、破風等の飾りのない三階櫓（内部は五階建て）を二の丸に建造した。また、櫓・多聞も極端に少なく塀を多用したが、この質朴さは水戸徳川家の家風を表している。元禄11（1698）年には2代藩主光圀によって二の丸に水戸彰考館が開かれ、以来「大日本史」編纂の舞台となった。藩校の弘道館は天保12（1841）年に9代藩主の斉昭によって開かれた。翌年には日本三大名園の偕楽園を千波湖畔に開園している。

幕末には水戸藩の藩論が分かれ、水戸城は藩内抗争の舞台となった。改革派の天狗党と保守派の諸政党の対立が起き、元治元（1864）年、天狗党が筑波山で挙兵し天狗党の乱が起こった。この対立は明治維新まで続き、明治元年には水戸城下で戦闘が行われ、弘道館に立てこもる諸政党を天狗党が攻撃した。この際に城内の多くの建物が焼失した。

明治4（1871）年の廃藩置県以降は、弘道館に茨城県庁が置かれた。明治5（1872）年には水戸城館放火事件が起き、大手門、三階櫓を除く建物が焼失した。太平洋戦争中の昭和20（1945）年の水戸大空襲では、三階櫓をはじめとして多くの残された城郭建造物が焼失した。

2 水戸城跡周辺遺跡における歴史的環境

水戸城跡周辺の先土器時代～近世までの土地利用の推移について周辺遺跡（第1図・第1表）の調査成果を参照しながら時代毎に概観する。

先土器時代 先土器時代の遺物は、大鋸町遺跡（第3地点）及び吉田神社遺跡（第1地点）の調査で確認されており、大鋸町遺跡（第3地点）からはチャート製の尖頭器が、吉田神社遺跡（第1地点）からは瑪瑙製のナイフ形石器が出土している（佐々木・大橋編2006、前田・伊藤ほか2013）が、いずれも後世の遺構外出土遺物である。

縄文時代 水戸城跡周辺では早期から晩期の遺物が出土する遺跡が確認されているが、遺構が確認されたのは、大鋸町遺跡と薬王院東遺跡に限られる。大鋸町遺跡（第2地点）では、土坑6基が確認され、うち3基は中期加曾利E IV式期のものである（齋藤・新垣2005）。薬王院東遺跡（第1地点）では、中期阿玉台式期の竪穴状遺構1基が検出されている（井上 1990）。水戸城跡周辺の当該期の遺跡では、竪穴住居跡が1軒も確認されていないのが現状である。

弥生時代 弥生時代の遺跡は、お下屋敷遺跡、大鋸町遺跡、中河内上坪遺跡、反町遺跡、柳河町遺跡、薬王院東遺跡、吉田神社遺跡、東組遺跡など比較的多く確認されているが、大半が後期十王台式期のものに限られる。遺構が確認されているのは、大鋸町遺跡（第1・2・10地点）、薬王院東遺跡（第1地点）、東組遺跡（第1地点）において竪穴住居跡や竪穴状遺構、土坑等が検出されている。

古墳時代 当該期の遺跡は古墳と集落遺跡に分けられるが、水戸城跡周辺の古墳で時期が判明しているものは、千波山古墳群と吉田古墳群に限られる。千波山古墳群は前方後円墳1、円墳2から構成され、第1号墳は円筒埴輪を伴っており、後期の古墳とみられる。吉田古墳群は奥壁に線刻壁画を持つ八角形墳1（第1号墳）、方墳？1（第2号墳）、墳形不明1（第3号墳）の3基から構成される終末期の古墳群である。第1号墳の周溝内からは埴輪片が出土しており、近隣に6世紀代の古墳の存在がうかがえる。埴輪は、茨城町小幡北山埴輪製作遺跡・ひたちなか市馬渡埴輪製作遺跡のほか、筑波山周辺の埴輪の胎土と共通する特徴を持つものもあることから、クニの領域を超えた埴輪の供給が行われていた事が明らかとなった（関口・川口 2007, 関口・川口・渥美 2009）。集落遺跡では、大鋸町遺跡（第10地点）、吉田神社遺跡（第1地点）で6世紀前半の竪穴建物跡が検出されている（川口・色川ほか編 2011, 前田・伊藤ほか前掲）。

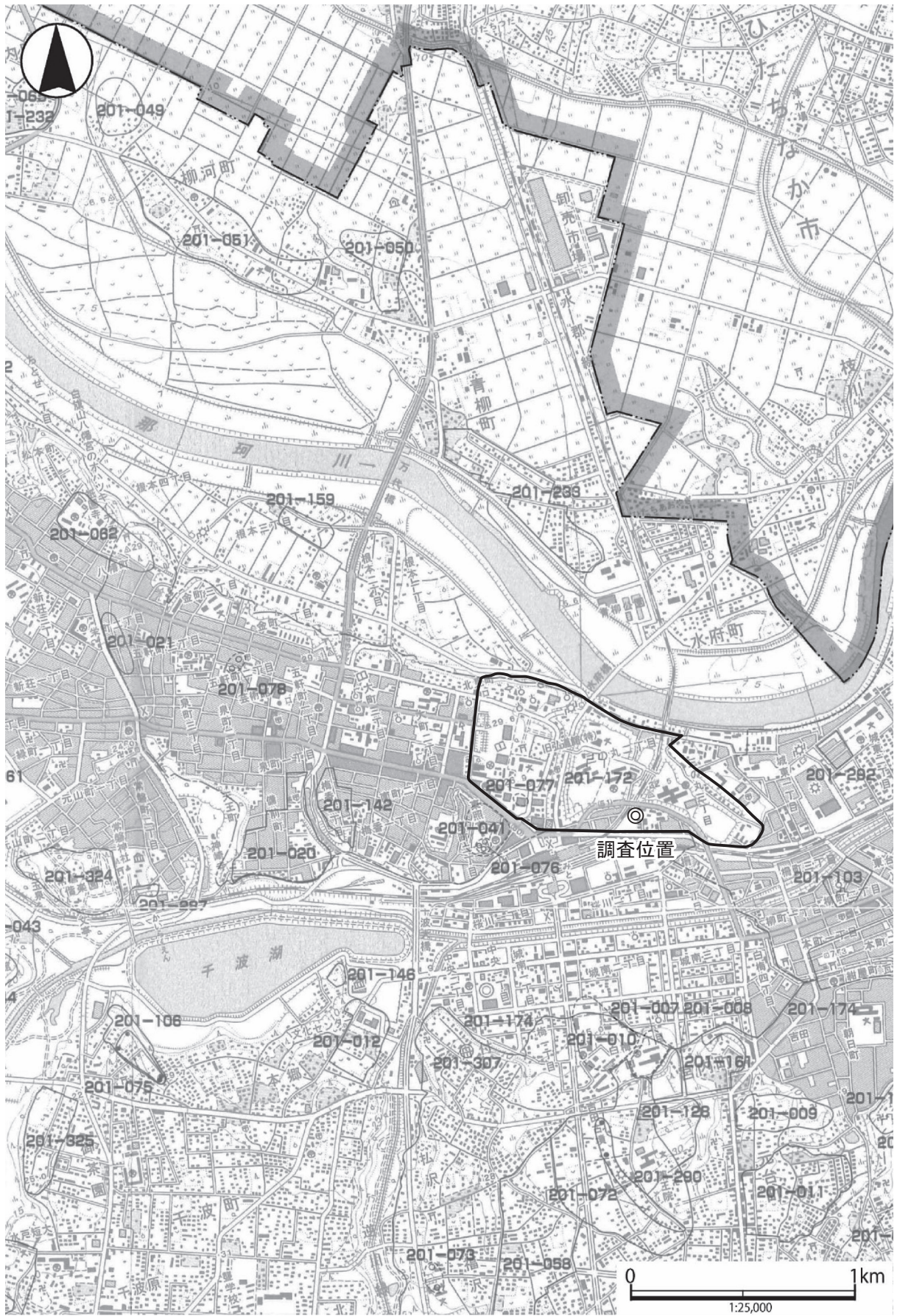
奈良・平安時代 奈良時代の当該地域は、常陸国那賀郡常石郷（里）・吉田郷（里）のに比定されると考えられ、那賀郡衙と郡衙周辺寺院は水戸市渡里町に所在する台渡里官衙遺跡群と考えられている。水戸城跡の周辺においては、奈良・平安時代の集落が大鋸町遺跡（第1・2・3・6・10地点）、薬王院東遺跡（第1地点）、などにおいて検出されている。

中世・近世 当該期の遺跡は、大鋸町遺跡・釜神町遺跡・米沢町遺跡・茨城高等学校遺跡・吉田古墳群・薬王院東遺跡・吉田神社遺跡・笠原水道・東組遺跡・三ノ町遺跡・七面製陶所跡・旧偕楽園が該当する。

中世の遺跡は、大鋸町遺跡・米沢町遺跡・薬王院東遺跡・吉田神社遺跡・青柳町遺跡・東組遺跡が挙げられ、大鋸町遺跡（第6地点・第7地点）において吉田城に係る堀跡が（川口・色川編 2010）、薬王院東遺跡（第1地点）において集落に伴うとみられる井戸状遺構1基が検出されている（井上 1990）。

近世の遺跡として著名なのは、水戸藩の大規模公共事業として敷設された笠原水道と殖産興業の一環として開設された七面製陶所跡であろう。第2代水戸藩主徳川光圀によって敷設された笠原水道は、舟付橋より下流では、遺存状況が不明瞭であるが、笠原水源から舟付橋付近にかけては部分的ではあるものの良好な状態で保全されている（関口・川口編 2010）。

第9代水戸藩主徳川斉昭によって開設された七面製陶所跡では、明確な窯跡は確認され



第 1 図 水戸城跡周辺の遺跡分布図

第1表 水戸城跡周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	時代							備考
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世	
201-007	水戸南高校遺跡		○	○	○				湮滅
201-008	吉田貝塚		○						
201-009	安楽寺遺跡		○			○			
201-010	お下屋敷遺跡		○	○	○	○			湮滅
201-011	大鋸町遺跡	○	○	○	○	○	○	○	
201-012	下本郷遺跡		○						
201-020	釜神町遺跡		○		○	○		○	
201-021	並松町遺跡								湮滅
201-041	東照宮境内遺跡								湮滅
201-049	中河内上坪遺跡			○	○				柳河小学校にて出土遺物保管
201-050	反町遺跡			○	○				
201-051	柳河町遺跡		○	○	○	○			
201-058	米沢町遺跡		○			○	○	○	
201-062	茨城高等学校遺跡		○		○	○		○	
201-072	吉田古墳群		○		○	○		○	1号墳(国史跡)は八角形墳, 周辺に円筒墳輪(後期)を伴う湮滅古墳あり
201-073	払沢古墳群				○				湮滅
201-075	千波山古墳群				○				円筒墳輪(後期)
201-076	東照宮境内古墳				○				湮滅
201-077	三の丸古墳				○				湮滅
201-078	五軒町古墳群				○				湮滅
201-103	横竹隈遺跡								湮滅
201-106	千波山遺跡		○						湮滅
201-128	薬王院東遺跡		○	○	○	○	○		
201-142	鷹匠町遺跡								湮滅(旧梅香火葬墓跡)
201-146	柳崎貝塚		○						
201-159	根本町遺跡								湮滅(旧幸町遺跡)
201-161	吉田神社遺跡	○		○	○		○	○	
201-172	水戸城跡	○	○	○	○	○	○	○	
201-174	笠原水道						○		
201-233	青柳町遺跡					○	○	○	
201-290	東組遺跡		○	○	○	○	○	○	
201-292	三ノ町遺跡							○	
201-297	七面製陶所跡							○	
201-307	山崎遺跡								H24年度版包蔵地分布地図新規登録
201-324	旧偕楽園							○	H24年度版包蔵地分布地図新規登録
201-325	御茶園遺跡								H24年度版包蔵地分布地図新規登録

なかったものの、物原から大量の陶磁器類が出土している(川口・関口 2006)。

武家地では、下市に所在する三ノ町遺跡(第1地点)において、18世紀後半～19世紀前半にかけての陶磁器・土器類と生活面が確認されている。また、上市台地に所在する釜神町遺跡では、第2地点において、水戸城跡の外郭の土塁や溝状遺構、ピットなどが(川口・色川編 2009)、第4地点においては、近世の一括廃棄土坑内から陶磁器類とともに、黒地蒔絵箱物の断片が出土している(川口・色川ほか 2011)

第3節 水戸城跡における既往の調査

水戸城跡では、平成17年以降、発掘調査件数が増加しており、発掘調査等の情報を整理するため、通し番号で「水戸城跡第〇〇次調査」と整理してきており、さらに調査地域と曲輪との関係性を明確にするため、以下のように地点名を付与してきている（渥美・河野・美濃部 2014）。

- 第1地点：大手門跡（三の丸から二の丸へ至る虎口地点）
- 第2地点：県立水戸第一高等学校敷地内（本丸曲輪）
- 第3地点：茨城大学教育学部附属小学校・附属幼稚園敷地内（二の丸曲輪南西部）
- 第4地点：市立第二中学校敷地内（二の丸曲輪北半部）
- 第5地点：茨城県三の丸庁舎・茨城県立図書館敷地内（二の丸曲輪北西部）
- 第6地点：水府橋交差点付近（二の丸・三の丸間の堀北端部）
- 第7地点：特別史跡旧弘道館敷地内（三の丸曲輪北東部）
- 第8地点：一般県道232号市毛水戸線沿線（二の丸・三の丸間の土塁・堀）
- 第9地点：市立三の丸小学校敷地内（三の丸曲輪南東部）
- 第10地点：県立水戸第三高等学校敷地内（二の丸曲輪南東部）
- 第11地点：三の丸3丁目1番（街区）一帯（本丸曲輪東辺の水堀）

また、その後の調査の進展により調査次数が大幅に増加したため、第11地点以後の調査地点を以下のように整理している。

- 第12地点：三の丸2丁目22番（街区）一帯（二の丸曲輪南辺の水堀及び陸地帯）
- 第13地点：北見町1-1・9（農政局茨城農政事務所・水戸地方検察庁）一帯（中山備前守屋敷地）
- 第14地点：水戸市道上市205号線（現水戸市道上市353号線）一帯（二の丸曲輪内を走る大手道）
- 第15地点：三の丸2丁目130番（街区）一帯（二の丸曲輪北辺の空堀及び陸地帯）
- 第16地点：北見町1-11・17（水戸税務署・水戸地方検察庁仮庁舎）一帯（北三の丸武家地）

以下では、既往の調査（第2表）のうち、特記すべきものについて概観する。

二の丸大手門跡 二の丸大手門跡は、平成5年度に第1次調査（第1地点）が復元に向けて実施され、礎石や地業遺構・土留遺構などが検出されるとともに、陶器・土器・瓦・釘などの金属製品が出土したとされる（建築文化振興研究所編 1993）。大手門の上部構造は現存せず、古写真や絵図で確認されるのみであったが、平成24年度に水戸市教育委員会が実施した第32次調査（第1地点）の際、礎石の一部や根石とみられる遺構が舗道直下より検出された。その後、平成27年度に実施した復元整備に向けた第40次調査（第1地点）において、大手門枡形虎口構築地業2箇所のほか、瓦堀跡2基、石組水路1条、礫集中地点3箇所、礎石（根石カ）1基、大手門外周基礎工跡1箇所、暗渠施設1基が検

出されるとともに、大量の近世陶磁器・瓦とともに石製硯・鉄製品（錠前・釘等）が出土した（宮田・関口 2017）。本調査により、瓦堀跡 2 基や礎石の一部が確認され、大手門の復元に向けて重要な根拠資料が得られた。

二の丸南西角櫓 市街地における文化財の新たな活用方策の検討を行うための事前確認調査として水戸市教育委員会が実施した第 24・29 次調査（第 3 地点）では、二の丸曲輪の南西角櫓の遺構が良好な状態で遺存していることが明らかとなった。二の丸曲輪の南西角櫓は、版築基壇の上に建造された二間四面の礎石建物で、残存していた礎石及び礎石据え付け痕跡から、柱間は 1 間（6 尺 5 寸 = 1.97 m）であったことが明らかとなった。この規模は、茨城県立図書館所蔵の「水戸城実測図」に描かれている二の丸南西角櫓と位置・規模がほぼ一致する。また、櫓の整地層は新旧 2 時期存在するようで、間に炭化材等を含む焼土層がみられることから、古い時期の櫓が明和元（1764）年の水戸城大火で焼失した後、新たに再建された可能性が高いことが判明した。整地層直上からは、櫓壁材とみられる漆喰を含む白色土のほか、大量の近世瓦や鉄釘・錠等の建築部材が出土した。特に注目されるのは、調査区北端部から出土した三つ葉葵紋鬼瓦で、紀州和歌山藩邸とみられる東京都千代田区紀尾井町遺跡出土鬼瓦や尾張藩市ヶ谷邸出土鬼瓦などに類例が求められるものである。本調査については、現在も整理作業を継続中であり、いずれ報告の予定である。

二の丸彰考館 平成 18・20・22 年度に水戸市立第二中学校校舎改築工事に伴い実施した第 4 地点の調査は、7,519㎡と水戸城跡内では過去最大の面積を調査した。同調査では、旧石器時代から近現代に至るまでの多数の遺構・遺物が検出された（渥美・河野・美濃部 2014）。遺物で注目すべきは、13 世紀後半の古瀬戸瓶子の中に詰められた約 1,500 枚の渡来銭であろう。埋納された銭の中で最も古い時期に鑄造されたものは乾元重宝（758 年初鑄）で、最も新しい時期に鑄造されたものは宣徳通宝（1433 年初鑄）であった。埋納銭はバラで詰められた状況で発見され、再利用の意図が見られず、15 世紀代の整地層最上部から見ついている事から、水戸城普請に伴う神仏への埋納行為によるものと理解されている（関口 2007）。

中世の遺構で注目されるのは、重複して切り合う形で検出された 30 条にも及ぶ中世の堀跡である。これらは、江戸氏支配下の重臣屋敷地の区画溝と理解されるもので、15 世紀後半～16 世紀後半の間に概ね半世紀毎に堀が作り替えられており、特に 16 世紀代に活発化していた（関口 2016）。こうした現象の背後には、江戸氏の南進や北の佐竹氏との確執を背景とする軍事的・社会的緊張があったと理解される。

近世の遺構で注目されるのは、23 次調査の際に北東部で検出された東西 24 m 以上、南北 19 m、深さ 6.4 m にも及ぶ巨大な土坑である。当初は土取り穴として掘られたものであったが、後に廃棄土坑として転用されたものである。覆土中からは、陶磁器・土器・瓦をはじめとする数十万点の遺物が出土している。水戸彰考館の礎石や柱穴等の遺構は確認されなかったが、水戸彰考館で使用された日常什器を一括廃棄したものと理解され、19 世紀前半の水戸彰考館の運営の実態を知るうえで貴重な一括資料と評価される。

なお、同調査では古墳時代前期の竪穴建物跡 3 軒、M 字形低突帯を有する円筒埴輪片 1 点と刀子形石製模造品 1 点、平安時代の竪穴建物跡 4 軒も検出されており、古墳時代前期と平安時代には集落、古墳時代中期には墓域としての土地利用が展開していたなど、水戸

城築城以前の土地利用の一端が初めて明らかとなった（渥美・河野・美濃部前掲）。

二の丸表御殿 平成 22 年度に水戸第三高等学校図書館改築に伴い、財団法人茨城県教育財団によって実施された第 21・22 次調査（第 10 地点）は、表御殿のほぼ中央部に該当し、9 世紀中葉から近現代に至る整地層が確認されるとともに、3 基の石組貯蔵施設と 3 基の石組水路跡が検出された（松林 2012）。3 基の石組貯蔵施設は、構築時期に時間差があり、17 世紀代のもの 1 基、残りの 2 基は 17 世紀中葉～18 世紀代のものとみられる。城内における既往の調査ではこのような遺構の検出例はなく、最も格式の高い建造物である表御殿を象徴する遺構として評価される。3 基の石組水路跡は、18 世紀後半～19 世紀代に構築されたもので、後述する二の丸大手道の調査で検出されたものと同様、凝灰質泥岩製の切石を組み合わせたものである。その組み合わせ方には、①蓋石・側石 2・底石の 4 点によるもの、②蓋石・凹型岩樋の 2 点によるもの、③底石・側壁板石積・蓋石の 10 数点による大型のもの 3 者があり、上下水や本管・枝管といった形で機能した可能性が高い。

二の丸大手道 平成 26 年～28 年度にかけて歴史・観光ロード整備事業に伴い実施している第 37・39・43・47・49 次調査では、大型の石組水路が検出されている（宮田・萩原・米川・関口 2015、宮田・関口 2017）。第 49 次調査で見つかった石組水路は、凝灰質泥岩製の底石、側面切石、蓋石を組み合わせたもので、側面切石は 5 段積みとなっていた。その規模は、残存長 32 m、幅約 1.4 m、深さ（高さ）0.6 m で、二の丸表御殿の調査で検出された大型石組水路と規模が一致する。二の丸表御殿方面へ分岐する状況が確認されていることから、大手道の地下に暗渠として埋設され、表御殿の石組み水路と接続していた可能性が高い。

北三の丸武家地 平成 25 年度に水戸地方検察庁仮庁舎建設事業に伴い、公益財団法人茨城県教育財団により実施された第 62 次調査（第 16 地点）では、奈良・平安時代の竪穴建物跡 10 軒・竪穴遺構 1 基、土坑 2 基のほか、近世の水路状施設 1 条・整地跡 1 か所・土坑 2 基などが確認された（盛野 2015）。9 世紀中葉頃に廃絶したとみられる第 2 号竪穴建物跡からは、再分配された伝世品とみられる腰帯具の一部である青銅製の巡方が検出されており、威信財としての役割を持っていた可能性が指摘されている（盛野前掲）。近世の水路状施設は 15 点の特殊瓦を組み合わせたもので、相互に漆喰で接着した痕跡が残されていた。水戸城内における既往の調査では検出例がなく、調査区域の北側斜面に向かう排水路の可能性が指摘されている（盛野前掲）。茨城県立図書館に所蔵されている「江戸期水戸武士小路明細図（上市の部）」によると、寛文年間の当地点は、田代三郎衛門の拝領地に該当しており、文政 9（1826）年に描かれた「水戸地図」（公益財団法人徳川ミュージアム所蔵）では、中山備前守の屋敷地が広く描かれていることから、中山家に伴う遺構である可能性がある。

弘道館 平成 19 年度に便所改築工事・下水道管改修工事に伴い実施した第 13 次・15 次調査（第 7 地点）の際、5 基の植栽痕とともに 18 世紀後半から 19 世紀代の陶磁器や瓦類が多数出土した（川口・色川編 2010）。陶磁器の中には第 9 代水戸藩主徳川斉昭が開設した七面製陶所跡の製品とみられる焼締陶器も含まれていた。その後、平成 22 年 10 月に実施した第 25 次調査（第 7 地点）は、正庁の床を支える柱の礎石周辺が陥没したため、現状復旧に向けて急遽実施したものであるが、弘道館造成に伴う整地層の下から地下室の可能性のある土坑が検出されるとともに、覆土中より近世の陶磁器・瓦が出土した。（新垣）

第2表 水戸城跡における既往の調査一覧

次数	地点	調査箇所	調査期間	種別	調査原因	遺構	遺物	調査主体	備考
1	1	三の丸2丁目(大手門)	H5.8.20 ～ H5.9.2	確	大手門復元計画	○	○	市教委	調査支援：建築文化振興研究所
2	2	三の丸3丁目10-1 (水戸一高)	H13.3.5	立	学校整備	—	○	県文化課	
3	5	三の丸1丁目5	H18.5.29 ～ H18.8.24	確	史跡整備	○	○	市教委	
4	3	三の丸2丁目6-8 (茨大附属小)	H17.5.3	試	排水溝埋設	○	○	市教委	市埋蔵文化財調査報告第11集
5	3	三の丸2丁目6-8 (茨大附属小)	H17.6.27	立	法面工事			市教委	
6	4	三の丸2丁目9-22 (水戸二中・Ⅰ期工事)	H18.8.16 ～ H18.12.2	本	学校校舎改築	○	○	市教委	調査支援：大成エンジニアリング 市埋蔵文化財調査報告第61集
7	4	三の丸2丁目9-22 (水戸二中)	H17.8.29 ～ H17.9.1	試	学校校舎改築	○	○	市教委	
8	6	三の丸2丁目1-274 ほか(水府橋脇)	H18	試	道路整備	○	○	県文化課	
9	6	三の丸2丁目1-274 ほか(水府橋脇)	H18	立	道路整備	○	○	県文化課	法面掘削に伴う調査
10	4	三の丸2丁目9-22 (水戸二中)	H19.8.20 ～ H19.9.14	試	学校校舎改築	○	○	市教委	市埋蔵文化財調査報告第35集
11	6	三の丸2丁目1-274 ほか(水府橋脇)	H19.12.14	試	道路整備	—	○	市教委	
12	6	三の丸2丁目1-274 ほか(水府橋脇)	H20.3.20	立	道路整備	—	—	市教委	法面掘削に伴う調査
13	7	三の丸1丁目6-29 (弘道館内)	H20.8.31 ～ H20.9.4	試	便所改築(現状 変更)	○	○	市教委	市埋蔵文化財調査報告第35集
14	8	三の丸2丁目1-315 (県道232号市毛水戸 線沿線)	H19.12.14 ～ H20.1.18	立	解体	—	○	市教委	
15	7	三の丸1丁目6-29 (弘道館内)	H20.2.13	立	下水管改修	—	○	市教委	
16	9	三の丸1丁目6-51 (三の丸小)	H20.4.4	試	学校整備	—	○	市教委	市埋蔵文化財調査報告第43集
17	6	三の丸2丁目1-274 ほか(水府橋脇)	H20.6.9	立	県道拡幅	—	—	県文化課	法面掘削に伴う工事立会
18	4	三の丸2丁目9-22 (水戸二中・Ⅱ期工事)	H20.8.29 ～ H21.2.3	本	学校校舎改築	○	○	市教委	調査支援：大成エンジニアリング 市埋蔵文化財調査報告第61集
19	6	三の丸2丁目1-274 ほか(水府橋脇)	H20.10.21 ～ H21.1.31	本	県道拡幅	○	○	県教育財団	
20	7	三の丸1丁目6-29 (弘道館内)	H20.12.8	立	井戸屋形修築(現状 変更)	—	○	市教委	市埋蔵文化財調査報告第43集
21	10	三の丸2丁目7-27 (水戸三高)	H21.9.25	試	図書館改築	○	○	県文化課	
22	10	三の丸2丁目7-27 (水戸三高)	H22.6.1 ～ H22.9.30	本	図書館改築	○	○	県教育財団	
23	4	三の丸2丁目9-22 (水戸二中・Ⅲ期工事)	H22.7.5 ～ H22.8.27	本	学校校舎改築	○	○	市教委	調査支援：大成エンジニアリング 市埋蔵文化財調査報告第61集
24	3	三の丸2丁目6-8 (茨大附属小)	H22.7.27 ～ H22.8.27	確	隅櫓存否確認	○	○	市教委	
25	7	三の丸1丁目6-29 (弘道館内)	H22.10.4 ～ H22.10.8	確	史跡整備	○	○	市教委	
26	4	三の丸2丁目9-22 (水戸二中)	H22.11.19	立	学校整備	—	○	市教委	
27	7	三の丸1丁目6-29 (弘道館内)	H23.1.12 H23.1.28 H23.2.10	立	史跡整備(現状 変更)	—	○	市教委	
28	3	三の丸2丁目6-8 (茨大附属小)	H23.6.17	確	範囲確認	○	○	市教委	

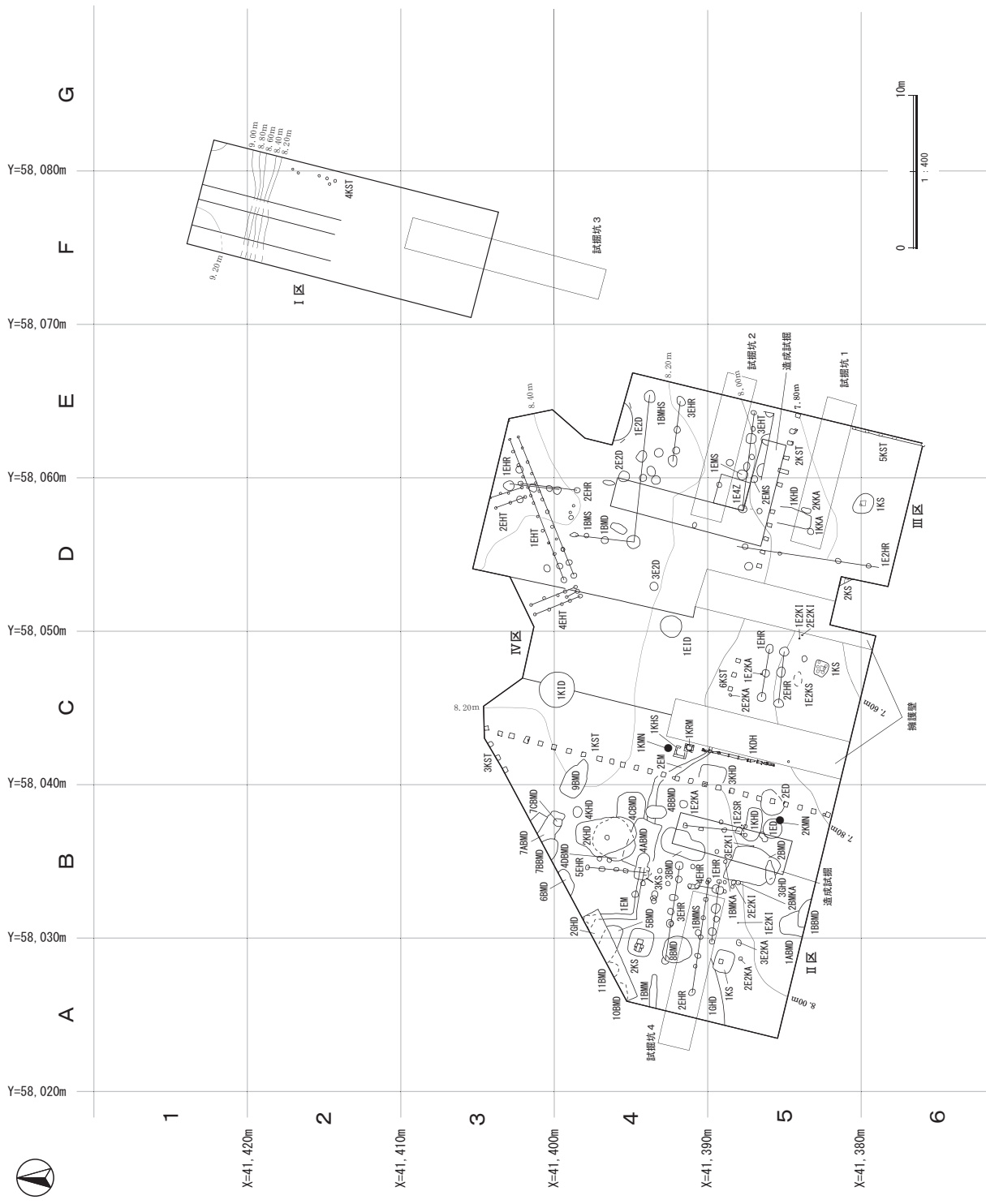
次数	地点	調査箇所	調査期間	種別	調査原因	遺構	遺物	調査主体	備考
29	3	三の丸2丁目6-8 (茨大附属小)	H23.8.9 ～ H23.10.7	確	角櫓範囲確認	○	○	市教委	
30	1	三の丸2丁目1(大手門・附属小側)	H24.6.5 ～ H24.6.8	確	法面保護工事	○	○	市教委	
31	9	三の丸1丁目119-14 (三の丸小)	H24.7.18	試	学校整備	—	—	市教委	
32	1	三の丸2丁目1-274 (大手門)	H24.8.20 ～ H24.9.4	確	大手門確認	○	○	市教委	
33	11	三の丸3丁目1-355	H24.9.11	試	物件売買	○	○	市教委	
34	8	三の丸2丁目1-82	H25.4.26	試	個人住宅	—	—	市教委	
35	8	三の丸2丁目1-329	H26.6.25	試	個人住宅	—	—	市教委	
36	3	三の丸2丁目6-8 (茨大附属小)	H26.10.7	試	校庭トイレ建設	○	—	市教委	
37	14	市道上市205号線	H26.10.29	試	電線共同溝	○	○	市教委	
38	11	三の丸3丁目1-355	H27.2.25	試	個人住宅	—	—	市教委	
39	14	市道上市205号線	H27.5.2 ～ H27.9.15	本	電線共同溝	○	○	市教委	調査支援：関東文化財振興会 水戸市埋蔵文化財調査報告第72集
40	1	三の丸2丁目(大手門)	H27.7.30 ～ H27.12.15	確	大手門復元計画	○	○	市教委	調査支援：関東文化財振興会
41	3	三の丸2丁目6-8 (茨大附属小)	H27.8.6 ～ H27.8.31	確	土塀確認	○	○	市教委	
42	1	三の丸2丁目(大手門)	H28.3.15 ～ H28.5.31	確	大手門復元計画	○	○	市教委	
43	14	市道上市205号線	H28.6.10 ～ H28.9.10	本	電線共同溝	○	○	市教委	調査支援：関東文化財振興会
44	11	三の丸3丁目1-301	H28.6.7	立	地下埋設物の有無の確認	—	—	市教委	
45	12	三の丸2丁目22-113・114	H28.9.6	試	個人住宅	—	○	市教委	
46	15	三の丸2丁目130-22	H29.5.11	試	個人住宅	—	—	市教委	
47	14	市道上市353号線	H29.5.27 ～ H29.7.21	本	電線共同溝	○	○	市教委	調査支援：関東文化財振興会
48	17	北見町1-9(関東農政局茨城農政事務所)	H29.5.16	立	公共下水道埋設	—	—	市教委	
49	14	市道上市353号線	H29.6.8 ～ H29.7.8	本	電線共同溝	○	○	市教委	調査支援：日本窯業史研究所 市埋蔵文化財調査報告第94集
50	16	北見町1-11～17	H29.5.23	立	公共下水道埋設	—	—	市教委	
51	1	三の丸2丁目(大手門)	H29.6.13	立	水道管移設	—	—	市教委	
52	13	北見町1-1(水戸地方検察庁)	H29.7.21	試	水戸法務総合庁舎新設	○	○	県文化課	
62	16	北見町1-11(水戸地方検察庁仮庁舎)	H25.12.2 ～ H26.1.31	本	水戸地方検察庁庁舎新設	○	○	県教育財団	中山備前守屋敷地
63	1	三の丸2丁目(大手門)	H29.11.4	確	大手門復元	○	○	市教委	大手門復元に伴う瓦塀等を再確認
64	29	三の丸二丁目1-355 他		立				市教委	
65	29	三の丸二丁目1-355		立	地中管路取替			市教委	
66	10	三の丸2-7-27(水戸三高)	H30.1.22	立	駐車場新築	—	—	県文化課	
67	7	三の丸1-6-29(弘道館内)	H30.1.22	確	史跡整備	○	○	県文化課	旧テニスコート及び北柵門
68	3	三の丸2丁目1-420・421	H30.5.21	確	土塀復元工事	○	○	市教委	
69	26	北見町120-1地内	H30.7.10	立	電柱・地中埋設	—	—	市教委	中山家家紋軒丸瓦検出
70	30	三の丸1-129～132	H30.5.17	試	道路改良工事	—	—	市教委	
71	7	三の丸1-2-29(弘道館内)	H30.5.22	確	史跡整備	—	—	県文化課	旧テニスコート及び北柵門
72	38	三の丸三丁目1-210	H30.6.12	試	共同住宅	—	—	市教委	
73	35	三の丸3丁目11-19	H30.7.20	立	職員住宅解体	—	—	県文化課	
74	1	三の丸2丁目(大手門)	H30.7.23	確	大手門復元	○	○	市教委	大手門復元工事に伴う土塁の再確認

次数	地点	調査箇所	調査期間	種別	調査原因	遺構	遺物	調査主体	備考
75	33	三の丸2丁目1-1・151の一部(茨大付属小・三高)	H30.8.21～8.24	試	二の丸隅櫓復元	○	○	市教委	二の丸隅櫓アプローチ整備
76	42	三の丸三丁目17-6		立	小柱の取替			市教委	
77	31	三の丸一丁目		立	地中管路改修			市教委	
78	26	北見町120-1地内	H30.8.24	立	地中ケーブル埋設	—	○	市教委	
79	7	三の丸1-6-29(弘道館内)	H30.11.19	立	管路埋設工事	—	○	市教委	
80	36	三の丸3丁目130番4		立	支線打替			市教委	
81	22	北見町1-1	H30.12.25	試	法面对策	—	—		
82	2	三の丸3丁目地内(水戸一高地内)	H31.2.5	立	テニスブロック改修	—	—	県文化課	
83	22	北見町1-1	H31.2.20	立	北側法面改修	—	—	市教委	
84	32	三の丸1丁目地内(市道上市6号線歩道)	H31.2.22	立	案内板設置工事	—	—	市教委	
85	28	三の丸1丁目129地内		立	地中管撤去工事			市教委	
86	28	三の丸1丁目132地内		立	機器撤去工事			市教委	
87	31	三の丸1丁目103-8地内		立	地中管路新設			市教委	
88	41	三の丸3丁目21-1	R1.6.18	試	共同住宅建設	○	○	市教委	本報告書

※種別の記号は、次のとおりである。試：試掘調査 本：本発掘調査 立：立会調査 確：確認調査

引用文献

- 渥美賢吾・河野一也・美濃部達也 2014 『水戸城跡発掘調査報告Ⅰ 二の丸曲輪彰考館の調査(1)』水戸市教育委員会
- 井上義安 1990 『薬王院東遺跡 千波中学校建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』水戸市薬王院東遺跡発掘調査会
- 川口武彦・色川順子編 2009 『平成18年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 川口武彦・色川順子・田中恭子・三浦健太編 2010 『平成19年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 2011 『平成20年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 建築文化振興研究所編 1993 『水戸城大手門跡発掘調査報告書』水戸市
- 齋藤 洋・新垣清貴 2005 『大鋸町遺跡 グランディヒルズ元吉田造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会・グランディハウス株式会社・株式会社地域文化財コンサルタント
- 佐々木藤雄・大橋生編 2006 『大鋸町遺跡(第3地点)一市道浜田207号線側溝新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』水戸市教育委員会
- 関口慶久 2007 「水戸城の調査の歩みと課題」『江戸遺跡研究会会報』No.110 江戸遺跡研究会
- 2016 「水戸城における堀の変遷」『中世城郭研究』第30号 中世城郭研究会
- 関口慶久・川口武彦 2006 「水戸城下における近世生産遺跡の調査一七面製陶所跡の調査成果を中心に一」『江戸遺跡研究会会報』第106号 江戸遺跡研究会
- 2007 『吉田古墳Ⅱ 史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第3次発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 関口慶久・川口武彦編 2010 『笠原水道 第6次・10次・11次発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 関口慶久・川口武彦・渥美賢吾 2009 『吉田古墳Ⅲ 史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第4・5次発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 前田卓宏・伊藤千洋編 2013 『吉田神社遺跡(第1地点)一大型物販店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』水戸市教育委員会
- 松林秀和 2012 『水戸城跡 茨城県立水戸第三高等学校図書館改築工事地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育委員会・財団法人茨城県教育財団
- 宮田和男・関口慶久 2017 「水戸城跡大手門・大手道の調査」『第39回 茨城県考古学協会研究発表会 資料』茨城県考古学協会
- 宮田和男・萩原宏季・関口慶久・米川暢敬 2015 『茨城県水戸市 水戸城跡(第14地点・第39次)一市道上市205号線道路改良・電線共同溝工事(4工区)に伴う発掘調査報告書一』水戸市教育委員会
- 盛野浩一 2015 『水戸城跡 水戸地方検察庁仮庁舎建設事業地内埋蔵文化財調査報告書』国土交通省関東地方整備局営繕部・公益財団法人茨城県教育財団



第2図 水戸城跡（第88次）調査区全体図

第3章 基本層序と遺構面

基本層序はⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区とも同一表現とした。現状は標高 10.0 mがアスファルト舗装の駐車場として利用されていた。下部の標高 9.0 mにコンクリート舗装を確認した。このコンクリート舗装上面に約 10cm焼土と炭化物を確認した。この大量の焼土・炭化物層は昭和 20（1945）年 8 月 6 日の水戸大空襲の残滓を廃棄したともものと判断される。この焼土層・炭化物層とコンクリート舗装に絡むものをⅠ層とした。コンクリート下部にはロームと碎石を主体とした層状の整地層がある。この層をⅡ層とした。その下層には黒色土に炭化物・焼土を含む層が層状に確認された。この層は、明治 5（1872）年に水戸城が不審火により、大手門及び三階櫓を除き焼失した時の残滓と考えられる。この層は場所によって高底差がある。さらに下層にはローム層を主体にした硬化面を確認した。これらの状況から大空襲の焼土層から上層は戦後の駐車場整備の際の整地層、Ⅰ層が現代、Ⅱ層が近代、Ⅲ層が幕末明治、Ⅳ層から下部は江戸時代と想定して遺構の確認を行った。またⅠ区のⅡ層の下、標高 9.0 mに自然層序の標準層序を確認した。自然堆積Ⅱ層は古代に相当する層、自然堆積Ⅲ層は縄文・弥生に相当する層、自然堆積Ⅳ層はローム漸移層のグライ化した層である。

第1節 基本層序

Ⅰ区の基本層序

Ⅰ区は南側半分は戦後の駐車場整備造成により破壊されていた。北半も同様であったが 80cm下の標高 9.0 mに水戸大空襲の炭化物層と戦前のコンクリート舗装下部整地層が遺存していた。また自然堆積層は調査区北端から上面で約 3.5 m、下端で 4.2 mで約 45 度で切土されている。標高は 8.0 ～ 8.2 mで下層は盛土されている。

Ⅱ区の基本層序

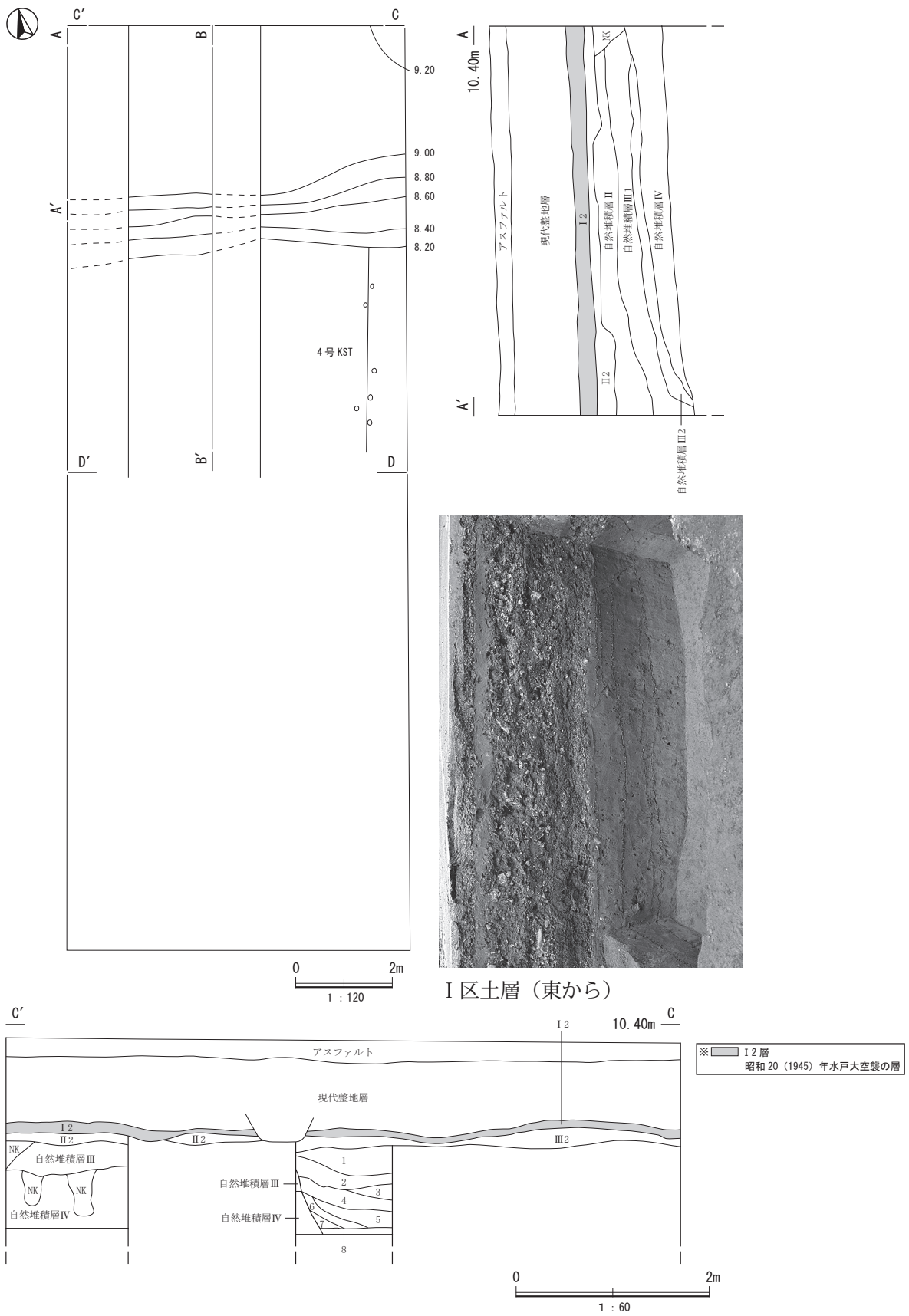
Ⅱ区は南壁・西壁・北壁とも層序が良く遺存している。一面は昭和 20（1945）年 8 月 2 日の水戸大空襲の整地土で焼土塊、炭化物の単一層と瓦やレンガが含まれている層を除去したⅡ層中に確認した。基本的にアスファルトを掘り込んでいる。二面はⅡ層中に確認した。三面はⅢ層上面から確認した。四面はⅣ層上面で確認した。いわゆる生活面として捉えられるのは四面の江戸一面とした面である。その他は建造物の建替によって変化し、全面が生活面として利用されてはいないようである。

Ⅲ区の基本層序

Ⅲ区の北壁はⅠ区からの近年の整地に伴う大きなコンクリート躯体が出土し、改変されていた。東壁は北端部の 3 分の 1 まで失われていた。東壁南側と南壁は遺存していた。三面の幕末明治のⅢ層の整地土の層状は多くの層に細分されたが基本層序は変わらない。四面のⅣ層上面は整地した硬化面でⅠ区・Ⅱ区とおなじである。

Ⅳ区の基本層序

IV区は駐車場の出入口の部分でⅢ層は確認したが、三面のⅢ層上面は確認出来なかつ

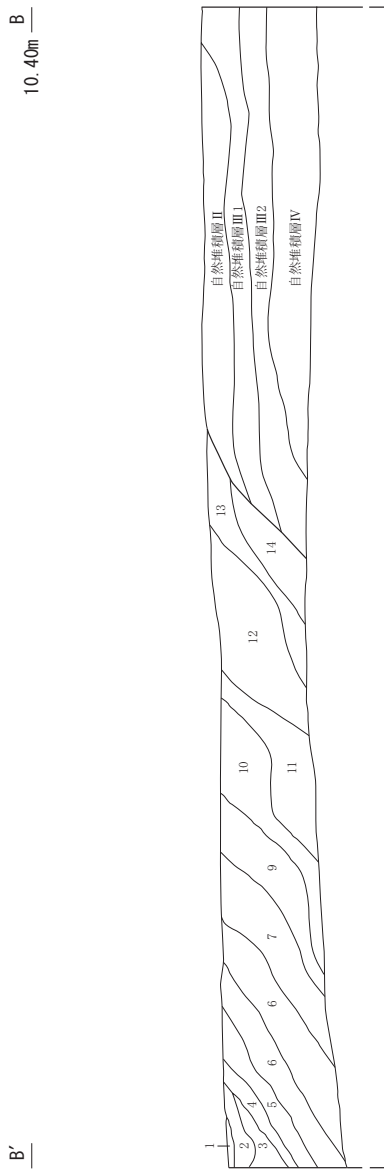


第3図 基本土層 I 区 (1)

た。四面のIV層上面で江戸一面を確認した。

II～IV区の様相

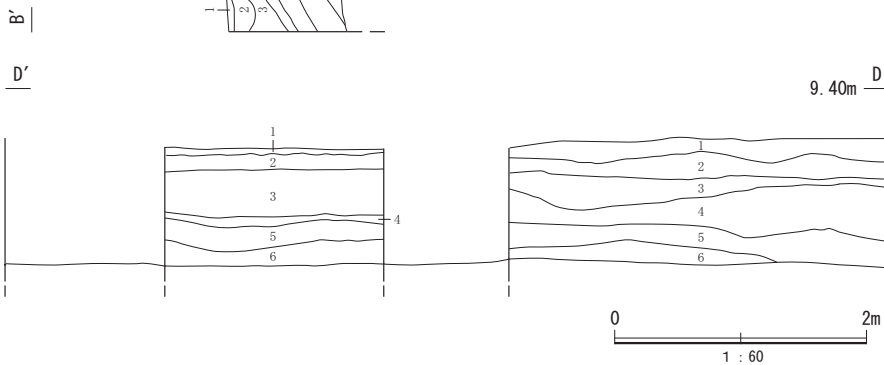
I区を除いたII～IV区の様相から、遺構として捉えられるのは四面の江戸一面までである。そこから下層の二～五面は造成に関わる工事の工程と考えられる。



II区西壁土層（東から）

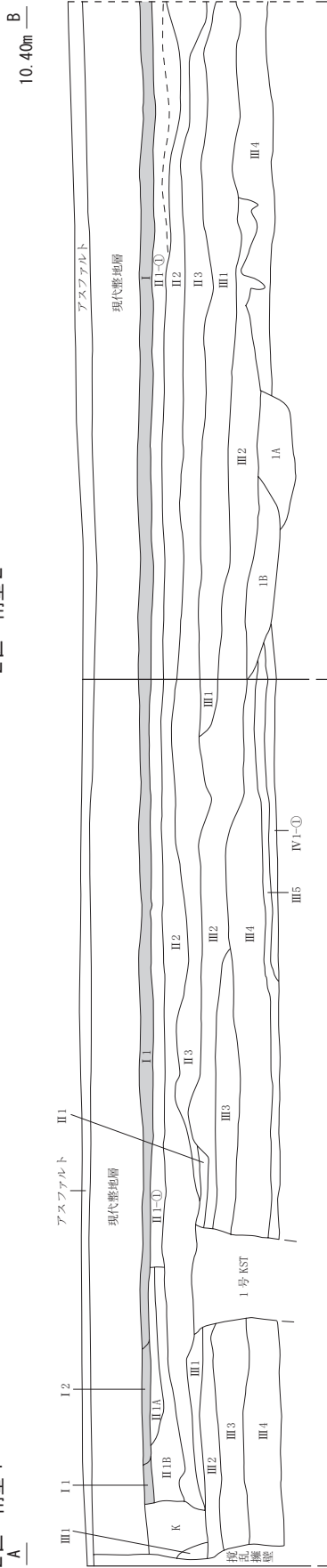


II区南壁土層（北西から）

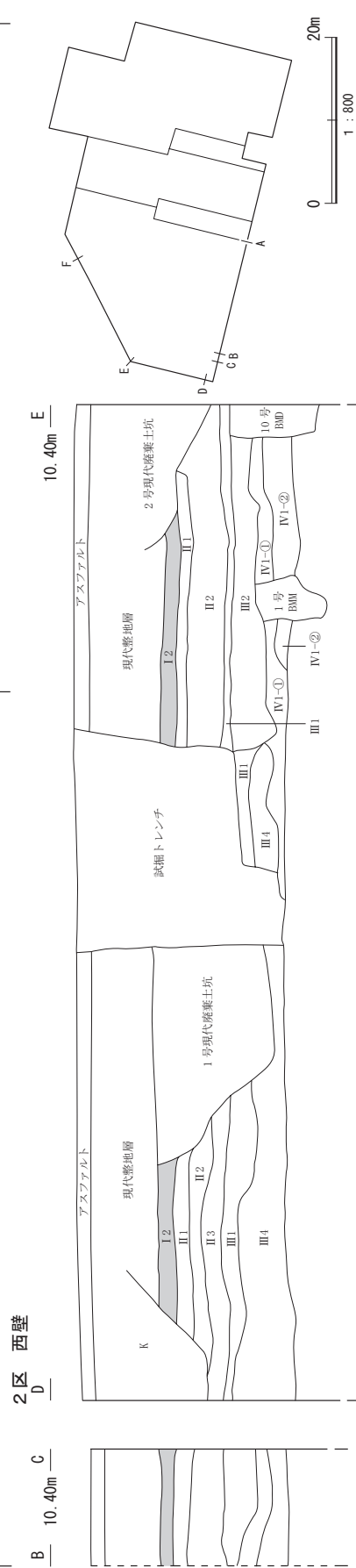


第4図 基本土層I区（2）

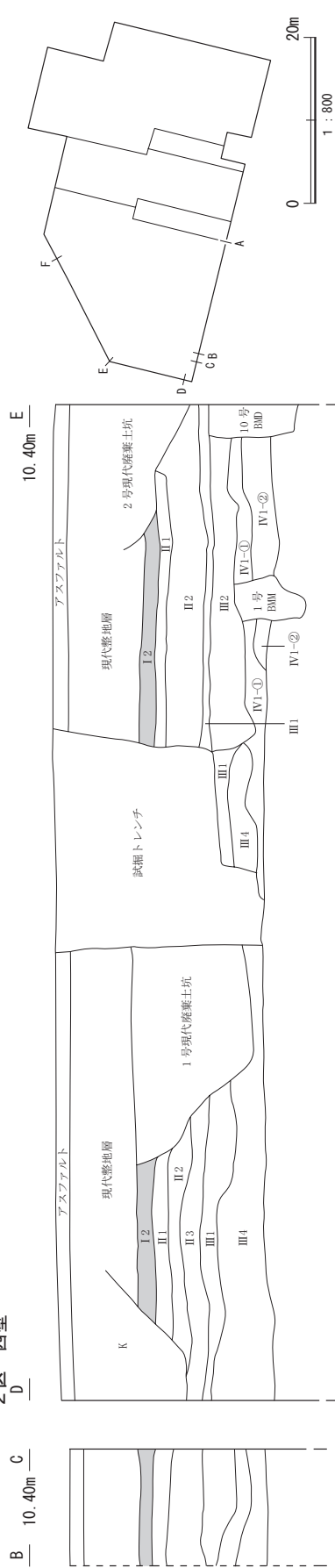
2区 南壁1



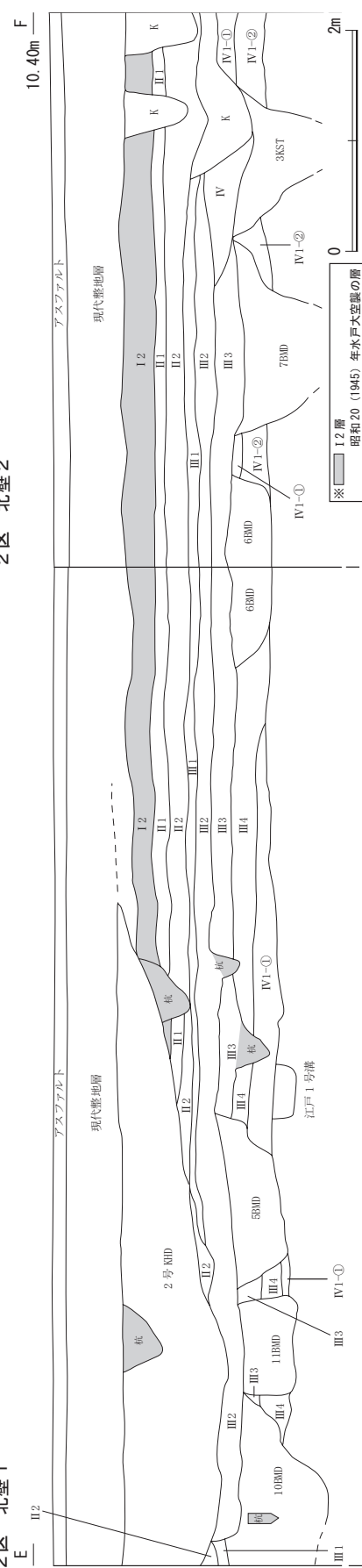
2区 南壁2



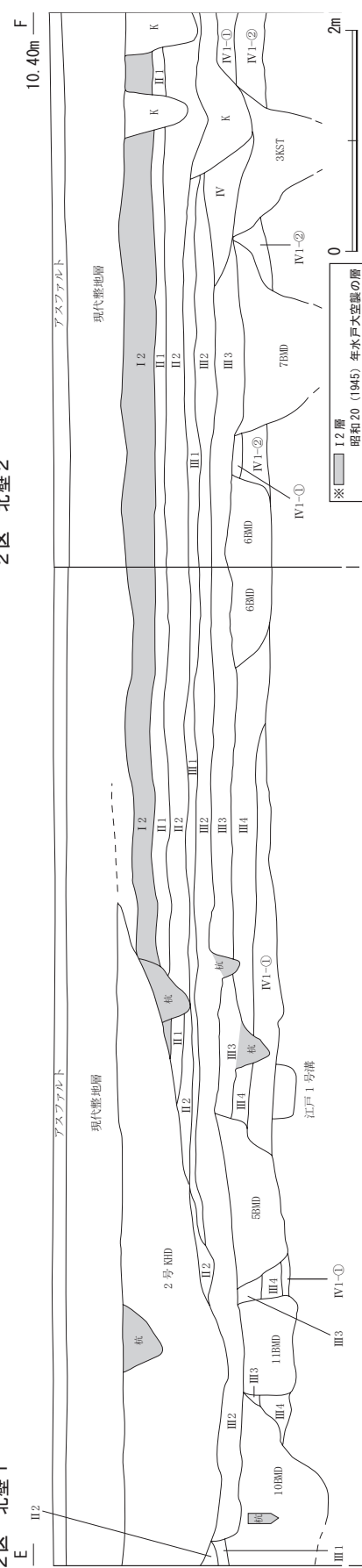
2区 西壁



2区 北壁1

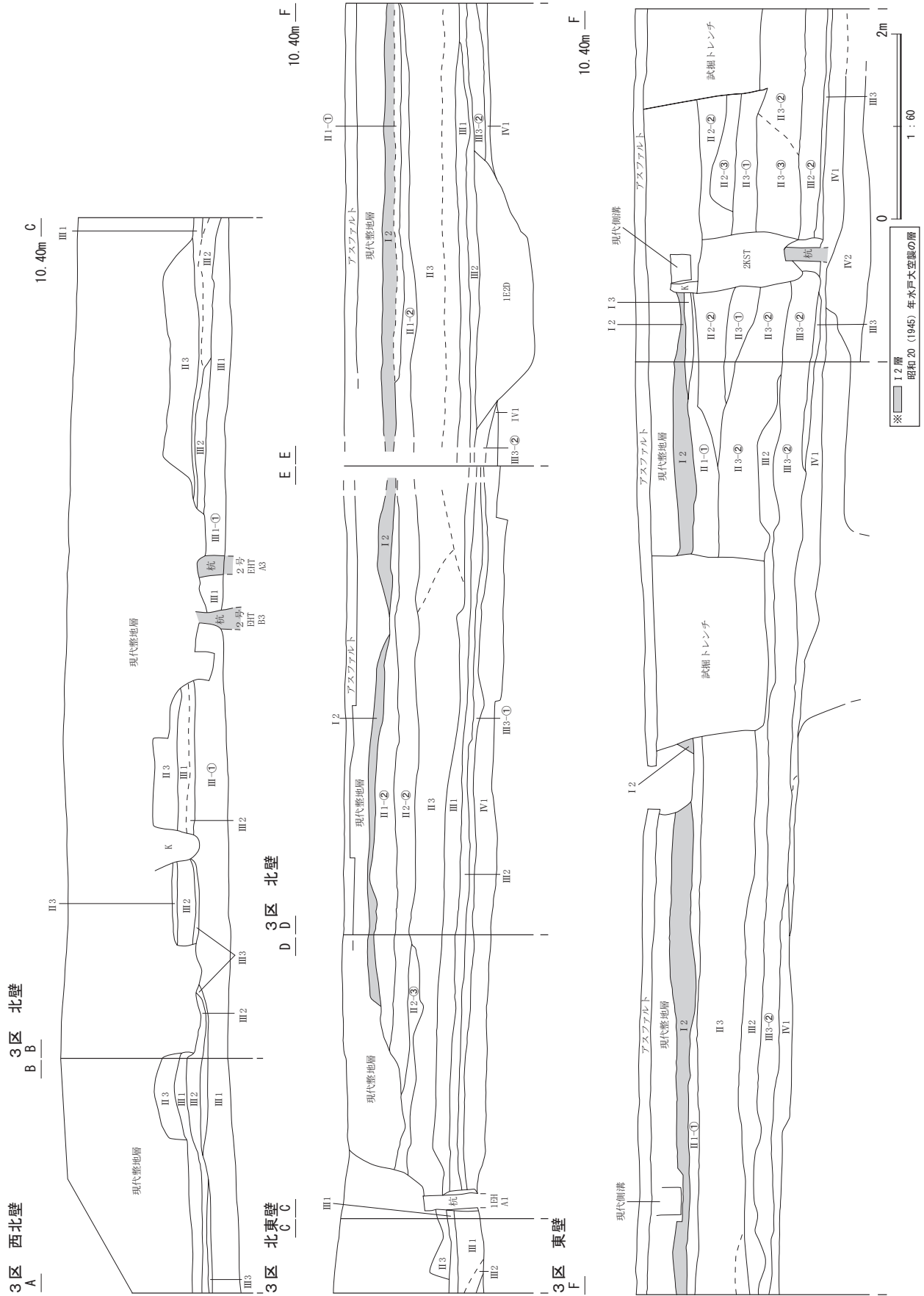


2区 北壁2



※ 12層 昭和20(1945)年水戸大空襲の層

第5図 基本土層Ⅱ区



第6図 基本土層Ⅲ区(1)

東壁 2

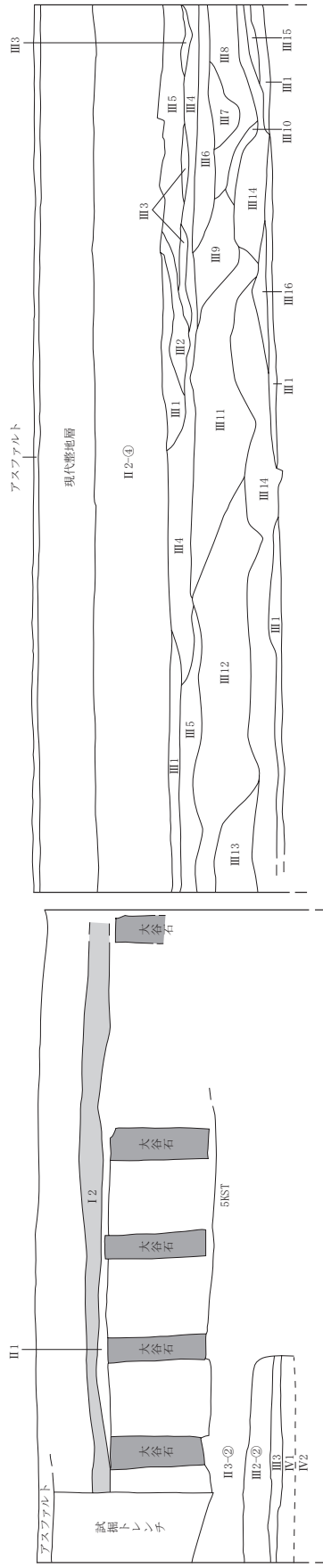
F

3区 南壁

G

10.40m H

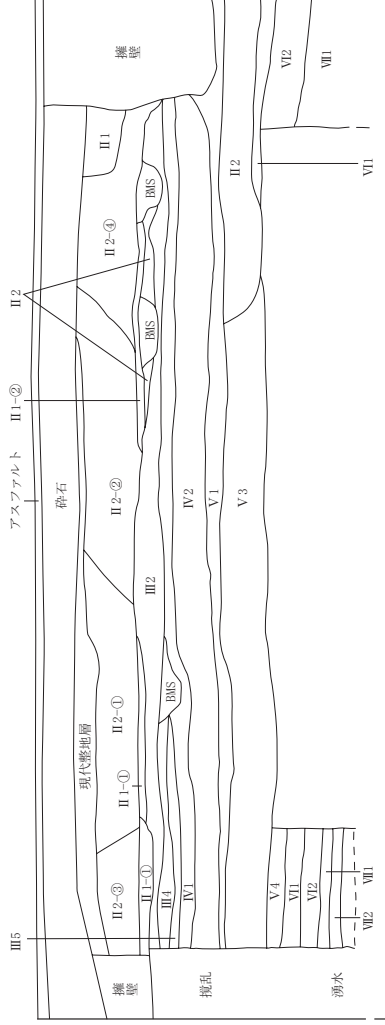
10.40m G



4区 南壁

A

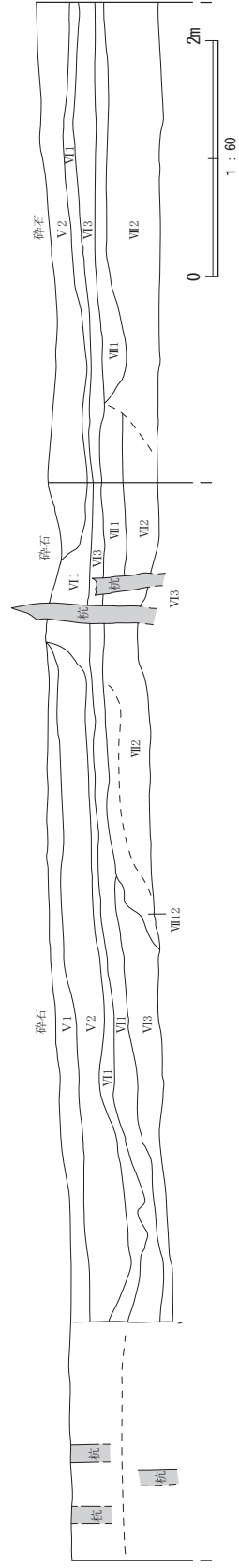
9.40m B



4区 調査区壁面 (西側)

B

8.40m C



第7図 基本土層Ⅲ区 (2)



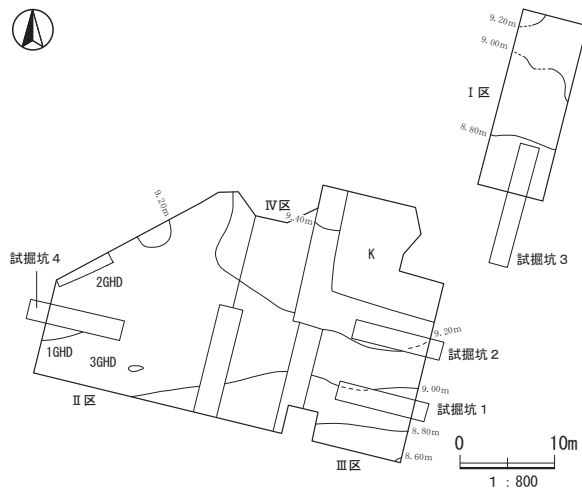
Ⅲ区南壁土層（北から）



Ⅳ区南壁土層（北から）

第4章 各面の遺構と遺物

第1節 現代面の遺構と遺物



Ⅱ区現代面完掘状況（北東から）

第8図 現代面全体図

Ⅱ区

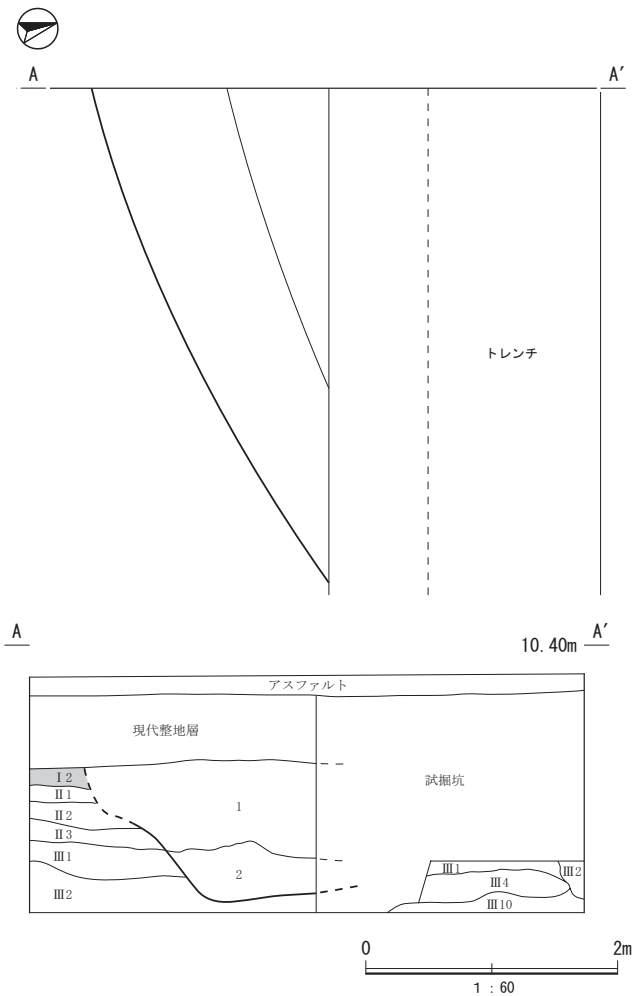
第1号現代廃棄土坑（1GHD）

遺構 Ⅱ区4・5A区に位置し、試掘坑により掘り込まれている。平面形は近代面のⅡ3層から確認したが壁面からは現代整地層から掘り込まれている。東西4.0m以上、南北8.4m以上を確認した。深さは2.4m以上である。残滓の処理穴である。

遺物 遺物は戦前のガラス瓶類1点・565点，戦後の缶類・プラスチック類11点・358g，ガラスびん類46点・12,371g，金属・工業製品10点・1,567g，土管・焔炉・セメント瓦・アスベストえんとつ類4点・574g，瀬戸・美濃陶器2点・172g，磁器の肥前27点・632g，瀬戸11点・253g，美濃6点・171g，瓦は江戸後期3点・527g，昭和14点・3,669g，大正・戦前の陶器不明1点・59g，磁器の肥前2点・33g，瀬戸4点・29g，明治・大正の陶器小砂6点・277g，磁器肥前2点・24g，幕末明治の土師質1点・25g，

陶器小砂 1 点・10 g，江戸の磁器肥前 1 点・1 g が出土した。その内，写真で 18 点を示した。

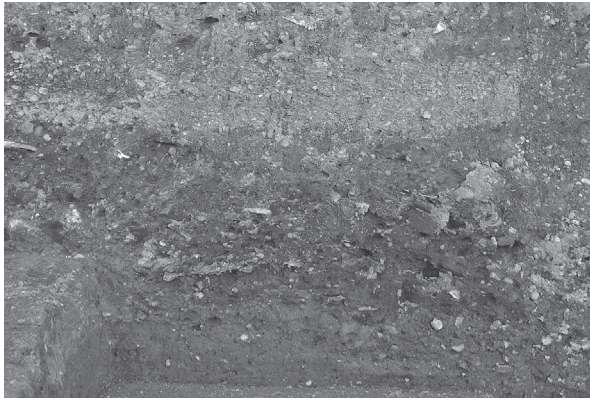
1 は磁器の商標盃で内底面に「大七」とある。2 は磁器の寿司屋の湯飲茶碗で「多賀駅前」とある。3～13 は瓶で，3 は青緑色のワインボトルである。4 は濃茶色のサッポロビールの瓶であるがアサヒビールの商標が張ってある。規格品の瓶を再利用したもので，昭和 30 年代の製品であろう。5 は濃茶色のカルピスの瓶である。6 は濃茶色の亀形の瓶で，ニッカウキスキー 180ml の携帯用である。7 は濃青色の瓶でアサヒビール株式会社の三ツ矢サイダーの瓶である。8 はサンキストソーダの瓶である。9 はバヤリースオレンジの瓶である。10 は明治牛乳の瓶である。11 は明治牛乳の瓶で雪印バターとある。12 は清酒 2 合のガラス瓶である。13 は江戸むらさきの瓶である。14～16 はスチール缶で 14 はサッポロビールのオリンピック商標入りである。15 はコカ・コーラ，16 はファンタグレープである。17 は錠前，18 はセメント棧瓦である。



第 9 図 第 1 号現代廃棄土坑実測図



第 1 号現代廃棄土坑出土遺物



II区第1号現代廃棄土坑土層（東から）

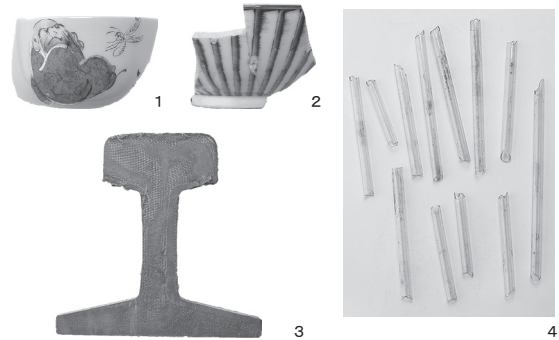


II区第2号現代廃棄土坑土層（南東から）

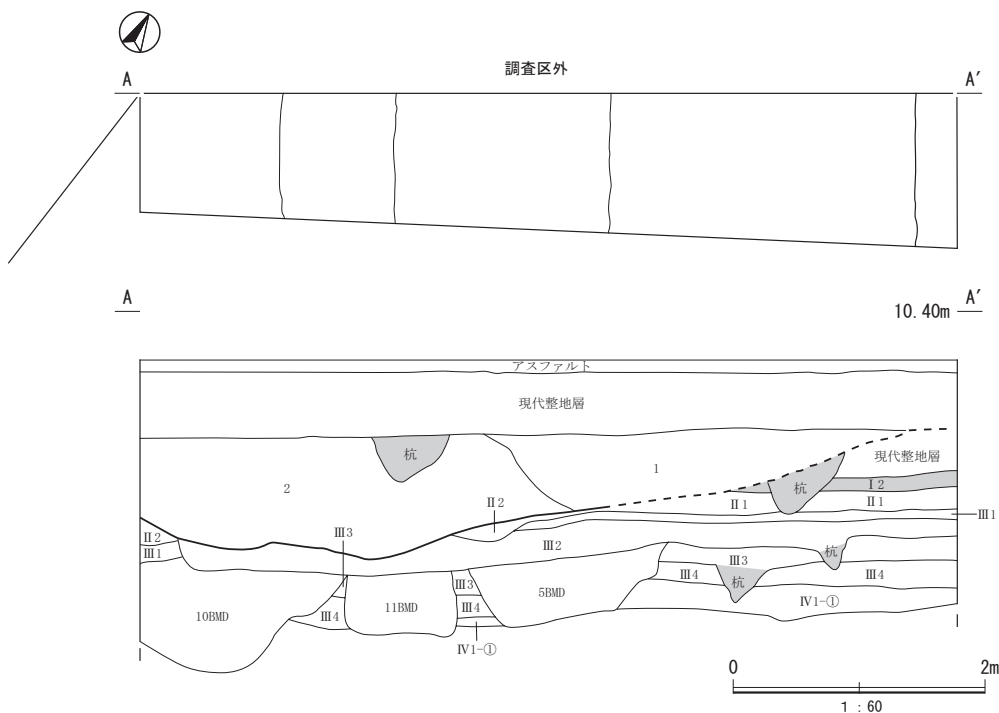
第2号現代廃棄土坑（2GHD）

遺構 II区4A・B区に位置し，平面形は東西3.2m以上×南北1.1m以上で，現代面で確認したが土層では上層まで確認した。深さは1.1mで残滓の処理穴である。

遺物 遺物は戦後の工業製品他29点・965g，陶器の瀬戸・美濃2点・39g，磁器の肥前2点・44g，瀬戸1点・30g，美濃4点・69g，大正・戦前の陶器瀬戸1点・146g，常滑3点・20g，磁器の肥前1点・18g，瀬戸4点・47g，明治・大正の陶器益子1点・25gが出土した。その内4点を写真で示し



第2号現代廃棄土坑出土遺物



第10図 第2号現代廃棄土坑実測図

た。1は磁器の丸碗，2は磁器の丼，3はプラスチックのレール，4はガラス管である。

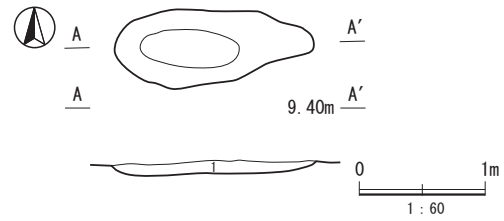
第3号現代廃棄土坑（3GHD）

遺構 II区5B区に位置し、東西1.57m，南北0.6mで深さは9.0cmである。残滓の処理穴である。

遺物 遺物は瓦8点・1468gが出土した。2点（棧瓦）を写真で示した。1は棧瓦である。



II区第3号現代廃棄土坑完掘状況（東から）

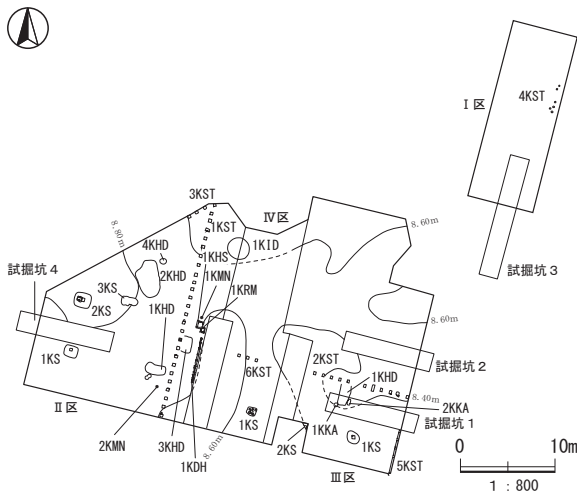


第11図 第3号現代廃棄土坑実測図



第3号現代廃棄土坑出土遺物

第2節 近代面の遺構と遺物



第12図 近代面全体図



II区近代面完掘状況（北東から）

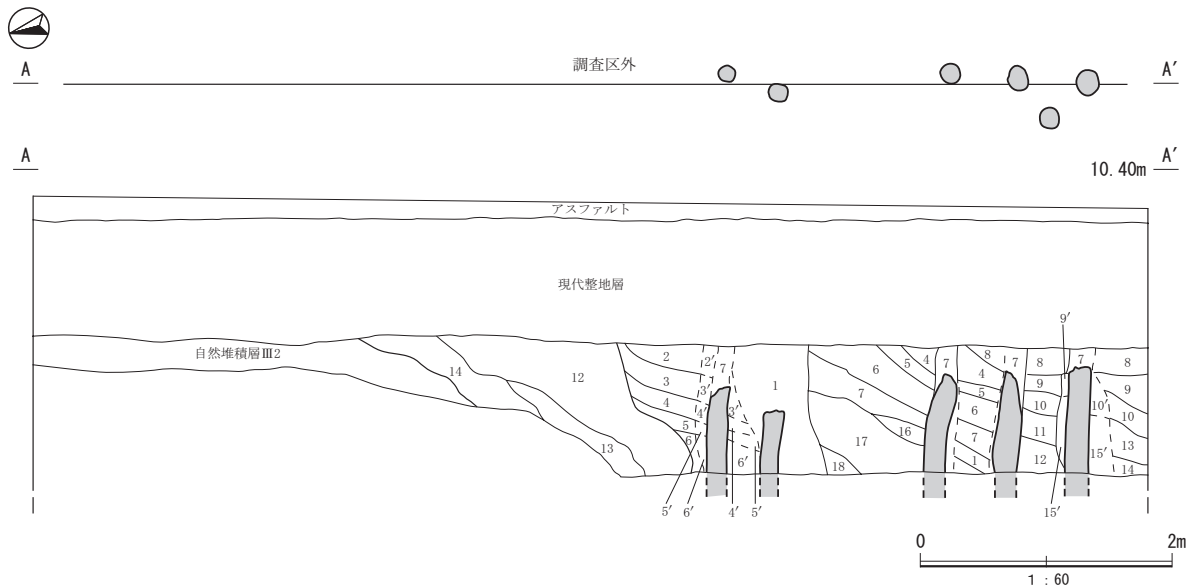
I区

第4号近代礎石建物（4KST）

遺構 I区2F・G区の調査区東壁面に確認した。江戸期の整地層に松杭を打込んだ遺構で北の2本が15cmと細く，南の3本は18～20cmと太い。芯々距離も40cmと58cmで土層断面からも北から南に建替えた事が想定される。機械で確認したところ杭は約3.0m，基盤層までは約5.0mであった。松杭の周囲は整地土の黄褐色ローム層がグライ化し灰色

になっている。

遺物 遺物は江戸の在地の瓦質土器 1 点・55 g が出土したが小片の為、図示し得なかった。



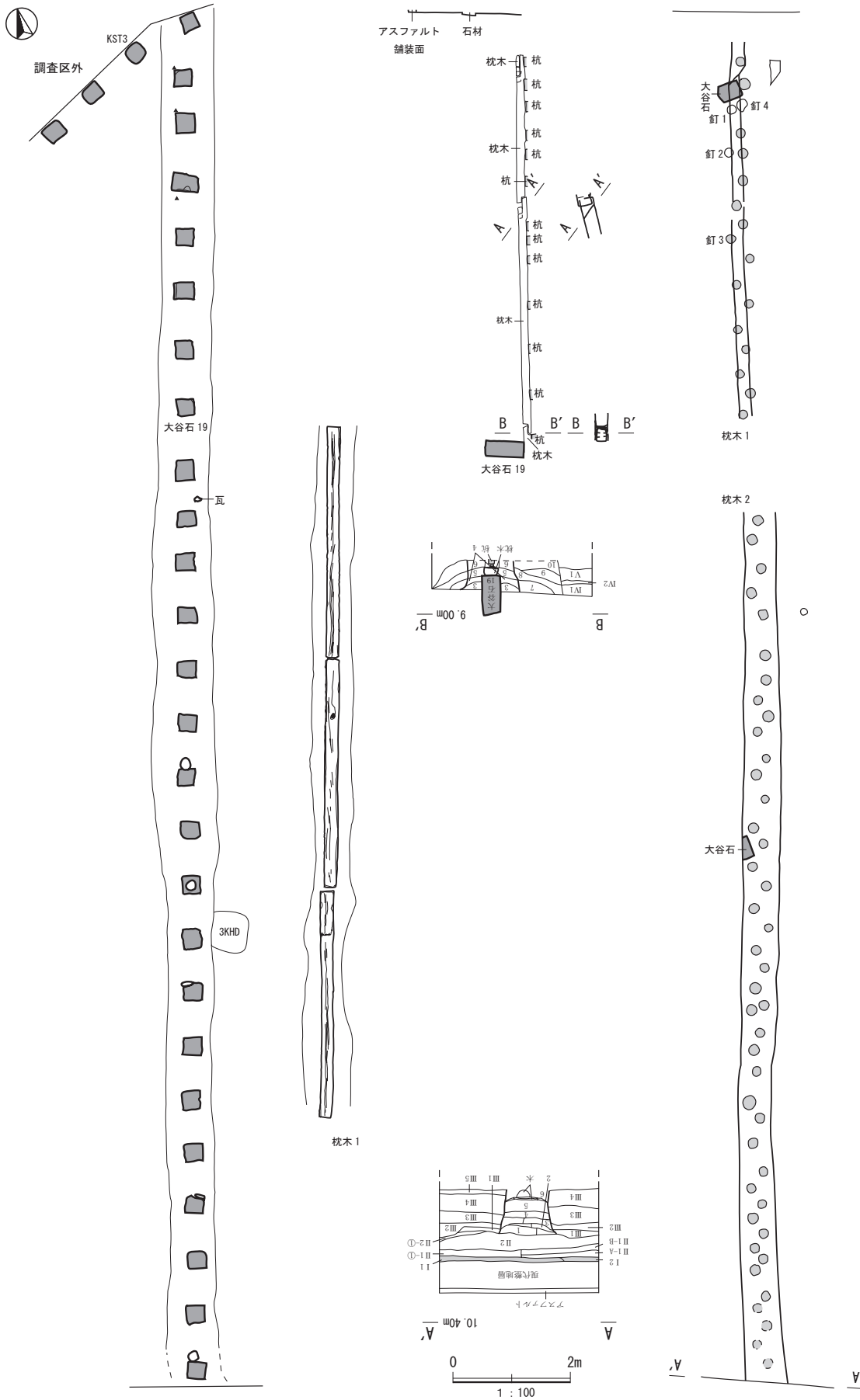
第 13 図 第 4 号近代礎石建物実測図

II 区

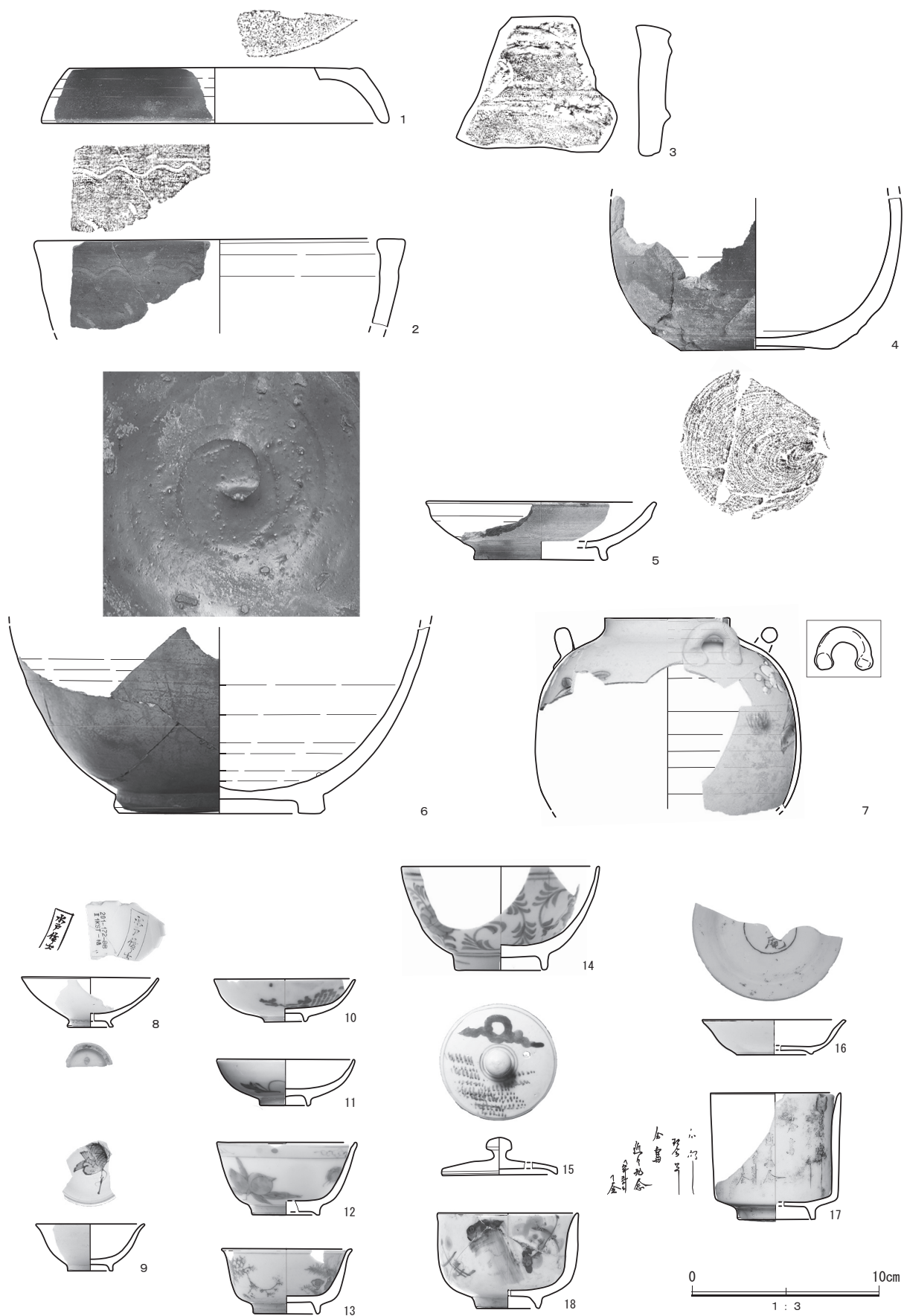
第 1 号近代礎石建物（1 KST）

遺構 II 区 3 C～5 B 区の調査区内を南北に確認した。調査区内で 23.8 m を確認した。構造は大谷石を連続倒立した遺構で下部に 13 尺の松板を枕木にし、連結部はクランク状で下部にはさらに松杭を打込んでいる。松杭は基本的には交互に打込んでいるが間隔は一様でない。大谷石は 25 個確認し 3 尺等間である。枕木が 5 本、松杭を 62 本確認した。松杭の長さは 9 尺程度と推定される。遺構の掘り込みの埋土は版築状で硬く締まっている。この近代礎石建物は III 層の幕末明治の層を掘り込み、昭和 20 年の水戸大空襲で焼失したと考えられる。

遺物 近代のガラス類 7 点・29 g，金属製品 5 点・57 g，明治の煉瓦 1 点・700 g，土製品 3 点・1643 g，昭和の瀬戸・美濃陶器 1 点・20g，戦後の陶器瀬戸・美濃 4 点・40g，磁器瀬戸 1 点・42g，美濃 5 点・109g，大正・戦前の陶器瀬戸 4 点・64g，美濃 3 点・36g，明治の陶器瀬戸 13 点・19g，美濃 10 点・75g，笠間 6 点・131g，不明 5 点・32g，常滑 2 点・635g，磁器肥前 13 点・188g，瀬戸 2 点・40g，美濃 2 点・50g，会津本郷 1 点・23g，幕末明治の瓦質土器 12 点・737g，陶器信楽 1 点・110 g，七面 8 点・775g，小砂 2 点・111g，在地不明 1 点・21g，磁器肥前 17 点・98g，瀬戸 7 点・23g，美濃 3 点・3 g，江戸の銅製品 1 点・6 g，軒丸瓦 1 点・398 g，軒浅瓦 1 点・171 g，土師質土器 2 点・159 g，瓦質土器 17 点・561 g，陶器瀬戸 6 点・76 g，美濃 4 点・57 g，信楽 2 点・21 g，明石 1 点・57 g，堺 1 点・73 g，磁器肥前 77 点・467 g，中世の舶載磁器龍泉 1 点・15 g，陶器常滑 1 点 867 g，平安は須恵器 1 点・7 g が出土した。その内 24 点を図化した。1～4 は瓦質，1 は蓋，2・3 は火鉢，4 は無頸壺である。5～7 は陶器で 5 は丸皿，6 は捏鉢，7 は信楽土瓶，8～20 は磁器で，8 は薄手酒杯でゴム印で「水戸停車□」，9 は端反小杯，10 は紅猪口，11 は染付紅猪口，12 は染付小杯，13 は端反小

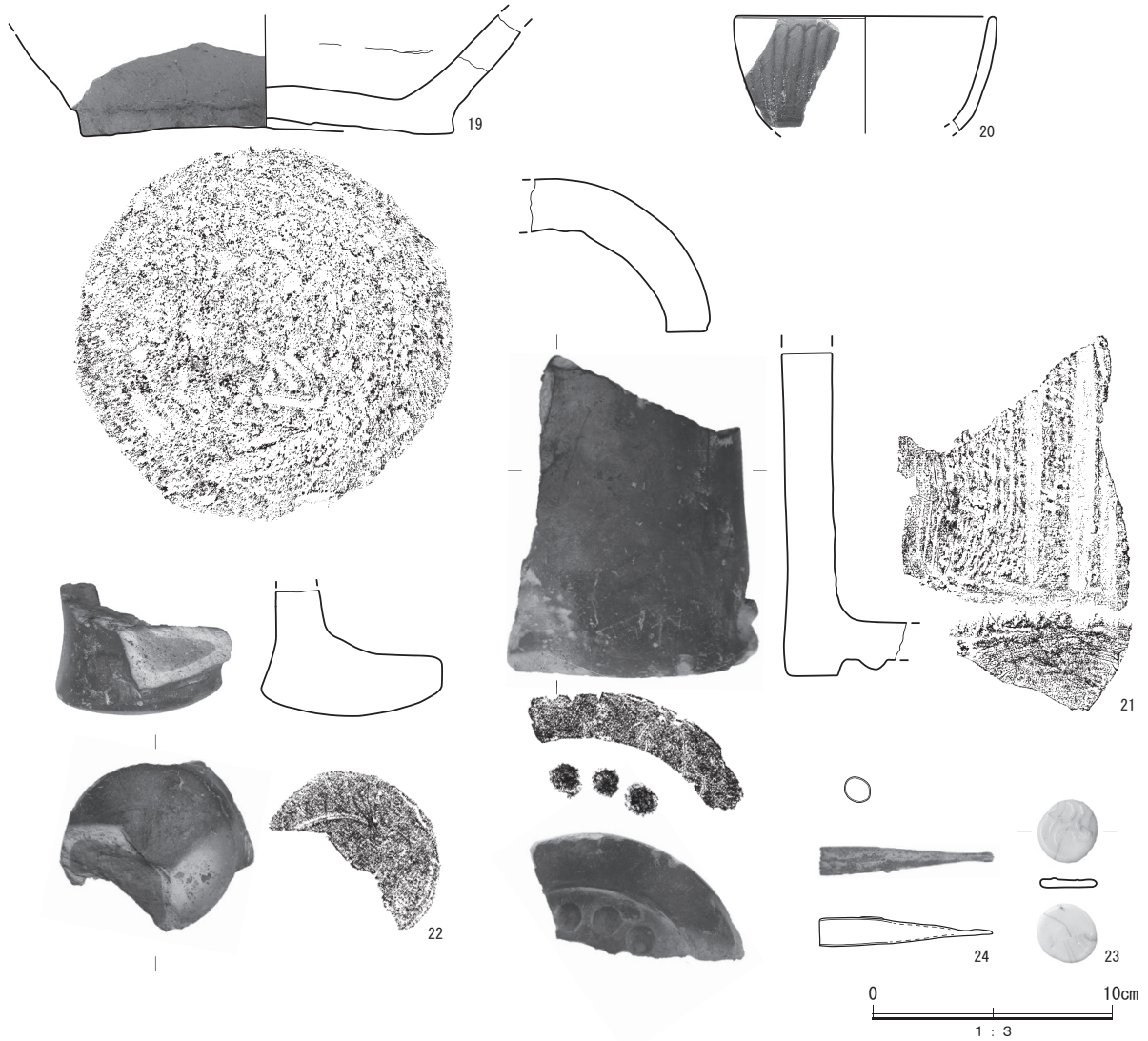


第 14 図 第 1 号近代礎石建物実測図



第 15 图 第 1 号近代礎石建物出土遺物実測図 (1)

杯, 14 は染付丸碗, 15 は染付落とし蓋, 16 は小皿, 17 は筒形湯呑茶碗, 18 は筒丸湯呑茶碗, 19 は常滑甕, 20 は龍泉窯の青磁碗, 21 は軒丸瓦, 22 は軒棧瓦瓦当, 23 はガラスおはじき, 24 は煙管吸口である。



第 16 図 第 1 号近代礎石建物出土遺物実測図 (2)



I 区第 4 号近代礎石建物基礎検出状況 (西から)



II 区第 1 号近代礎石建物確認状況 (北から)



II区第1・3号近代礎石建物構築状況（南東から）



II区第1・3号近代礎石建物杭列検出状況（南東から）



II区第1号近代礎石建物構築状況（西から）



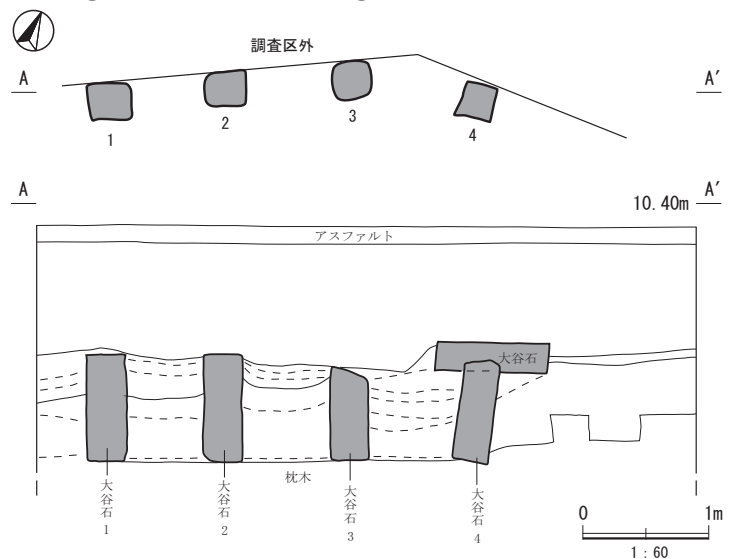
II区第3号近代礎石建物確認状況（南東から）

第3号近代礎石建物（3 KST）

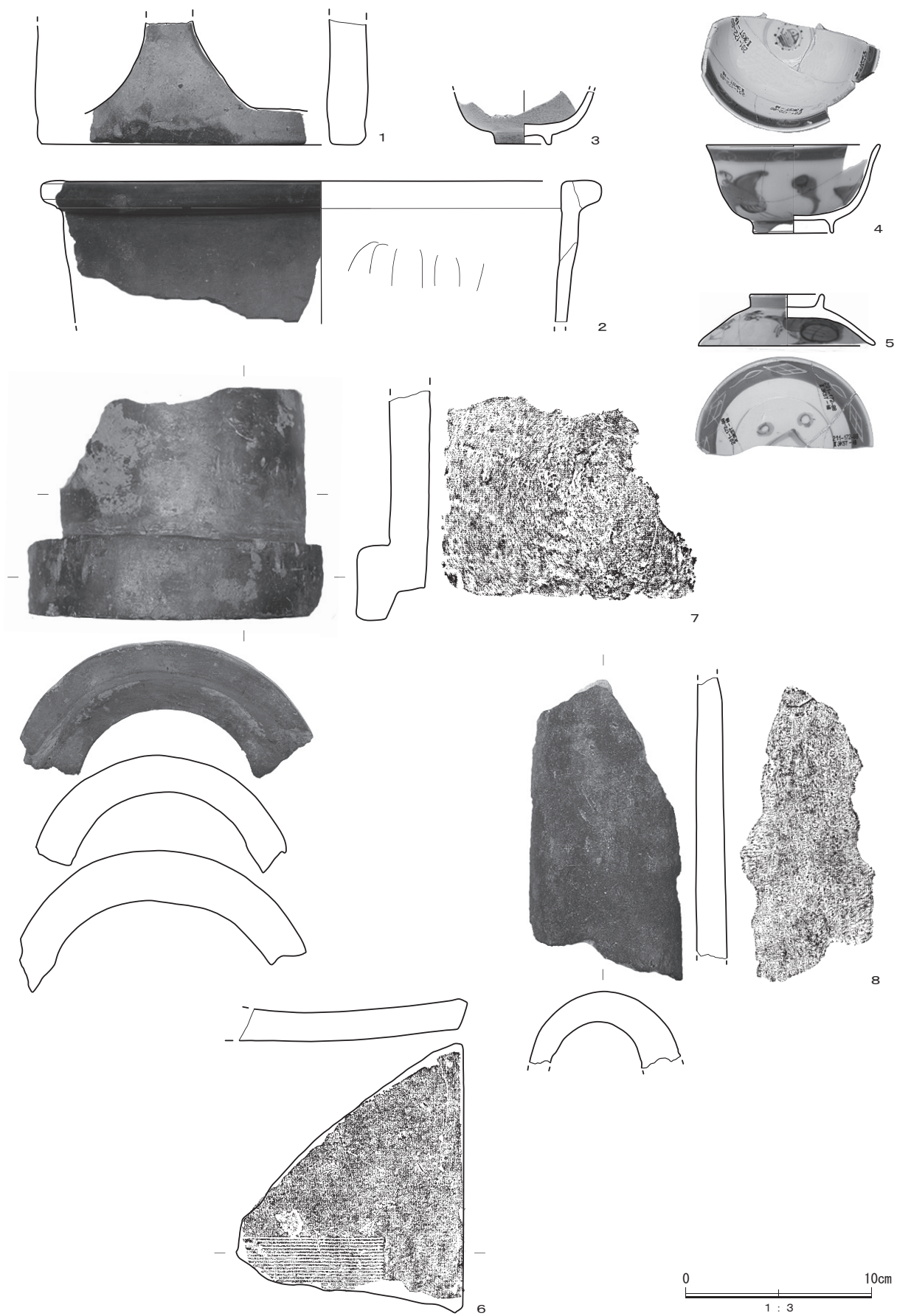
遺構 II区3C区の北壁際に確認した。1 KSTと「く」の字に鋭角に近接している。大谷石を4個確認し、3尺等間で西に続く。枕木と杭も確認した。構造は1 KSTと同じである。遺構の埋土は版築状で硬く締まっている。

遺物 戦後のガラス類7点・176g, 金属製品1点・366g, 昭和の瓦1点・274g, 江戸の瓦1点・772g, 明治の煉瓦1点・1450g, 土管1点・330g, 明治の土師質土器8点・693g, 瓦質土器1点・330g, 磁器肥前3点・18g, 瀬戸1点・54g, 幕末明治の瓦質土器1点・184g, 陶器不明5点・141g, 磁器肥前5点・24g, 江戸の陶器信楽1点・43g, 不明点5点・141g, 磁器の肥前6点126gが出土した。その内8点を図化した。

1は土師質の五徳, 2は瓦質竈, 3は陶器丸碗, 4・5は磁器で4は染付端反碗, 5は染付蓋, 6・7は瓦で6は平瓦, 7は雁振瓦, 8は瓦質の管, 9は煉瓦で別記である。



第17図 第3号近代礎石建物実測図



第 18 图 第 3 号近代礎石建物出土遺物実測図

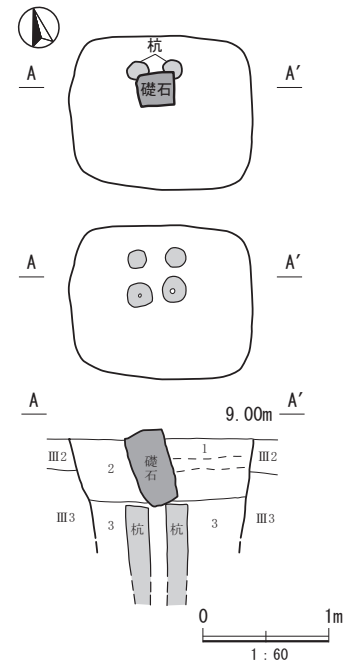
第1号近代礎石（1KS）

遺構 II区5A区に位置する礎石単独の遺構である。大谷石を倒立して、打込んだ松杭に直接載せている。平面形は東西1.47m、南北1.23m、大谷石は若干西に傾いている。松杭は北側が17cm2本、南側が24cmで、南側の2本に2cmの孔が開けられている。遺構の埋土は版築状で硬く締まっている。

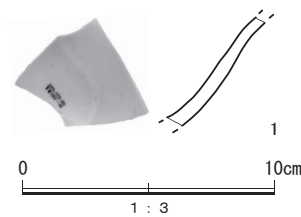
遺物 昭和の土管1点・129g、江戸後期の瓦1点・98g、江戸の磁器肥前1点・32gが出土した。その内磁器1点を図化した。1は磁器皿の体部片である。



II区第1号近代礎石検出状況（北から）



第19図 第1号近代礎石実測図

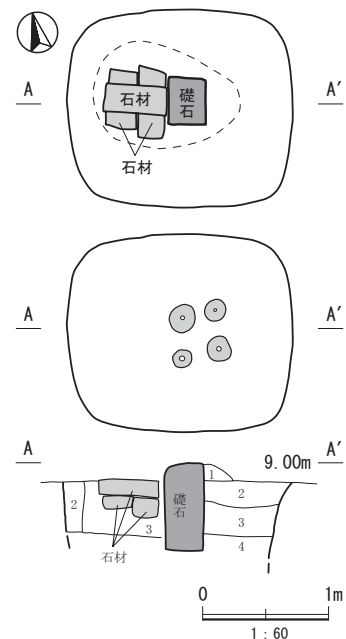


第20図 第1号近代礎石出土遺物実測図

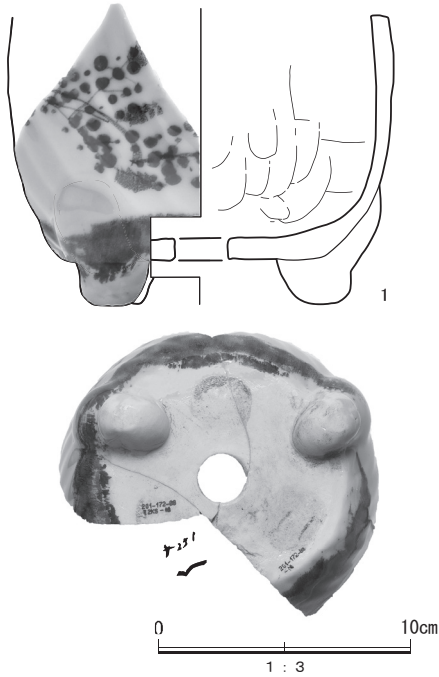
第2号近代礎石（2KS）

遺構 II区4A・B区に位置し、構造は礎石建物と同様であるが単独で大谷石が倒立している。平面形は東西1.68m、南北1.57mの方形で大谷石は38×30cmで長さが60cmである。大谷石の下に枕木はなく杭の上に直接乗っている。西側には支柱の大谷石を支えるように南北に2本敷き、その上に東西に1本設置している。杭は径18cmと22cmで相対して打込んでいる。また、杭の上面には径2cm、深さ約10cmの孔が開いている。遺構の埋土は版築状で硬く締まっている。

遺物 明治の陶器瀬戸1点・15g、美濃2点・29g、磁器肥前4点・577g、瀬戸1点・919g、江戸の瓦質土器3点・108g、陶器唐津1点・2g、瀬戸2点・15g、美濃4点・20g、不明1点・3g、磁器肥前15点・107g、石製硯1点・27gが出土したが、その内磁器1点（植木鉢）を図化した。1は磁器の植木鉢である。



第21図 第2号近代礎石実測図



第 22 図 第 2 号近代礎石出土遺物実測図

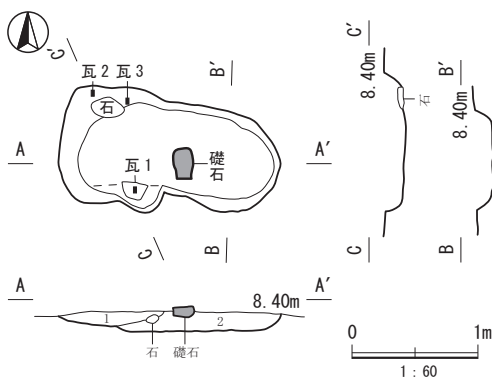


Ⅱ区第 2 号近代礎石検出状況（北から）

第 3 号近代礎石（3KS）

遺構 Ⅱ区 4 B 区に位置し、東西 1.75 m、南北 0.93 m の不正楕円形で深さは 17cm である。礎石は 23 × 17cm で厚さは 10cm である。掘込礎石としたが、硬い整地土の上の単独礎石とも考えられる。

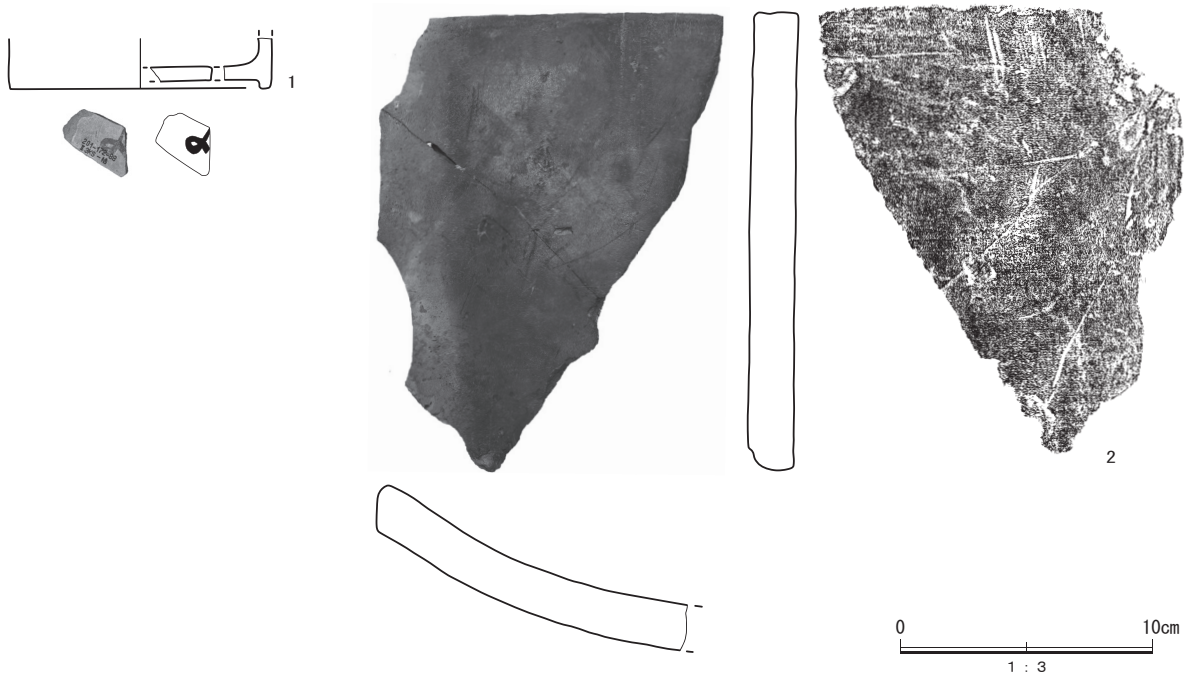
遺物 遺物は明治の陶器笠間 1 点・19g、幕末明治の礎石 1 点・3,200g、江戸中期の瓦 1 点・532 g、江戸後期の瓦 3 点・191g、江戸の陶器美濃 2 点・6g、不明 1 点・3g、江戸の磁器肥前 6 点・19 g、不明 1 点・3 g が出土したが、2 点を図化した。1 は陶器の灰落として、底部外面に墨書があるが積文は不明、2 は平瓦である。



第 23 図 第 3 号近代礎石実測図



Ⅱ区第 3 号近代礎石完掘状況（南から）



第24図 第3号近代礎石出土遺物実測図

第1号近代土管配管（1KDH）

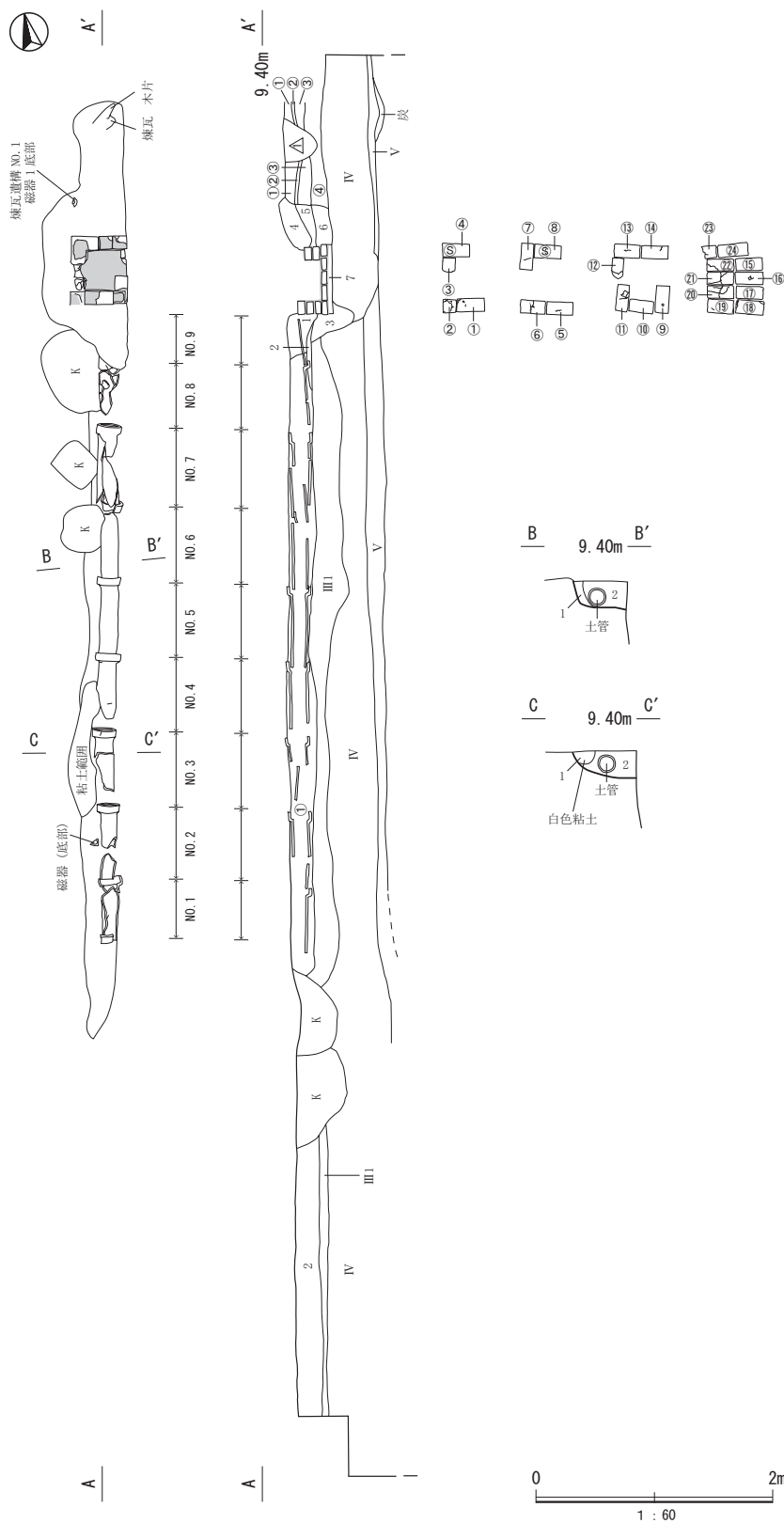
遺構 II区5C区に位置し，第1号礎石建物跡の2.0m東を並走する。第1号煉瓦枡と一連の遺構と考えられる。土管配管の掘り方は煉瓦枡から南壁まで9.2m確認したが，土管は擁壁によって失われ，5.4mで9本が遺存していた。連結部は北にある。土管の周囲には白色粘土を多用して固定している。9点の内4点と陶器2点を実測した。

遺物 明治の土管9本・45,800g，陶器益子1点・50g，幕末明治の陶器七面1点・28g，江戸の土師質土器1点・91g，磁器肥前1点・2gが出土した。その内土管9本の内4本と陶器2点を図化した。1は陶器折縁皿，2は陶器汽車土瓶で「□浦」とある。土浦であろう。土管①・土管⑧は筒部の内面が観察される資料，土管⑤は完形，土管⑨は煉瓦枡との接合部に使用された土管で，他の土管が円筒型に粘土板巻付けであるのに対し，土管⑨は円筒型に粘土紐を張付け円筒型から外してから斜方向に撫でている。



II区第1号近代土管配管・第1号近代煉瓦枡完掘状況（北東から）

II区第1号近代土管配管・第1号近代煉瓦枡検出状況（北東から）



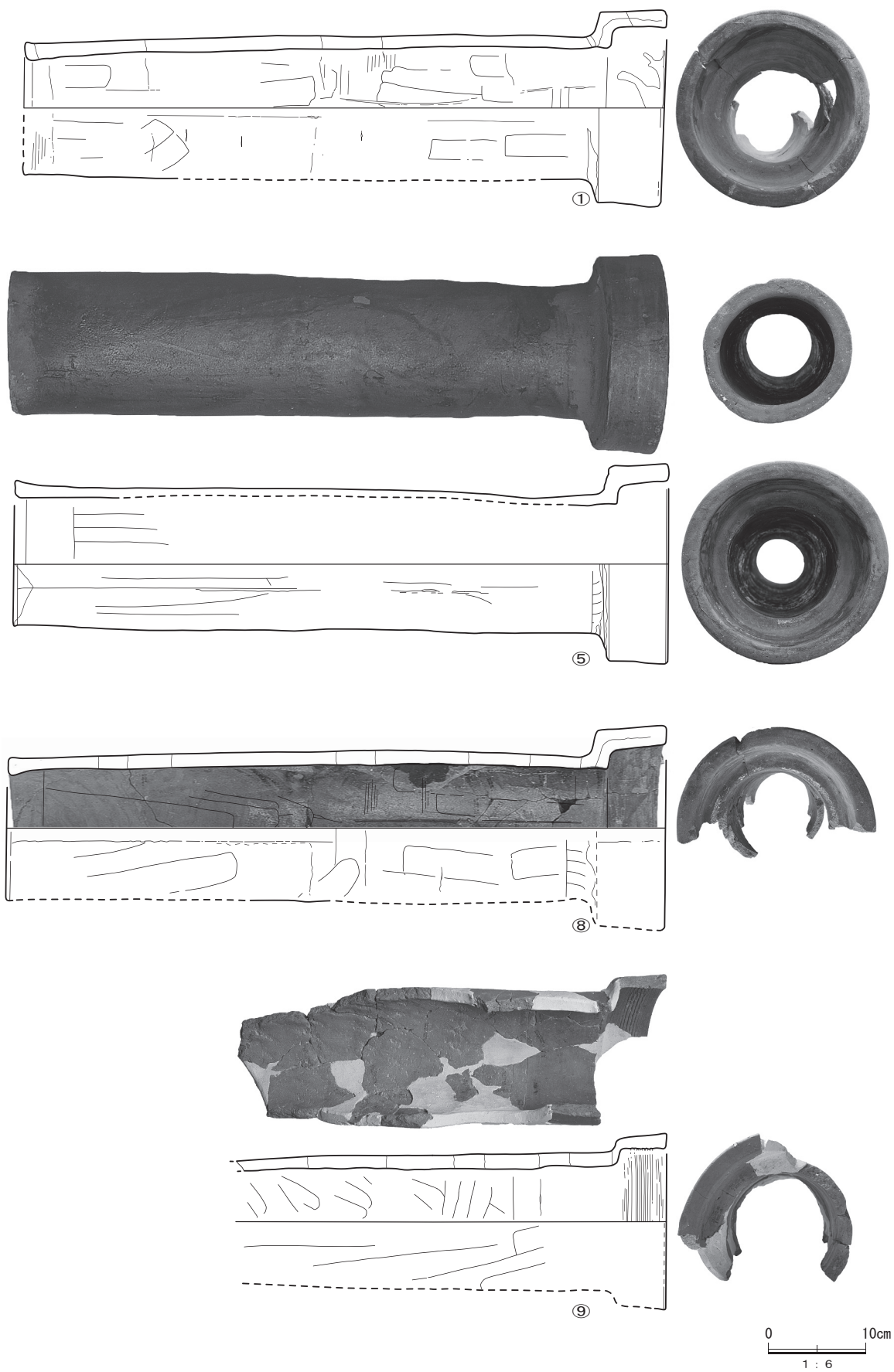
第 25 図 第 1 号近代土管配管及び第 1 号近代煉瓦枡実測図

第 1 号煉瓦枡（1 KRM）

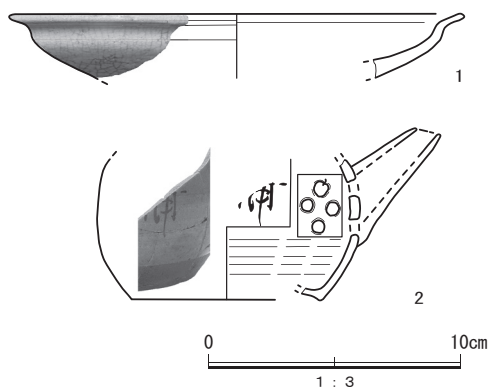
遺構 II 区 4 C 区に位置し、煉瓦は底面の煉瓦を含めて 5 段確認された。南側煉瓦 5 段目に土管⑨が連結部を南にして設置されていた。その周囲は白色粘土で補強と湧水防止のため塗固められていた。煉瓦は 24 個確認された。2 段目の煉瓦⑨と煉瓦⑭の間の煉瓦が無かった。失われたのか西に向かったの導水の可能性もある。

遺物 大正から昭和初期の煉瓦で全体で 28 点・51,602g, 金属製品 1 点・1 g, 明治の陶器美濃 1 点・1 g, 磁器肥前 1 点・18 g, 江戸の陶器瀬戸 1 点・9 g, 磁器肥前 1 点・17 g が出土した。そのうち煉瓦枡使用の煉瓦 24 個の内煉瓦④・煉瓦⑨・煉瓦⑭・煉瓦⑯・煉瓦⑲の 5 点と磁器 1 点を図化した。1 は磁器の紅猪口である。煉瓦は全て統一性のある企画品で機械抜きで⑤の刻印がある。

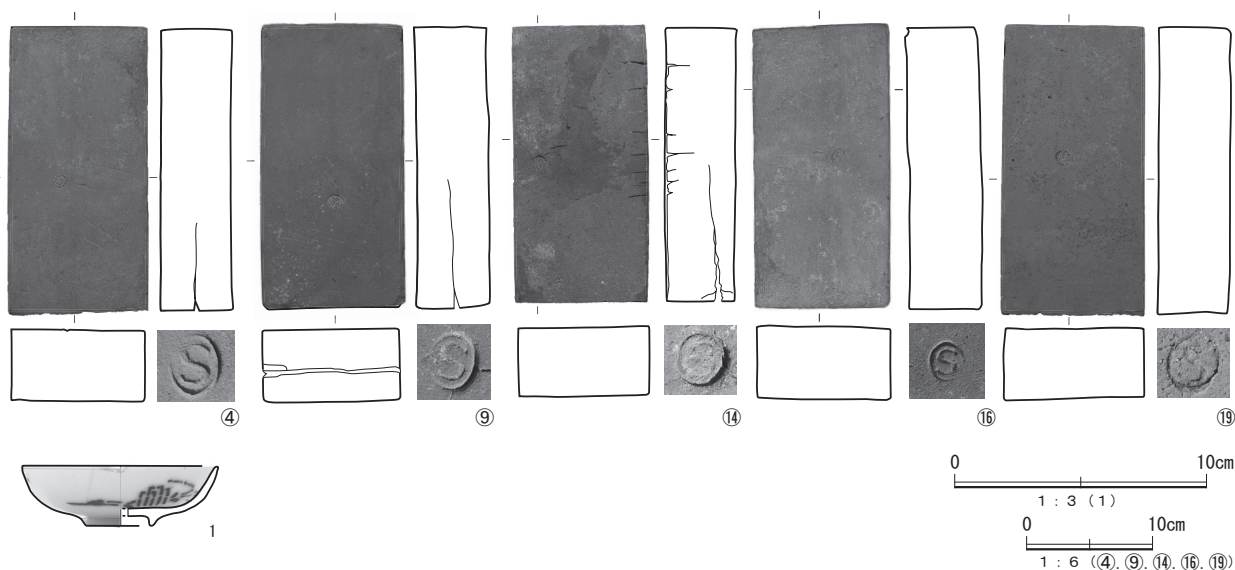
なお、第 1 号近代土管配管及び第 1 号煉瓦枡は出土位置に合わせて復元して、写真で掲載した。（口絵 2）



第 26 图 第 1 号近代土管配管出土遺物実測図 (1)



第27図 第1号近代土管配管出土遺物実測図(2) II区第1号近代土管配管・第1号近代煉瓦桁出土状況(東から)

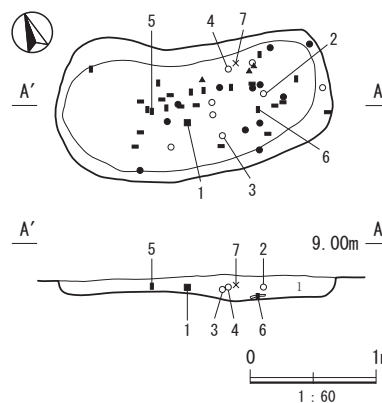


第28図 第1号近代煉瓦桁出土遺物実測図

第1号近代廃棄土坑 (1 KHD)

遺構 II区5B区に位置し、東西方向の楕円形で東西1.70m、南北1.15m、深さ20cmである。掘り込みは浅いが多量の遺物が出土した。残滓の廃棄土坑である。

遺物 遺物はガラス類16点・165g、金属製品4点・15g、木製品1点・8.1g、昭和初期の土管1点・219g、明治の煉瓦13点・6850g、土師質土器1点15g、瓦質土器5点・166g、陶器笠間1点・9g、磁器肥前7点・33g、江戸中期瓦1点・35g、江戸後期瓦1点・515g、幕末明治の瓦質土器1点・896g、陶器笠間1点・256g、小砂6点・176g、磁器肥前2点・15g、江戸肥前2点・26gが出土した。その内8点を図化した。1は瓦質土器の火消し壺の蓋、2～4は陶器で2は行平の蓋、3は小型の植木鉢、4は大型の植木鉢である。5・6は瓦で、5は軒棧瓦、6は平瓦である。7は計量目盛りが付いている瓶である。



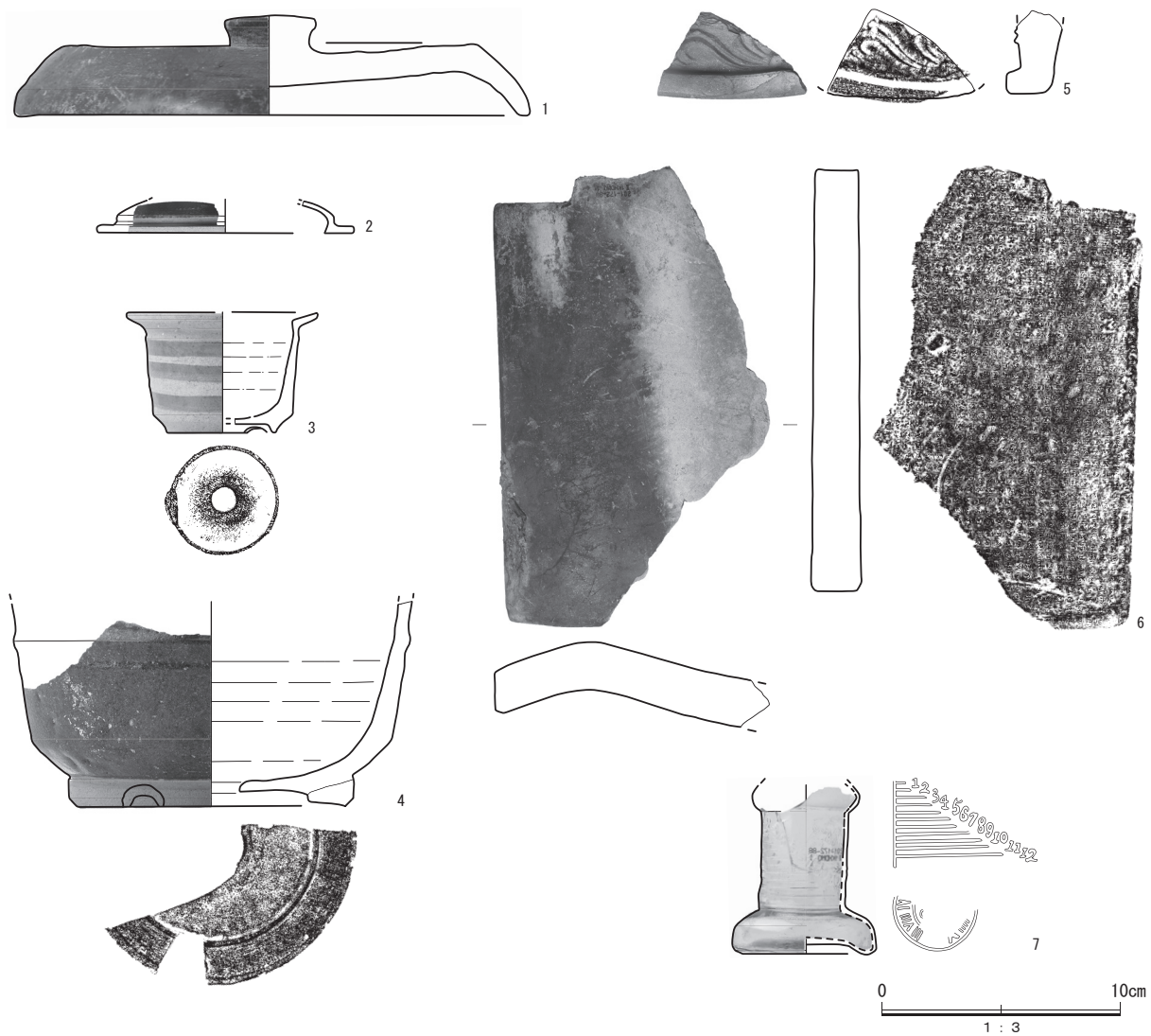
第29図 第1号近代廃棄土坑実測図



Ⅱ区第1号近代廃棄土坑完掘状況（西から）



Ⅱ区第1号近代廃棄土坑遺物出土状況（西から）

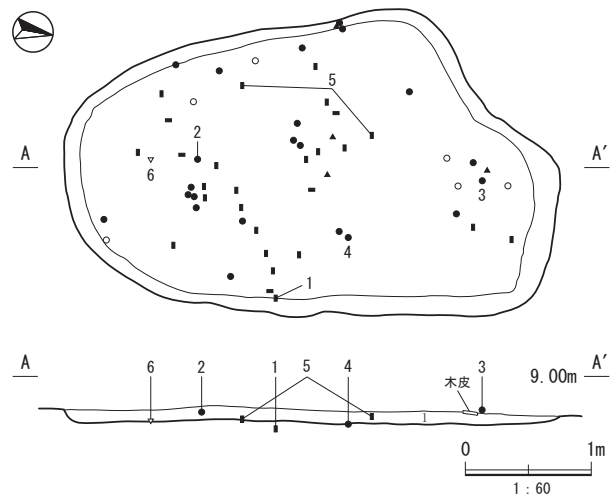


第30図 第1号近代廃棄土坑出土遺物実測図

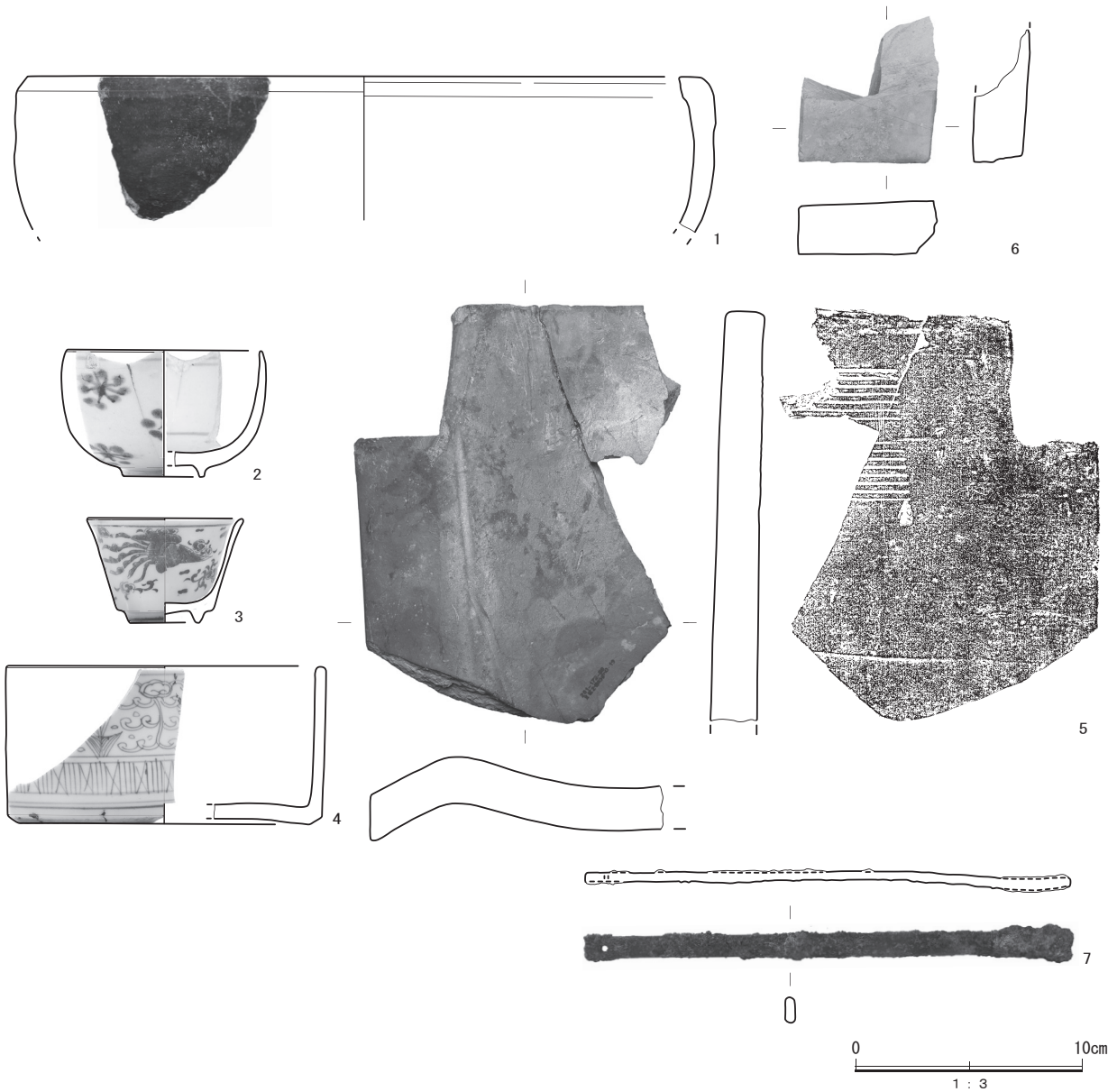
第2号近代廃棄土坑（2 KHD）

遺構 Ⅱ区4B区に位置し、平面形は不整楕円形で、東西3.93m、南北2.42mで深さが20cmである。残滓の廃棄土坑である。

遺物 ガラス類 1点・3g, 金属製品 14点・171g, 石製品 1点・106g, 不明素材 1点・202g, 昭和初期土管 1点・87g, 明治の瓦質土器 1点・14g, 土製品煉瓦 6点・84g, 陶器笠間 1点・3g, 不明 1点・18g, 磁器肥前 10点・81g, 幕末明治の陶器瀬戸 2点・11g, 美濃 5点・12g, 松岡 1点・13g, 七面 3点・46g, 磁器肥前 1点・11g, 明治陶器益子 1点・11g, 江戸の瓦 2点・630g, 瓦質土器 1点・84g, 土師質土器 1点・23g, 陶器信楽 1点・3g, 磁器肥前 8点・50g, 磁器七面 2点・101g が出土した。



第31図 第2号近代廃棄土坑実測図



第32図 第2号近代廃棄土坑出土遺物実測図

その内 7 点を図化した。1 は瓦質鍋, 2 ~ 4 は磁器で 2 は丸筒碗, 3 は端反の猪口, 4 は丸段重, 5 は椀瓦, 6 は温石の未製品であろう。7 は不明鉄製品である。



Ⅱ区第2号近代廃棄土坑完掘状況（北から）



Ⅱ区第2号近代廃棄土坑遺物出土状況（北から）

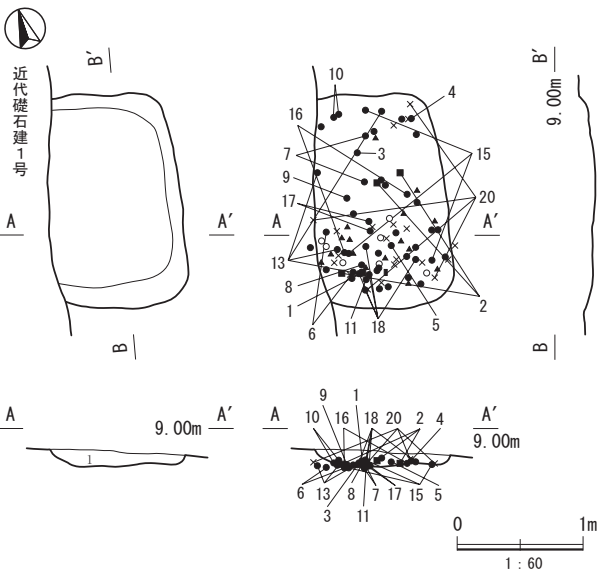
第3号近代廃棄土坑（3KHD）

遺構 Ⅱ区 4・5 C 区に位置し, 第1号近代礎石建物に掘り込まれている。南北 1.70m, 東西 1.06m 以上で深さは 13cm である。残滓の廃棄土坑である。

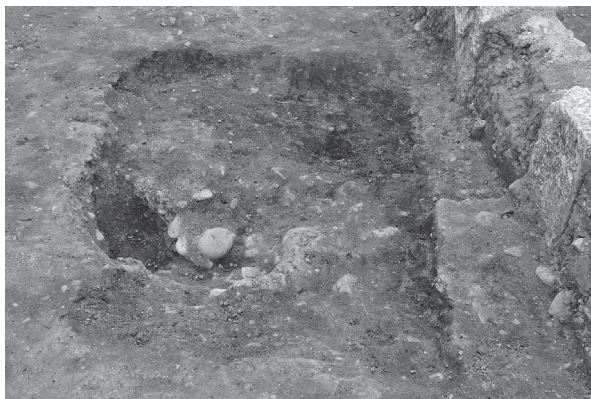
遺物 ガラス類 9 点・495g, 金属製品 26 点・704.4g, 明治のガラス類 2 点・99.1 g, 瓦質土器 1 点・1310 g, 陶器瀬戸 3 点・36g,

美濃 3 点・20g, 磁器肥前 7 点・314g, 磁器瀬戸 6 点・328 g, 磁器美濃 4 点・1124 g, 磁器会津本郷 2 点・513 g, 幕末明治の土師質土器 3 点・52g, 瓦質土器 3 点・1572g, 磁器瀬戸 17 点・483g, 江戸の磁器肥前 1 点・64 g, 江戸後期の瓦 3 点・431g, 瓦質土器 5 点・123 g が出土した。その内 22 点を図

化した。1・2 は瓦質で 1 は鍋, 2 は焜炉である。3・4 は薄手酒杯で 3 には「魚屋本店の商標」4 には「磯浜 味噌」の商標が書かれている。5 ~ 18 は磁器で 5 ~ 7 は端反小杯, 8・9 は丸小杯, 10 は腰丸端反小杯, 11 は青磁小杯, 12 ~ 15 は飯茶碗, 16 は蓋, 17 は急須, 18 は蓋付鉢の身, 19 はガラス瓶「御用御油所



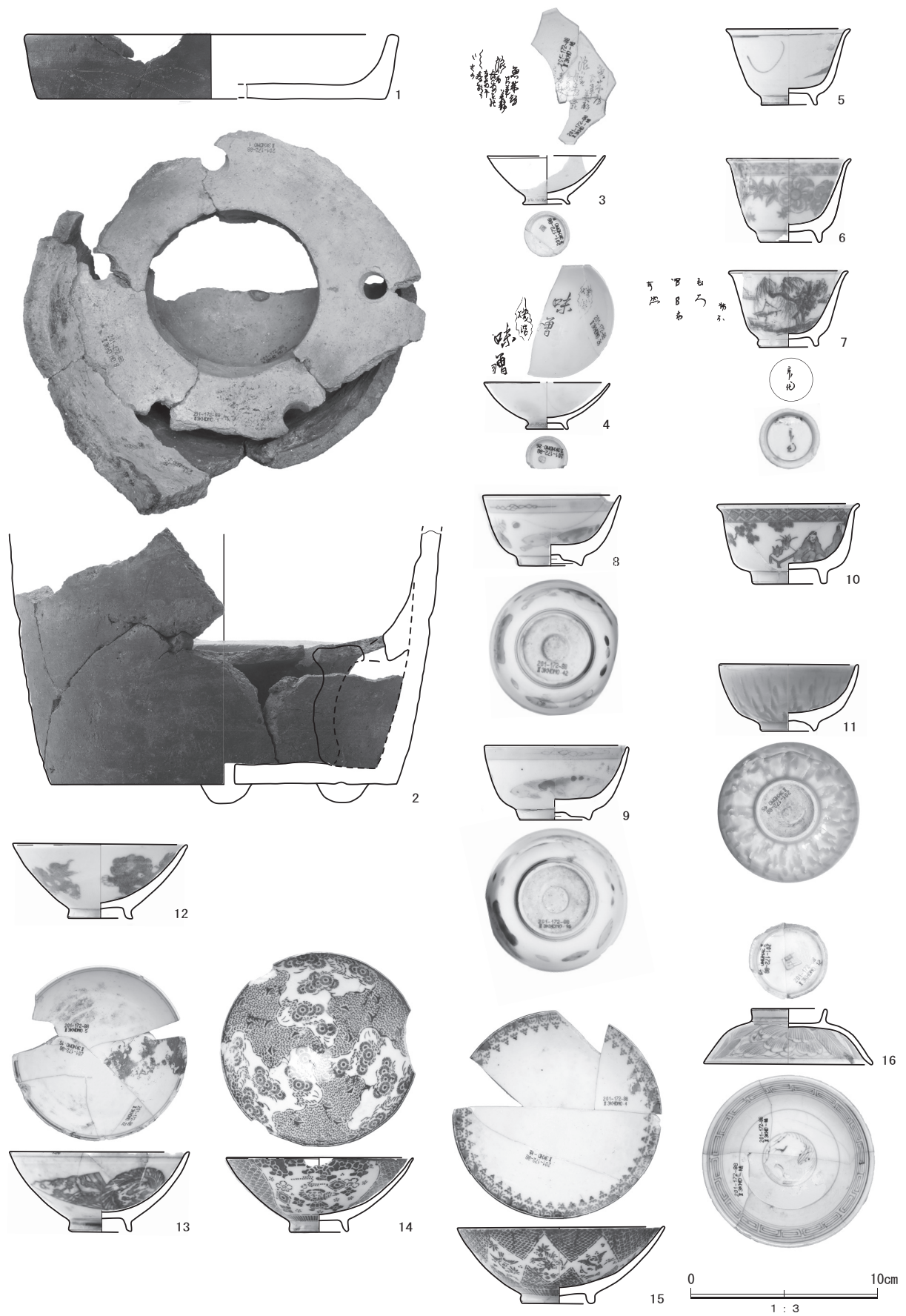
第33図 第3号近代廃棄土坑実測図



Ⅱ区第3号近代廃棄土坑完掘状況（北から）

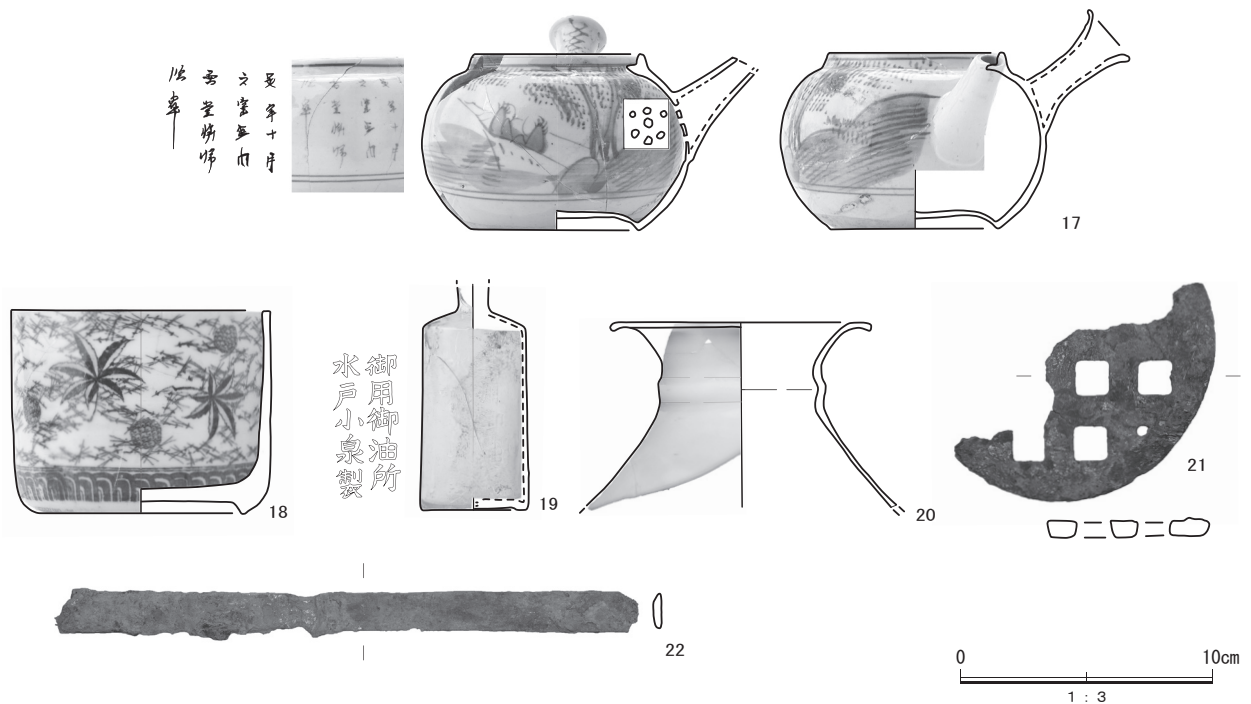


Ⅱ区第3号近代廃棄土坑遺物出土状況（南から）



第 34 图 第 3 号近代廃棄土坑出土遺物実測図 (1)

水戸小泉製」とある。20 はランプのホヤである。21 は鉄製の火受，22 は板状不明鉄製品である。

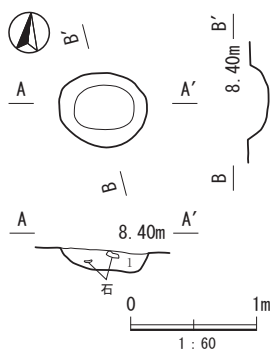


第35図 第3号近代廃棄土坑出土遺物実測図(2)

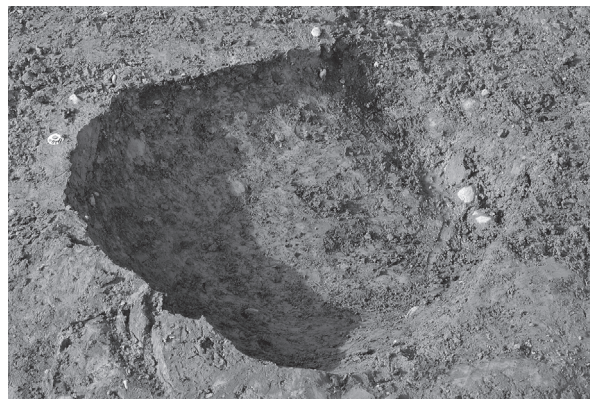
第4号近代廃棄土坑(4KHD)

遺構 II区4B区に位置し，遺構は東西0.70m，南北0.59m，深さ17cmである。残滓の廃棄土坑である。

遺物 遺物は出土しなかった。



第36図 第4号近代廃棄土坑実測図



II区第4号近代廃棄土坑完掘状況(南から)

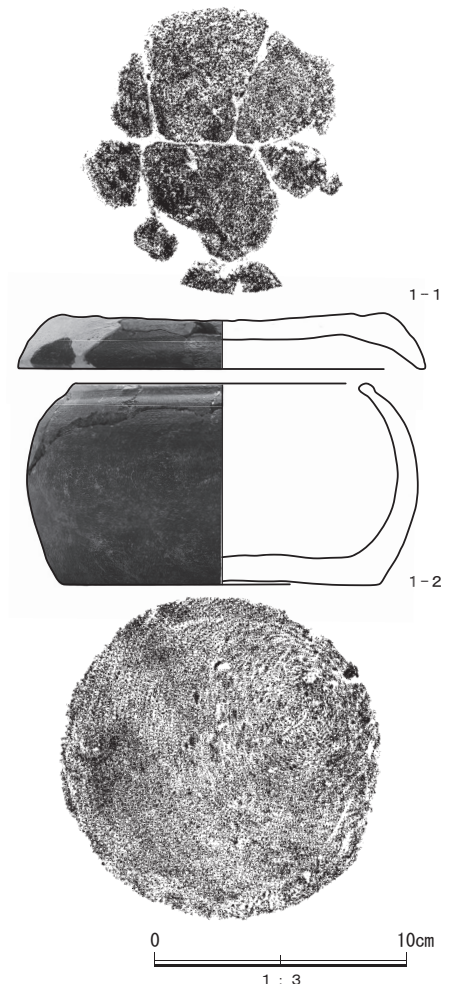
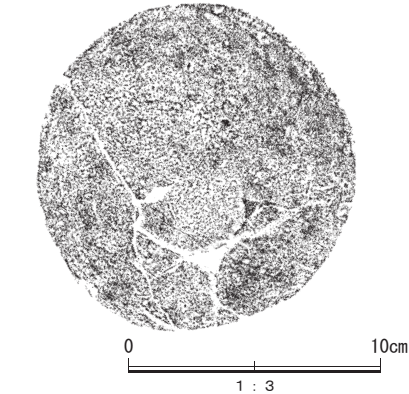
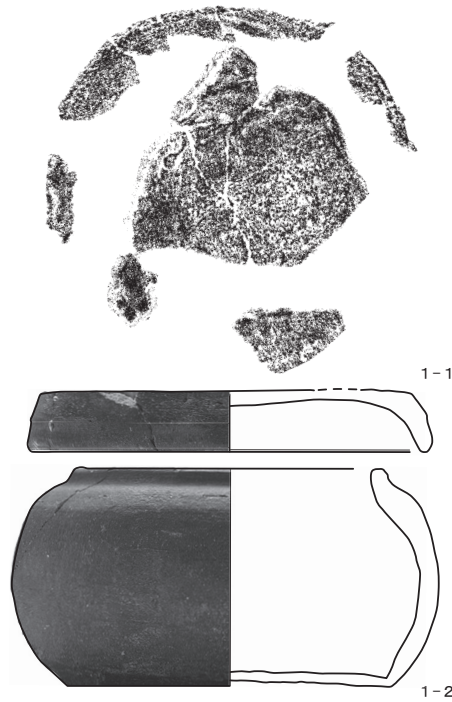
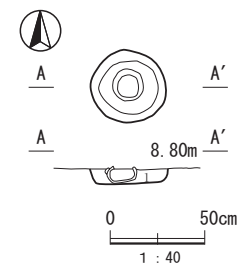
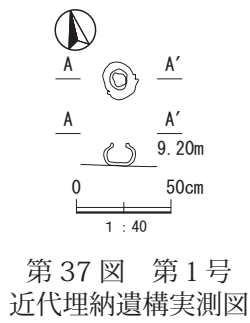
第1号近代埋納遺構(1KMN)

遺構 4C区の第1号近代煉瓦柵の西に第1号近代配石を確認したが，その北側に蓋付の瓦質壺が単独で出土した。第1号近代礎石建物の東1.7mの位置に完形品で埋置されていた。

遺物 単独で出土した。1は瓦質の無頸蓋付壺である。

第2号近代埋納遺構 (2 KMN)

遺構 II区5B区の1号近代礎石建物から1.2m西側から単独で出土した。ほぼ完形で埋置されていた。第1・2号の埋納遺構は第1号近代礎石建物の地鎮に伴う埋納遺構であろう。遺物 単独で出土した。1は瓦質の無頸蓋付壺である。



第40図 第2号近代埋納遺構出土遺物実測図



II区第1号近代埋納遺構検出状況(北から)

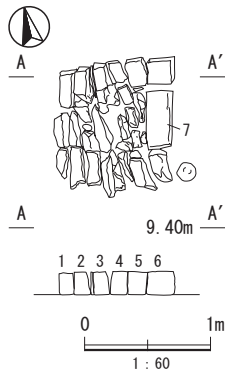


II区第2号近代埋納遺構検出状況(南から)

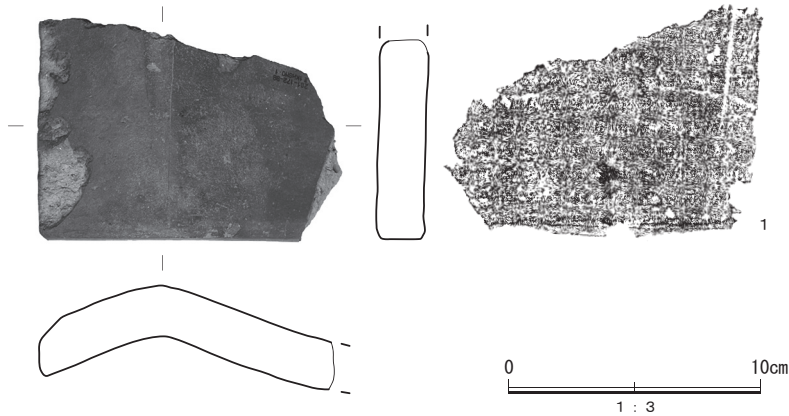
第1号近代配石（1 KHS）

遺構 II区4C区に位置し、第1号煉瓦柵の下部で確認された。南北1.10m、東西0.95mの範囲に外側に直方体の大きめの石を配置し内側は小さめの石を埋めている。深さ18cm前後の石を配置している。単独であるが建物の礎石であろう。

遺物 江戸後期の瓦2点・384gが出土した。そのうち1点を図化した。1は瓦質の棧瓦である。



第41図 第1号近代配石実測図



第42図 第1号近代配石出土遺物実測図



II区第1号近代配石出土状況（南から）



II区第1号近代配石検出状況（南西から）

III区

第2号近代礎石建物（2 KST）

遺構 III区5D・E区に位置し、調査区の東西に確認し西はIV区の第6号近代礎石建物に連結する。東は調査区外に延びている。IV区内で大谷石の礎石は11個確認した。芯々距離は約3尺等間で東から6本目と7本目の間は約6尺になっている。構造は大谷石の下に枕木、その下の松杭が左右交互に打込まれている。他の近代礎石建物と同

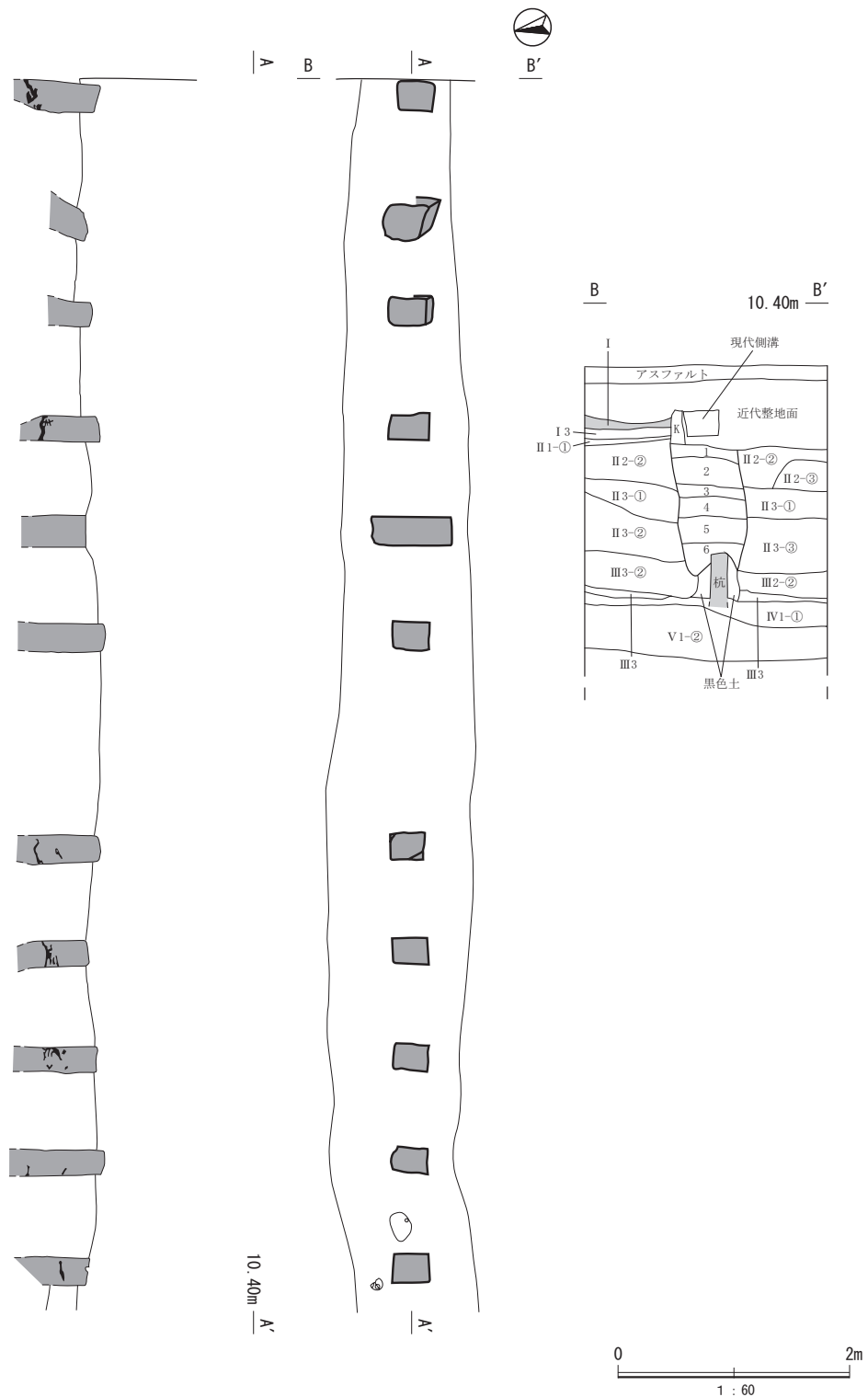


III区第2号近代礎石建物全景（西から）

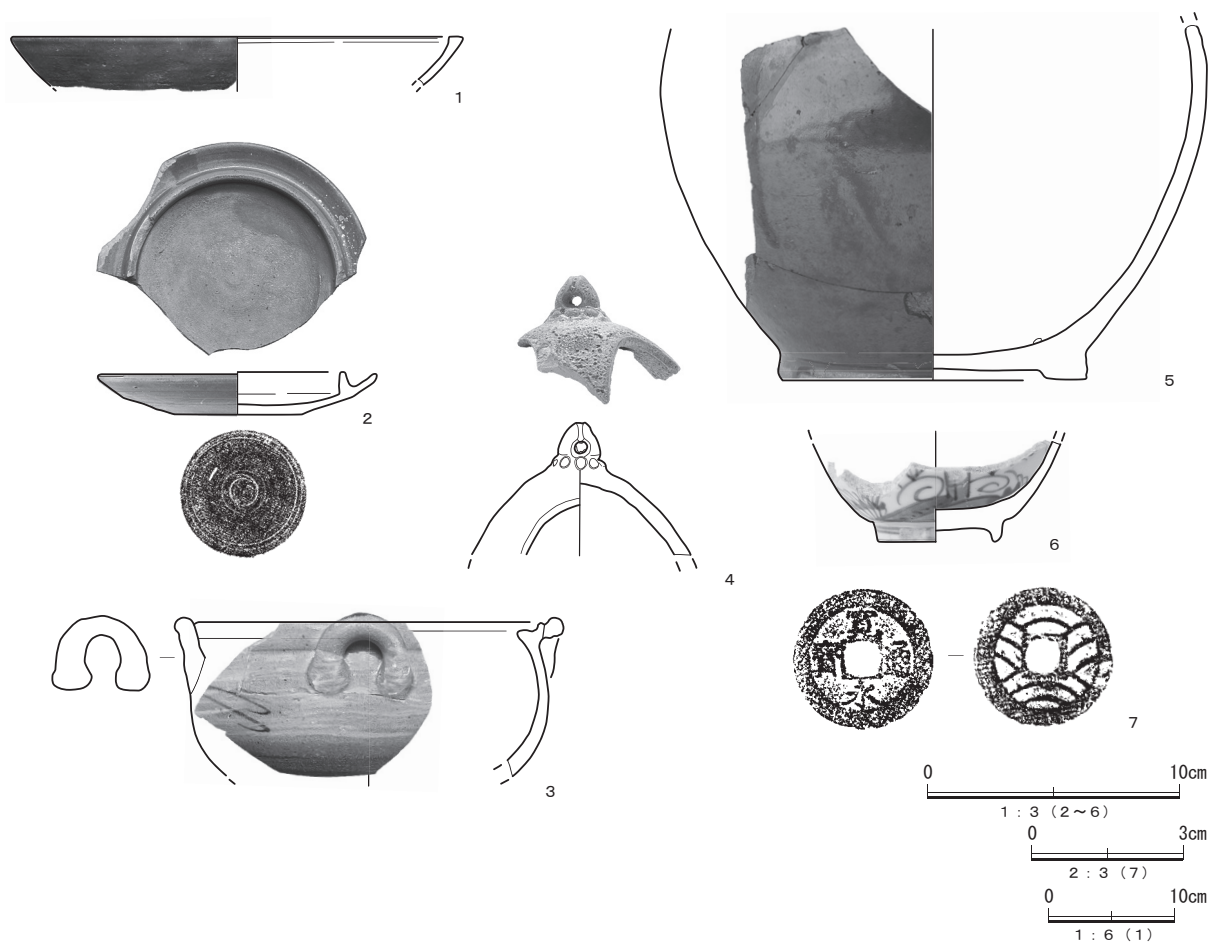
じである。大谷石の大きさは、長さ約2尺、幅約1尺、厚さ約8寸である。大谷石の北面には墨で符号のようなものが書かれていたが性格は不明である。

遺物 ガラス

類 5 点・166g,
 金属製品 1 点・
 122g, 不明素材
 2 点・283g, 石
 炭 1 点・362g,
 明治の陶器益子
 3 点・95g, 磁
 器 肥 前 5 点・
 82g, 幕末明治
 の瓦質土器 1
 点・118 g, 陶
 器 瀬 戸 1 点・
 5g, 美濃 1 点・
 10g, 松岡 1 点・
 20g, 七面 5 点・
 1051g, 万 古
 1 点・54g, 磁
 器 肥 前 12 点・
 38g, 江戸の銭
 貨 1 点・4 g,
 瓦質土器 1 点・
 55g, 陶器京焼
 1 点・40 g,
 磁器肥前 9 点・
 51g が 出 土 し
 た。そのうち 7
 点を図化した。
 1 は瓦質の鍋,
 2・3 は陶器で 2
 は灯明皿, 3 は
 土鍋である。4
 は軟質陶器の香
 炉である。5・6
 は陶器で 5 は甕, 6 は丸碗である。7 は寛永通宝である。



第 43 図 第 2 号近代礎石建物実測図



第44図 第2号近代礎石建物出土遺物実測図



Ⅲ区第2号近代礎石建物杭列検出状況（西から）

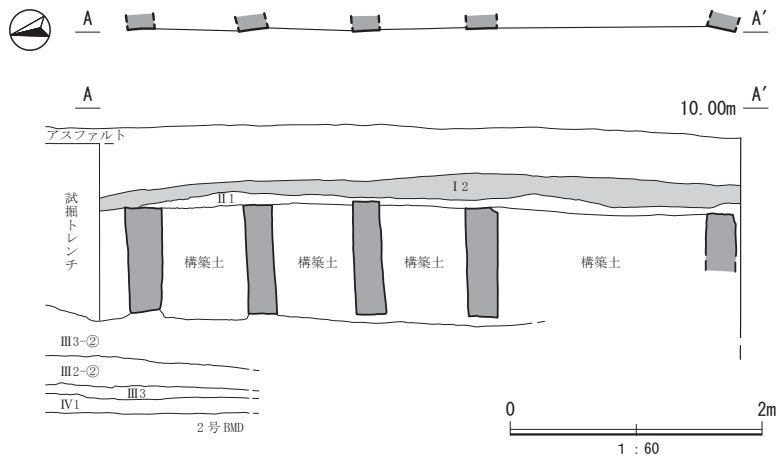


Ⅲ区第2号近代礎石建物大谷石出土状況（北から）

第5号近代礎石建物（5 KST）

遺構 Ⅲ区5・6 E区の東壁で確認した。大谷石の立石で5本を確認し、東から3間は約3尺等間で4間目は約6尺になっている。下部構造は枕木を確認した。

遺物 出土していない。



第 45 図 第 5 号近代礎石建物実測図



Ⅲ区第 5 号近代礎石建物検出状況（西から）

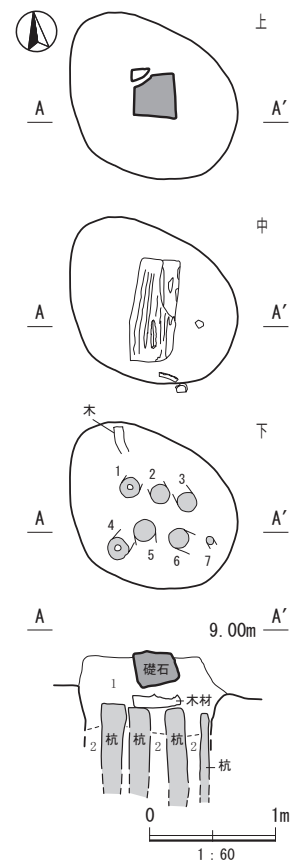
第 1 号近代礎石（1KS）

遺構 Ⅲ区 5・6 D 区に確認した。平面形は長軸 1.55 m, 短軸 1.20 m, 高さは 0.3 m であるが上部が欠如している。下部に 80 × 40 cm, 厚さ 10 cm の枕木, その下に松杭 6 本を確認した。杭の径は 6 本とも 15 cm である。3・4 の杭に固定用の孔がある。杭の長さは推定 7 尺であろう。

遺物 幕末明治の磁器肥前 1 点・6g, 江戸肥前磁器 2 点・9g, 銭貨 1 点・4g が出土した。図化し得る遺物は無かった。



Ⅲ区第 1 号近代礎石検出状況（南から）

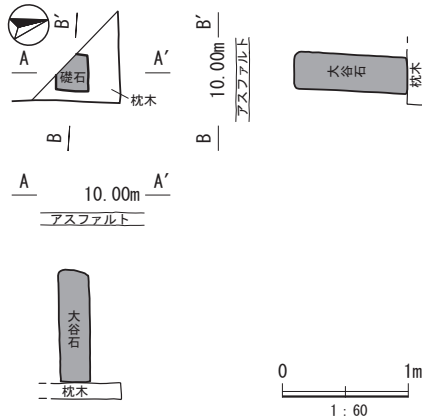


第 46 図 第 1 号近代礎石実測図

第2号近代礎石（2KS）

遺構 Ⅲ区5D区に確認した。調査区外に位置していたが崩落により露出したため記録した。大谷石1石と枕木を確認した。大谷石は長さ3尺、幅8寸、厚さ1尺である。一石なのか連結なのかは不明である。

遺物 昭和の平瓦1点・223gが出土した。図化しえる遺物は無かった。



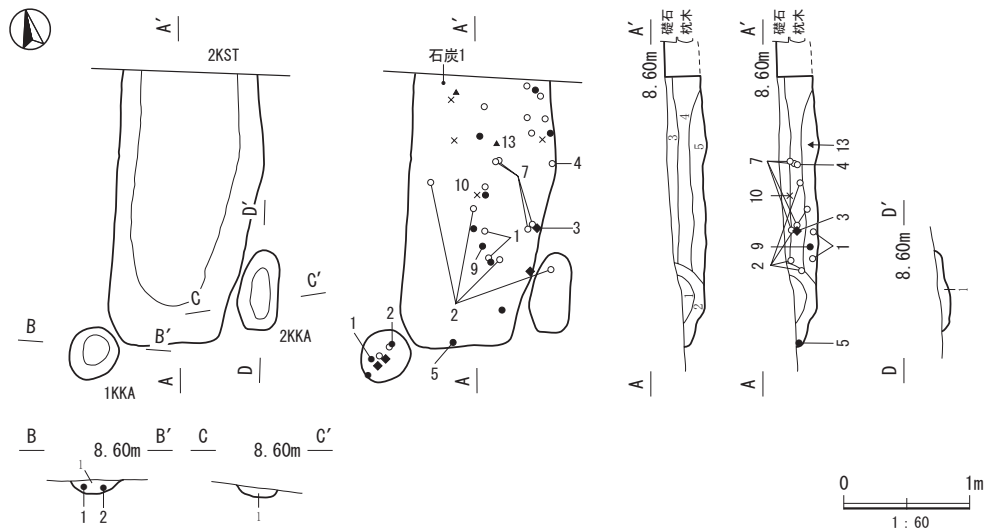
第47図 第2号近代礎石実測図

Ⅲ区第2号近代礎石検出状況（北から）

第1号近代廃棄土坑（1KHD）

遺構 Ⅲ区5D区に位置し、第2号近代礎石建物に掘り込まれている。平面形は隅丸長方形で南北2.15m以上、東西1.2m、深さ30cmである。残滓の廃棄土坑である。

遺物 戦後の磁器瀬戸1点・25g、磁器美濃2点・90g、大正昭和のガラス類11点・58g、金属製品2点・7g、木製品3点・10.3g、瓦2点・152g、大正戦前の磁器肥前2点・46g、瀬戸4点・8g、明治のガラス類3点・54g、磁器肥前3点・58g、磁器瀬戸1点・49g、磁器美濃1点・129g、幕末明治の瓦質土器5点・164g、陶器美濃4点・6g、万古5点・181g、小砂1点・6g、相馬1点・96g、陶器七面2点・1095g、磁器肥前7点・45g、江戸の瓦質土器1点・54g、陶器瀬戸1点・105g、磁器肥前9点・85g、平安時代の須恵器2点・15gが出土した。そのうち15点を図化した。1～4



第48図 第1号近代廃棄土坑および第1・2号小穴実測図



第 49 图 第 1 号近代廃棄土坑出土遺物実測図

は陶器で1は相馬家の家紋入り拳骨湯呑, 2は捏鉢, 3は摺鉢, 4は万古急須, 5～9は磁器で5・6は紅猪口, 7は端反小杯, 8は丸小杯, 9は小飯椀, 10～12はガラスで10はホヤ, 11は透明の小瓶で凸型に「脇田」とある。12は透明の小型瓶, 13は「18K」の指輪, 14は木製の算盤玉, 15は黒漆の折敷の台である。



Ⅲ区第1号近代廃棄土坑・
第1・2号小穴完掘状況（南から）

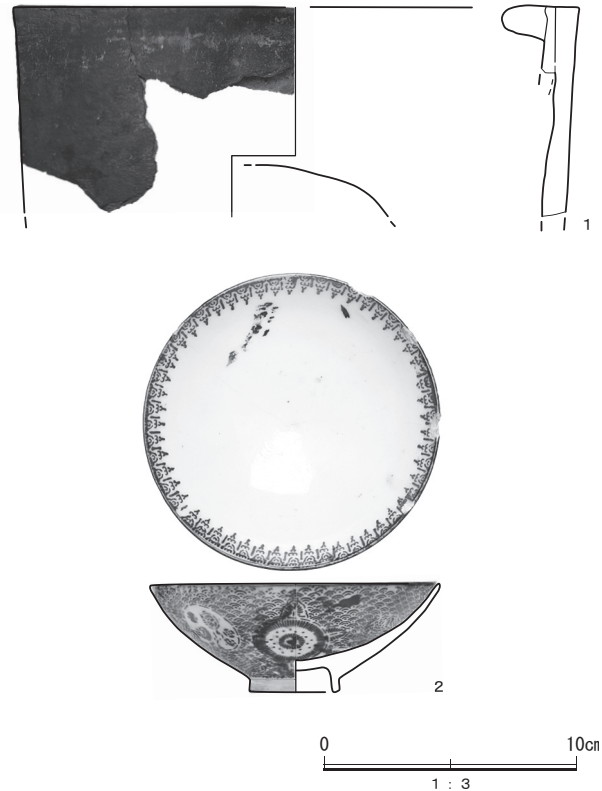


Ⅲ区第1号近代廃棄土坑・
第1・2号小穴遺物出土状況（南から）

第1号小穴（1KKA）

遺構 Ⅲ区5D区に位置し, 第1号近代廃棄土坑の南西隅にある。

遺物 大正戦前の陶器瀬戸1点・9g, 明治の瓦質土器2点・158g, 磁器瀬戸1点・145g, 幕末明治の瓦質土器1点・138gが出土した。その内2点を図化した。1は瓦質の焜炉, 2は磁器の飯椀である。



第50図 第1号小穴出土遺物実測図

第2号小穴（2KKA）

遺構 Ⅲ区5D区に位置し, 第1号近代廃棄土坑の南東隅にある。

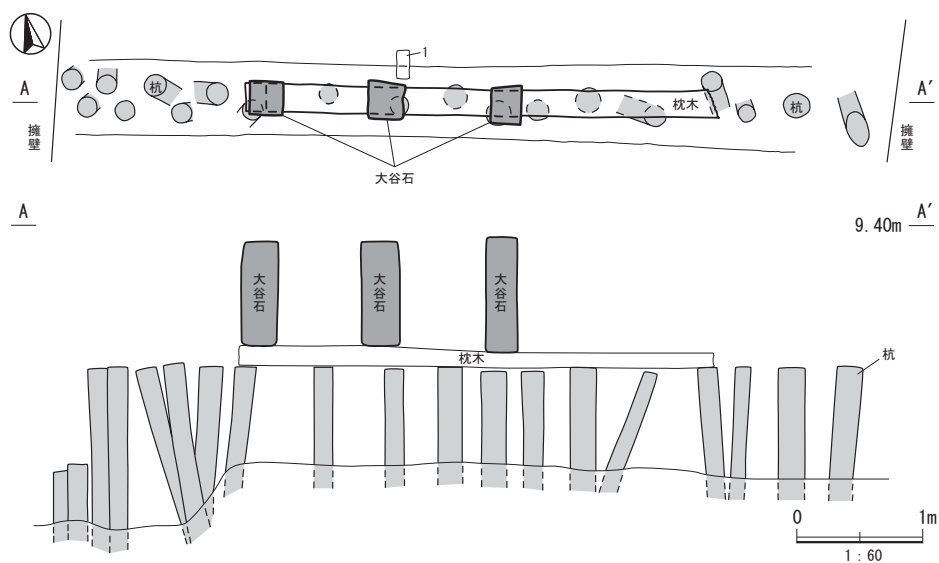
遺物 出土していない。

Ⅳ区

第6号近代礎石建物（6KST）

遺構 Ⅳ区5C区に位置する。大谷石が3石と枕木が1本遺存していた。大谷石の芯々は3尺, 15cmの松杭19本確認した。構造は他の近代礎石建物と同様である。

遺物 幕末明治の陶器松岡1点・27g, 煉瓦が出土した。別記。



第51図 第6号近代礎石建物実測図



IV区第6号近代礎石建物完掘状況(北から)

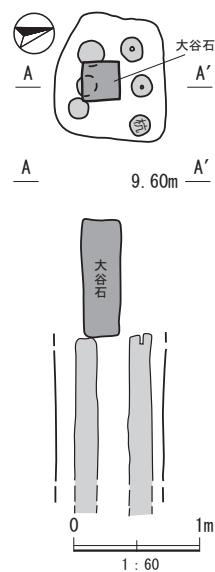


IV区第6号近代礎石建物礎石構築状況(北西から)

第1号近代礎石(1KS)

遺構 IV区5C区に位置している。東西1.18m、南北0.88mの方形で、大谷石の大きさは他と同じである。大谷石の下に枕木がなく松杭の上に直接載っている。5本の松杭のうち2本には孔がある。松杭の長さは江戸二面まで120cm確認できる。

遺物 戦後の磁器美濃1点・20gが出土したが、図化しえる遺物はなかった。



第52図 第1号近代礎石実測図

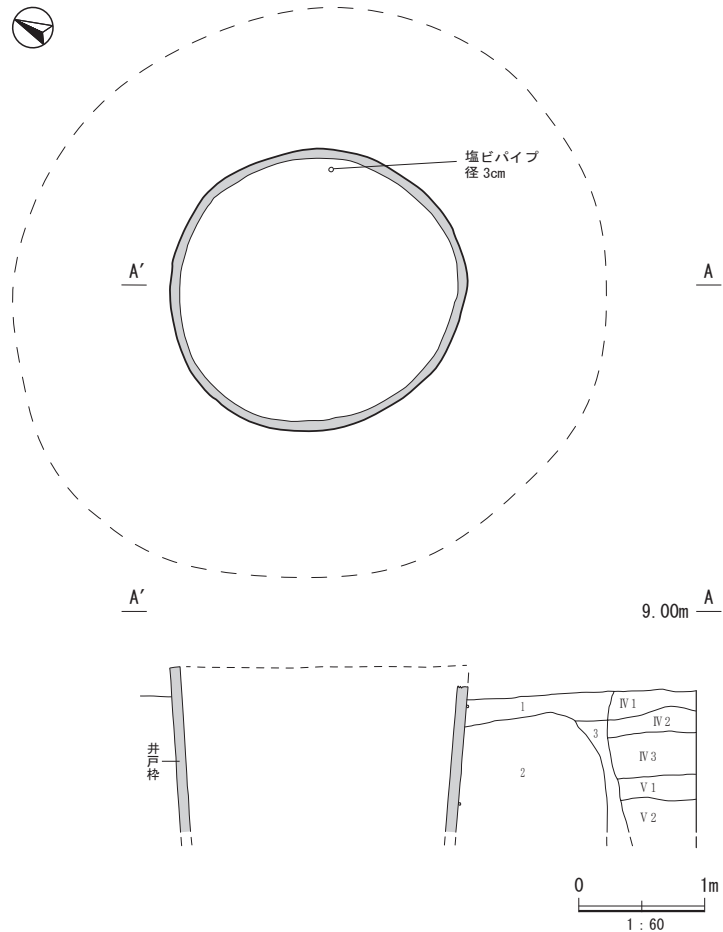
第1号近代井戸(1KID)

遺構 II・III区3・4C区に位置し、当初1区で確認したが全体が確認できるIV区の遺構

とした。円形で径は 2.35 ～ 2.25 m である。下半は杉板を桶に連結し番線で緊縛していた。上半は波板トタンを型枠にコンクリートで躯体を作っていた。塩ビの息抜きパイプが設置されていた。掘り込みは整地土を外周 1.2m の範囲を開削している。

遺物 アルミ缶 3 点・125 g, スチール缶 2 点・97 g, 合成皮革 2 点・574g, ガラス類 5 点・698g, 金属製品 7 点・1,885g, 金銅製品 10 点・6,292 g, 不明素材 2 点・355g, コークス 2 点・592 g, 江戸中期の瓦 1 点・35 g, 江戸後期の瓦 3 点・1328 g, 昭和の瓦 12 点・4719 g, 戦後の陶器瀬戸美濃 11

点・248g, 大堀相馬 1 点・7 g, 工業製品 1 点・25g, 土管 1 点 129 g, 磁器美濃 4 点・121 g, 大正戦前の土師質土器 1 点・83 g, 陶器瀬戸 5 点・1092 g, 陶器美濃 1 点・46 g, 会津本郷 1 点・12 g, 磁器肥前 4 点・15g, 瀬戸 1 点・49g, 美濃 9 点・865g, 明治の瓦質土器 1 点・84g, 磁器肥前 2 点・3g, 磁器瀬戸 1 点・25 g, 磁器美濃 2 点・2,172 g, 幕末明治の陶器松岡 1 点・27g, 磁器肥前 1 点・5g, 美濃 1 点・6g, 江戸の磁器肥前 6 点・21g が出土した。その内 15 点を図化した。1 ～ 6 は磁器で 1 は蕎麦猪口, 2 は湯呑茶碗で「那珂町後台 寺門自転車店 TEL (8) 4325」とある。3 は飯茶碗, 4 は洋皿, 5・6 は火鉢である。7 はカルピス瓶, 8・9 はコーヒー缶, 10 は軒丸瓦, 11 は鍵, 12 は鉄瓶の注口, 13 は滑車, 14 はストーブの火受, 15 は錘である。



第 53 図 第 1 号近代井戸実測図



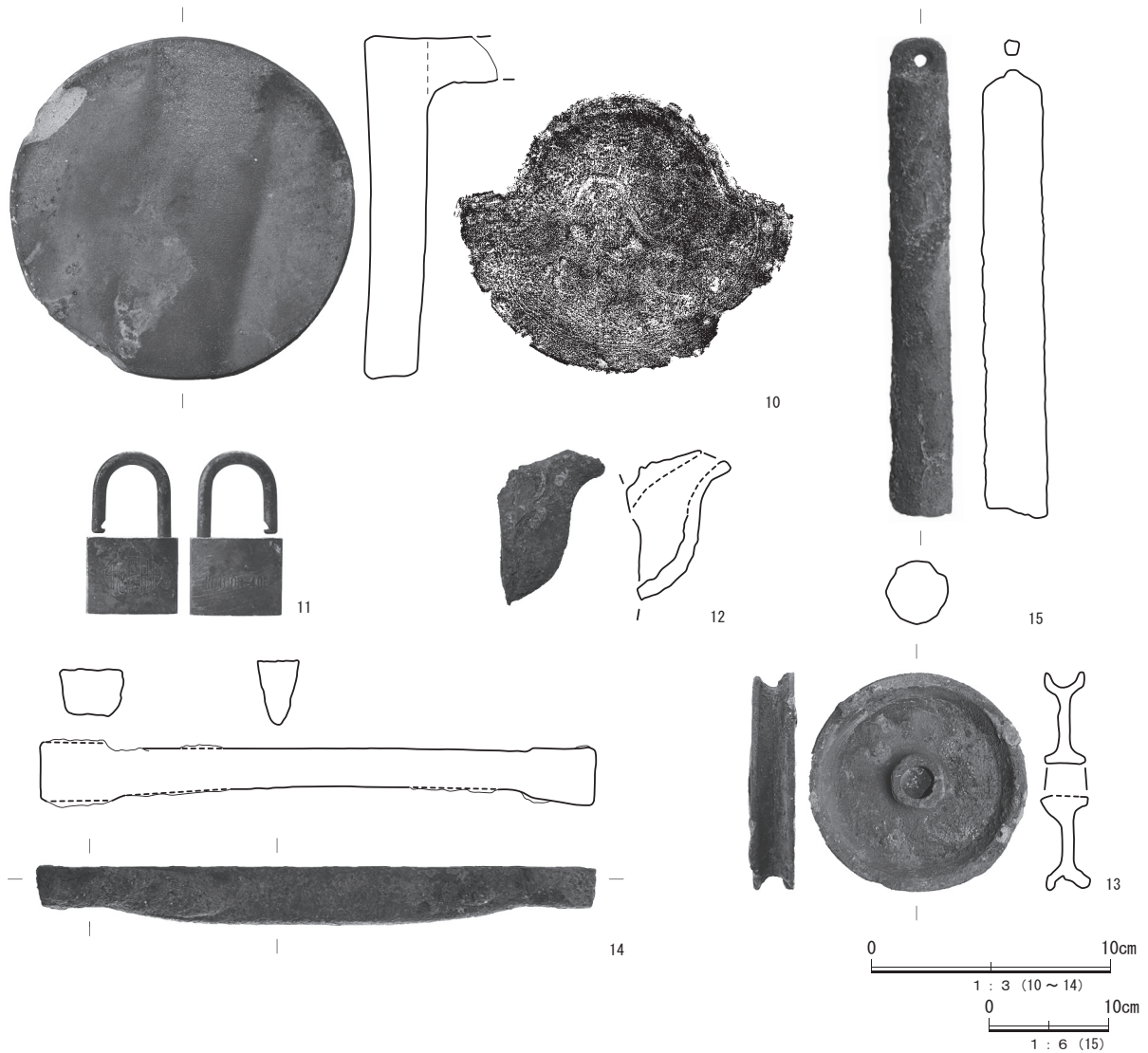
IV区第 1 号近代井戸側板検出状況 (南から)



IV区第 1 号近代井戸確認状況 (東から)



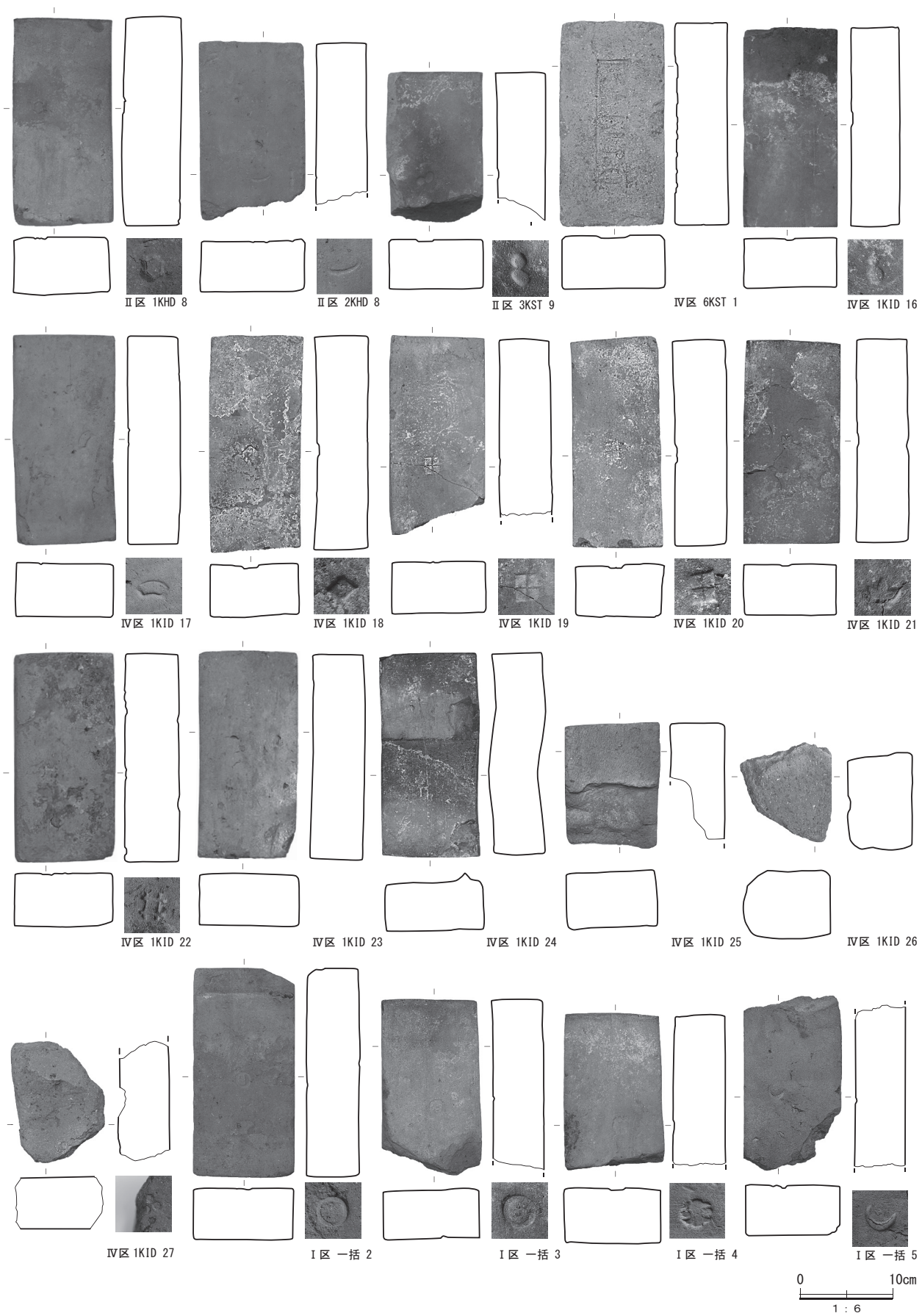
第 54 図 第 1 号近代井戸出土遺物実測図 (1)



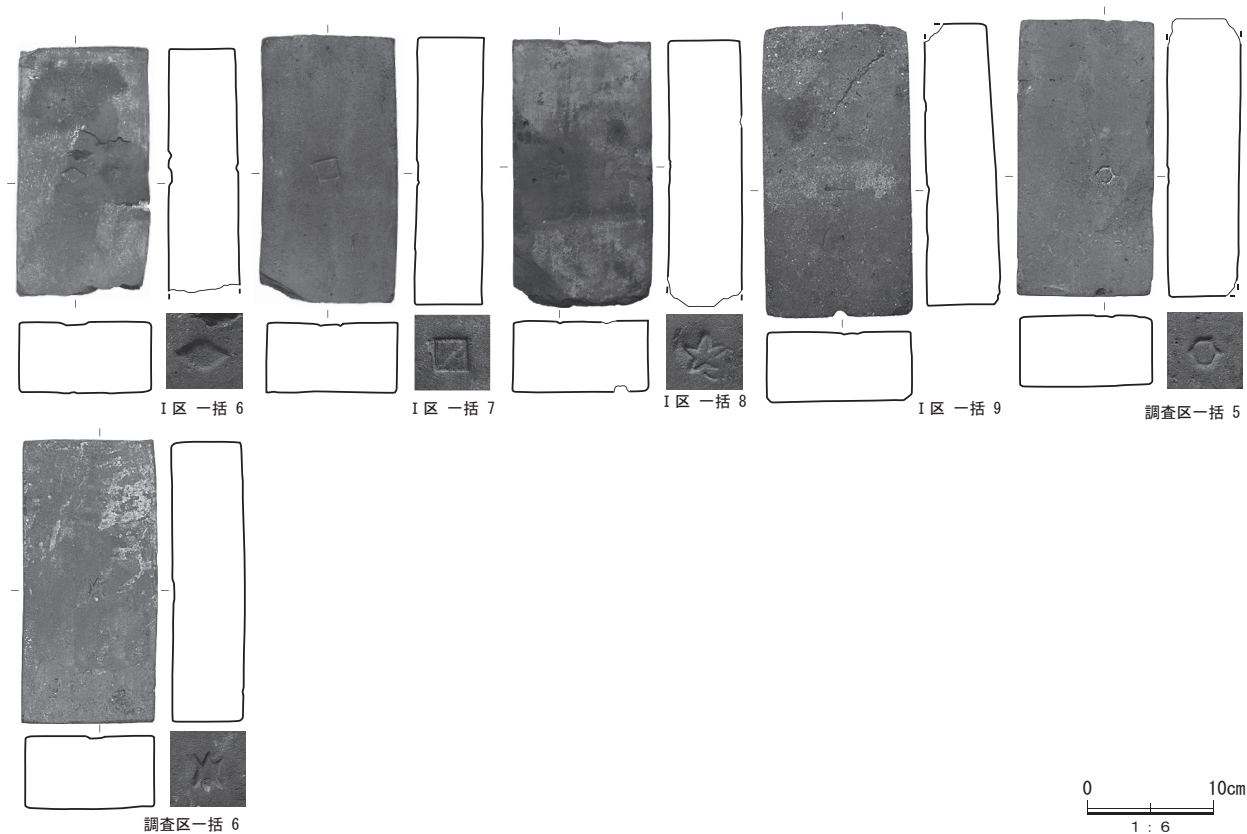
第55図 第1号近代井戸出土遺物実測図(2)

近代面から出土した煉瓦

煉瓦は明治期のものと昭和初期のものが出土した。昭和初期の煉瓦は1号近代煉瓦枡として前述してある。明治期の煉瓦は建物構造材としての煉瓦ではなく、廃棄された煉瓦が各遺構から出土したものと考えられる。煉瓦は131点・209,128gが出土した。その内のⅡ区1KHD 8, 2KHD 8, 3KST 9, Ⅳ区の6KST 1, 1KID16・17・18・19・20・21・22・23・24・25・26・27, Ⅰ区一括1・2・3・4・5・6・7・8・9, 調査区一括22・23の明治期の煉瓦26点を図化した。

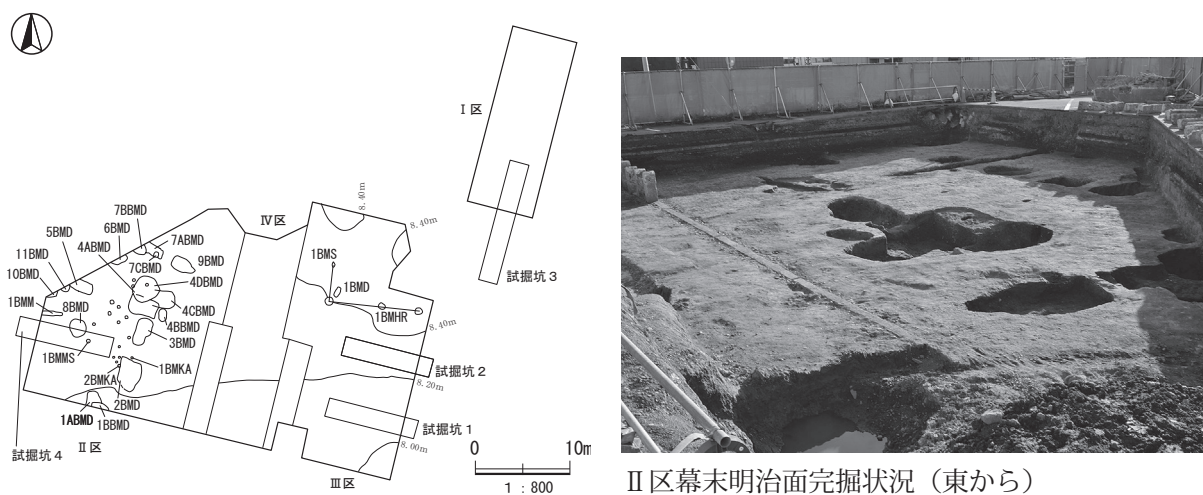


第 56 图 出土煉瓦実測図 (1)



第57図 出土煉瓦実測図(2)

第3節 幕末明治面の遺構と遺物



第58図 幕末明治面全体図

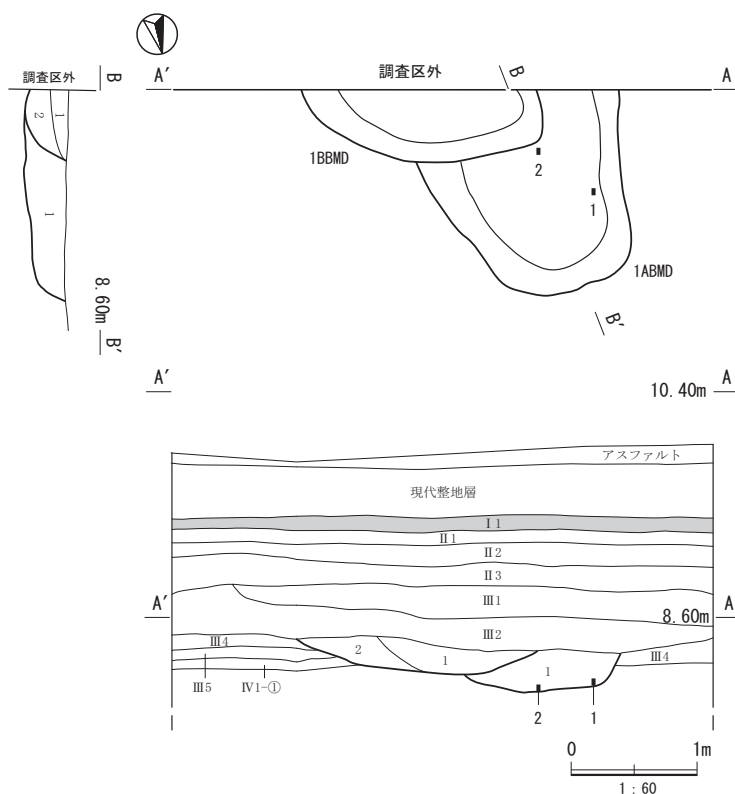
II区

第1A・1B号幕末明治土坑(1ABMD)

遺構 II区5B区に位置し、南側は調査区外にある。1ABMDが古く1BBMDが新しい。

南北 1.72 m 以上，東西 1.60m，深さ 35cm である。廃棄土坑である。

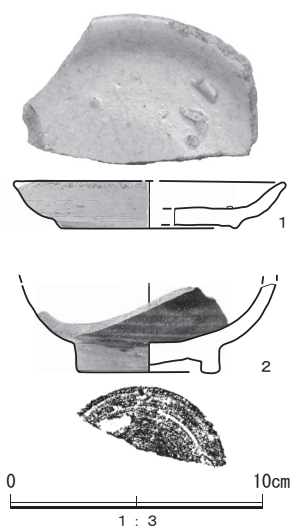
遺物 遺物は瓦 1 点・271g，陶器瀬戸 1 点・82g，美濃 2 点・47g が出土した。その内 2 点を図化した。1・2 は陶器で 1 は志野丸皿，2 は鉄釉丸碗である。



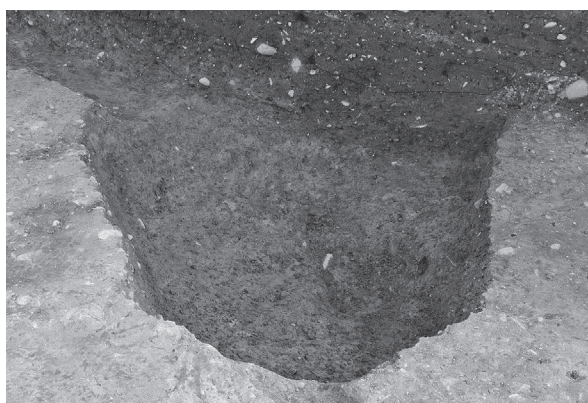
第 59 図 第 1 A・B 号幕末明治土坑実測図

1 BBMD (1 B 号幕末明治土坑)

遺構 II 区 5 B 区に位置し，1 ABMD を掘り込んでいます。長軸 1.90 m 以上，短軸 0.58 m 以上，深さは 13cm である。遺物 瓦質土器 8 点・245g，瓦 9 点・901g，陶器瀬戸 1 点・4g，美濃 1 点・2 g，磁器肥前 4 点・43g が出土した。図化し得る遺物は無かった



第 60 図 第 1 A 号幕末明治土坑出土遺物実測図



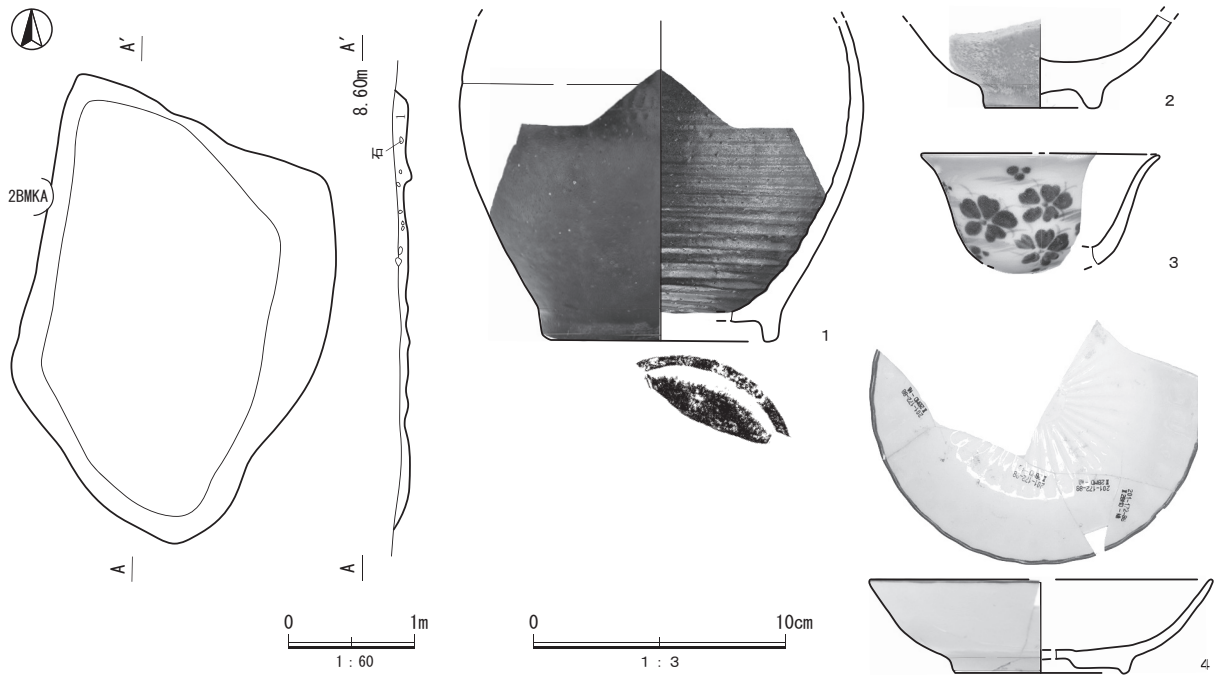
II 区第 1 A・1 B 号幕末明治土坑完掘状況 (北から)

第 2 号幕末明治土坑 (2 BMD)

遺構 II 区 5 B 区に位置し，南北 3.15m，東西 2.35m の平行四辺形で深さは 10cm である。廃棄土坑である。

遺物 土師質土器 2 点・69g，瓦 1 点・88g，陶器瀬戸 8 点・119g，七面 1 点・115g，明石 1 点・90g が出土した。そのうち 4 点を図化した。1 は陶器で 1 は鉄釉徳利，2～4 は磁器で 2

は青磁丸碗，3は染付端反碗，4は白磁輪花皿である。

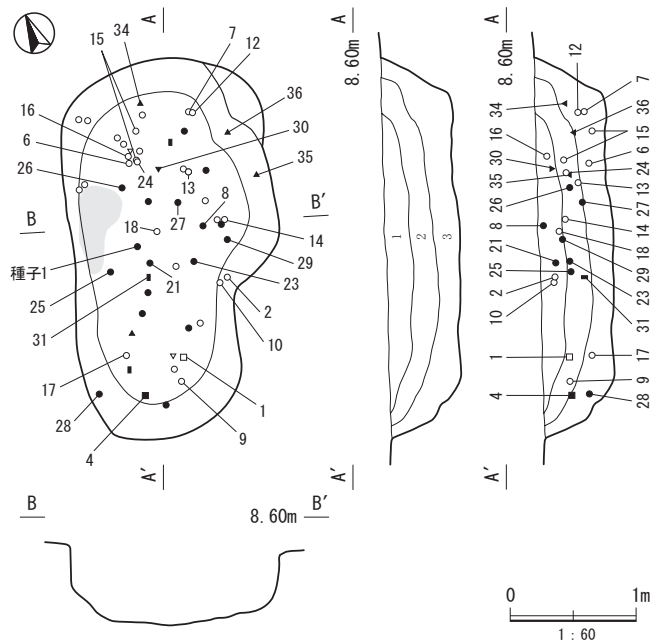


第 61 図 第 2 号幕末明治土坑・出土遺物実測図

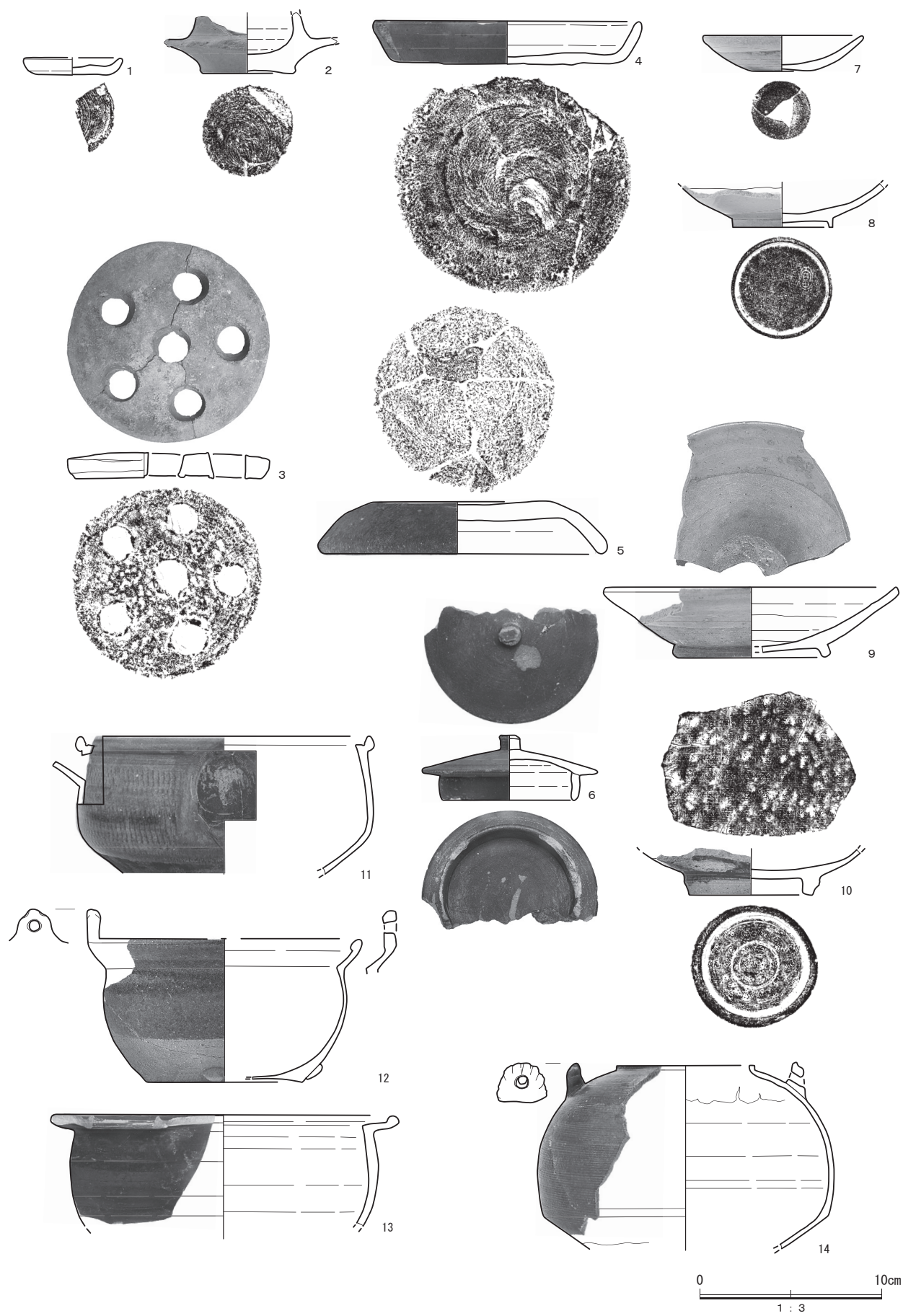
第 3 号幕末明治土坑（3 BMD）

遺構 II 区 4 B 区に位置し，南北 3.05 m，東西 1.65m の不整楕円形で深さは 39cm である。廃棄土坑である。

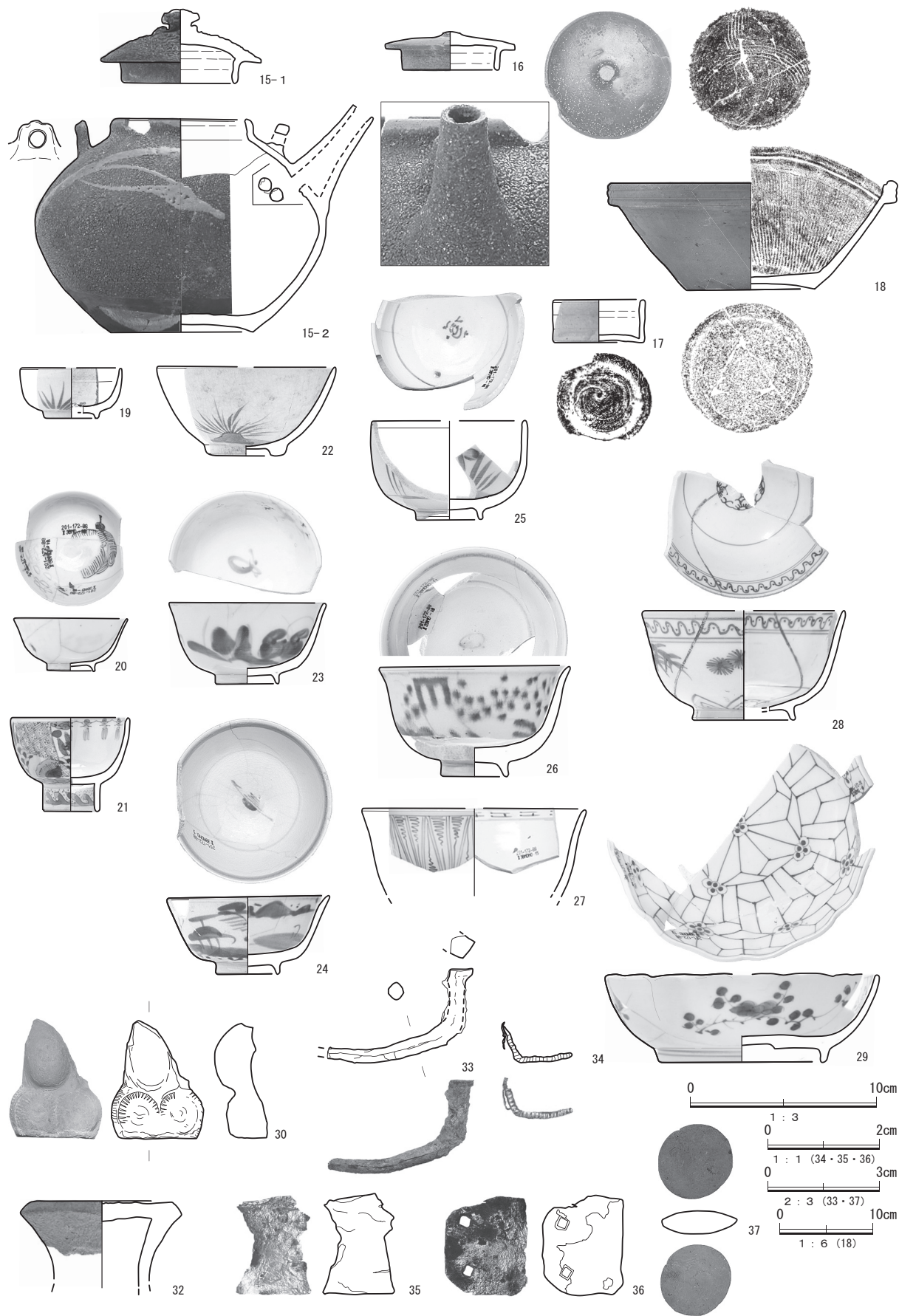
遺物 土師質土器 11 点・422g，瓦質土器 10 点・421 g，瓦 12 点・2,912 g，陶器瀬戸 55 点・956g，唐津 2 点・30g，信楽 2 点・85g，堺 4 点・2,700g，小砂 4 点・69g，松岡 19 点・177g，七面 31 点・2,925g，在地 4 点・221 g，磁器肥前 122 点・986 g，瀬戸 2 点・66 g，美濃 1 点・92 g，京焼系 1 点・39 g，七面 2 点・288 g，土製品 2 点・52，1 g，金属製品 5 点・26g，石製品 8 点・627g，獣骨 1 点・6 g が出土した。その内 37 点を図化した。1～3 は土師質土器で 1 はカワラケ，2 は灯明台，3 は火受，4～6 は瓦質土器で 4 は皿，5 は蓋，6 は土瓶蓋である。7～19 は陶器で 7 は灯明皿，8 は灰釉皿，9 は輪禿皿，10 は鉢，11 は行平，12・13 は土鍋，14 は糸目土瓶，15 は鮫肌土瓶，16 は青土瓶蓋，17 は餌猪口，18 は堺摺鉢，19～29 は磁器で 19 は合子，20 は薄手酒杯，21 は祥瑞手酒杯，22 は丸碗，23・24



第 62 図 第 3 号幕末明治土坑実測図

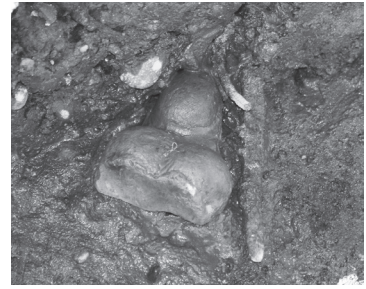


第 63 图 第 3 号幕末明治土坑出土遺物実測図 (1)



第64图 第3号幕末明治土坑出土遺物実測図(2)

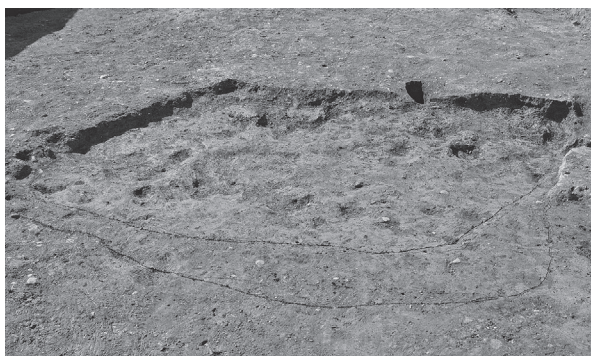
は端反碗，25は筒丸碗，26～28は端反碗，29は中形菊花皿，30は土人形，31は軒平瓦，32は焼台，33～36は金属製品で33は釘，34は不明，35・36は飾金具，37は土製のおはじきである。



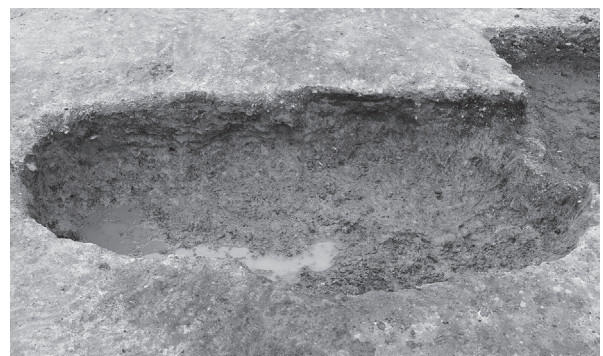
Ⅱ区第3号幕末明治土坑
土人形出土状況（南から）



第65図 第3号幕末明治土坑出土遺物実測図（3）



Ⅱ区第2号幕末明治土坑完掘状況（東から）



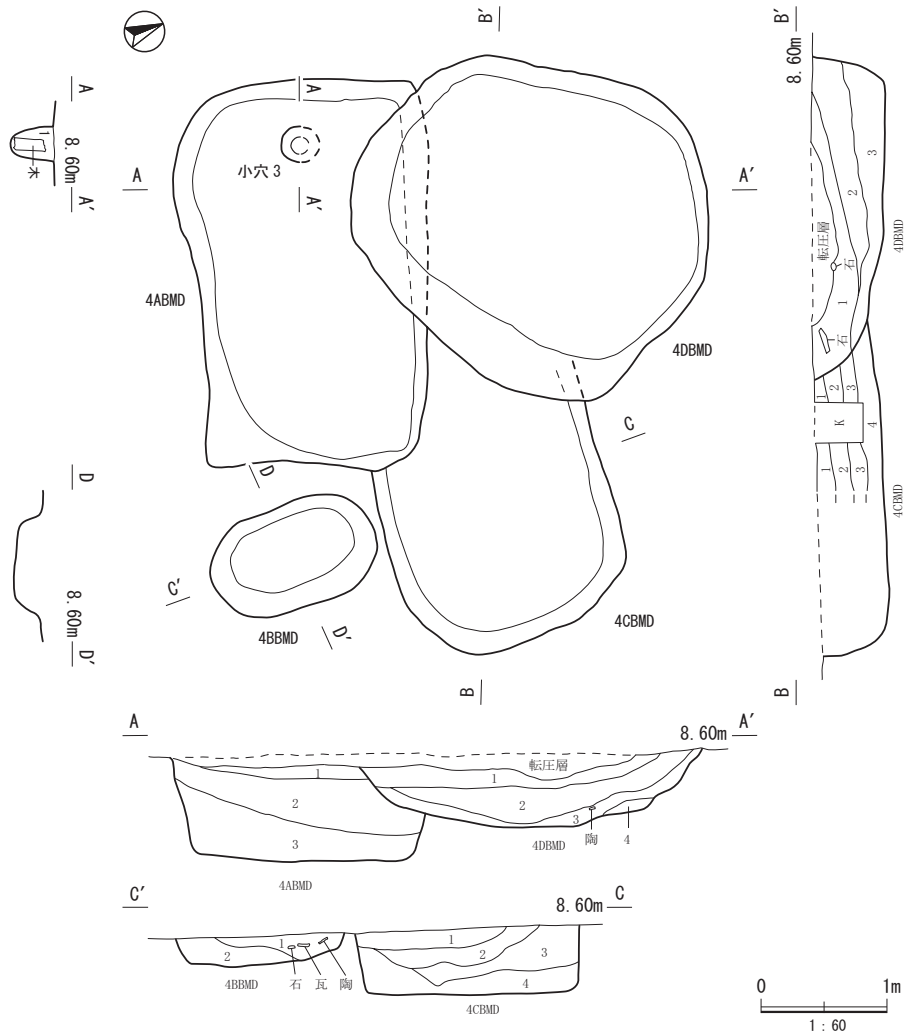
Ⅱ区第3号幕末明治土坑完掘状況（東から）

第4A号幕末明治土坑（4ABMD）

遺構 II区4B地区に位置し、4CBMD・4DBMDと重複し、4CBMDを掘り4DBMDに掘り込まれているが、時間幅はないと思われる。東西3.1m、南北2.0m、深さ82cmである。廃棄土坑である。

遺物 土師質土器56点・944g、瓦質土器3点・2,070g、陶器瀬戸11点・154g、美濃15点・87g、壺屋

1点・34g、唐津3点・2,116g、信楽4点・5g、松岡1点・2g、七面13点・161g、在地不明4点・87g、磁器肥前60点・353g、美濃1点・9g、瓦25点・6,865g、土製品1点・85g、金属製品4点・24gが出土した。その内9点を図化した。1・2は瓦質土器で1は蓋、2は内耳土鍋である。3～5は陶器で3は鼠志野皿、4は刷毛目皿、5は陶胎染付丸碗である。6～8は磁器で6・7は染付丸碗、8は染付角皿である。9は丸瓦である。



第66図 第4A・B・C・D号幕末明治土坑実測図（1）

第4B号幕末明治土坑（4BBMD）

遺構 II区4Bに位置している。東西1.33m、南北0.83m、深さ23cmである。廃棄土坑である。

遺物 土師質土器1点・27g、瓦質土器1点・524g、陶器七面3点・360g、磁器肥前1点・3gが出土した。その内3点を図化した。1は瓦質土器の火消壺の蓋、2・3は陶器で2は土瓶の蓋、3は常滑の大甕である。

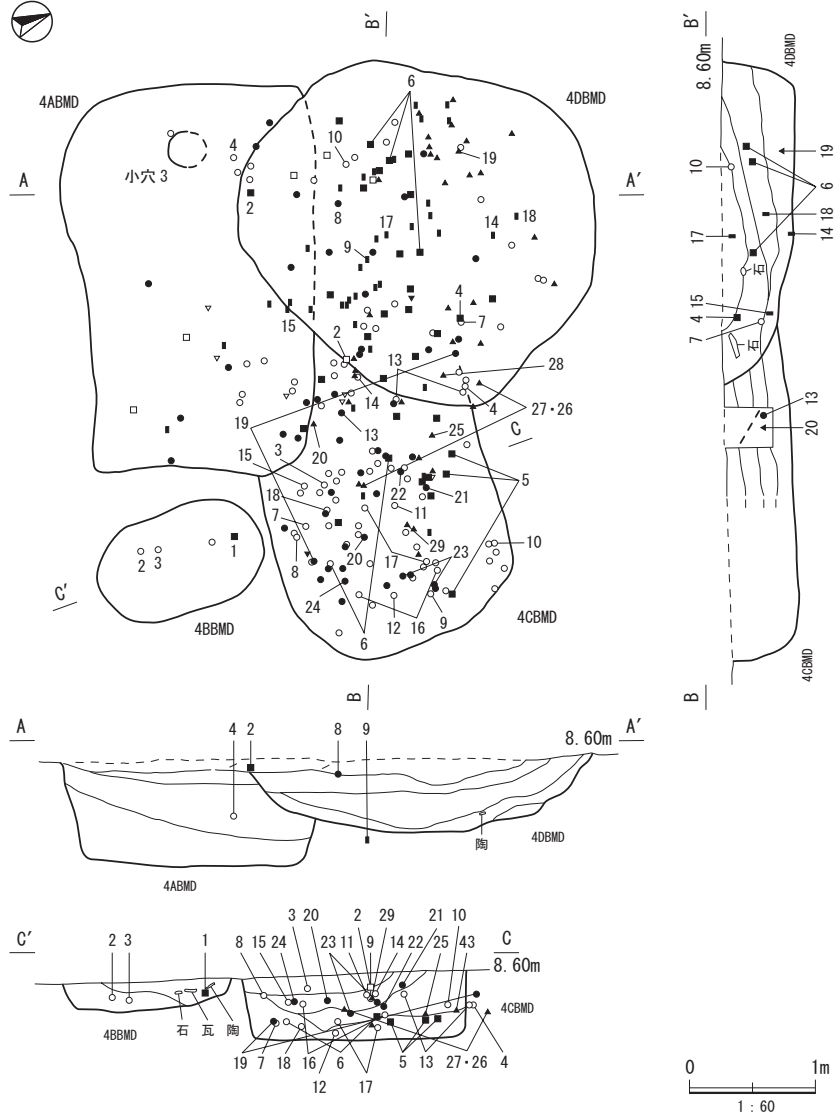
第4C号幕末明治土坑（4CBMD）

遺構 II区4B区に位置し4ABMD・4DBMDに掘り込まれている。南北2.85m以上，東西1.82m，深さ50cmである。廃棄土坑である。

遺物 金属製品6点・242g，銅製品3点・15g，銭貨1点・2.1g，土師質土器4点・70g，瓦質土器121点・6,697g，陶器の瀬戸36点・1,554g，美濃13点・236g，壺屋2点・137g，唐津6点・514g，明石1点・8g，信楽2点・102g，常滑2点・285g，志土呂2点・146g，益子2点・9g，小砂4点・39g，七面14点・713g，磁器の瀬戸1点・83g，肥前142点・2,277g，鍋島1点・84g，美濃6点・89gが出土した。

そのうち29点を図化した。

1・2は土師質土器のかわらけ，3～7は瓦質土器で3はかわらけ，4は鍋，5は内耳鍋，6は竈，7は壺である。8～18は陶器で8は灯明上皿，9は灰釉小杯，10は灰釉丸小杯，11は鉄釉丸碗，12は黄瀬戸せんじ碗，13は色絵丸碗，14は鬘盥，15は鉄釉香炉，16は鉄釉土鍋，17は小形播鉢，18は大形播鉢である。19～24は磁器で19は染付丸碗，20・21は染付皿，22は染付輪花皿，23は青磁染付端反碗，24は染付徳利である。25は鉄製鎌，26～28は煙管，29は寛永通宝である。

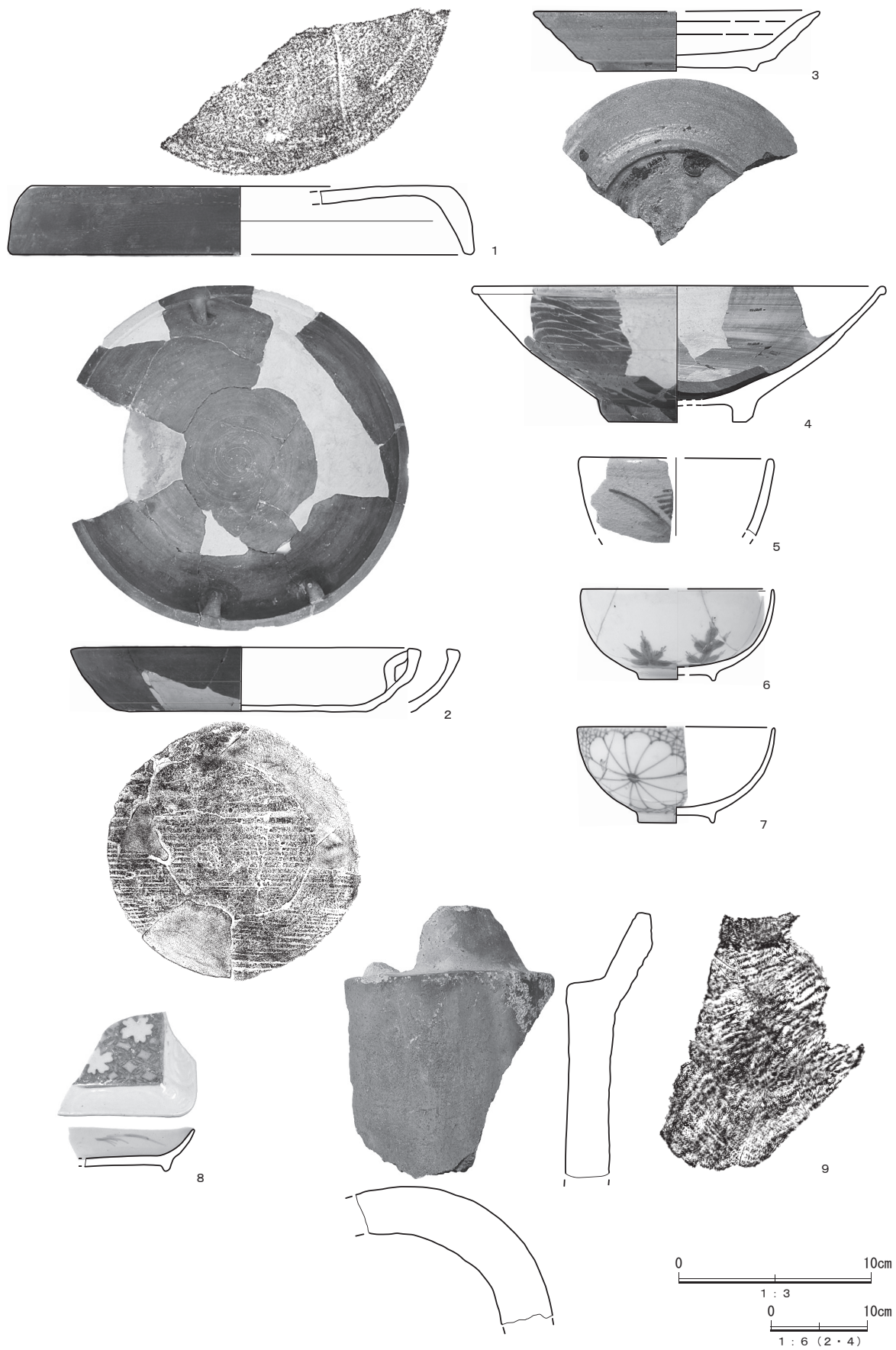


第67図 第4A・B・C・D号幕末明治土坑実測図（2）

第4D号幕末明治土坑（4DBMD）

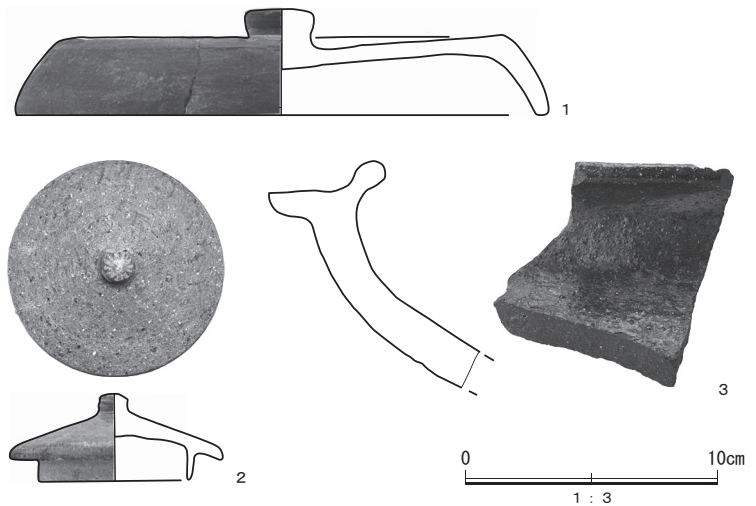
遺構 II区4B区に位置し4A・CBMDを掘り込んでいる。東西2.80m，南北2.59m，深さ57cmで廃棄土坑である。

遺物 土師質土器25点・556g，瓦質土器48点・2,066g，陶器の薩摩1点・58g，瀬戸29点・444g，美濃35点・451g，唐津1点・98g，明石1点・42g，堺2点・178g，信楽5点・17g，志土呂10点・263g，小砂1点・2g，七面8点・582g，在地4点・96gで



第 68 图 第 4A 号幕末明治土坑出土遺物実測図

ある。磁器の肥前 68 点・980 g, 瀬戸 1 点・48 g, 舶載磁器 5 点・196 g, 瓦 48 点・8,714 g, ガラス 1 点・3 g, 金属製品 17 点・100 g, 銅製品 2 点・9 g, 石製品 6 点・823 g, 寛永通宝 1 点・2.2 g が出土した。その内 20 点を図化した。1～3 は土師質土器のかわらけである。4～6 は瓦質土器で 4 は表燭, 5 は香炉, 6 は取鍋である。8・9 は陶器で 8 は志野釉丸碗, 9 は鉄釉耳付壺, 10 は人形である。12・13 は磁器で 12 は染付丸碗, 13 は染付皿である。14～16 は瓦で 14 は鬼瓦, 15・16 は軒平瓦, 17・18 は丸瓦である。19 は銅製金具, 20 は寛永通宝である。11 は 4CBND の 19 と接合したため欠番とする。



第 69 図 第 4B 号幕末明治土坑出土遺物実測図



Ⅱ区第 4A～D 号幕末明治土坑完掘状況(東から)



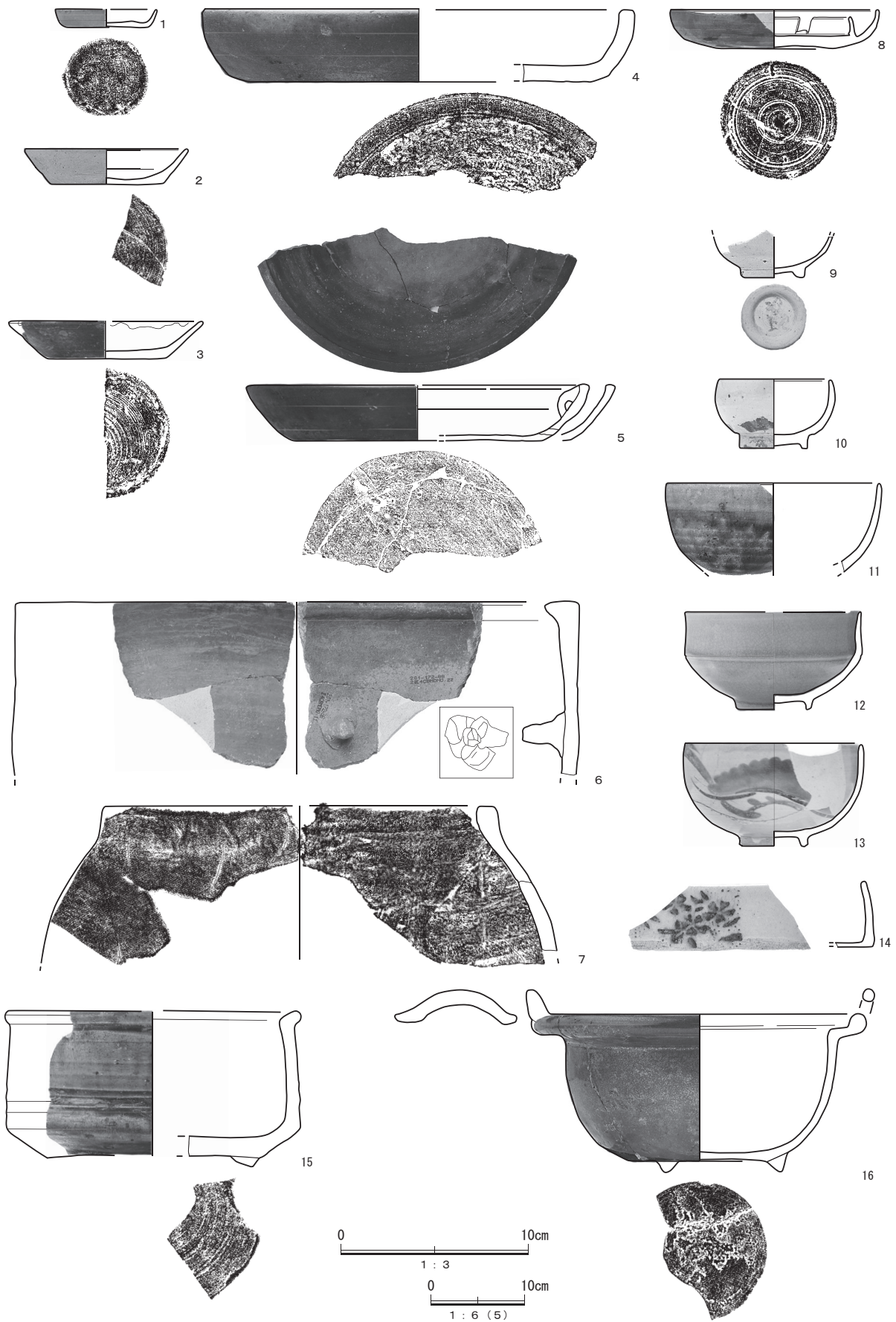
Ⅱ区第 4A・D 号幕末明治土坑遺物出土状況(西から)



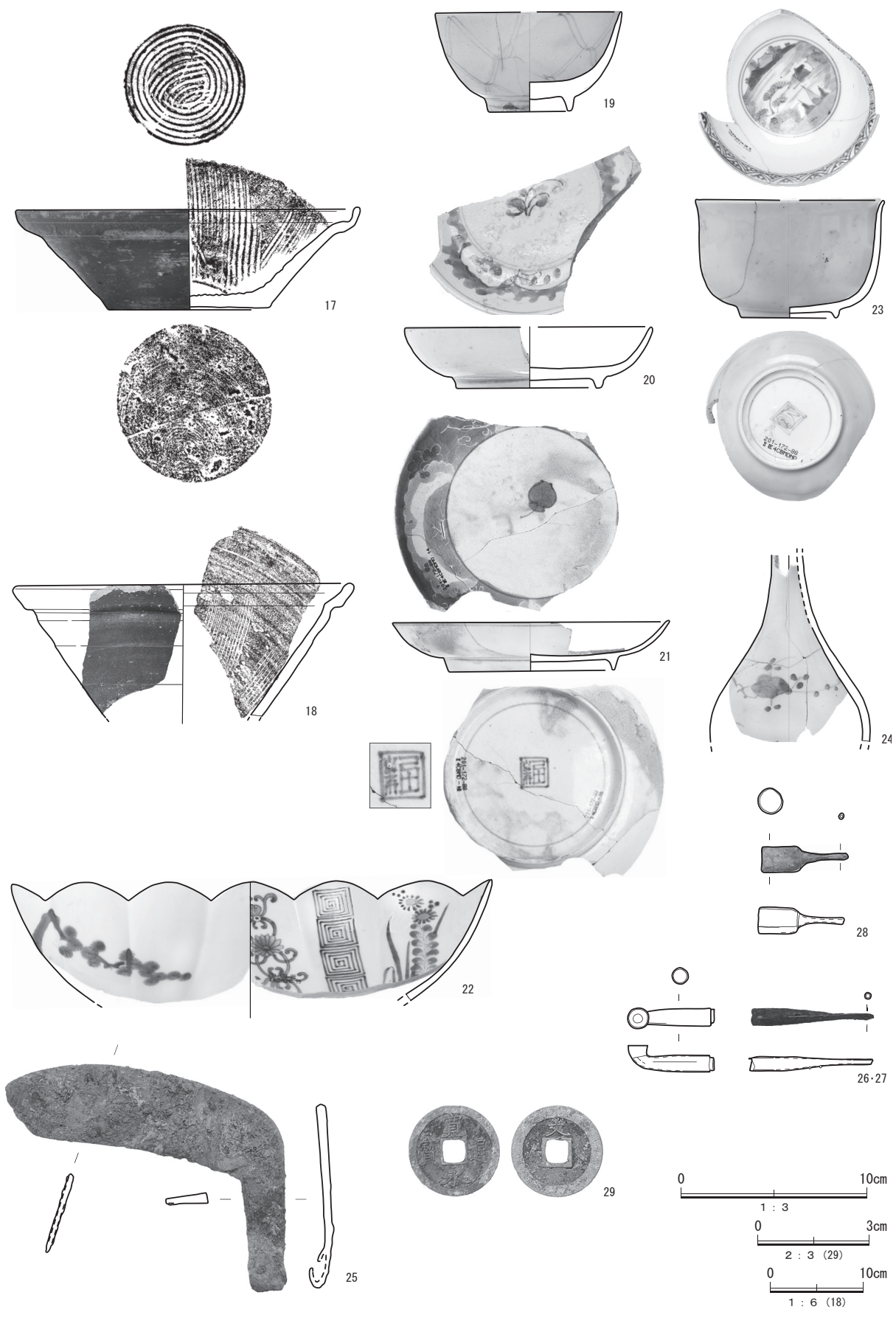
Ⅱ区第 4B 号幕末明治土坑遺物出土状況(東から)



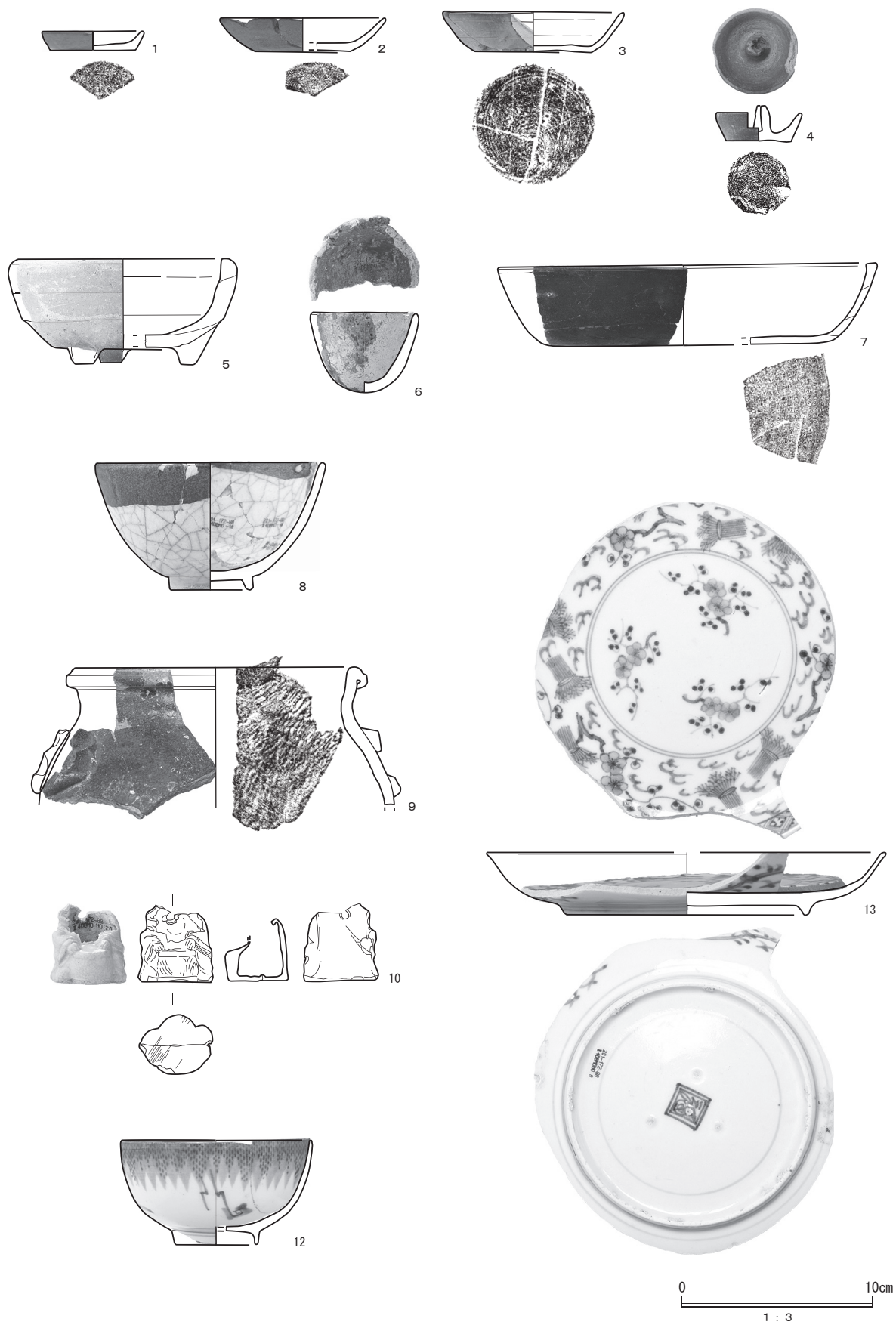
Ⅱ区第 4C 号幕末明治土坑遺物出土状況(西から)



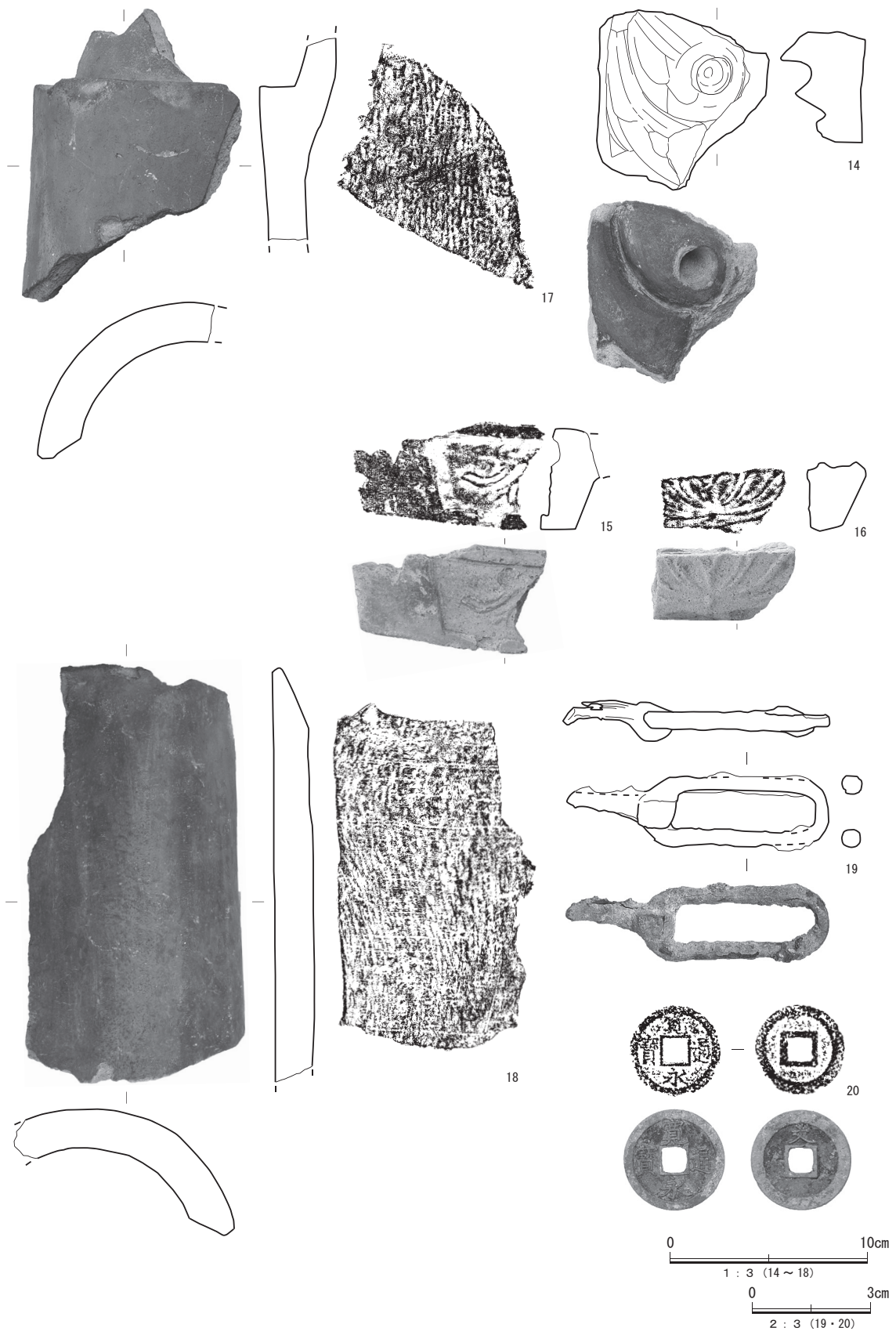
第70図 第4C号幕末明治土坑出土遺物実測図(1)



第 71 图 第 4C 号幕末明治土坑出土遺物実測图 (2)



第 72 图 第 4D 号幕末明治土坑出土遺物実測图 (1)

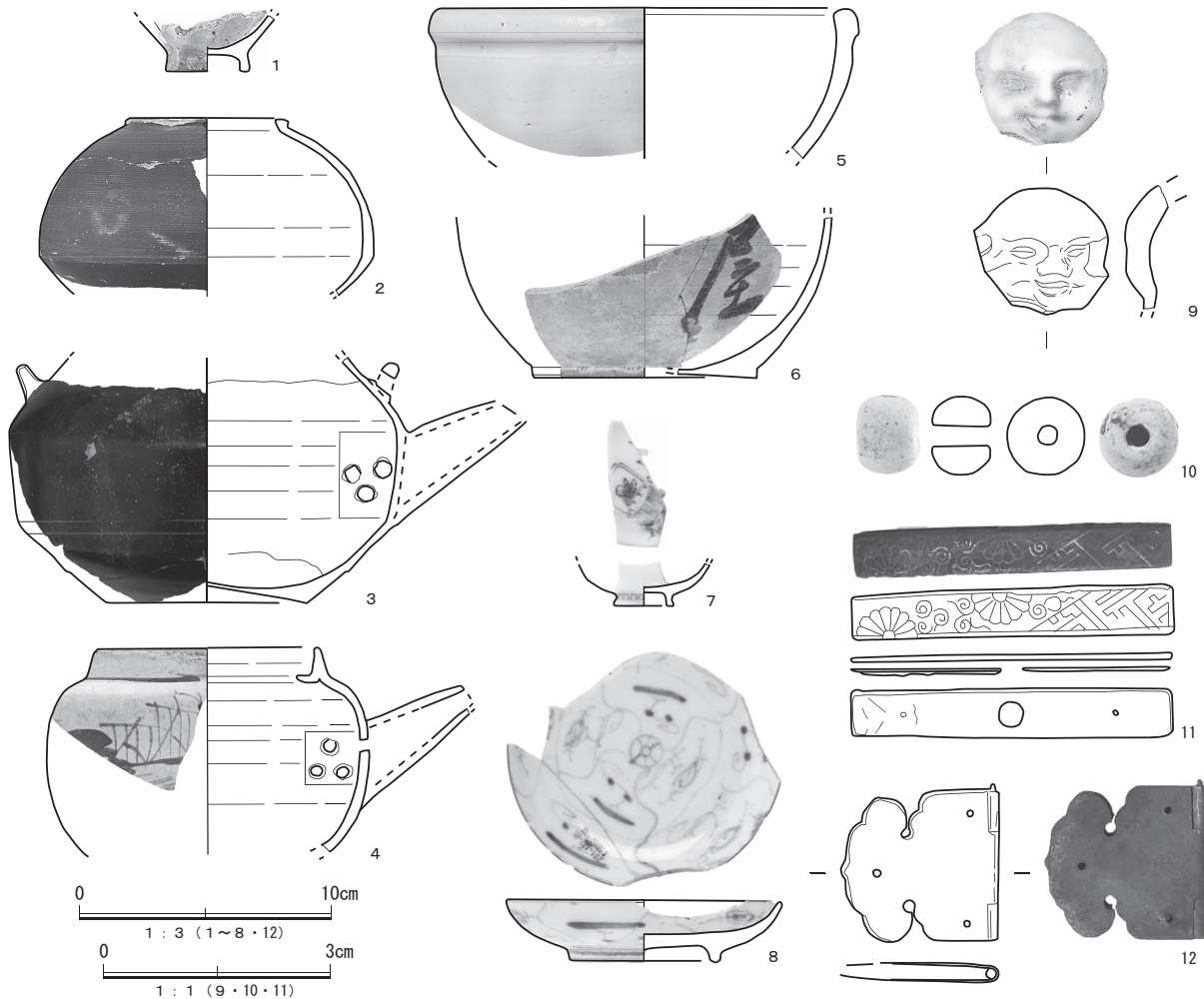
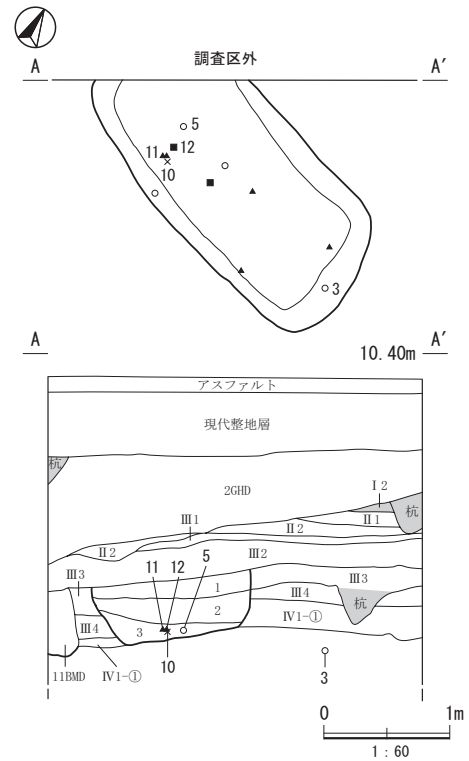


第73图 第4D号幕末明治土坑出土遺物実測図(2)

第5号幕末明治土坑（5BMD）

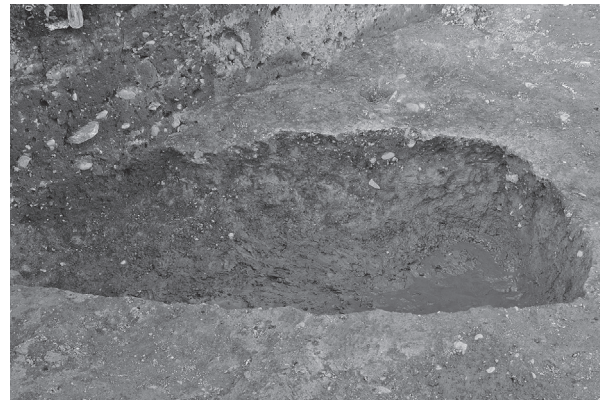
遺構 II区4A・B区に位置し北端が調査区外にある。III3層から掘り込まれている。東西2.62m以上、南北1.13m、深さ57cmである。廃棄土坑である。

遺物 瓦質土器9点・586g, 陶器は瀬戸22点・261g, 美濃18点・103g, 堺1点・41g, 信楽6点・31g, 今戸3点・5g, 笠間1点・6g, 益子1点・99g, 松岡5点・154g, 小砂12点・212g, 七面27点・674gである。磁器の肥前97点・640g, 瀬戸1点・6g, 舶載磁器1点・7g, 瓦7点・1158g, 土師器3点・138g, ガラス5点・154g, 金属製品3点・91g, 金銅製品3点・18.2g, 石製品2点・169gが出土した。その内12点を図化した。1～6は陶器で1は万古風猪口, 2～4は土瓶で2は糸目土瓶, 3は鉄釉土瓶, 4は呉須山水文土瓶である。5は捏鉢, 6は記銘入鉄釉徳利, 7～9は磁器で7は薄手酒杯, 8は染付小皿,



第74図 第5号幕末明治土坑・出土遺物実測図

9 は人形の面, 10 は穿孔のあるガラス玉,
11 は金銅製の飾金具, 12 は丁番である。

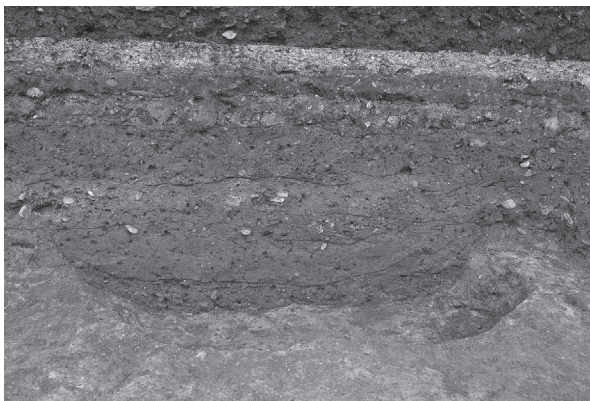


Ⅱ区第5号幕末明治土坑完掘状況（南から）

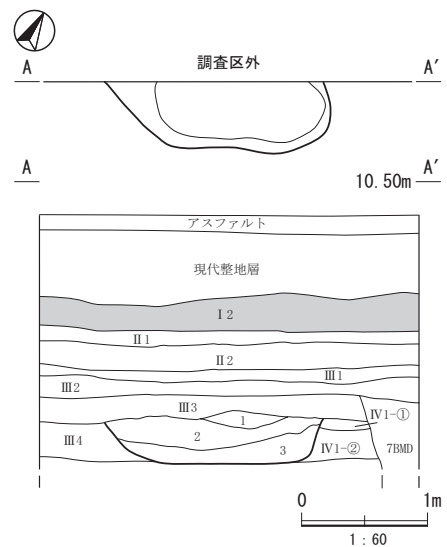
第6号幕末明治土坑（6BMD）

遺構 Ⅱ区4B区に位置し，北側が調査区外にある。長軸 1.82m 以上，短軸 1.08m 以上，深さは 42cm である。平面は江戸一面で確認したがⅢ4層から掘り込まれている。廃棄土坑である。

遺物 瓦質土器 1 点・27g，不明素材 1 点・24g が出土したが，図化しえる遺物はなかった。



Ⅱ区第6号幕末明治土坑完掘状況・土層（東から）



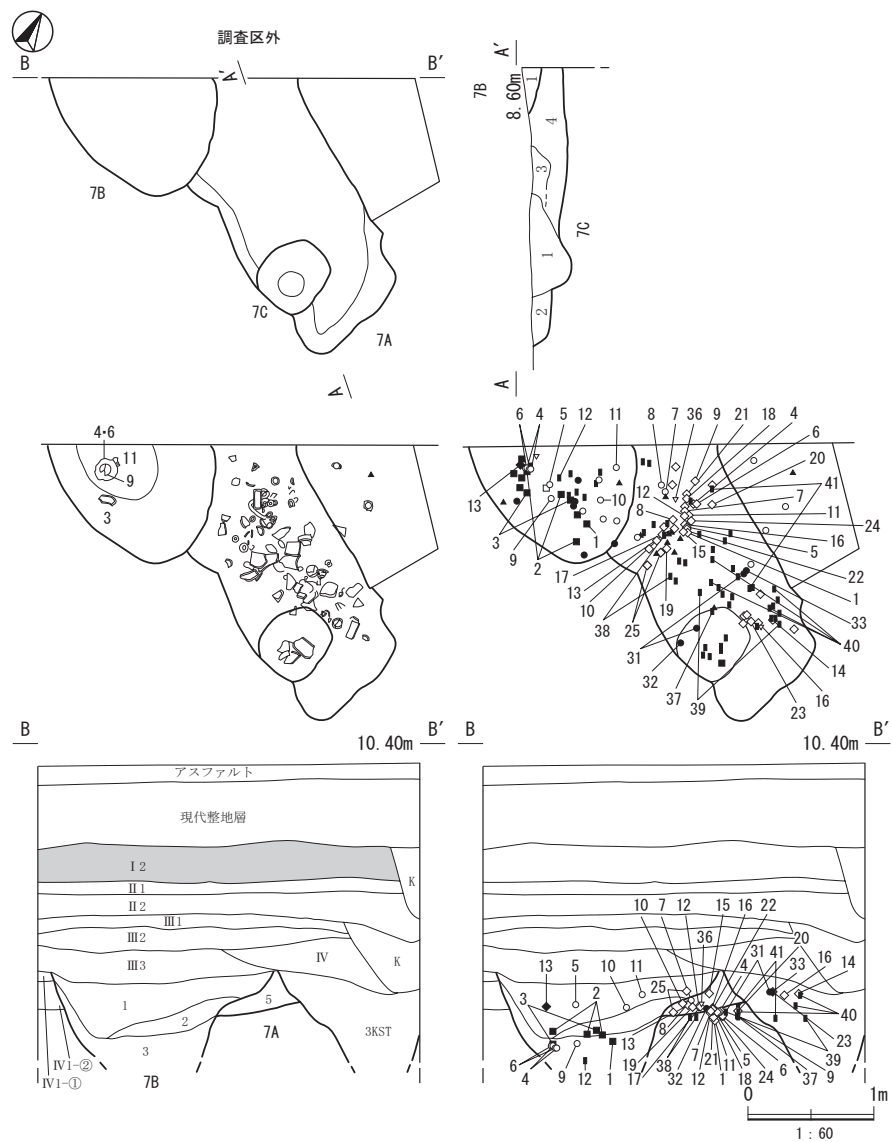
第75図 第6号幕末明治土坑実測図

第7A号幕末明治土坑（7ABMD）

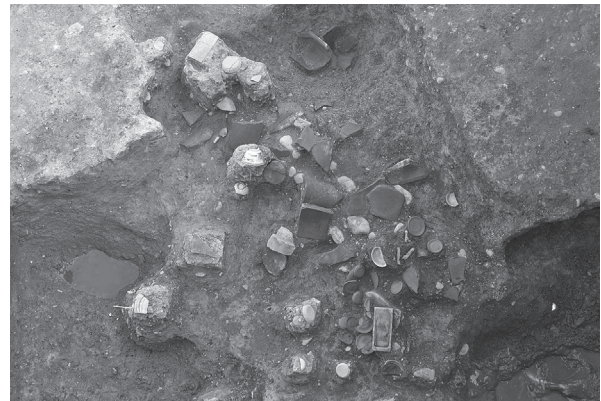
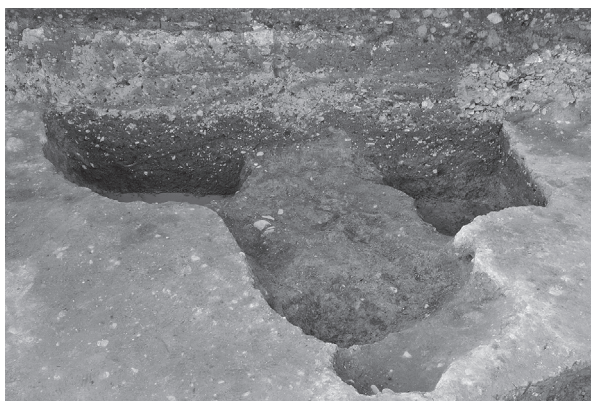
遺構 Ⅱ区3・4B区に位置し，北側が調査区外にある。7BBMDに掘り込まれている。東西 2.27m 以上，南北 1.11 m，深さ 42cm である。廃棄土坑である。

遺物 土師質土器 33 点・868g，瓦質土器 13 点・295g，陶器の瀬戸 8 点・88g，美濃 4 点・74g，信楽 1 点・12g，常滑 3 点・237g，益子 3 点・38 g，小砂 7 点・118 g，松岡 8 点・111 g，七面 11 点・231 g，産地不明 4 点・44 g，磁器の肥前 60 点・531 g，瀬戸 4 点・301 g，七面 1 点・22 g，町田 1 点・72 g，瓦 35 点・7,437 g，土管 1 点・117 g，金属製品 10 点・166 g，金銅製品 1 点・1 g，石製品 4 点・556 g，素材瑪瑙 2 点・11 g，石炭 4 点・78 g，木製品 2 点・42 g が出土した。その内 42 点を図化した。1～26 はかわらけで全て皿形で，1～12 は小形，13～26 は中形である。27～30 は陶器で 27 は急須の蓋，28 は土瓶の蓋，29 は糸目土瓶，30 は土鍋，31～35 は磁器で 31 は湯呑茶

碗で「福寿」とある。
 32は染付腰張碗,
 33は染付端反碗,
 34は染付丸碗, 35
 は大形の染付端反碗
 である。36は石製
 硯, 37～41は瓦で
 37は軒棧瓦, 38・
 40は丸瓦, 39・41
 は平瓦である。42
 は鉄製の五徳の脚で
 ある。



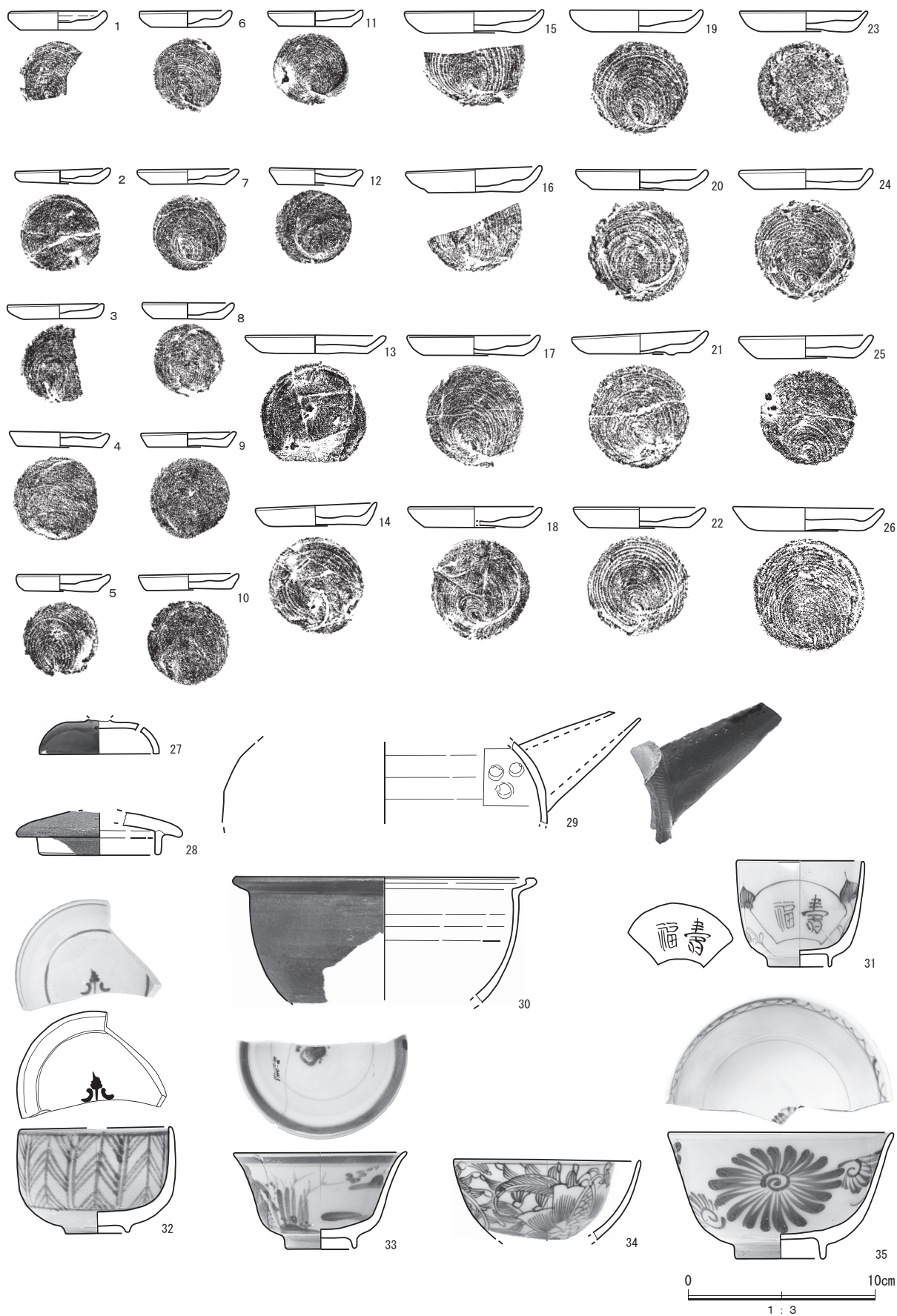
第76図 第7A・B号幕末明治土坑実測図



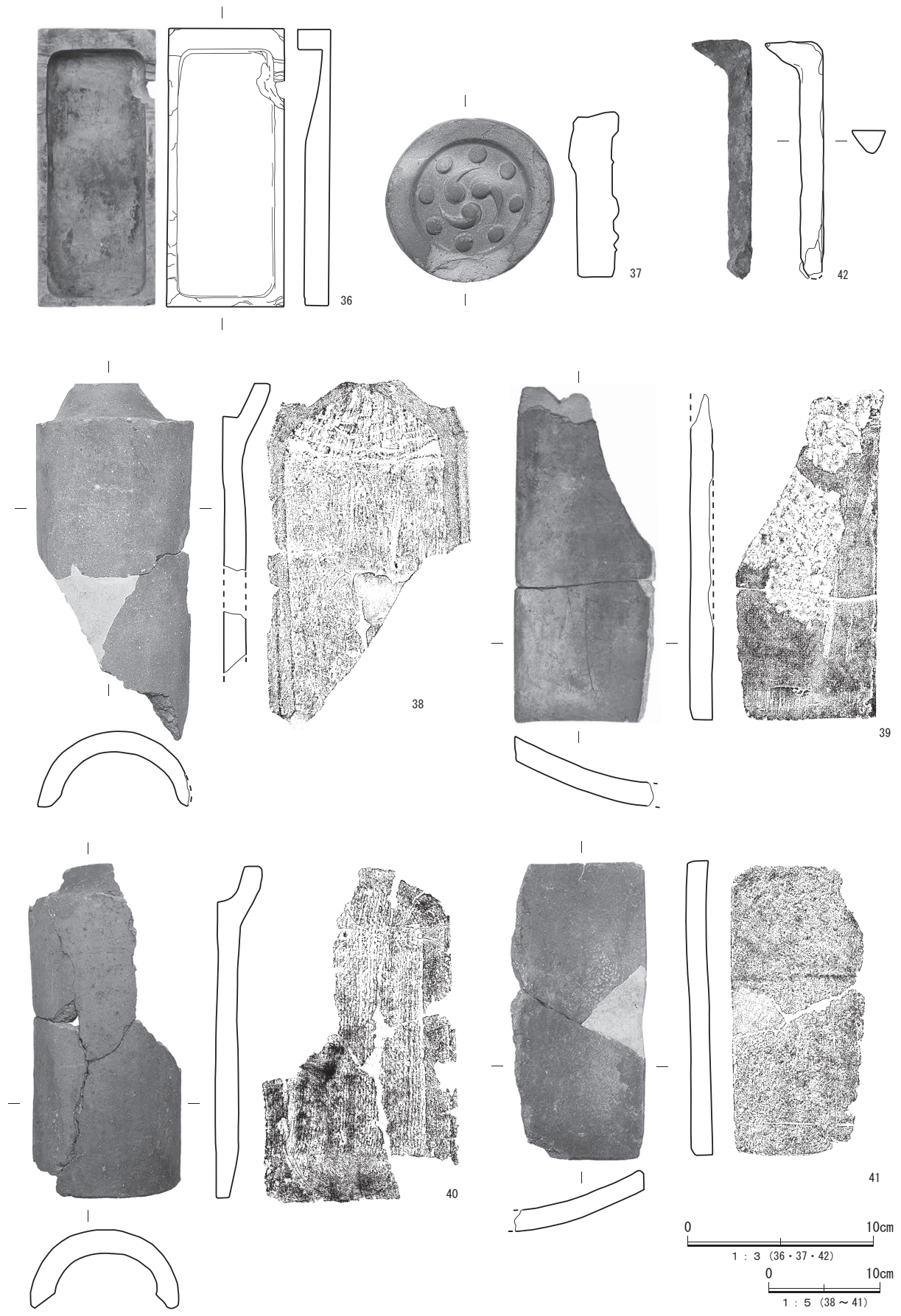
Ⅱ区第7A～C号幕末明治土坑完掘状況(南から) Ⅱ区第7A号幕末明治土坑遺物出土状況(北から)

第7B号幕末明治土坑(7BBMD)

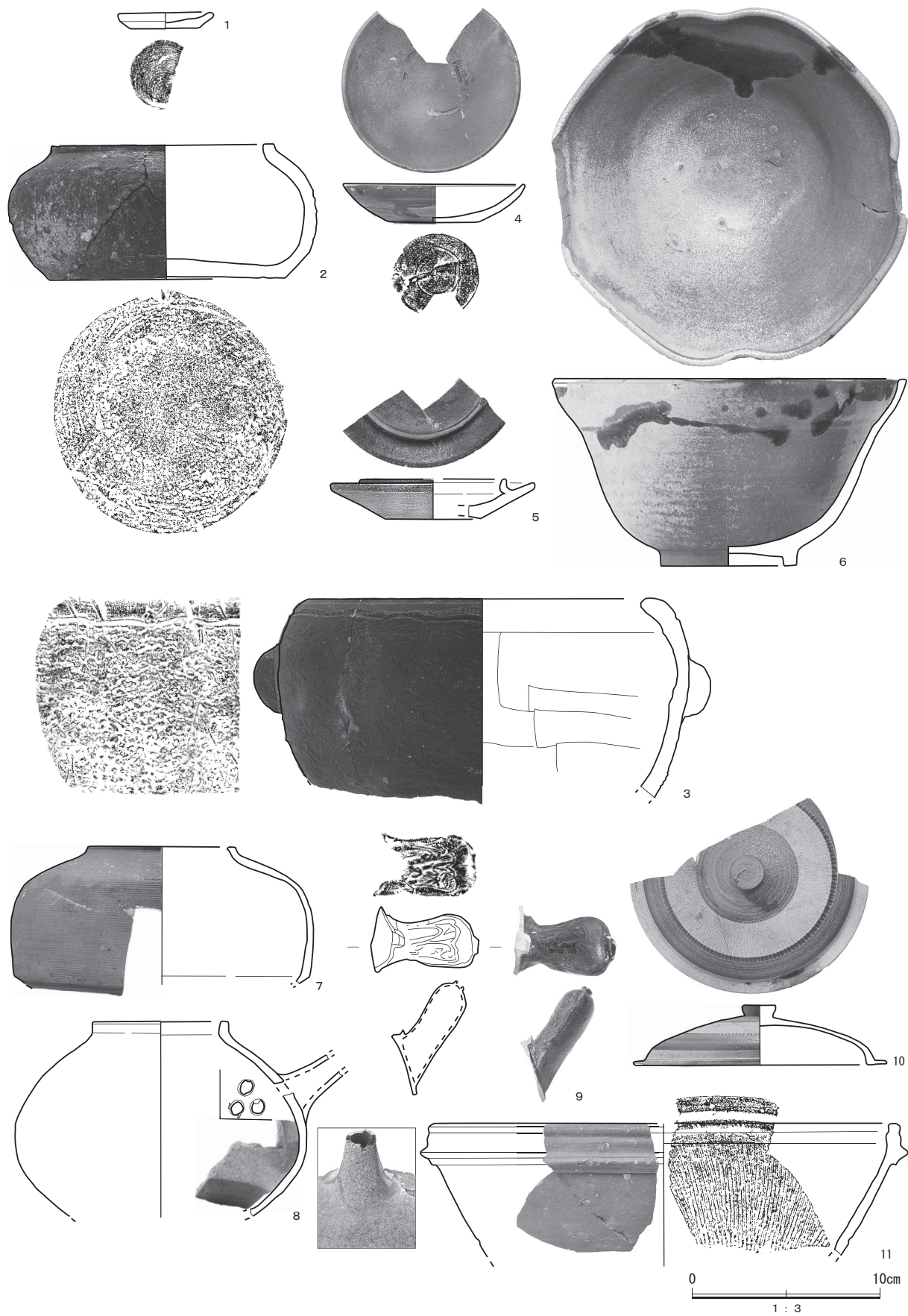
遺構 Ⅱ区3・4B区に位置し, 7ABMDを切っている。東西1.30m以上, 南北1.12m以上, 深さ65cm以上である。廃棄土坑である。



第 77 图 第 7 A 号幕末明治土坑出土遗物实测图 (1)

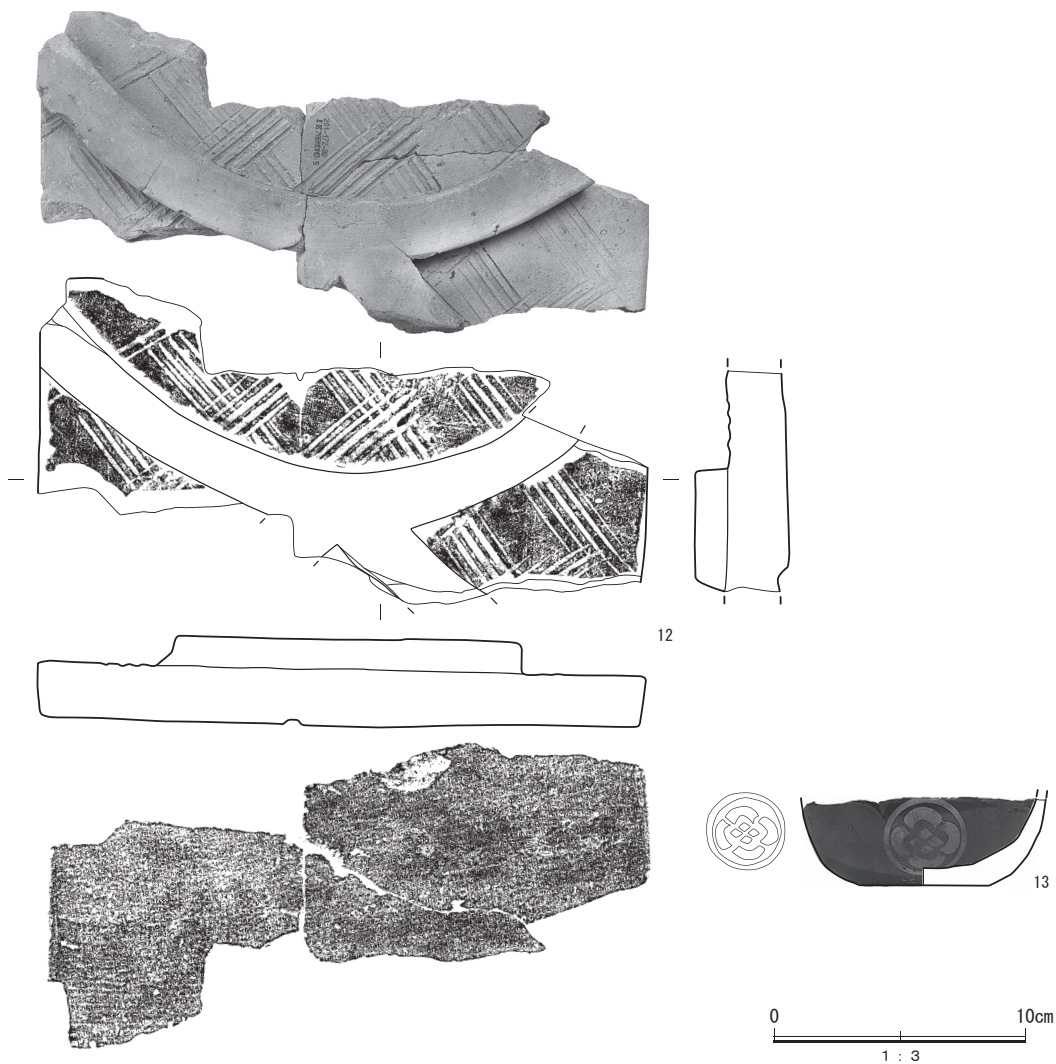


第 78 图 第 7A 号幕末明治土坑出土遺物実測図 (2)



第 79 图 第 7 B 号幕末明治土坑出土遺物実測図 (1)

遺物 土師質土器 2点・14 g，瓦質土器 9点・2,052 gである。陶器は瀬戸 10点・176 g，美濃 9点・50 g，松岡 1点・75 g，小砂 2点・22 g，七面 11点・931 gである。磁器は肥前 19点・120 g，瀬戸 34点・75 g，美濃 1点・11 gである。木製品 2点・154 g，瓦 19点・3,297 gである。金属製品 9点・142 gが出土した。その内 13点を図化した。1は土師質土器のかわらけ，2・3は瓦質土器で2は無頸壺，3は火鉢（手焙），4～11は陶器で4は灯明下皿，5は灯明上皿，6は鶉の糞釉百合口鉢，7は糸目土瓶，8は糠白釉土瓶，9は行平の把手，10は飛鉋行平の蓋，11は播鉢，12は瓦で棟込瓦である。13は黒漆漆器椀で「割木瓜紋」が描かれている。「割木瓜紋」は朝比奈氏の家紋かと思われる。



第 80 図 第 7 B 号幕末明治土坑出土遺物実測図（2）

第 7 C 号幕末明治土坑（7CBMD）

遺構 II区 3・4 B区に位置し，7ABMD を切っている。東西 0.50m 以上，南 0.57m 以上，深さ 30cm である。廃棄土坑である。7ABMD・7BBMD との時期差はないと考える。

遺物 煉瓦 1点・790 g が出土しているが，図化できなかった。



Ⅱ区第7 B号幕末明治土坑遺物出土状況(南から)



Ⅱ区第7 B号幕末明治土坑出土カワラケ

第8号幕末明治土坑 (8BMD)

遺構 Ⅱ区4 A区に位置し、規模は1.90 × 1.70mの不整円形で深さは2.0mまで確認した。廃棄土坑としたが江戸期の井戸で幕末明治の時期に遺物が廃棄された。

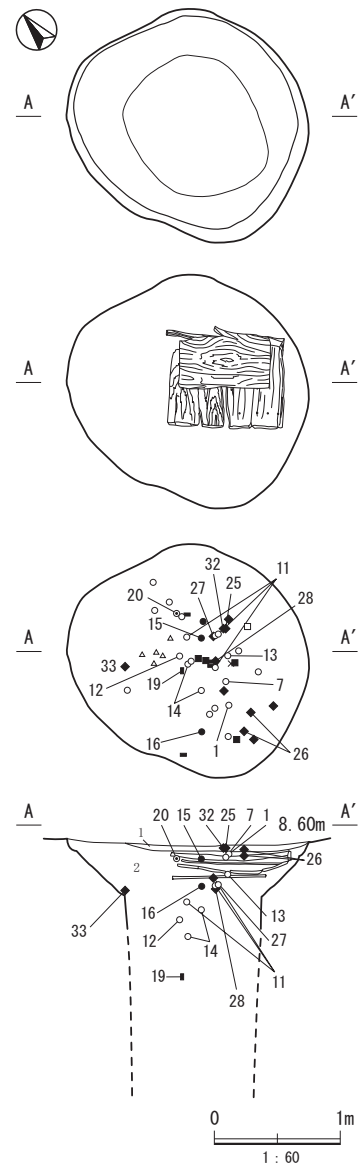
遺物 土師質土器9点・6,631g, 瓦質土器16点・4,285g, 陶器は瀬戸6点・3,065g, 信楽1点・3g, 志土呂1点・14g, 益子7点・432g, 笠間3点・1,736g, 小砂3点・169g, 七面5点・2,014gである。磁器は肥前17点・151g, 瀬戸3点・149g, 会津本郷1点・18gである。



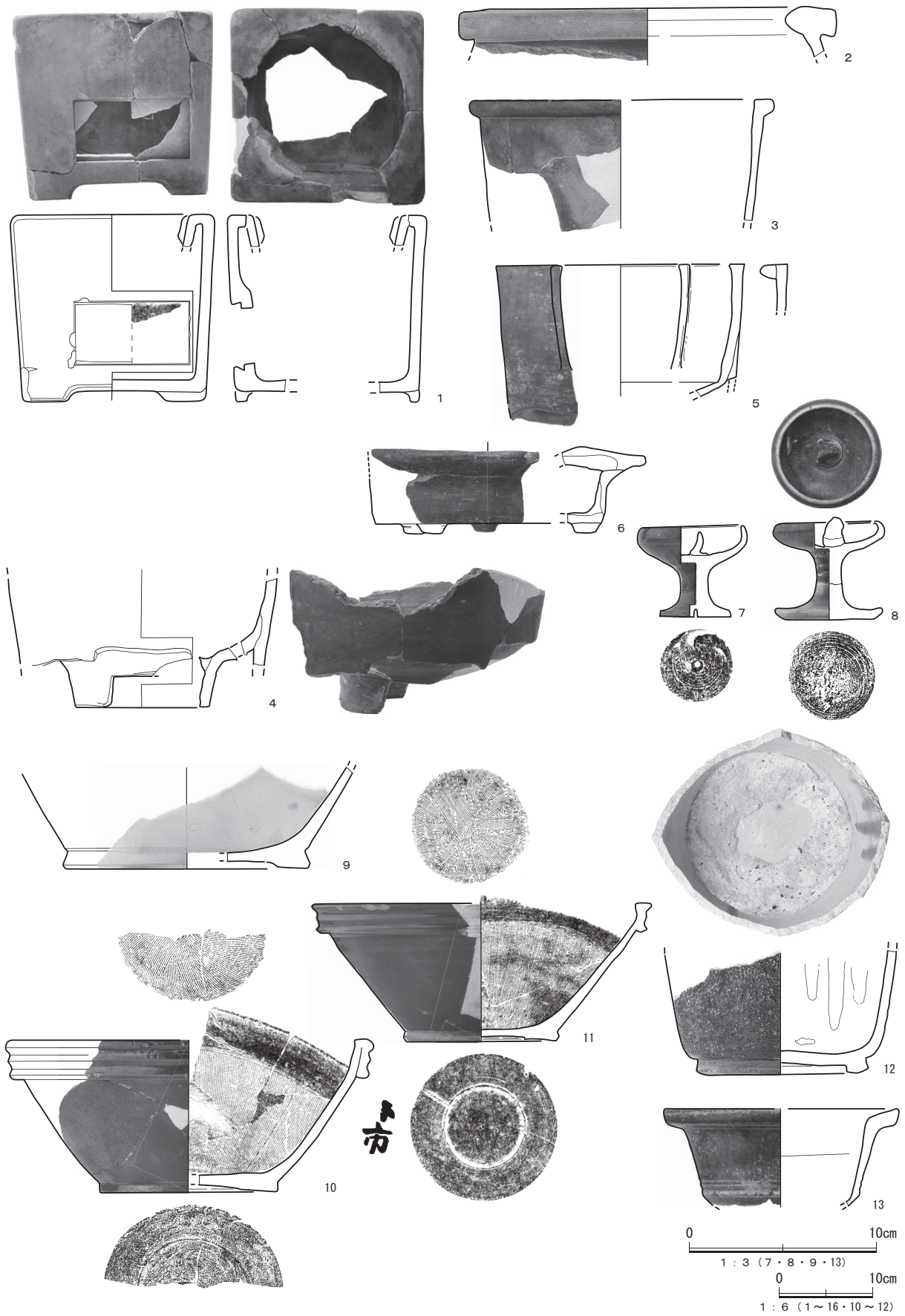
Ⅱ区 第8号幕末明治土坑完掘状況(東から)



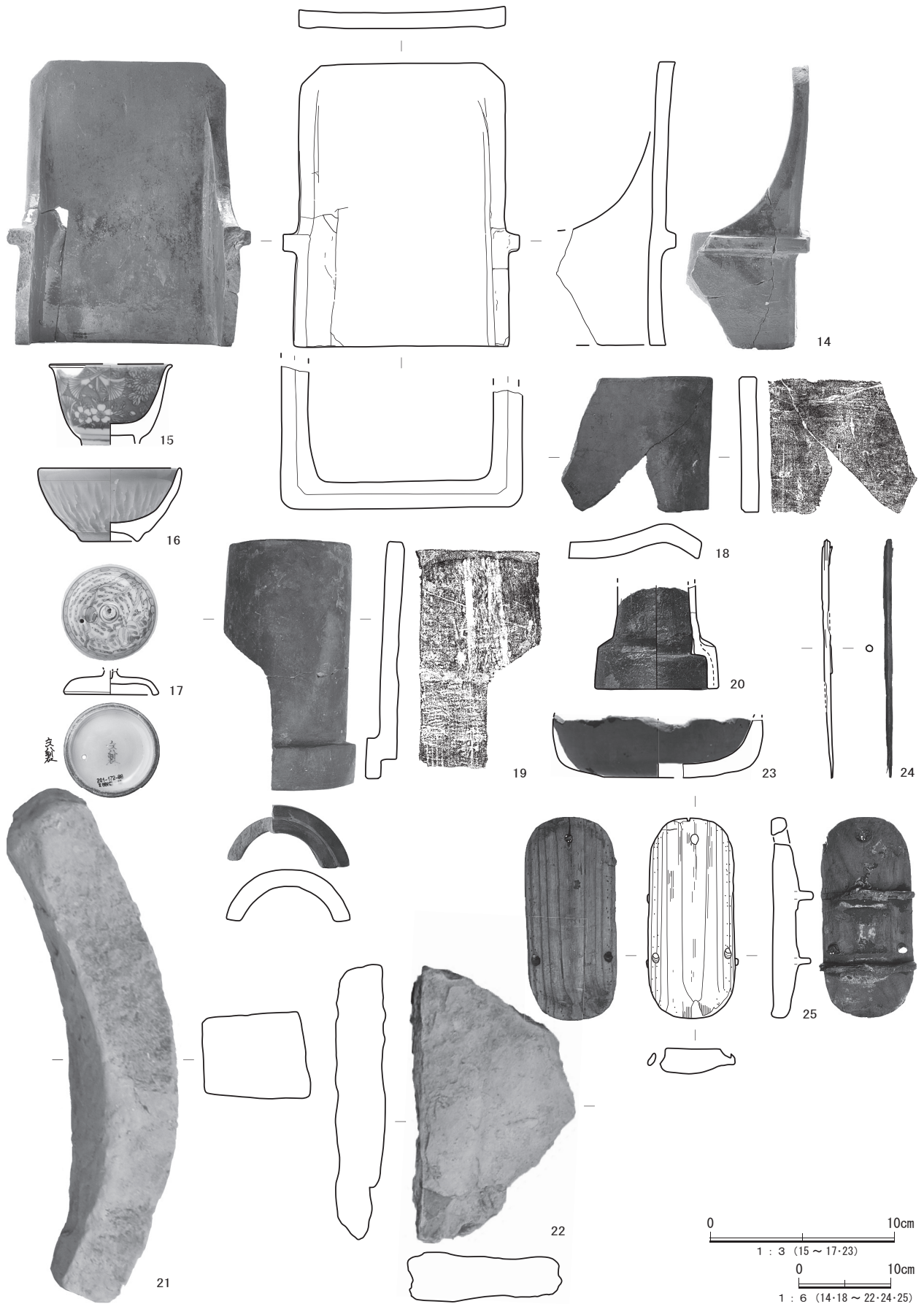
Ⅱ区 第8号幕末明治土坑遺物出土状況(南から)



第81図 第8号幕末明治土坑実測図

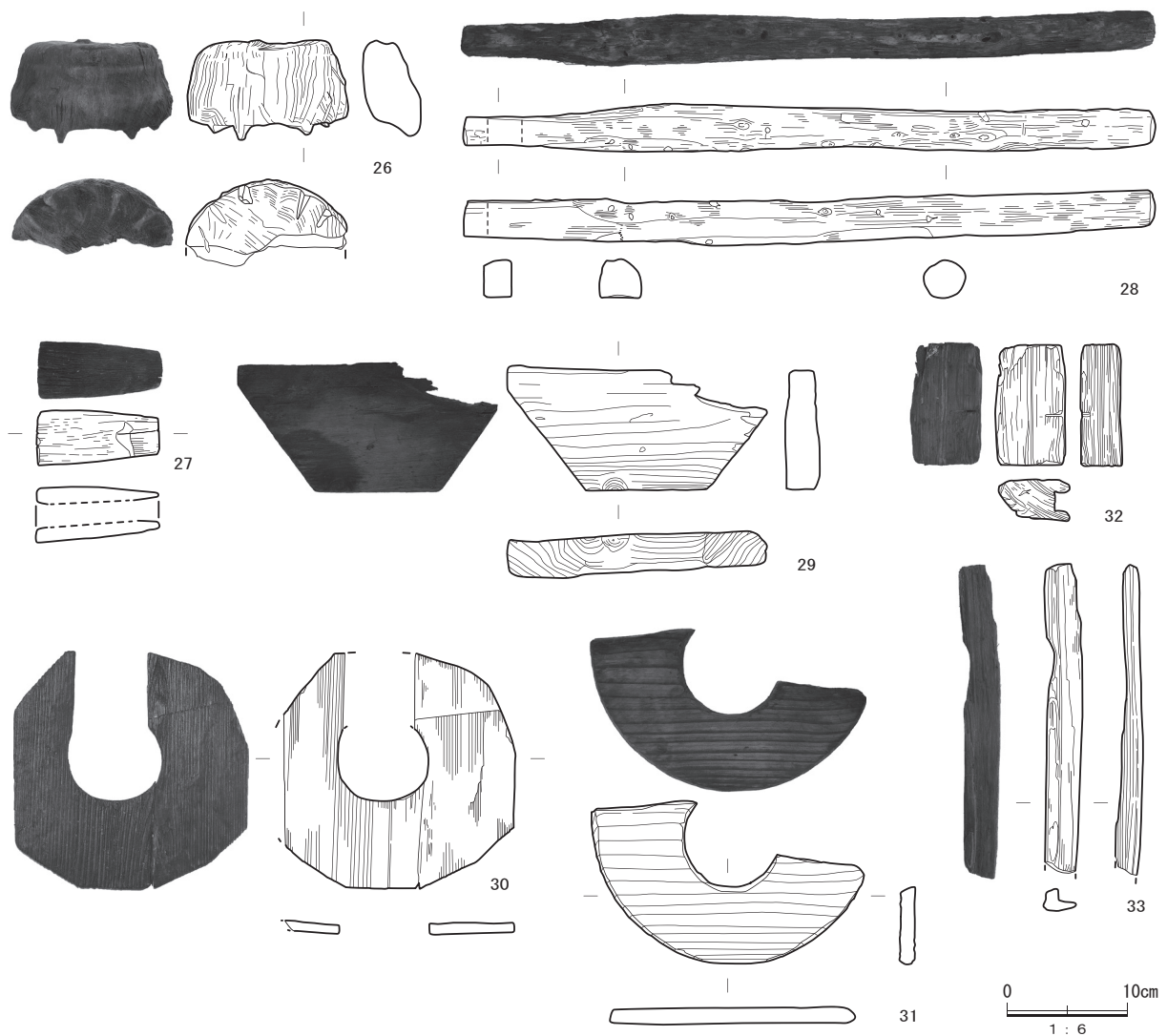


第 82 図 第 8 号幕末明治土坑出土遺物実測図 (1)



第 83 图 第 8 号幕末明治土坑出土遺物実測図 (2)

瓦は 22 点・4,207g, ガラスが 4 点・59g, 木製品 11 点, 石製の井戸杵 22 点・21,578 g, 敷石 5 点・4,128 g が出土した。その内 33 点を図化した。1・2 は土師質土器で 1 は焜炉, 2 は大甕, 3～6 は瓦質土器で 3・5 は竈, 4・6 は焜炉である。7～14 は陶器で 7・8 は灯明具の高灯, 9 は亀文の水鉢, 10・11 は播鉢, 12 は火鉢, 13 は植木鉢, 14 は便器である。15～17 は磁器で 15 は銅版転写の端反猪口, 16 は銅緑釉の猪口, 17 は急須の蓋で内面に「文八製」とある。18・19 は瓦で 18 は棧瓦, 19 は雁振瓦, 20 は土管, 21 は石製の井戸杵, 22 は敷石である。23～33 は木製品で 23 は漆器椀, 24 は箸, 25 は下駄, 26 は日傘の軸, 27 は桶の注口, 28 は柄, 29～31 は部材, 32・33 は建具の部材であろう。また, 21 の井戸杵と 22 の敷石は土坑内に廃棄されていたものであるが, 井戸の部材と考えて, 図化していない他の部材と合わせて復元した (口絵 2)。

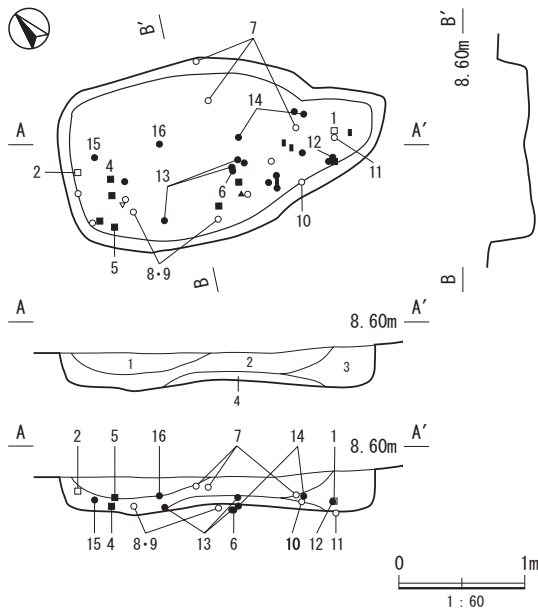


第 84 図 第 8 号幕末明治土坑出土遺物実測図 (3)

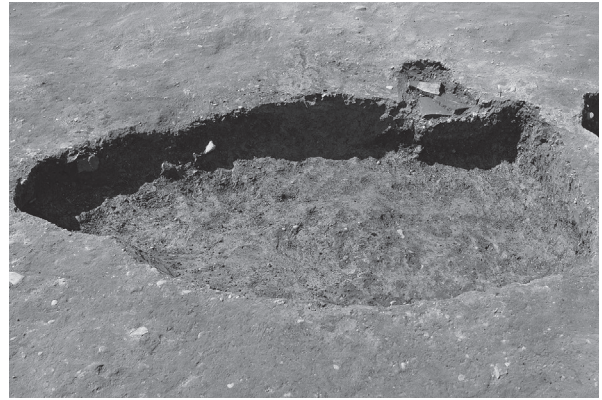
第9号幕末明治土坑（9BMD）

遺構 II区4B・C区に位置し、東西2.20m、南北1.20m、深さ28cmである。廃棄土坑である。

遺物 土師質土器 21点・1,267g，瓦質土器 7点・660g，陶器は薩摩 1点・58g，萩 1点・5g，瀬戸 17点・83g，益子 6点・16g，七面 17点・731g，松岡 8点・67g，不明 17点・330gである。磁器は肥前 58点・337g，瀬戸 2点・134gである。瓦 8点・970g，金属製品 2点・160g，工業製品 1点・749g，泥岩 4点・114gが出土した。その内 16点を図化した。1・2は土師質土器で1はかわらけ，2は小鉢である。3～5は瓦質土器で3はかわらけ，4は小鉢，5は竈である。6は磁器で染付端反碗，7～11は陶器で7は鶉の糞釉鉢，8は鉄釉土瓶，9は鉄釉土瓶蓋，10は鉄釉ペコカン徳利，11は菊花文水滴である。12～16は磁器で12は染付端反猪口，13は染付端反碗，14は染付腰張碗，15は染付端反碗，16は染付小壺である。



第85図 第9号幕末明治土坑実測図



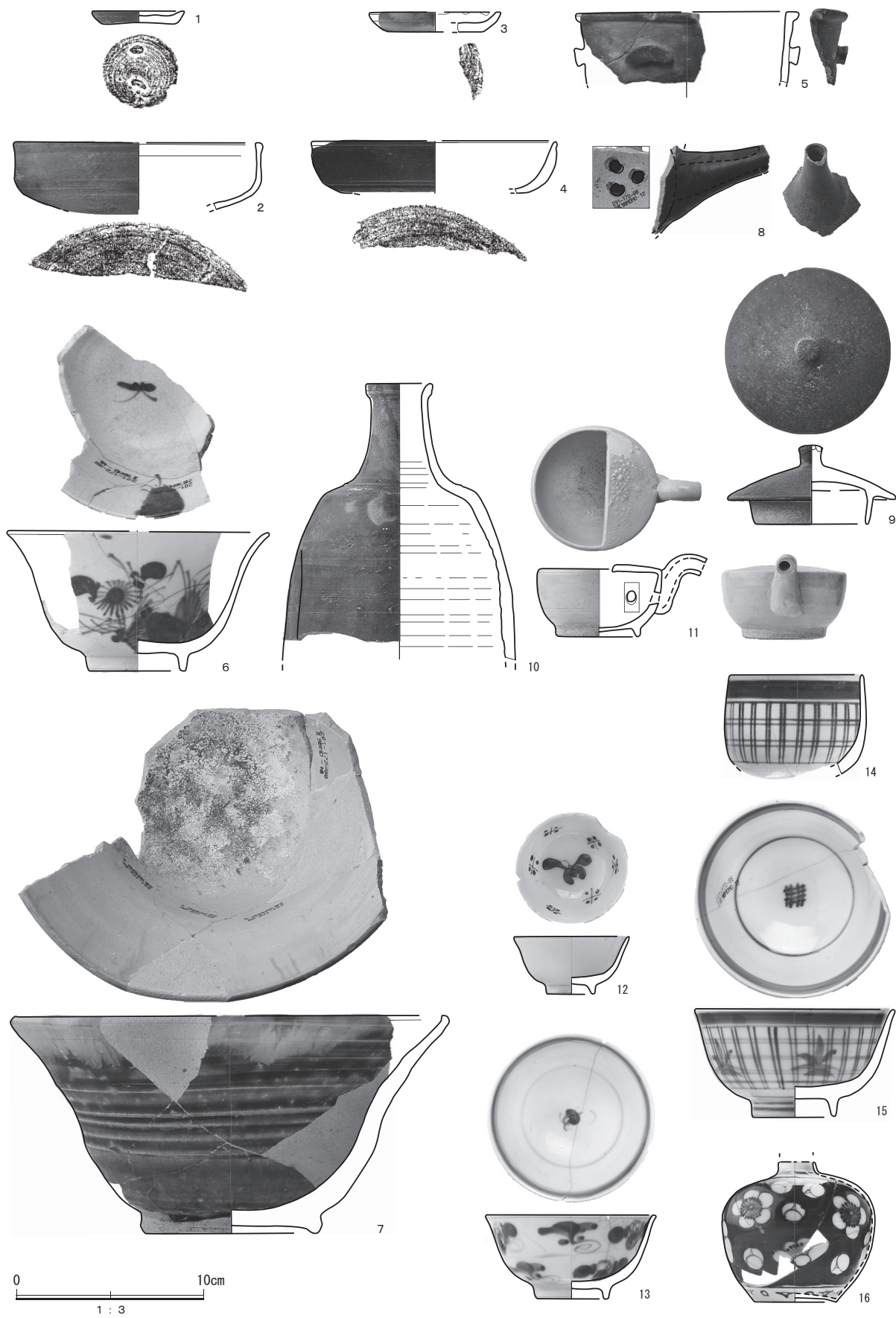
II区 第9号幕末明治土坑完掘状況（東から）



II区 第9号幕末明治土坑遺物出土状況（東から）



II区 第9号幕末明治土坑遺物出土状況接写（東から）

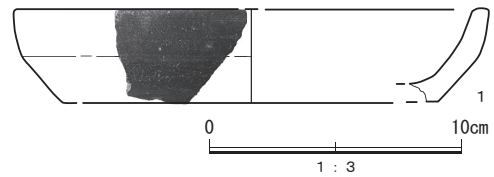
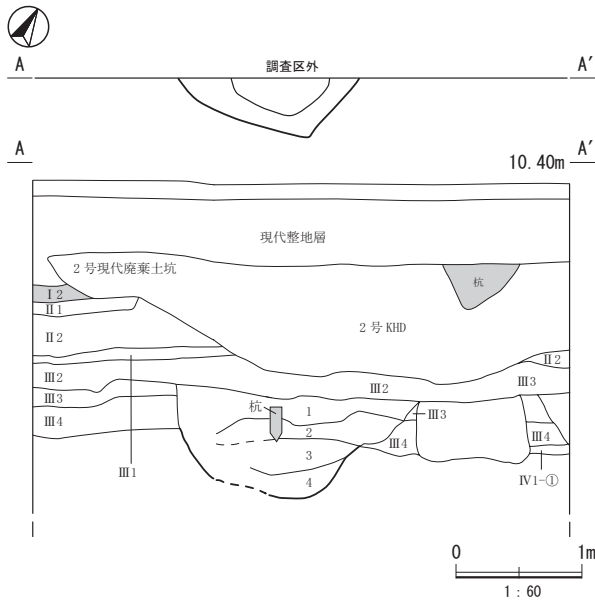


第 86 图 第 9 号幕末明治土坑出土遺物実測図

第 10 号幕末明治土坑 (10BMD)

遺構 II 区 4 C 区に位置し、北側が調査区外にある。IV 層江戸一面で確認したが土層断面では III 3 層から掘り込まれている。廃棄土坑である。

遺物 瓦質土器 2 点・71g, 瓦 1 点・392g が出土した。その内 1 点を図化した。1 は瓦質土器の鍋である。



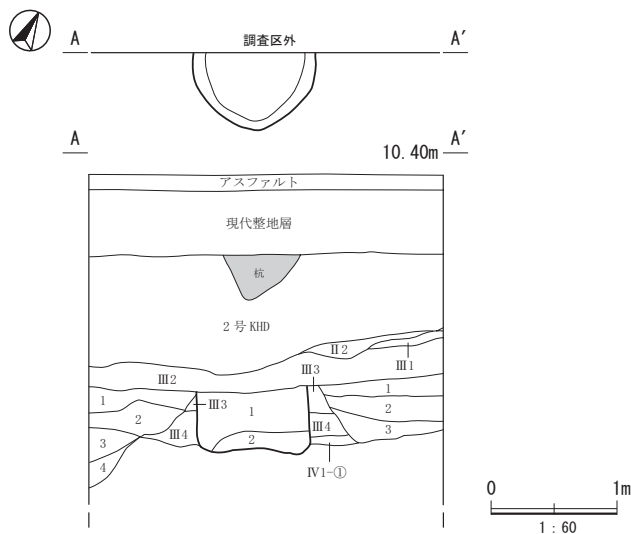
第 88 図 第 10 号幕末明治土坑出土遺物実測図

第 87 図 第 10 号幕末明治土坑実測図

第 11 号幕末明治土坑 (11BMD)

遺構 II 区 4 A 区に位置し、北側が調査区外にある。四面の江戸一面で確認したが、III 3 層から掘り込まれている。規模は東西 0.97m 以上, 南北 0.60m 以上で, 深さは 53cm である。植栽痕である。

遺物 出土していない。



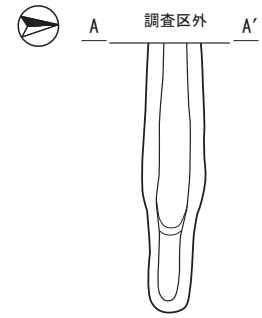
II 区 第 11 号幕末明治土坑土層 (南から)

第 89 図 第 11 号幕末明治土坑実測図

第1号幕末明治溝（1BMM）

遺構 II区4A区に位置し、西が調査区外にある。東西溝で東西2.23m以上、幅は35～48cm、深さは16～25cmである。幕末明治としたが掘り込み面がIV1層からなので江戸期の可能性がある。

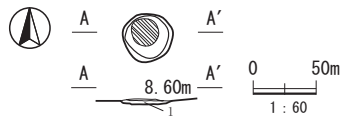
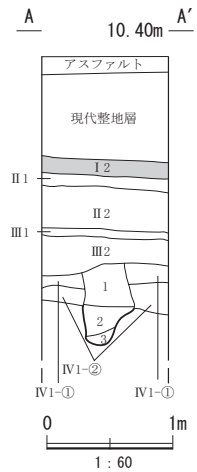
遺物 遺物は出土していない。



第1号幕末明治埋設遺構（1BMMS）

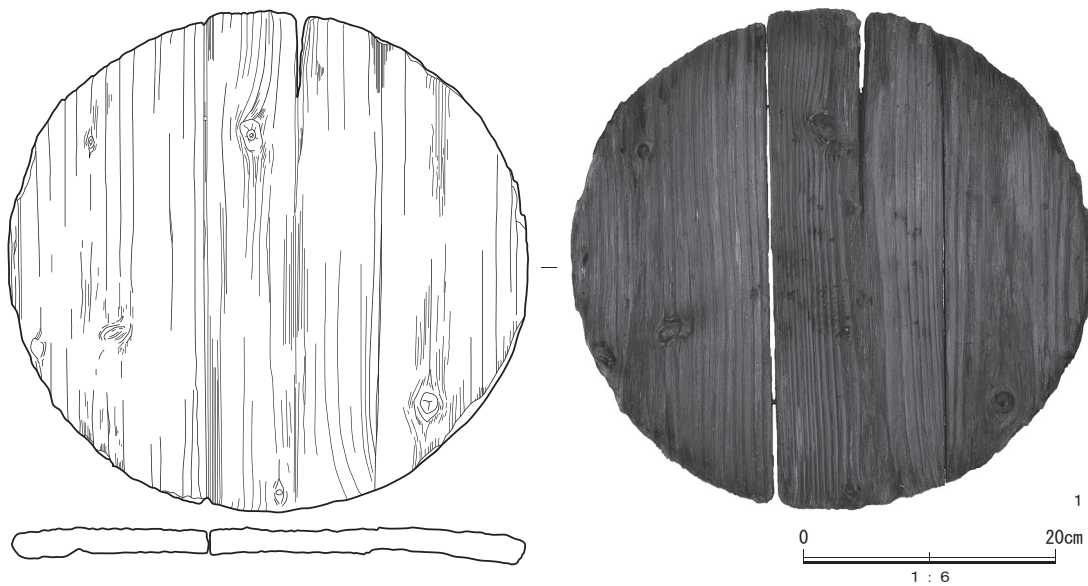
遺構 II区4B区に位置し、掘込みは確認できなかった。径40.0cm、深さ3cmに径41.5cmの円形の板が添えられていた。礎板と考えられる。

遺物 図化したものは、礎板で径40.0cm、厚さ3.0cmで材質はスギである。



第91図 第1号幕末明治埋設遺構実測図

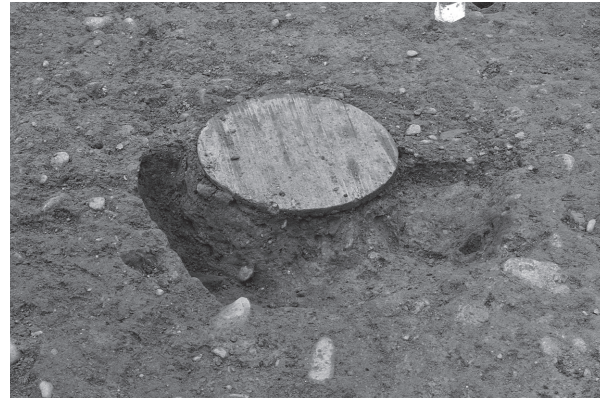
第90図 第1号幕末明治溝実測図



第92図 第1号幕末明治埋設遺構出土遺物実測図



Ⅱ区第1号幕末明治溝完掘状況（東から）

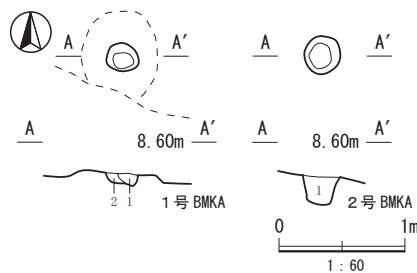


Ⅱ区第1号幕末明治埋設遺構樽底検出状況（南から）

第1号幕末明治小穴（1 BMKA）

遺構 Ⅱ区5 B区に位置し、25 × 22cm，深さ10cmである。

遺物 出土していない。



第93図 第1・2号幕末明治小穴実測図



Ⅱ区第1号幕末明治小穴完掘状況（南から）

第2号幕末明治小穴（2 BMKA）

遺構 Ⅱ区5 B区に位置し，径30cm，深さ22cmである。

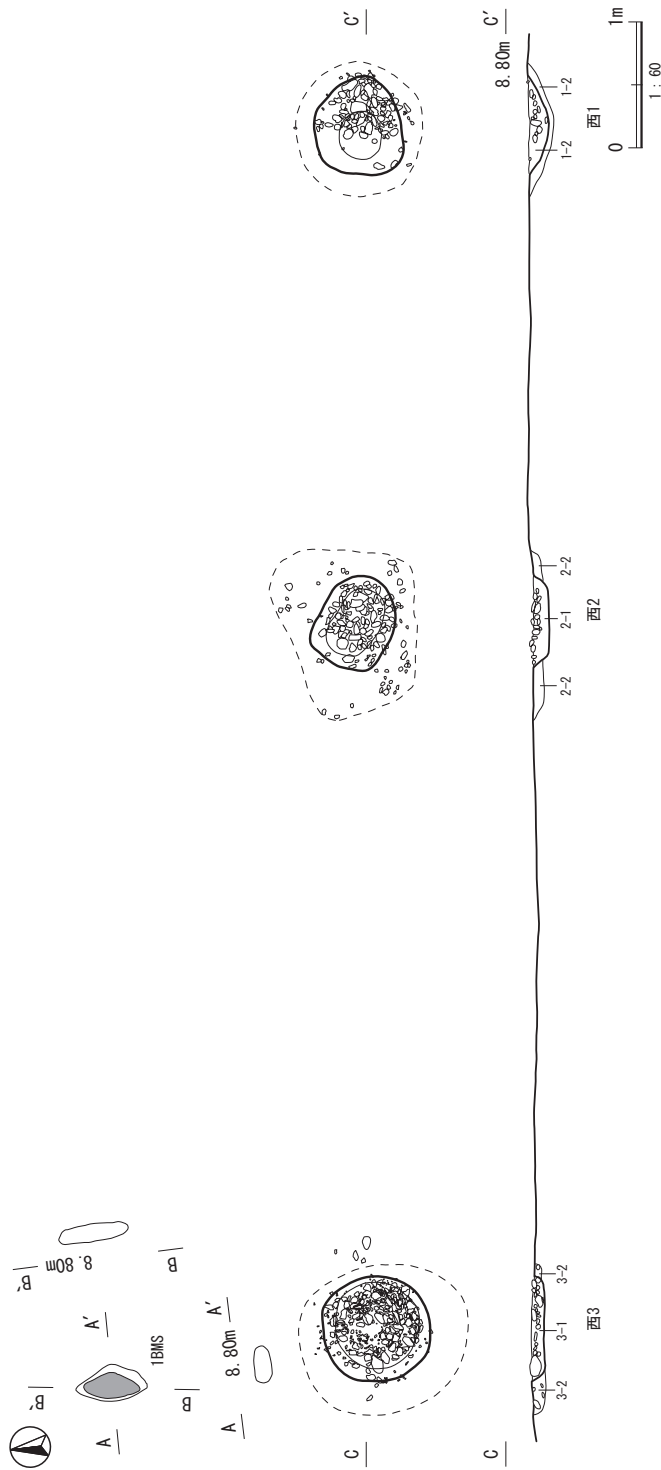
遺物 出土していない。

Ⅲ区

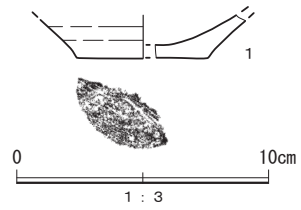
第1号幕末明治柱列・第1号幕末明治礎石（1 BMST・1 BMS）

遺構 Ⅲ区4 D・E区に位置し，東西に東から根石を伴う柱穴3基の柱列と，西から北折した礎石を一個確認した。建物を復元出来ないため，柱列から礎石とした。西側調査区外に伸びている可能性がある。芯々距離は西から3.9 m，5.6 mで北折の礎石間は2.7 mである。規模は西1地形は77 × 65cm，深さ15cm，西2は73 × 58cm，深さ13cm，西3は87 × 87cmで深さ10cmである。根石が確認された。礎石は根石を伴わず江戸一面に直接乗っている。

遺物 遺物はカワラケ1点が第1号幕末明治柱穴から出土した。図化した。



第94図 第1号幕末明治柱列・第1号幕末明治礎石実測図



第95図 第1号幕末明治柱列
出土遺物実測図



Ⅲ区第1号幕末明治柱列・第1号幕末明治礎石完掘状況（西から）

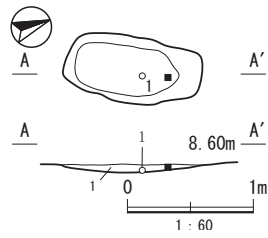


Ⅲ区第1号幕末明治柱列確認状況（西から）

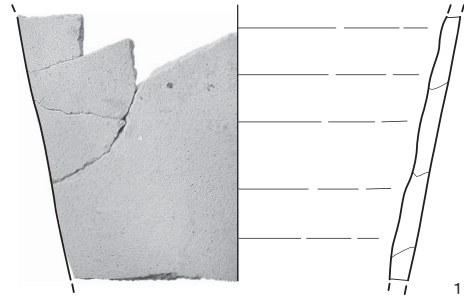
第1号幕末明治土坑（1BMD）

遺構 Ⅲ区4D区に位置し、南北1.18m、東西0.53m、深さ8cmの長方形で廃棄土坑である。

遺物 瓦質土器2点・45g、磁器の肥前2点・62g、陶器素焼2点・230g、瓦1点・41gが出土した。その内2点を図化した。1は陶器に素焼の涼炉、2は磁器の染付端反碗である。



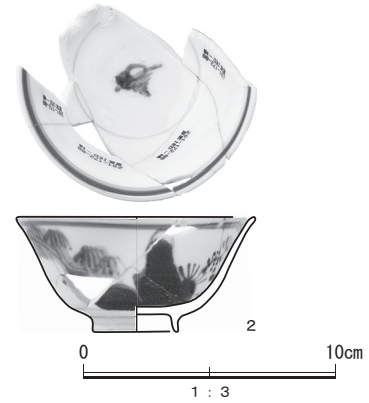
第96図 第1号
幕末明治土坑実測図



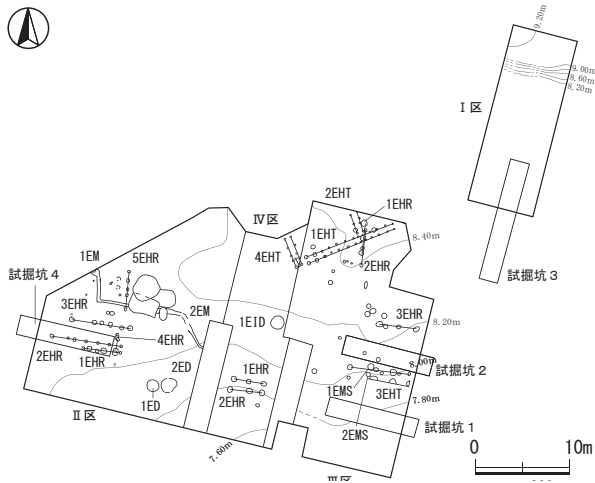
第97図 第1号幕末明治土坑出土遺物実測図



Ⅲ区第1号幕末明治土坑完掘状況（南から）



第4節 江戸一面の遺構と遺物



第98図 江戸一面全体図



Ⅱ区江戸一面完掘状況（南東から）

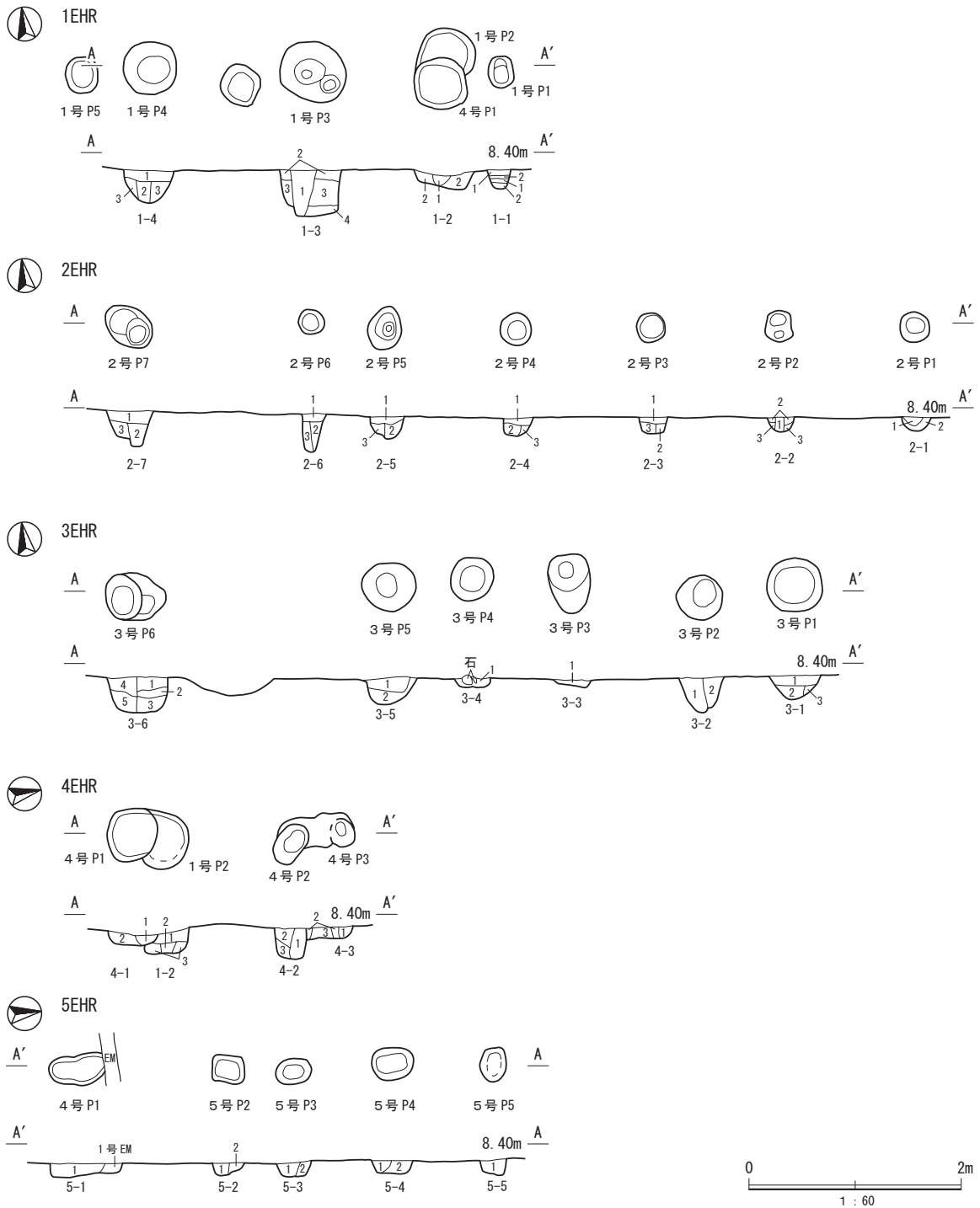
Ⅱ区

Ⅱ区に集中する小穴群は整地層の砂利層に小穴の埋土が砂利を多く含むため不明瞭で建物群としての並に大小があり組み合わせが困難なため柱列とした。

第1号江戸柱列 (1 EHR)

遺構 II区5A・B区に位置する東西柱列である。P2は4EHRのP1に掘り込まれている。P1～5まで与えたがP1・5は径が30cm前後と小形、P3・4・5は径が50～60cmと大形で芯々距離は大型の方が等間隔である。全長4.0mである。

遺物 P1から瓦質土器のカワラケ1点・14gが出土した。1点を図化した。1は瓦質カワラケで油煙が溶着し灯明皿として使用していた。



第99図 第1～5号江戸柱列実測図

第2号江戸柱列（2 EHR）

遺構 II区4A・B区に位置する東西柱列である。P1～7を確認した。径はP5・6は40cm台で大きく、20～30cm台と小さい。深さも13～35cmと一様でない。明確な柱痕は認められない。芯々もP1～5は約4尺、P5～6は2尺、P6～7は5尺強である。全長3.35mである。

遺物 土師質土器2点・10g，瓦質土器3点・91g，陶器4点・48g，磁器2点・3g，金属製品鋳1点・4gが出土した。共に図化した。1は瓦質鍋，2は陶器二耳壺の蓋である。

第3号江戸柱列（3 EHR）

遺構 II区4A・B区に位置する東西柱列である。P1～7を確認した。径は40～55cmで、深さはP1・2・5・6は23～32cm，P4・5は6～8cmである。明確な柱痕はない。芯々はP1・2間，P3・4・5間は3尺，P2・3間は4尺，P5・6間は8尺である。全長6.35mである。

遺物 P6から陶器1点・15gが出土し図化した。1は天目茶碗である。

第4号江戸柱列（4 EHR）

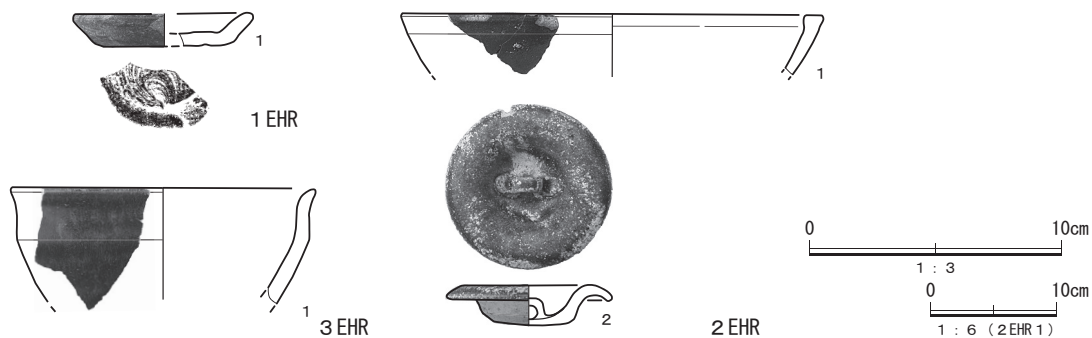
遺構 II区4・5B区に位置する南北棟である。P1～3を確認した。P1は1EHRのP2を掘り込んでいる。径はP1が90cm，P2・3は不整楕円形で長軸75cm前後，短軸30cm前後で深さは10～28cmである。芯々はP1・2間は5尺，P2・3間は1尺強である。全長は1.95mである。

遺物 出土していない。

第5号江戸柱列（5 EHR）

遺構 II区4B区に位置する南北列である。P1～5を確認した。P1は第1号江戸溝を掘り込んでいる。P1は長軸53cm，短軸29cm，P2～5は長軸32～40cm，短軸23～28cmで深さは11～15cmである。隅丸長方形である。芯々はP1・2間は4尺強，P2・3間は2尺，P3・4間・P4・5間は3尺である。全長3.90mである。

遺物 出土していない。



第100図 第1～3号江戸柱列出土遺物実測図



Ⅱ区第1～5号江戸柱列完掘状況（北から）



Ⅱ区第1～4号江戸柱列完掘状況（西から）

第1号江戸溝（1EM）

遺構 Ⅱ区4A・B区に位置し、第2号江戸溝と連結する。「L」字状に屈曲し現状6.5mである。上幅は25～35cm、下幅は15～20cm、深さは25cmである。

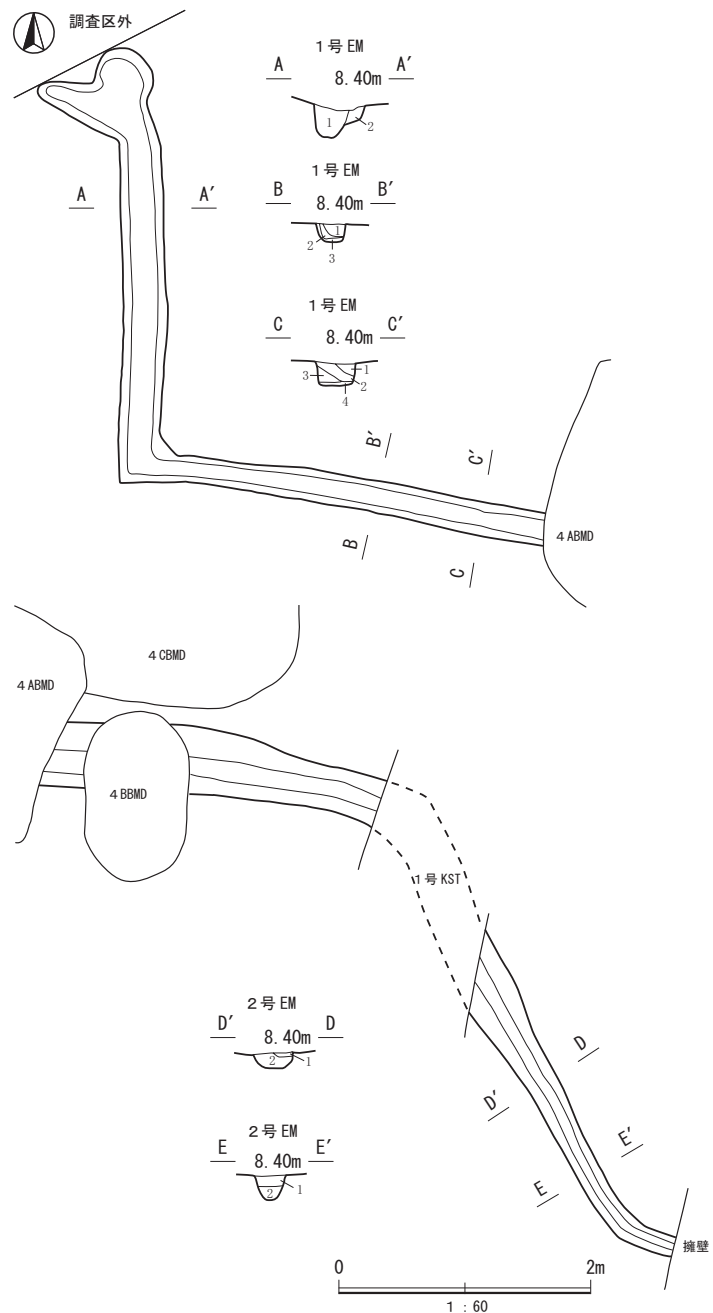
遺物 出土していない。

第2号江戸溝（2EM）

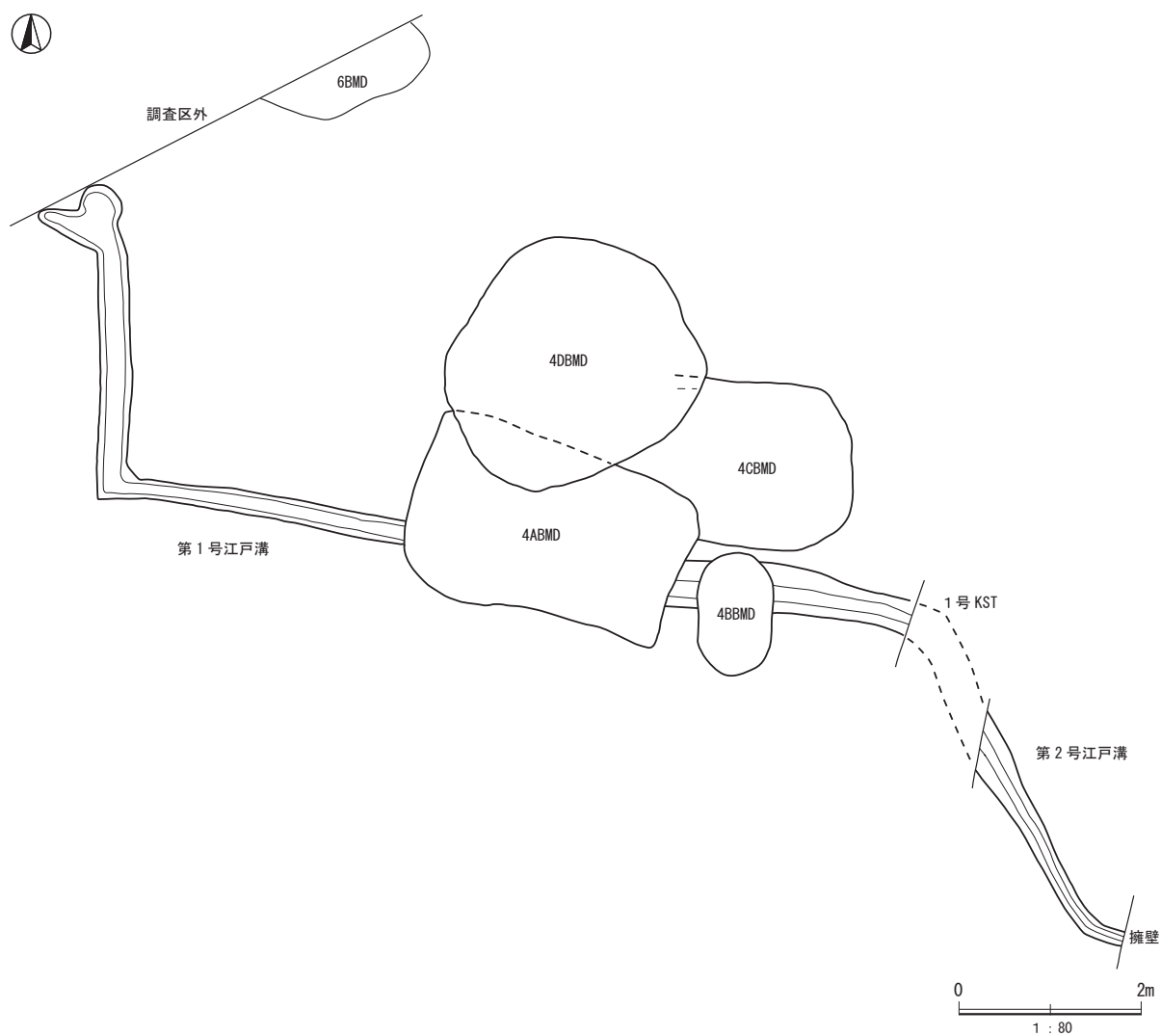
遺構 Ⅱ区4B・C区に位置し、第1号江戸溝と連結する。逆「L」字状に屈曲し現状5.30mである。溝は南西に延びで細くなり擁壁に掘り込まれている。上幅は15～53cm、下幅は5～15cmで深さは20cmである。

遺物 瓦質土器1点・159gが出土したが図示し得なかった。

第1・2号江戸溝は北西から南東にクランク状に確認した。中央を第4A・B幕末明治土坑に掘り込まれている。



第101図 第1・2号江戸溝実測図（1）



第 102 図 第 1・2号江戸溝実測図（2）



Ⅱ区第1号江戸溝完掘状況（南から）

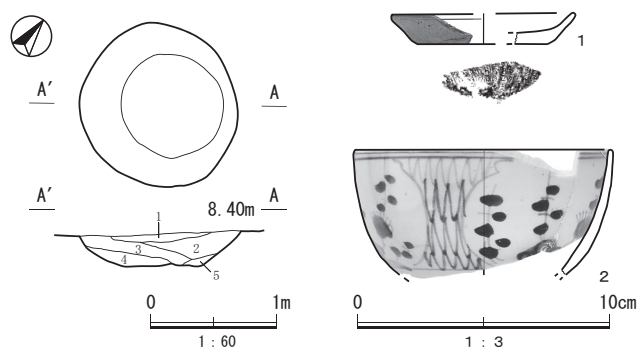


Ⅱ区第2号江戸溝完掘状況（南東から）

第1号江戸土坑（1ED）

遺構 II区5B区に位置する。規模は1.2×1.28mで深さは25cmである。

遺物 土師質土器6点・48g, 瓦質土器1点・73g, 陶器1点・10g, 磁器6点・76g, 瓦3点・163gが出土した。その内2点を図化した。1は土師質土器のかわらけ, 2は磁器の染付丸碗である。

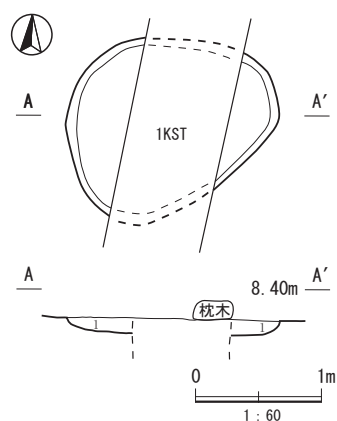


第103図 第1号江戸土坑・出土遺物実測図

第2号江戸土坑（2ED）

遺構 II区5B区に位置し, 第1号近代礎石建物に掘り込まれている。規模は1.5×1.6mで深さは12cmである。

遺物 出土していない。



第104図 第2号江戸土坑実測図



II区第1・2号江戸土坑完掘状況（南西から）

III区

第1号江戸掘立柱建物（1EHT）

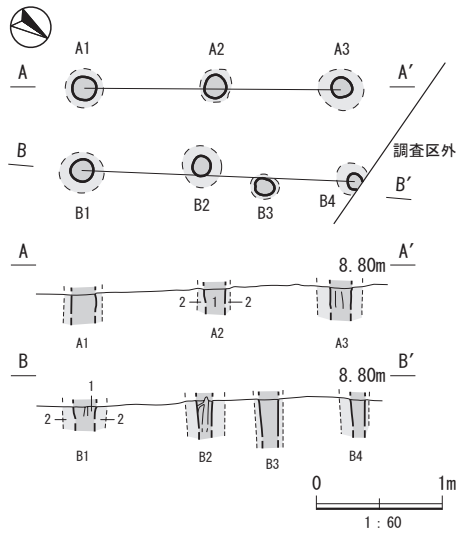
遺構 III区3D・E, 4D区に位置する東西棟の杭列である。杭の素材は松で太さ15～38cm, 長さ2.0m前後で細い方の先端を加工して打込んでいる。杭の周囲は整地土の黄褐色のロームがグライ化し灰色に変色している。杭は東は調査区外に延びている。東から北列と南列各13本を確認した。桁行1間・梁行13間以上の東西棟である。桁行は60～70cm（2尺）梁行は狭いところで（P6～7）で55cm, 広いところで（P8～9）100cm, 大半は80～90cm（3尺）である。現長は9.85mである。P6・7の位置で南北棟の第2号江戸掘立柱建物と接続する。また, P13の西側に2尺おいて南北棟の第4号掘立柱建物と接続する。現状「コ」字形の建物は北側に展開する。

遺物 出土していない。

第2号江戸掘立柱建物（2EHT）

遺構 II区3D区に位置し, 第1号江戸掘立柱建物のP6・7間から北に展開する桁行1間,

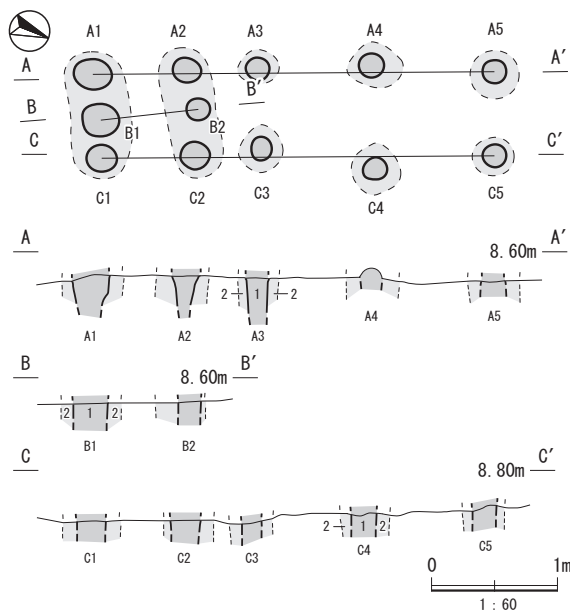
梁行 2 間以上の南北棟である。遺構の状況は第 1 号江戸掘立柱建物と同様である。桁行の幅は北に行くとき広がっているがほぼ 2 尺である。現存長 2.2 m 以上である。
遺物 出土していない。



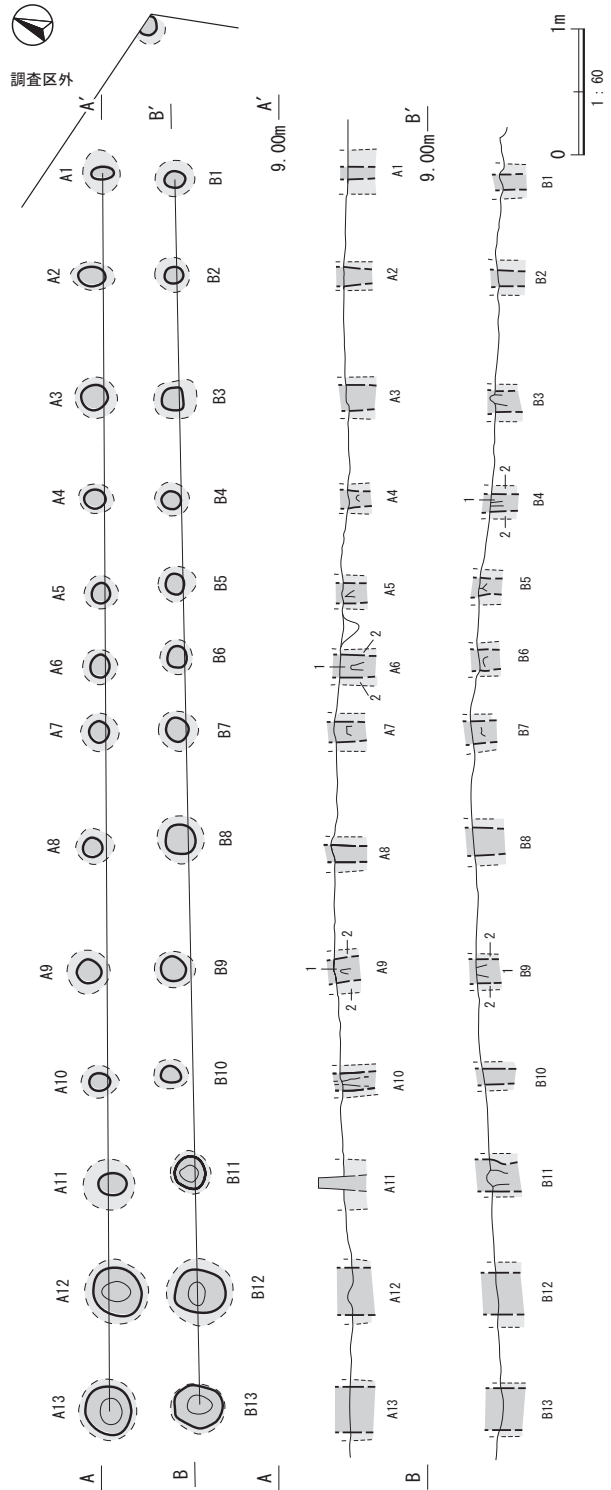
第 106 図 第 2 号江戸掘立柱建物実測図

第 4 号江戸掘立柱建物 (4 EHT)

遺構 Ⅲ区 3・4 D 区に位置し第 1 号江戸掘立柱建物から北折する。松杭の打込みは同様であるが、桁行が南の 1 間は中央に 2 本の杭を打込み強化しているようである。



第 107 図 第 4 号江戸掘立柱建物実測図



第 105 図 第 1 号江戸掘立柱建物実測図

建物隅の荷重を想定しての事であろう。桁行幅は2尺，南の1間は中央に2本の松杭を打込んでいる。梁行幅も南の2間は狭く，北の2間は3尺になっている。
遺物 出土していない。



Ⅲ区第1・2・4号江戸掘立柱建物完掘状況（北西から）



Ⅲ区第1号江戸掘立柱建物 B12 完掘状況（南から）



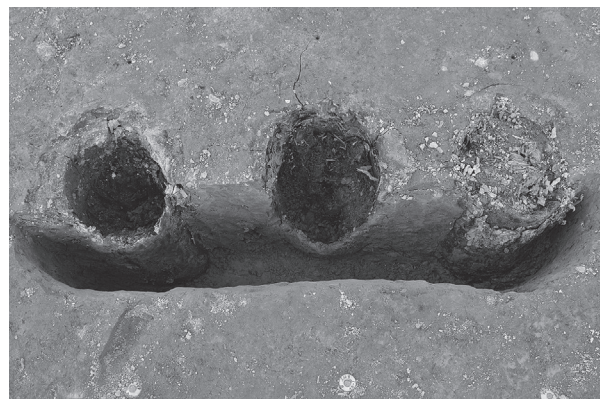
Ⅲ区第1・3・4号江戸掘立柱建物木杭検出状況（北西から）



Ⅲ区第2号江戸掘立柱建物完掘状況（南から）



Ⅲ区第4号江戸掘立柱建物完掘状況（南から）

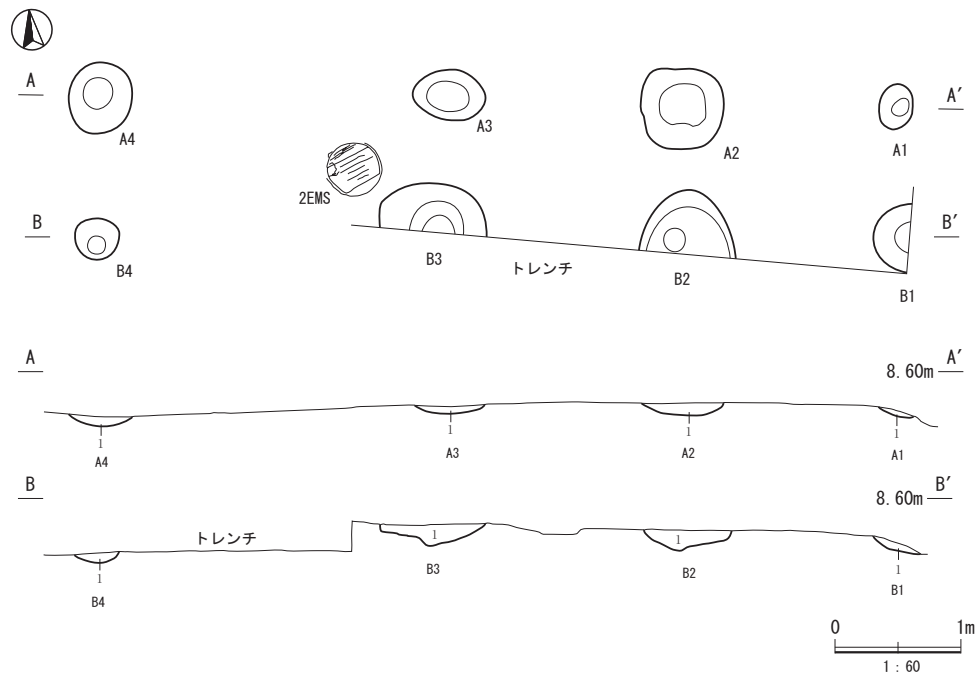


Ⅲ区第4号江戸掘立柱建物 A～C 1土層（南東から）

第3号江戸掘立柱建物（3EHT）

遺構 Ⅲ区5D・E区に位置し，東は調査区外にある。1間×3間以上の東西棟で柱穴の規模はA1・A3，B4が小さく，B2・B3が大きい。深さは5～15cmと浅い。梁行は3尺前後，桁行は東から2間は8尺，3間目は9尺である。1EMS（第1号江戸埋設）は樽地形の可能性があるなので一緒に図化した。

遺物 瓦質土器1点・9g，陶器1点・4gが出土したが図化しえる遺物はなかった。



第 108 図 第 3 号江戸掘立柱建物実測図



Ⅲ区第 3 号江戸掘立柱建物完掘状況（東から）

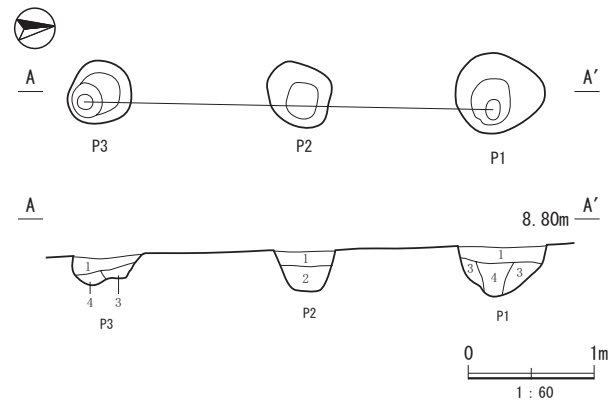


Ⅲ区第 3 号江戸掘立柱建物 A2 掘方（南から）

第 1 号江戸柱列（1 EHR）

遺構 Ⅲ区 3・4D 区に位置する南北の柱列で北が調査区外に伸びる可能性がある。径は 50～70cm で深さは 20～35cm である。芯々は 3 尺前後である。

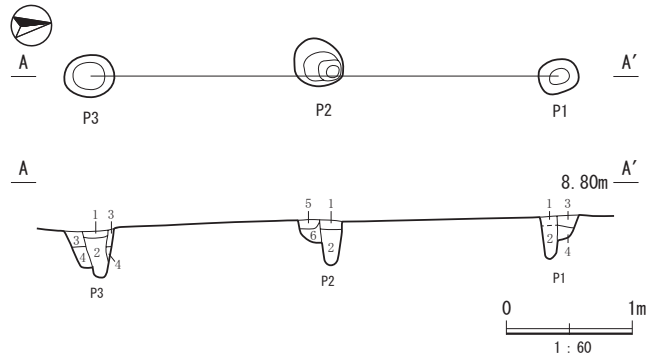
遺物 出土していない。



第 109 図 第 1 号江戸柱列実測図

第2号江戸柱列（2 EHR）

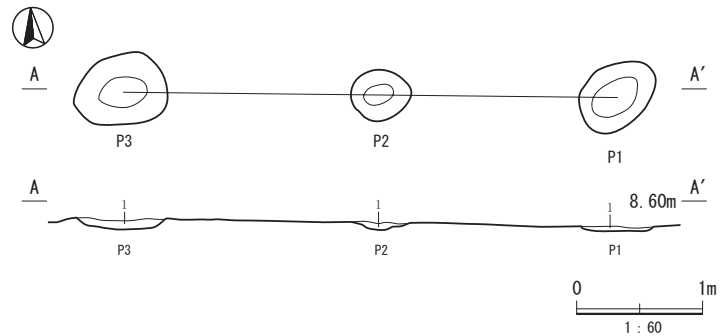
遺構 Ⅲ区3・4D区に位置する南北の柱列で北は調査区外に伸びる可能性がある。1号江戸柱列と軸が同じで前後の可能性はある。径は25～40cmで深さは35～40cmである。芯々は8尺である。
遺物 出土していない。



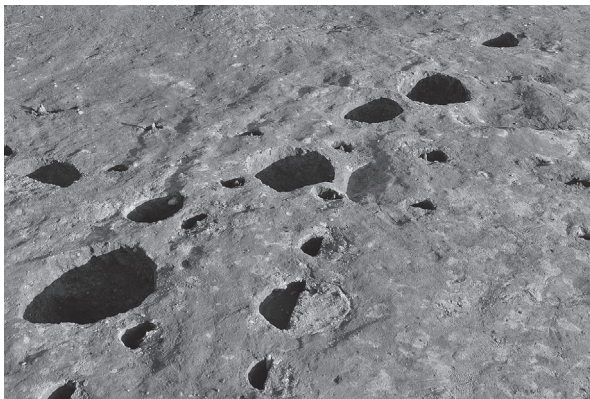
第110図 第2号江戸柱列実測図

第3号江戸柱列（3 EHR）

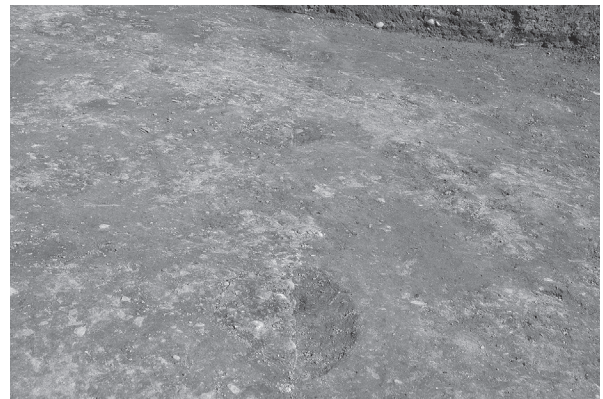
遺構 Ⅲ区4E区に位置する東西柱列である。3柱穴で両側の径が50～75cm，中央の柱穴は42～50cmで深さは3～5cmである。
遺物 出土していない。



第111図 第3号江戸柱列実測図



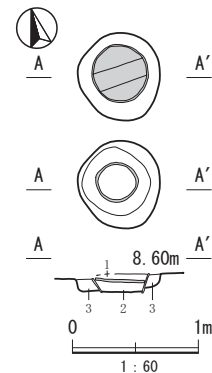
Ⅲ区第1・2号江戸柱列完掘状況（北西から）



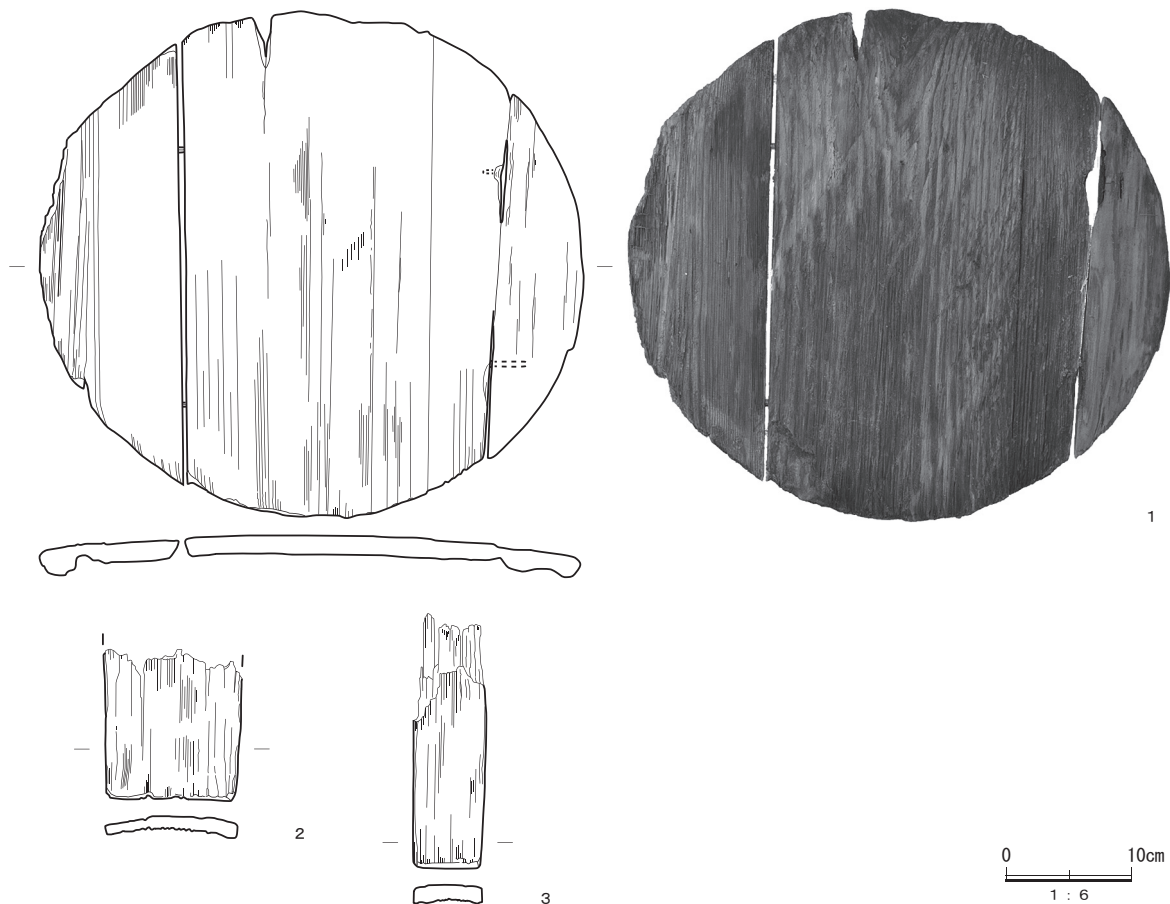
Ⅲ区第3号江戸柱列確認状況（西から）

第1号江戸一面埋設遺構（1 EMS）

遺構 Ⅲ区5D・E区に位置している。樽の底板と枳板の下端が遺存していた。0.70×0.65m，深さ10cmの掘り方に，径40.0cm，厚さ10cmの樽が埋設されていた。
遺物 樽の底板と枳板が出土した。底板と枳板の一部を図化した。



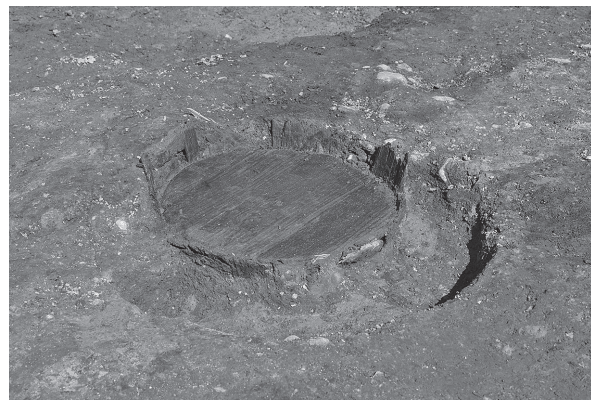
第112図 第1号江戸一面埋設遺構実測図



第 113 図 第 1 号江戸一面埋設遺構出土遺物実測図



Ⅲ区第 1 号江戸一面埋設遺構枳板検出状況（南から）



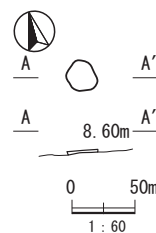
Ⅲ区第 1 号江戸一面埋設遺構樽底出土状況（南から）

第 2 号江戸一面埋設遺構（2 EMS）

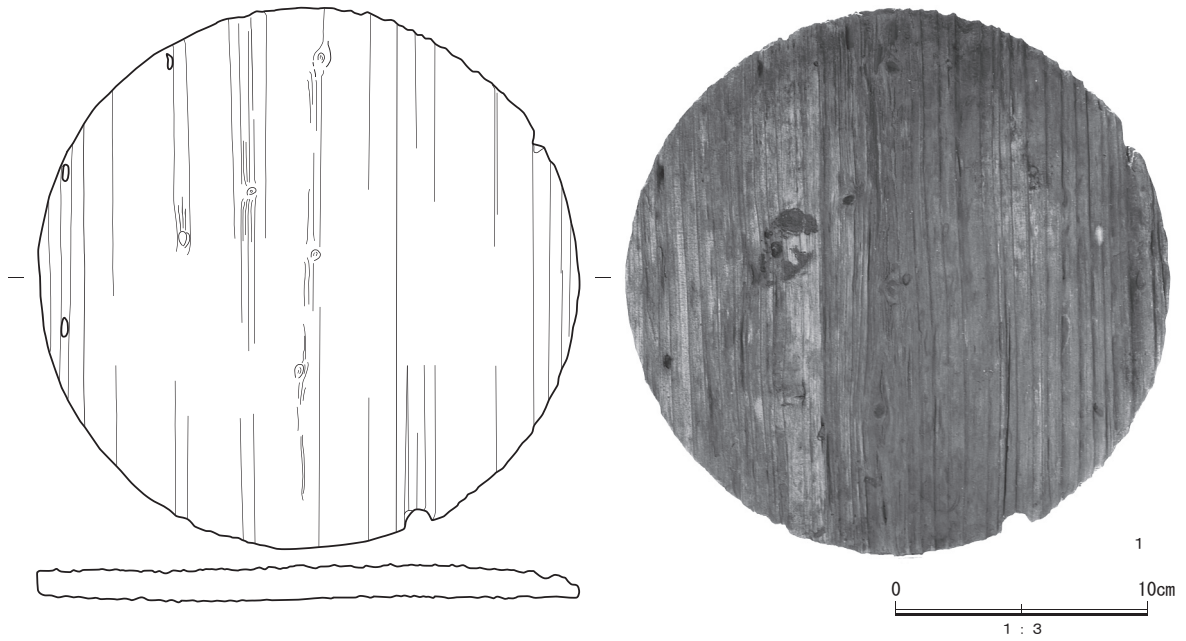
遺構 Ⅲ区 5D 区に位置し、21.6cm の円形板が埋設されていた。

礎板と考えられる。

遺物 木製礎板が出土した。



第 114 図 第 2 号江戸一面埋設遺構実測図



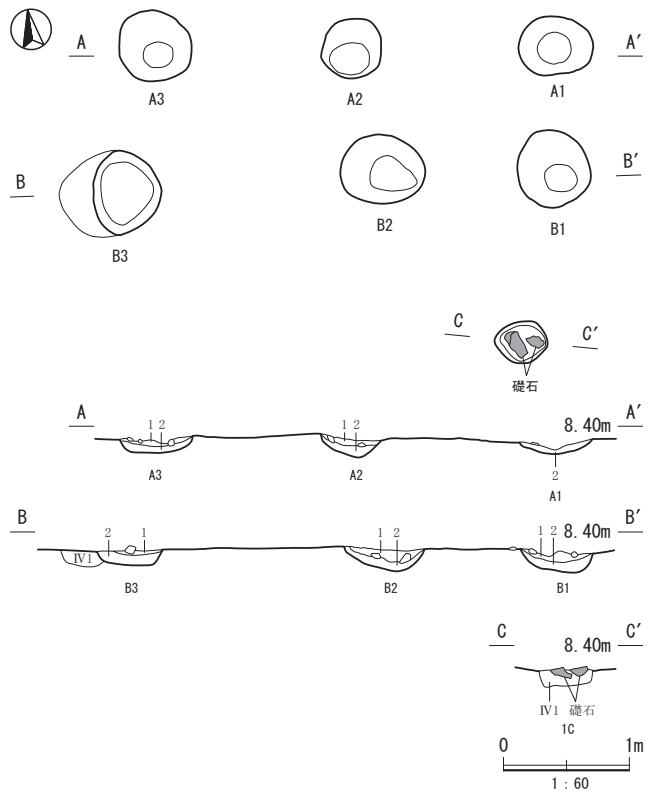
第 115 図 第 2 号江戸一面埋設遺構出土遺物実測図

IV区

第 1・2 号柱列 (1・2 EHR)・第 1 号江戸礎石建物 (1 EST)

遺構 IV区 5C区に位置し、当初柱列としたが柱内は多量の石や小砂利で充填され 2 列に礎石が 1 個が伴うと考えて、1 間×2 間の東西棟の礎石建物とした。梁行が 3 尺前後、桁行は一様でないが 5 尺から 7 尺、掘方の深さは 10～15 cm である。東端の掘方の南に 4 尺離れて礎石を確認した。

遺物 出土していない。



第 116 図 第 1・2 号江戸柱列，第 1 号江戸礎石建物実測図



IV区第1号江戸柱列完掘状況（西から）

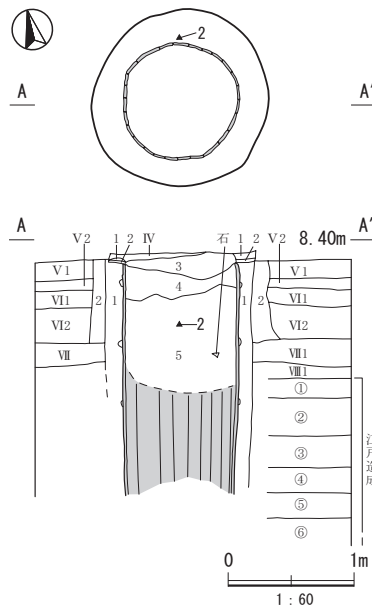


IV区第1号江戸礎石建物完掘状況（南から）

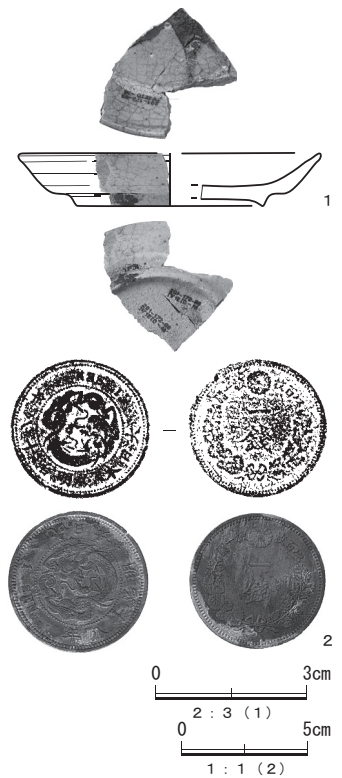
第1号江戸井戸（1EID）

遺構 IV区4C・D区に位置し、江戸一面で確認した。径1.2mの掘方に90cmに井戸枠を設置し50cm間隔で竹製のタガで固定していた。深さは2.0mまで確認した。確認面はV層とした江戸一面で確認した。V1・2・3間では2層とした黄褐色ロームがグライ化し灰色に変色していた。

遺物 陶器1点・23g、銭貨1点・7g、瓦1点・46gが出土した。そのうち2点を図化した。1は陶器の鉄絵皿、2は明治18年の一銭銅貨である。江戸一面の遺構としたが明治18年以降の井戸と考えられる。



第117図 第1号江戸井戸実測図



第118図 第1号江戸井戸出土遺物実測図

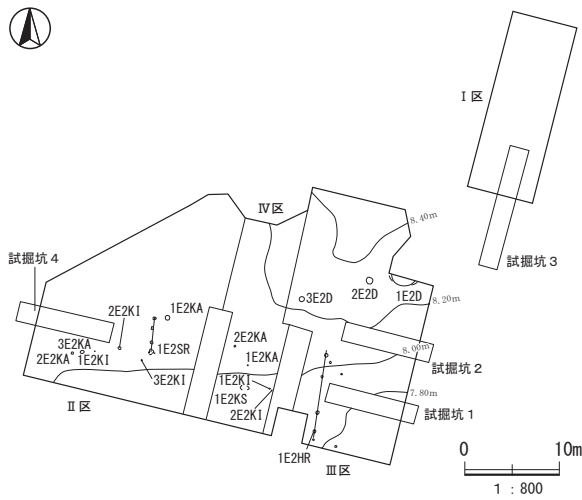


IV区第1号江戸井戸完掘状況（南から）



IV区第1号江戸井戸側板検出状況（北から）

第5節 江戸二面の遺構と遺物



第 119 図 江戸二面全体図



II～IV区江戸二面完掘状況（西から）

II区

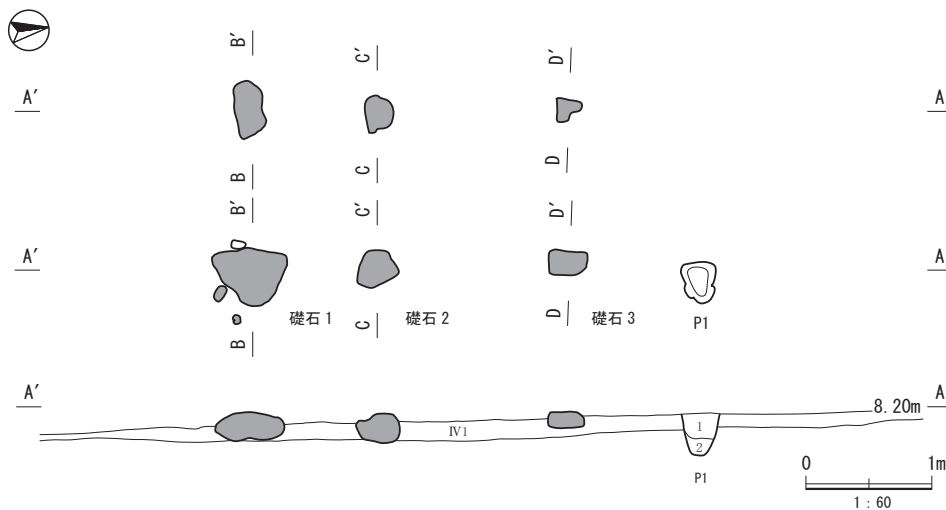
第1号江戸二面礎石列（1E2SR）

遺構 II区5B区に位置し、江戸一面で確認したが江戸二面の整地土に乗っていたので江戸二面の遺構とした。凝灰岩質泥岩の礎石3個と小穴1個を確認した。礎石は南から60×45cm、厚さ22cm、35×30cm、厚さ20cm、30×15cm、厚さ15cmである。北端は小穴で35×28cm、深さ35cmである。芯々は南から3尺・4尺・3尺である。

遺物 出土していない。



II区第1号江戸二面礎石列完掘状況（北から）



第 120 図 第1号江戸二面礎石列実測図

第1号江戸二面小穴（1 E2KA）

遺構 II区4B区に位置し、径54×48cm、深さ42cmである。

遺物 出土していない。

第2号江戸二面小穴（2 E2KA）

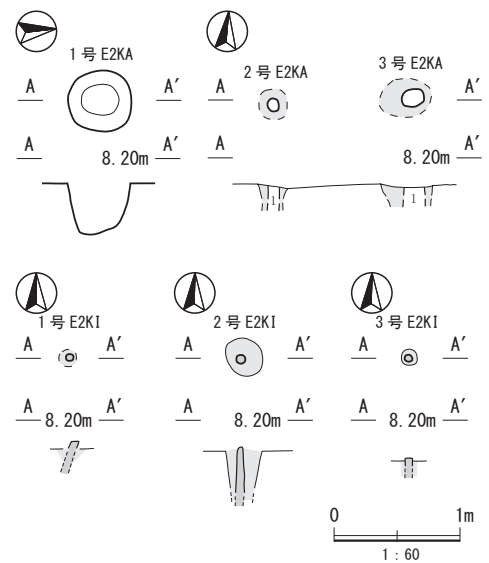
遺構 II区5A区に位置する。径10×8cmで深さ2cmで小穴としたが、打込み杭で周囲がグライ化したものである。

遺物 出土していない。

第3号江戸二面小穴（3 E2KA）

遺構 II区5A区に位置する。径18×14cmで深さ15cmで小穴としたが、打込み杭で周囲がグライ化したものである。

遺物 出土していない。



第121図 第1～3号江戸二面小穴および第1～3号江戸二面杭実測図

第1号江戸二面杭（1 E2KI）

遺構 II区5B区に位置する。径5cmの杭を打込んで周囲がグライ化している。

遺物 出土していない。

第2号江戸二面杭（2 E2KI）

遺構 II区5Bに位置する。径8cmの杭を打込んで周囲がグライ化している。

遺物 出土していない。

第3号江戸二面杭（3 E2KI）

遺構 II区5B区に位置する。径5cmの杭を打込んで周囲がグライ化している。

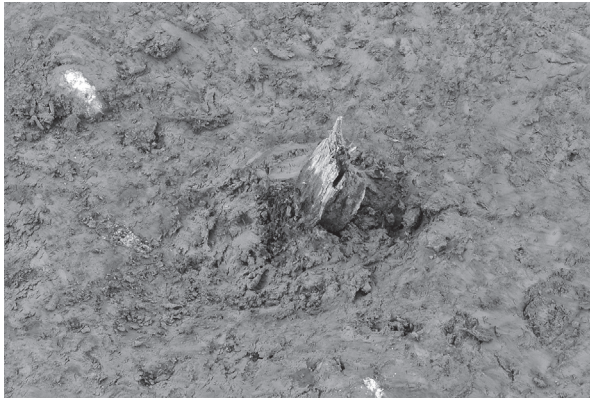
遺物 出土していない。



II区第1号江戸二面小穴完掘状況（東から）



II区第3号江戸二面小穴完掘状況（南から）



Ⅱ区第1号江戸二面杭確認状況（南から）



Ⅱ区第2号江戸二面杭完掘状況（南から）

Ⅲ区

第1号江戸二面柱列（1 E2HR）

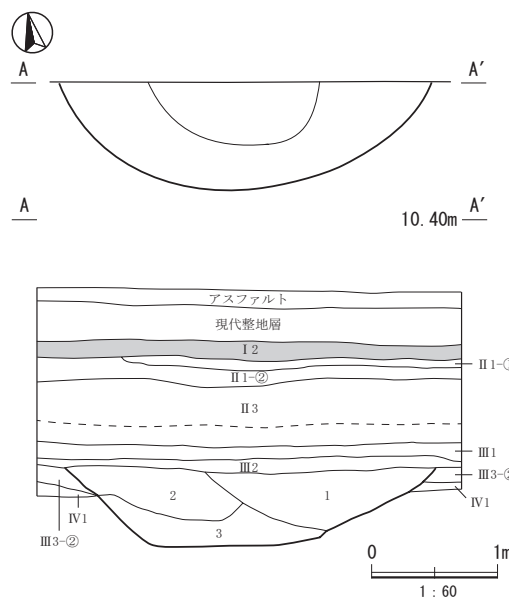
遺構 Ⅲ区5・6D区に位置する南北の柱列である。P1は35×35cmで深さ15cm，P2は24×20cmで深さ40cm，P3は40×35cmで深さ15cm，P4は32×30cmで深さ35cmである。芯々は北から8尺・13尺・6尺と一様でない。遺物 出土していない。



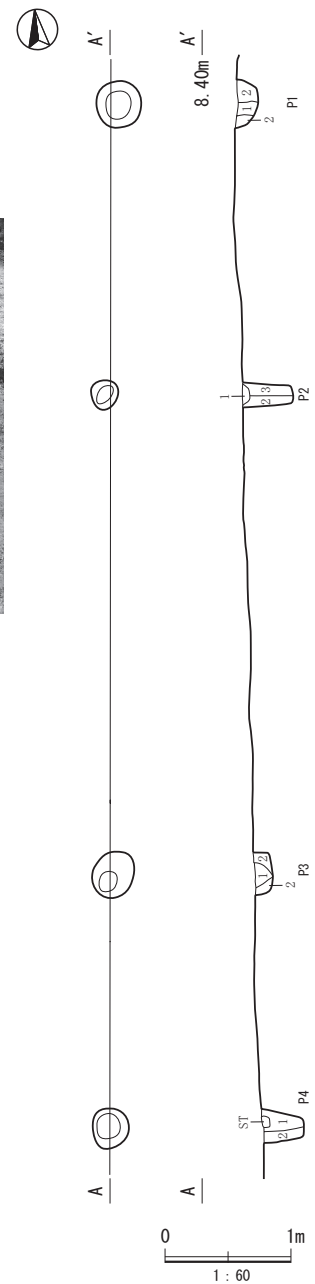
Ⅲ区第1号江戸二面柱列完掘状況（北から）

第1号江戸二面土坑（1 E2D）

遺構 Ⅲ区4D区に位置し，北側は調査区外にある。東西2.95m以上，南北0.9m以上で深さ60cmである。調査ではⅢ層下部からⅣ層に掘り込まれているが造成に伴う所業と考えられる。遺物 出土していない。



第123図 第1号江戸二面土坑実測図

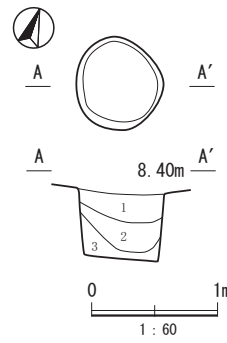


第122図 第1号江戸二面柱列実測図

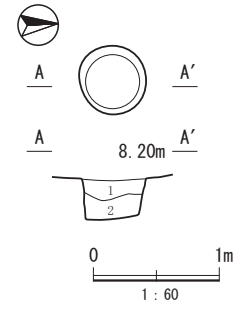
第2号江戸二面土坑（2E2D）

遺構 Ⅲ区4D・E区に位置し、径75×70cmで深さ55cmである。造成に伴う所業と考えられる。

遺物 出土していない。



第124図 第2号江戸二面土坑実測図



第125図 第3号江戸二面土坑実測図

第3号江戸二面土坑（3E2D）

遺構 Ⅲ区4D区に位置し、径53cm、深さ33cmである。造成に伴う所業と考えられる。

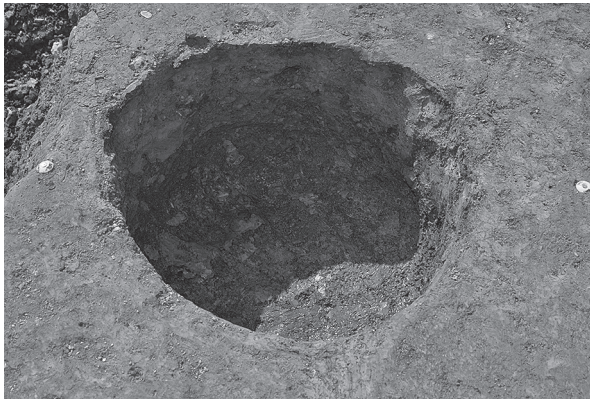
遺物 出土していない。



Ⅲ区第1号江戸二面土坑完掘状況（南から）



Ⅲ区第2号江戸二面土坑完掘状況（南から）



Ⅲ区第3号江戸二面土坑完掘状況（東から）



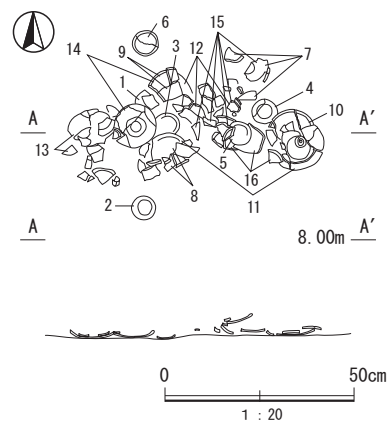
Ⅳ区第1号江戸二面カワラケ集積遺構遺物出土状況（南から）

Ⅳ区

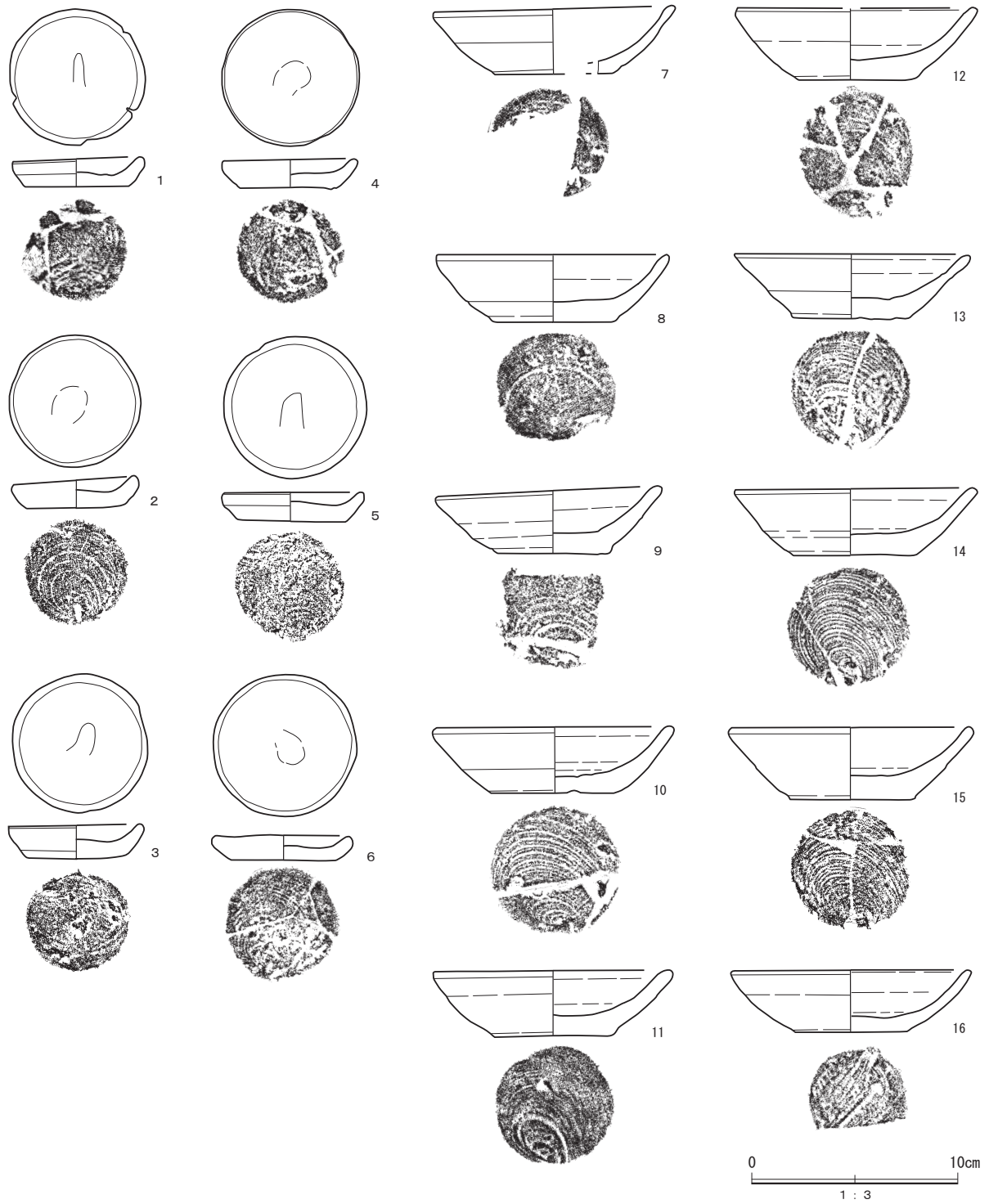
第1号江戸二面カワラケ集積（1E2KS）

遺構 Ⅳ区5C区に位置し、掘り込みはなく江戸二面の造成土の直上にカワラケが廃棄されていた。造成に伴う所業と考えられる。

遺物 土師質のカワラケ52点・1,655gが出土した。接合したカワラケもあるが16点を図化した。1～6は6.0～6.6cmの皿形で、7～16は10.7～11.6cmの坏形である。



第126図 第1号江戸二面カワラケ集積遺構実測図



第 127 図 第 1 号江戸二面カワラケ集積遺構出土遺物実測図



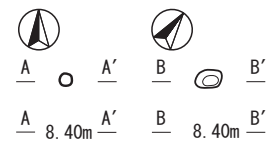
IV区第1号江戸二面カワラケ集積遺構出土遺物 (1)

IV区第1号江戸二面カワラケ集積遺構出土遺物 (2)

第1号江戸二面小穴 (1 E2KA)

遺構 IV区5C区に位置し、小穴としたが、径20cmで打込み杭であろう。

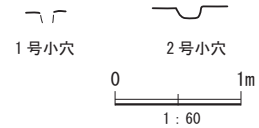
遺物 出土していない。



第2号江戸二面小穴 (2 E2KA)

遺構 IV区5C区に位置し、小穴としたが、23×14cmで深さ10cmで打込む杭であろう。

遺物 出土していない。



第128図 第1・2号江戸二面小穴実測図

第1号江戸二面木杭 (1 E2KI)

遺構 IV区5C区に位置し、径8cmの打込み杭である。

遺物 出土していない。

第2号江戸二面木杭 (2 E2KI)

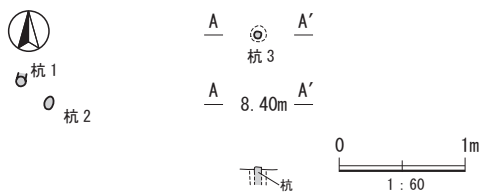
遺構 IV区5C区に位置し、径10cmの打込み杭である。

遺物 出土していない。

第3号江戸二面木杭 (3 E2KI)

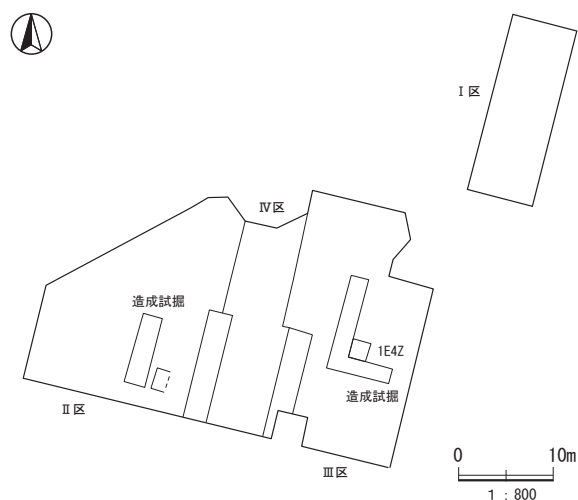
遺構 IV区5C区に位置し、径5cmの打込み杭である。

遺物 出土していない。



第130図 第1～3号江戸二面杭実測図

第6節 水戸城造成に関わる遺構と遺物



Ⅲ区江戸四面拡張区全景（南西から）

第130図 江戸造成面全体図

江戸造成遺構

Ⅱ区（江戸二面～五面）

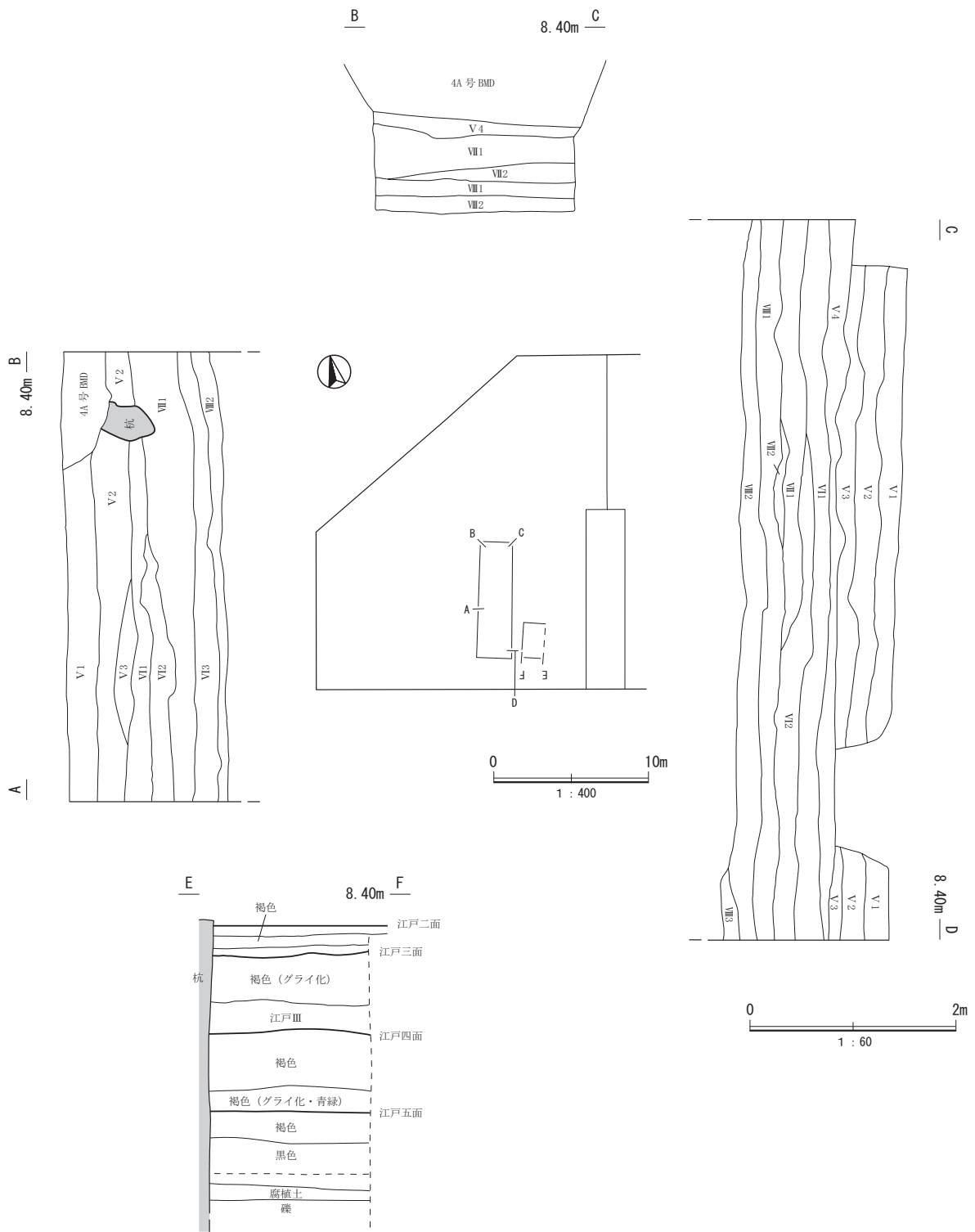
Ⅱ区4・5B区に設定した。水戸城築城に関わる盛土造成を確認するため試掘坑を設定した。江戸二面（V層）までは遺構の確認を行ったが、明確な遺構は認められなかった。小穴や杭は造成に関わる所業と考えられる。確認した江戸二面から五面の盛土は基本的には黒色土に多量の粗朶や植物の小枝を主体に敷き詰め、その上に軟質ロームや硬質ロームを転圧し硬く仕上げている、この工程が1工程で江戸三面（VI層）、江戸四面（VII層）、江戸五面（VIII層）まで確認した。E-Fの土層は第1号近代礎石建物の松杭の打込みと長さを確認するために重機で掘削した略図である。江戸一面から3.6m以上に達し、自然の砂利層を確認した。この面から江戸の造成が行われたと考えられる。



Ⅱ区江戸造成遺構東壁土層（南西から）



Ⅲ区江戸造成遺構藁殻遺構遺物出土状況（西から）



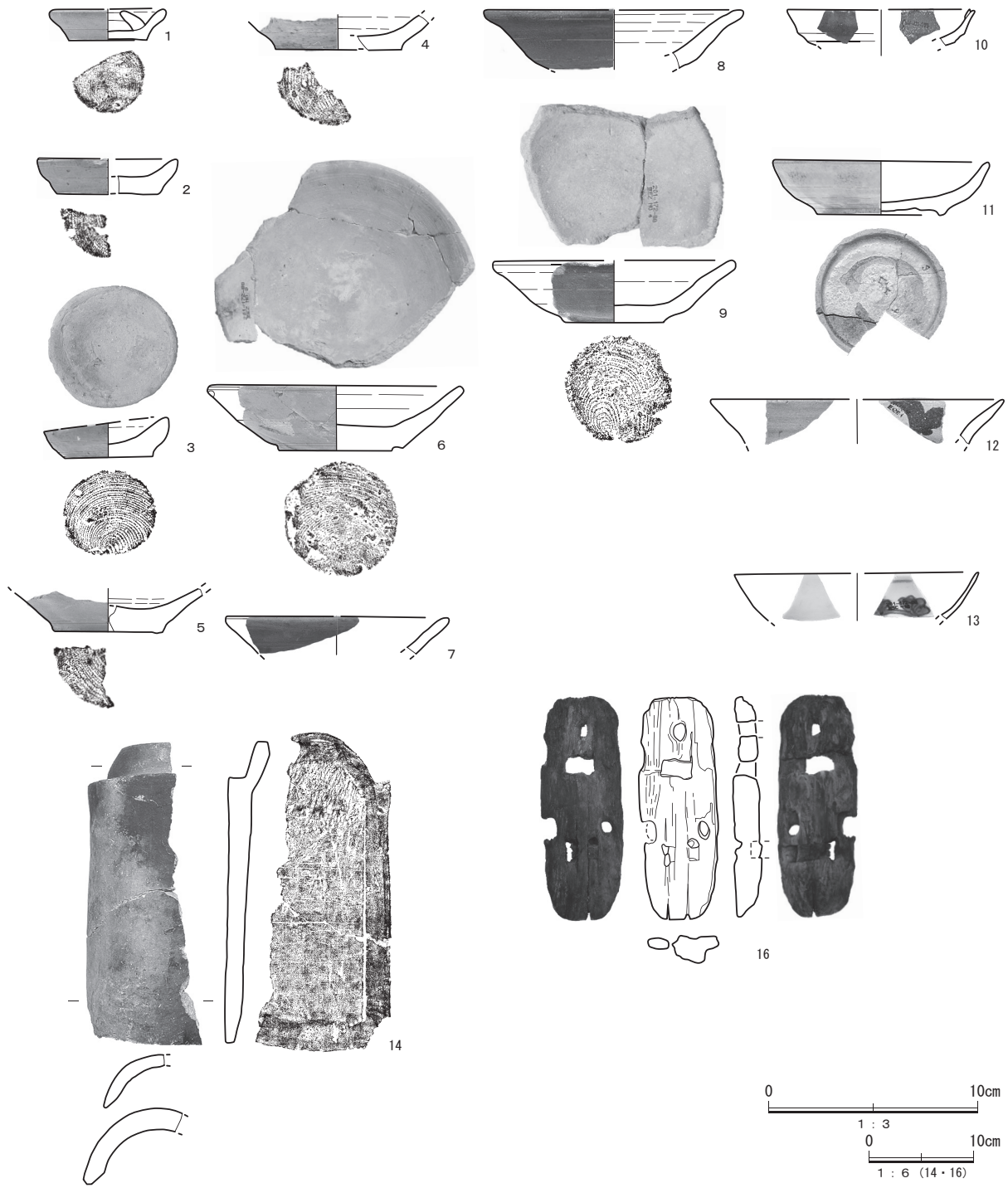
江戸造成面略図

第 131 図 II 区江戸造成遺構土層図

江戸造成遺構

III 区

III 区 4・5 D・E 区に江戸造成確認試掘坑を設定した。



第 133 図 江戸造成遺構出土遺物実測図

第 1 号江戸四面葉殻遺構（1 E4SG）

遺構 松の小枝を付けたまま縦に杭状に設置している。造成段階の所業と考えられる。土砂の流出を防ぐためか工程上の目印の可能性もある。西壁の A - B の土層にも杭の痕跡が見られる。

遺物 出土していない。

第1号江戸四面葦遺構・粗朶遺構（1E4Z）

遺構 Ⅲ区5D・E区に位置し，1E4SGを確認したため2.0mの範囲をⅥ層（江戸七面）で面的に調査した。Ⅵ2層からは小枝が集中して出土した。Ⅵ3層上面からは木片や土師質土器，瓦質土器，陶器などが出土した。下層のⅦ3①層上面は流路状に水が流れた痕跡が確認された。江戸七面（Ⅵ層）から江戸八面（Ⅶ層）への造成工程が確認された。

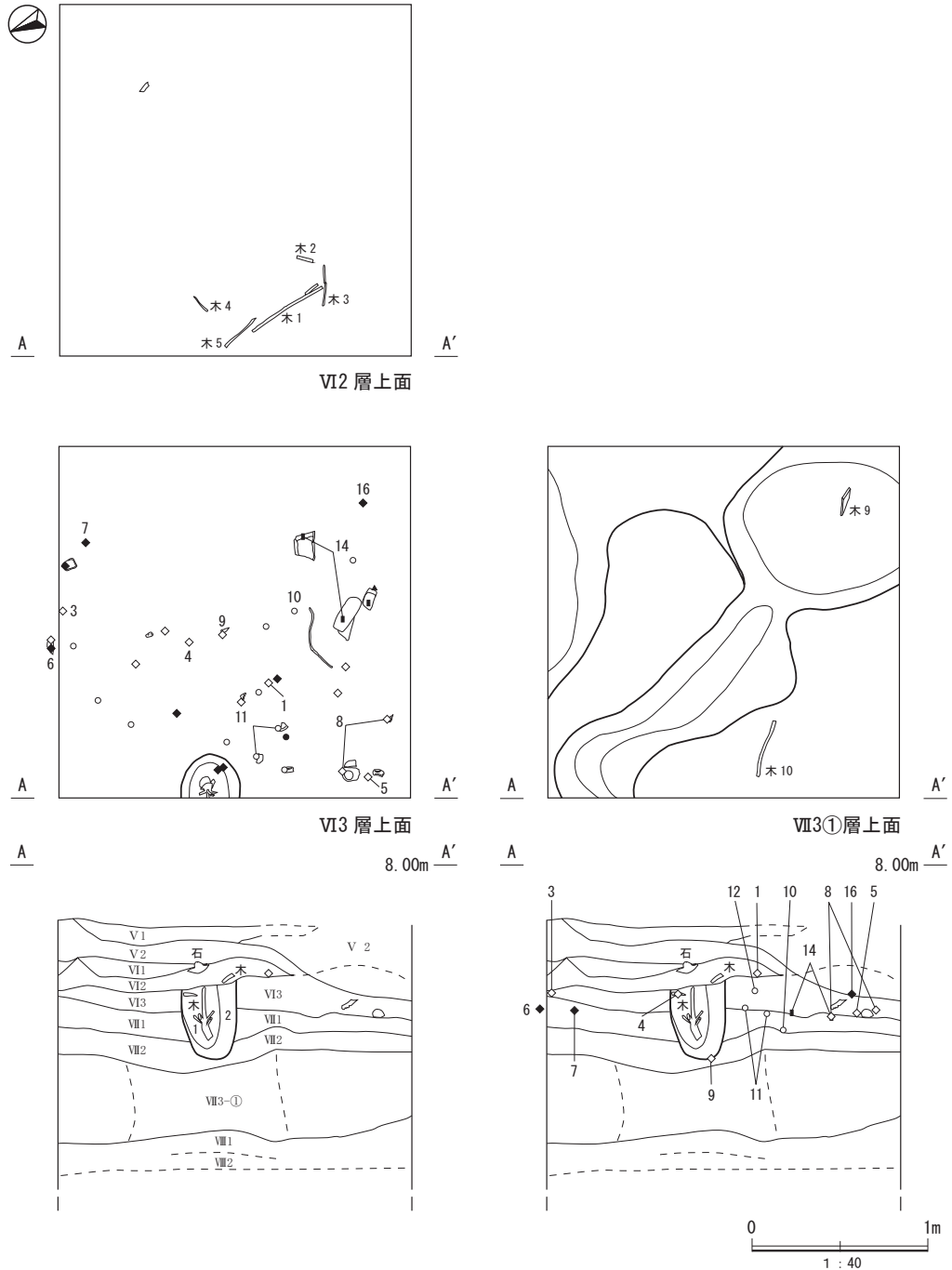
遺物 土師質土器 15点・187g，瓦質土器 8点・289g，陶器の瀬戸 2点・89g，美濃 3点・78g，信楽

2点・66g，唐津 1点 7g，景德鎮 1点 3g，瓦 2点・530g，種木製品 14点・263g，金銅製品 2点・6gが

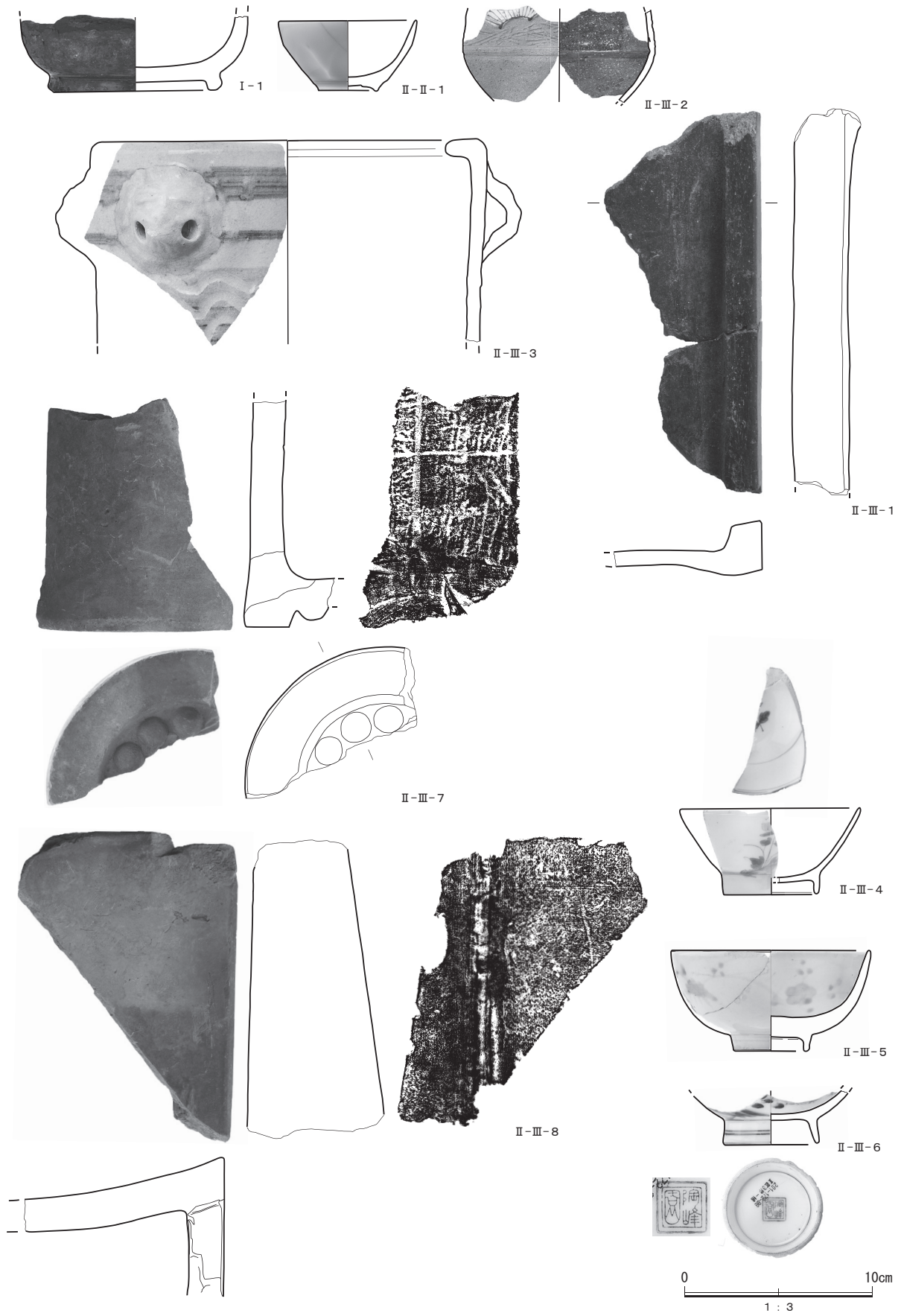
出土した。その内 16点を図化した。1～6は土師質のカワラケ，7～9は瓦質のカワラケ，10～12は陶器，

10は美濃鉄釉襷皿，11は瀬戸丸皿，12は唐津の鉄絵皿，13は磁器は景德鎮の染付皿である。

14は瓦，15は桃の種（分析），16は下駄である。



第134図 第1号江戸四面葦遺構・粗朶遺構実測図



第 135 図 遺構外出土遺物実測図 (1)

第7節 遺構外出土遺物

I区 1は漆器碗である。

II区II層 1は磁器で瀬戸の青磁釉の小杯である。

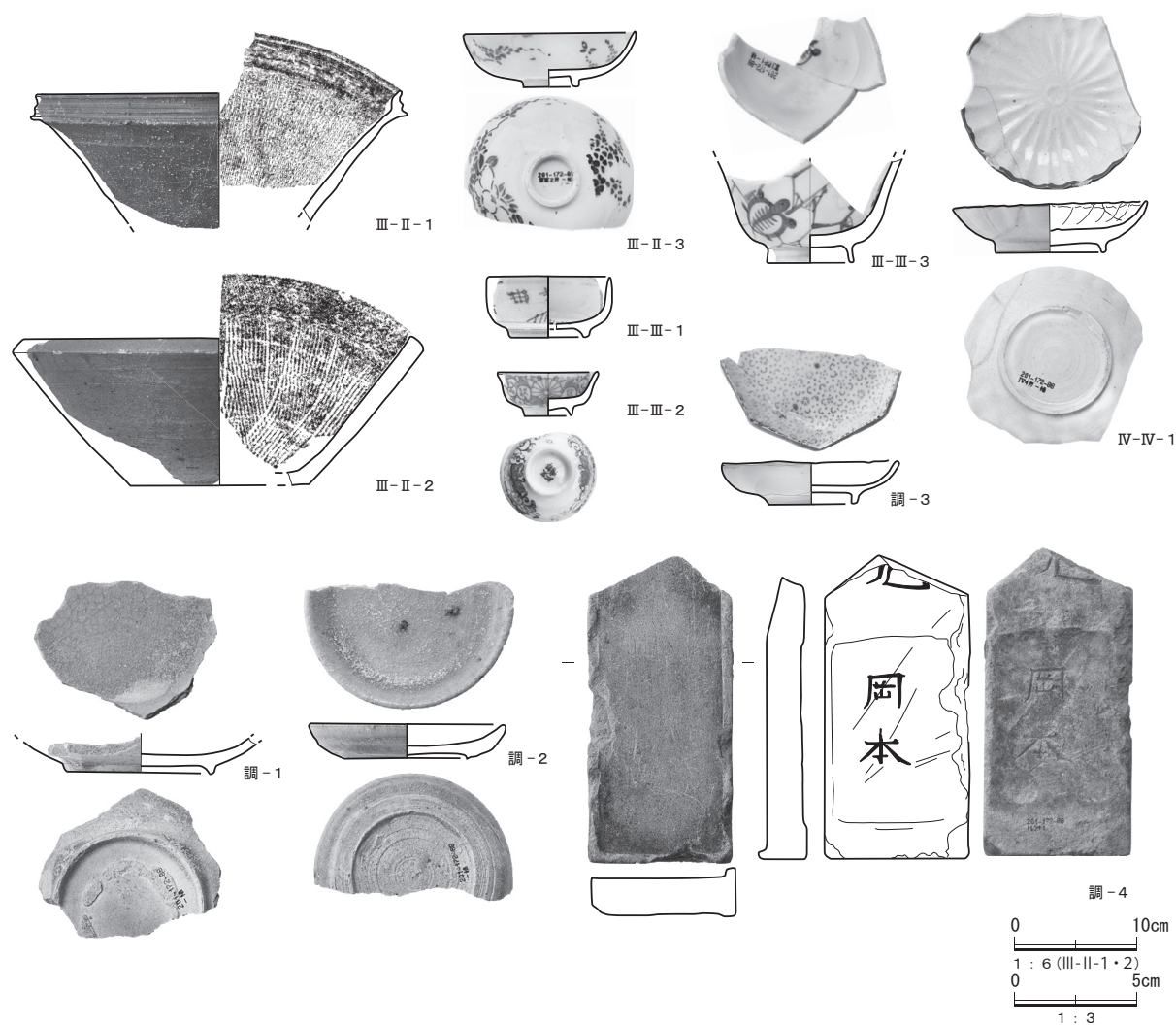
II区III層 1は瓦質土器で角火鉢である。2は万古焼風の陶器で鉢としたが小砂焼の急須の可能性もある。3は陶器で獣面把手付の火鉢である。4～6は磁器で肥前の広東碗, 7は梅文の染付丸碗で町田焼の可能性ある。6は美濃焼の墨絵碗で高台裏にゴム印で「陶峰園」とある。7は軒丸瓦で珠文が廻る。8は右袖瓦である。

III区II層 1・2は陶器の摺鉢である。3は磁器で肥前の紅猪口である。

III区III層 1～3は磁器で1・2は紅猪口, 3は染付丸碗である。

IV区IV層 1は紅皿である。

調査区 1・2は瀬戸の大窯期の灰釉小皿, 3は磁器で肥前の型紙摺絵の八角小皿である。4は石製硯で裏面に刻印で「岡本」とある。「水府家御屋敷割図」の大町に「朝比奈酒店」に隣接し「岡本友之助」とある。



第136図 遺構外出土遺物実測図(2)

第5章 総括

第1節 出土遺物の様相

1 土器・陶磁器類の年代と生産地の変遷

出土陶磁器類の様相から遺構の性格を確認するため、概ね凡その年代を与えた。第138～141図は出土した土師質土器・瓦質土器と陶器の生産地、磁器の生産地別に配列したものである。

1～26は土師質土器のかわらけである。1～4は江戸四面の造成中から出土したもので、6cm前後の小形のものと12cm前後の大形のものがある。小形のものは外反するものと口縁を摘み上げるものがある。大形のものは底部が突出し外反する。内底面に指ナデが見られるものが多い。5～11は江戸二面上に一括廃棄されていた資料である。6cm前後の小形のものと12cm前後の大形のものがある。小形のものは浅い皿形、大形のものは厚い底部で突出しのものから丸底になり、11のように底部・体部が薄くなる。12～16は各遺構から出土したもので胎土も砂質で薄く焼きが良い。5cm前後の12と7cm前後の13は皿形、14は直線的に開き、15は内湾気味、16は内湾する。17～26は第7A号廃棄土坑から一括出土した。胎土は精良で焼きも良いが作りが良くない。5cm前後の小形のものと7cm前後の大形のものがある。内底外周が窪み中央が凸になるもの（7・8・19～21）と中央が窪み非常に薄くなるもの（22～26）がある。

27～42は瓦質土器で28～30はかわらけである。27は瓦質としたが焼成により変色している可能性もある。底部が突出し7のかわらけに近い。28は小形の皿形で灯明皿である。29は薄手で外傾する。30は皿形で内底は平らである。16世紀後半から17世紀前半への経緯は容認出来るが、18世紀後半の資料を18世紀前半には分離できないように思う。19世紀前半のかわらけにも連続性がない。大きく3時期のかわらけは胎土・形態・焼成に大きく隔たりがあり、今回の資料では編年観は組めない。これが実態だとすれば生産形態や工人の強制的な移動と管理者の強制的な関与を考えなければならない。31は乗燭、32は香炉である。33・34は土鍋で口縁と耳の形態が相違する。35・36は皿、37は竈、38は丸型焜炉、39は角焜炉、40は手あぶりである。41・42は蓋付の壺で埋納されていた。

43～53は瀬戸焼で、43～45は大窯3～5期の灰釉丸碗である。46は鉄釉天目茶碗、47は鉄釉灯明上皿、48は丸皿であるが黄瀬戸風、49は鉄釉せんじ碗で黄瀬戸風、50は復興志野焼で志野釉に鉄釉を口辺に浸し掛している。51は灰釉餌猪口、52は鉄釉播鉢、53は黄釉の便器である。

54～63は美濃焼で54は大窯3期の鉄釉襷皿、55は大窯5期の灰釉丸皿、56は登窯I期の灰釉端反皿、57は鉄釉灰釉流丸碗、58は鉄釉灰釉流香炉でいわゆる尾呂茶碗・香炉である。59は鉄釉灯明上皿、60は灰釉端禿皿、61は灰釉の水滴、62は灰釉丸碗小杯、63は鉄釉播鉢である。

64～66は唐津焼で64は灰釉鉄絵皿、65は灰釉丸碗、66は化粧土の刷毛目大皿である。67は薩摩焼の鉄釉耳付壺である。

68は丹波焼の播鉢である。

69～71は信楽焼で69は京焼系と言われる灰釉色絵丸碗，70は灰釉小杯である。71は山水土瓶で明治時代である。

72～110は肥前系の磁器で72・73は染付丸碗，74は染付端反碗，75は染付腰張碗，76は透明釉の小杯で見込に染付鯛釣絵が描かれている。77は染付丸碗で二重網目文が描かれているが呉須が薄い。78は染付雨垂文丸碗，79は青磁釉腰張碗で見込に楼閣山水文が描かれている。80～82は染付丸碗，83は染付端反碗，84～86は腰張碗である。81はペン描き，83・84は格子文で83の格子の中には紅葉が描かれている。87は広東碗である。88は染付丸碗で高台幅が広い。89・90は型紙挿絵碗で飯茶碗である。91～94は染付丸碗湯呑茶碗で92～94は碁笥底である。95は染付端反碗である。96は型紙挿絵の猪口である。97は合子の身部である。98～105は紅猪口で98・100～104は皿型，99・105は小杯型である。100は型作り，105は銅版挿絵で菊花唐草が刷られている。内底面に「京都紅清」の商標がある。106～108は皿で106は灰釉折縁皿，107は染付大皿，108は染付小皿，109は輪花染付深皿である。110は青磁染付植木鉢である。

111～132は瀬戸焼の磁器で，111～113は染付端反碗で111は大碗である。114は染付筒丸碗で「福寿」の文字がある。115は薄手酒杯で内面に島田娘が描かれている。116は小杯で内面に草文が描かれている。117～120は染付端反碗で117は大碗である。121・122は薄手酒杯で121には魚屋本店の商標，122にはゴム印で「水戸停車□」とあり明治29年の土浦—田端間が開通した以降と考えられる。123は染付端反小杯，124は蕎麦猪口で松葉文，125～127は染付端反小杯，128は体部下端が厚く器高が低い。129は銅版転写の端反小杯である。130～132は青磁釉小杯で130・131は飛匏，132は面取りしている。

133～143は美濃焼の磁器で133は薄手酒杯で「磯浜 味噌」とある。134・135は染付端反小杯，136～139は飯碗で136・137はゴム印により136は親子獅子文，137は遊興文を押印している。138・139は型紙挿絵である。136・137は子供用，138・139は大人用の飯碗であろう。140～143はプリントにより装飾している。143は自転車店がお客に配布した湯呑茶碗であろう。

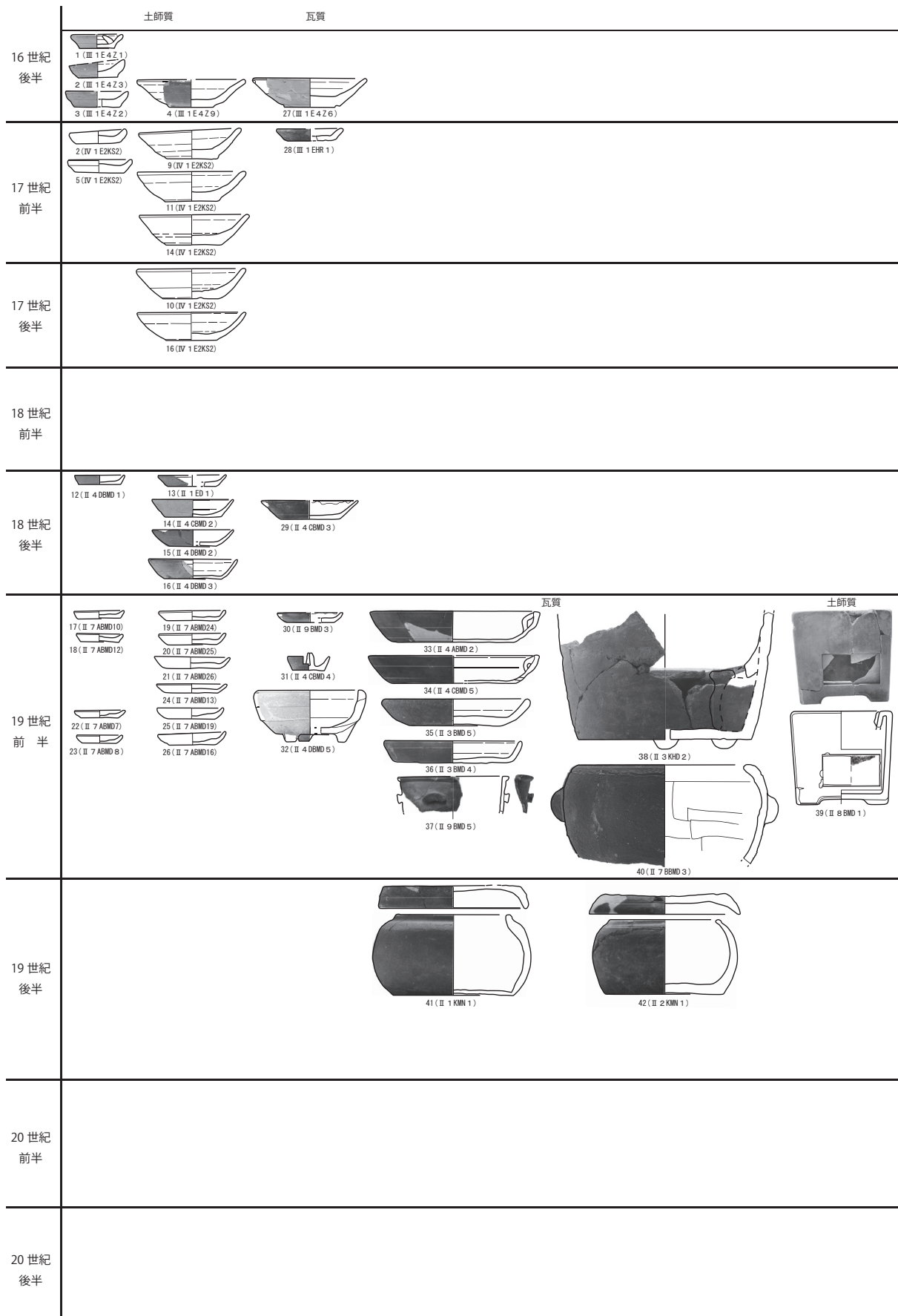
144～161は七面焼である。七面焼には陶器（粗製）と半磁器質（精製）ものがある。144～147は灯明具で144が上皿，145・146が下皿，147は高灯である。148は半磁器質（精製品）の急須の蓋である。

149～154は土瓶蓋と糸目土瓶で149は鉄釉蓋，150は土灰釉蓋，151は青土瓶蓋，152～154は糸目土瓶，155は行平蓋，156は行平，157～159は土鍋，160は半磁器質（精製）の菓子鉢，161は捏鉢である。

162・163は町田焼と推定されるものである。162は鉄釉鉢で，高台外面が有段になり鉄釉が均一でなく斑に成っている。胎土は砂質で長石粒と黒色砂粒微量を多量に含む。163は底部が厚い端反碗で底部が低く「ハ」の字に開く，胎土は長石単味で石質が明瞭で黒色砂粒微量を多量に含む。呉須釉の梅文が高温により釉垂れしている。

164～168は松岡焼で164・165は鶉の糞釉土瓶，166・167は鮫肌化粧土掛土瓶，168は黒釉土瓶である。胴部は165・167は銅張形，168は「コ」の字形である。

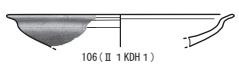

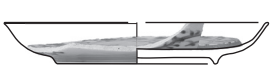



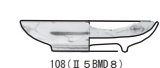



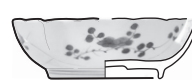








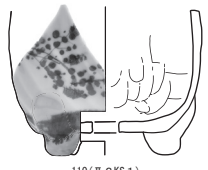



























169～176は小砂焼で169・170は型作りの万古焼でエビスウチ窯の製品である。171



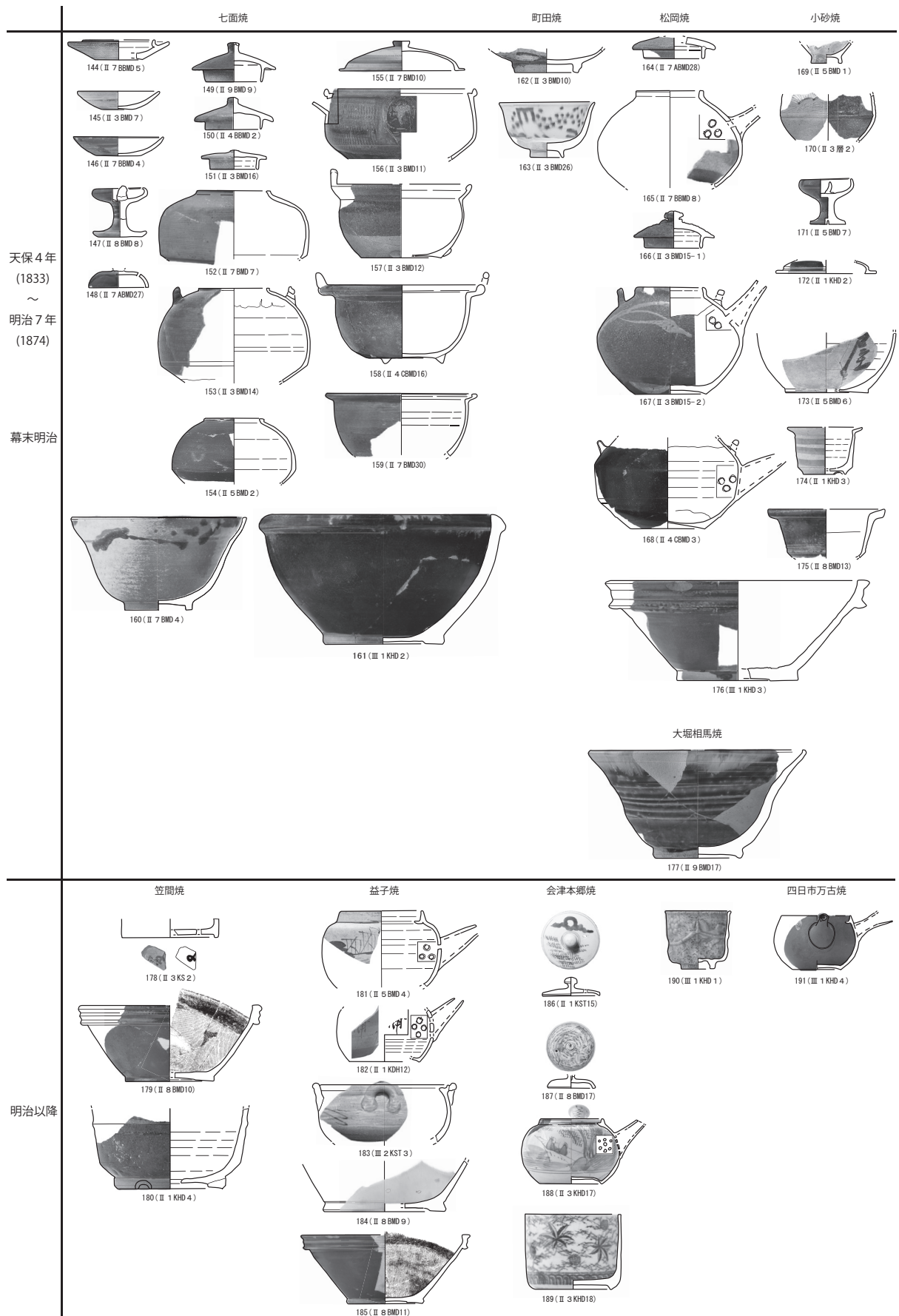
第 137 図 土器・陶磁器類変遷図 (1)

	瀬戸	美濃							
16世紀後半	43(調査区一括2) 44(Ⅲ1E4Z11) 45(Ⅳ1E1D1)	54(Ⅲ1E4Z10) 55(Ⅱ1ABMD1)							
17世紀前半		56(4ABMD3)	唐津	64(Ⅲ1E4Z12) 65(Ⅱ2BMD2)					
17世紀後半	46(Ⅱ3EHR1)			66(4ABMD4)					
18世紀前半	47(Ⅱ4CBMD8)	57(Ⅱ4CBMD11) 58(Ⅱ4CBMD15)			丸碗	端反碗	腰張碗		
18世紀後半	48(Ⅱ1KST5) 49(Ⅱ4CBMD12)	59(Ⅲ2KST2) 60(Ⅱ3BMD9) 61(Ⅱ9BMD56)	陸奥	67(Ⅱ4DBMD9)	72(Ⅱ1ED2) 73(Ⅱ1KST14)	76(Ⅱ1KST9) 74(Ⅱ3BMD27)	75(Ⅱ3BMD28)	77(Ⅱ4CBMD19) 78(Ⅱ4DBMD12)	79(Ⅱ4CBMD23)
19世紀前半	50(Ⅱ4DBMD8) 51(Ⅱ3BMD17) 52(Ⅱ4CBMD18)	62(Ⅱ4CBMD10) 63(Ⅱ4CBMD17)	丹波	68(Ⅲ2層1)	信楽	丸碗	端反碗	腰張碗	広束
19世紀後半	53(Ⅱ8BMD14)			71(Ⅱ1KST7)	69(Ⅱ4CBMD13) 70(Ⅱ4CBMD9)	80(Ⅱ4ABMD7) 81(Ⅱ7ABMD34) 82(Ⅱ4ABMD6)	83(Ⅱ9BMD15)	84(Ⅱ9BMD14) 85(Ⅱ7ABMD32) 86(Ⅱ2KHD2)	87(Ⅱ3層4)
20世紀前半					88(Ⅱ3BMD22) 89(Ⅲ1KKA2) 90(Ⅲ1KHD9)	91(Ⅱ1KST12) 92(Ⅱ3KHD8) 93(Ⅱ3KHD9) 94(Ⅲ1KHD8)	95(Ⅱ1KST13)	96(Ⅱ2KHD3)	
20世紀後半									

第138図 土器・陶磁器類変遷図(2)

16世紀後半	
17世紀前半	肥前系
17世紀後半	 <p>106 (II 1 KDH 1)</p>
18世紀前半	
18世紀後半	瀬戸
19世紀前半	<p>合子</p>  <p>97 (II 3 BMD19)</p>  <p>107 (II 4 DBMD12)</p>  <p>111 (II 9 BMD 6)</p>  <p>114 (II 7 ABMD31)</p> <p>紅猪口</p>  <p>98 (IV 4 層 1)</p>  <p>108 (II 5 BMD 8)</p>  <p>112 (II 2 BMD 3)</p>  <p>115 (II 3 BMD20)</p>  <p>99 (III 3 層 1)</p>  <p>109 (II 3 BMD29)</p>  <p>113 (II 7 ABMD33)</p>  <p>116 (II 9 BMD12)</p> <p>美濃</p>
19世紀後半	 <p>100 (III 1 KHD 5)</p>  <p>101 (II 1 KST10)</p>  <p>102 (II 1 KRM 1)</p>  <p>103 (II 1 KST11)</p>  <p>104 (III 2 層 3)</p>  <p>105 (III 3 層 2)</p>  <p>110 (II 2 KS 1)</p>  <p>117 (II 7 ABMD35)</p>  <p>118 (II 3 KST 4)</p>  <p>119 (II 9 BMD13)</p>  <p>120 (III 1 BMD 2)</p>  <p>121 (II 3 KHD 9)</p>  <p>122 (II 1 KST 8)</p>  <p>123 (II 3 KHD 5)</p>  <p>124 (IV 1 KID 1)</p>  <p>133 (II 3 KHD 4)</p>  <p>134 (II 3 BMD24)</p>  <p>135 (II 3 BMD23)</p>  <p>136 (II 3 KHD12)</p>  <p>137 (II 3 KHD13)</p>  <p>138 (II 3 KHD15)</p>  <p>139 (II 3 KHD14)</p>
20世紀前半	 <p>125 (II 3 KHD 6)</p>  <p>126 (II 3 KHD 7)</p>  <p>127 (III 1 KHD 7)</p>  <p>128 (II 3 KHD10)</p>  <p>129 (II 8 BMD15)</p>  <p>130 (II 3 KHD11)</p>  <p>131 (II 8 BMD16)</p>  <p>132 (II 2 層 1)</p>
20世紀後半	 <p>140 (IV 1 KID 3)</p>  <p>141 (II 1 KST18)</p>  <p>142 (II 1 KST17)</p>  <p>143 (IV 1 KID 2)</p>

第 139 図 土器・陶磁器類変遷図 (3)



第 140 図 土器・陶磁器類変遷図 (4)

は鉄釉高灯，172 は行平の蓋，173 は屋号入り鉄釉徳利，174 は鉄釉横線入り・175 は外面鉄釉施釉の植木鉢である。176 は鉄釉搦鉢である。

177 は大堀相馬焼の菓子鉢である。江戸時代後期の相馬焼で190の大堀相馬焼は明治時代である。

178～180 は笠間焼で178 は火入れ，179 は搦鉢，180 は植木鉢である。

181～185 は益子焼で181 は呉須山水土瓶明治20年代以前，182 は汽車土瓶で「□浦」と記名があり土浦である。常磐線が土浦から田端間が開通した明治29年以降であるが，形態からは大正時代であろう。183 は鉄釉に白刷毛塗の土鍋で明治時代後半から大正時代であろう。184 は内面に亀が描かれた水鉢で大正時代であろう。185 は鉄釉搦鉢である。

186～189 は会津本郷焼で186・187 は急須の蓋，188 は急須，188 は火入れである。

190 は相馬焼の湯飲茶椀で相馬藩の九葉文と馬文が貼付してある。

191 は四日市万古焼の急須である。

以上出土遺物の様相を確認したが，遺構の実態と合致するのは土師質土器のカワラケである。カワラケは16世紀後半から17世紀前半の資料と18世紀後半から19世紀前半の資料を確認し，17世紀後半から18世紀前半までの資料は皆無である。瀬戸・美濃の陶器，肥前磁器，瀬戸・美濃の磁器は伝世し廃棄されたものである。瀬戸・美濃の陶器は一定量出土した。磁器の生産形態から当然であるが，磁器は肥前系から19世紀後半から瀬戸の磁器が19世紀後半の明治期に入ると美濃の磁器が多くなる。また，19世紀前半から19世紀後半にかけて紅猪口が継続して確認される。朝比奈邸の奥向きの状況が反映されているのであろう。幕末明治に至り水戸藩の藩窯である七面焼を主体に松岡焼，小砂焼，確定は出来ないが町田焼が流通した実態が確認された。近代は川崎倉庫が創業され陶磁器量が減少する。また，水戸線や常磐線が開通し水戸駅が営業すると汽車土瓶や汽車土瓶用と推定される猪口が出土する。少量ながら明治から大正の益子焼，笠間焼，会津本郷焼等が出土することから，調査区の一部には生活が営まれて居たのであろう。現代に至り川崎倉庫の大形井戸の廃棄や廃棄土坑に伴い戦後の遺物が出土した。

2 水戸藩の焼物と藩窯

七面焼・町田焼・松岡焼・小砂焼は徳川齊昭（烈公）の藩政改革の1つとしての産業振興の一環で，陶器製造を目指し陶土の発見を検査し町田（常陸太田市）と小砂（栃木県那珂川町）で原料を発見し，藩営製陶所（瓦屋・神崎）を設置したことに始まった。天保元（1830）年に町田と小砂で陶土が発見され，天保4（1833）年瓦屋に陶器窯を築いた。天保5（1834）年には陶器を天保6（1835）年には磁器焼成を開始したとある。

松岡焼は享保3（1803）年頃棚倉藩の影響を受けて芳賀吉兵衛によって日棚窯が開窯された。文化元（1804）年水戸藩御国産取立掛の水戸上町泉町大黒屋治右衛門によって大塚窯が開窯，文化10（1813）年頃松川伝蔵・職人彦三郎が木皿窯開窯，文化13（1816）年以降大塚窯は水戸藩の表方御国産御手土産となった。松岡焼は七面焼・町田焼・小砂焼開窯以前に藩窯として位置が確立されていた。

天保12（1829）年に徳川齊昭が9代藩主になり七面焼・町田焼・小砂焼が先の殖産興業として藩財政立直しに組込まれ，天保5（1835）年には小砂の陶土を水戸城瓦屋に搬

出し、天保9（1838）年には七面製陶所を新設し陶器製造を開始した。嘉永4（1851）年の好文亭四季模様之図（大洗町幕末と明治の博物館蔵）には左から「びいどろさいく御家」「白やきせ戸や」「御役人」「諸事御せ戸やき場」とあり、この時期までには白焼瀬戸（半磁器）の製陶が行われていた。窯は右側が大きく本焼きの窯、左の窯は3袋の窯で絵付用の窯と思われる。「御役人」を間に瀬戸焼場が2窯が併用しているものと思われる。また、現在、茨城県歴史館に寄託されている「偕楽園」の押印がある焼締陶器花生には七面製陶所の風景が描かれており磁器窯はなく、陶器窯2窯が描かれている。白焼瀬戸の開窯に当

第3表 水戸藩関係窯業史年表

西暦	和暦	歴史事象	松岡焼	水戸城瓦屋	七面製陶所	小砂焼	町田焼
1727	享保12年頃	大友氏棚倉藩榎木内窯・福田窯・背踏窯開窯					
1803	享和3年頃		芳賀吉兵衛日棚窯開窯				
1804	文化3年	水戸藩御国産取立掛の水戸上町泉町大黒屋治衛門が創業	大塚窯開窯				
1813	文化10年頃		松川伝蔵・職人彦三郎木皿窯開窯				
1816	文化13年以降	水戸藩の表方御国産方御手土産となる	大塚窯				
1829	文政12年	斉昭9代藩主となる					
1830	天保元(12/10)					陶土の発見	陶土の発見
1831	天保2年	伊藤友寿陶業研究のため京都へ派遣「資説」					
1833	天保4年	公の1回目就藩		陶窯を築く			
1834	天保5年			陶器焼成開始		(陶土瓦屋に搬出)	
1835	天保6年			磁器焼成開始			
1836	天保7年4/4	公製陶所を土土産出地設ける					
1838	天保9年			陶窯を廃す	陶窯を新設(瓦屋合併)		
1840	天保11年7月	公の2回目就藩・瓦屋製陶所に赴く					(秋に瀬戸系窯で築窯)
1841	天保12年1/18	肥前唐津の陶工傳五郎水戸へ招くが素志に達せず					(梅雨時か秋口に唐津窯に造り替え)
1843	天保14年	公の3回目就藩					
1844	弘化元年(12/2)	公幕府より致仕謹慎慶篤第10代藩主					
1848	嘉永元年						
1849	嘉永2年	公藩政関与復帰					
1850	嘉永3年					彦三郎入ノ内に(えびすうち窯)築窯準備	
1851	嘉永4年				好文亭四季模様之図「白やきせ戸や」「御役人」「諸事御せ戸やき場」	彦三郎御用瀬戸焼立を実施	
1854	安政元年(11/27)	幕府反射炉資金1万両貸与・那珂湊に反射炉起工				佐久間貞助、大島高任ら小砂陶土山検分	
1855	安政2年	反射炉第1基工事完成				那珂湊へ陶土運搬	
1856	安政3年	大島高任反射炉銑鉄溶解成す・初白砲鑄る				半三郎国山開窯	
1859	安政6年					栄三郎松並開窯	
1869	明治2年	昭武公小砂巡覧			諸道具下賜		町田焼廃窯
1874	明治7年				明治7～12年(古写真)		

たつての記念品とも考えられる。

町田窯は天保9（1838）年の秋に瀬戸系窯で築窯し、翌年秋口には唐津窯に改築されたようである。

小砂焼は嘉永4（1851）年斎藤彦三郎によって御用瀬戸焼立てが開始された。

町田焼・小砂焼は天保元（1830）年の陶土の発見から町田は10年間、小砂は21年間に渡って七面製陶所に陶土の搬出を行っていたのであろう。七面焼は町田の磁土と小砂の陶土を混ぜて作陶されたと言われている。

水戸藩の藩窯は、明治2（1869）年の水戸第11代藩主徳川昭武公の巡覧によって近代化の中で明治に至り解体された。七面製陶所は古写真によって明治7～12年頃まで創業したと考えられている。

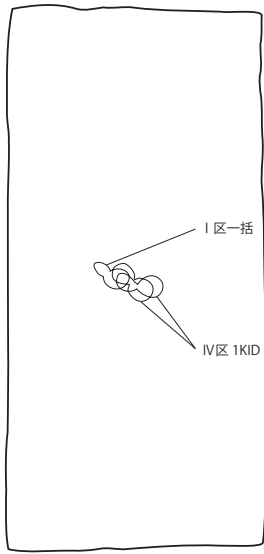
3 煉瓦

煉瓦は明治期の煉瓦と昭和初期の煉瓦が出土した。明治期の建物構造としての煉瓦ではなく廃棄された煉瓦が各遺構から出土した。煉瓦は131点・209,128gが出土した。明治期の煉瓦26点を図化した。Ⅱ区の3KST・1KHD・2KHD, Ⅳ区の6KSTから各1点, Ⅳ区の1KIDから12点, 遺構外等から11点を図化した。

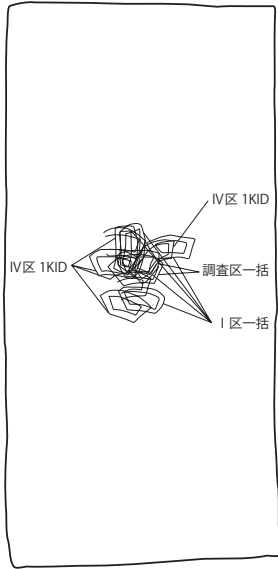
刻印は同文異范を含めて20種確認した。名称は客観的に表現した。「瓢箪」2種, 「扇」「丸」「丸に3珠文」「丸に組紐」「三日月」「果樹園」「灯台」「菱」「四角に斜線」「5望星」「正田」「長方田」「三葉束」「六葉」「井桁」「丸梅」「F3」「KANTO」である。製造所の分かる煉瓦は少なく, 推定であるが10の「菱」が栃木県野木

第4表 煉瓦刻印一覧表

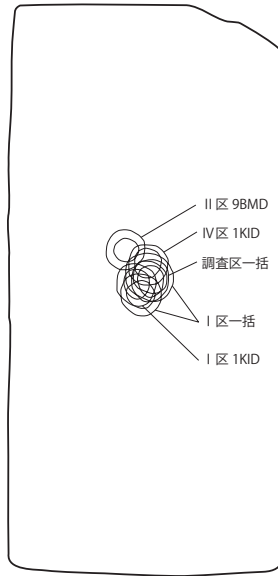
番号	刻印	Ⅰ区		Ⅱ区								Ⅳ区			調査区	備考			
		一括		1KST	3KST	1KHD	2KHD	8BMD	9BMD	一括	1KID	6KST	一括	総数					
		掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載						
1	瓢箪1	1										①	2			4			
2	瓢箪2			②									1		1	3			
3	扇	4										③	8		2	15			
4	丸	④	3						1				1		1	7	明治27年の建物に使用		
5	丸3珠文	⑤														1			
6	丸組紐	⑥											4			5			
7	三日月	⑦	2										4			7			
8	果樹園					⑧							3			4			
9	灯台	3				1				1			4		⑨	11			
10	菱1	4								2		⑩	3			10	下野煉瓦製造か		
11	菱2	⑪	2										2		1	6			
12	四角斜線	⑫								1			1		1	4			
13	5望星点	⑬											3			4			
14	正田	2										⑭	2		1	6			
15	長方田								1		⑮	2			1	5			
16	三葉束								1		⑯	1				3			
17	六葉	2										1		⑰		4			
18	井桁									1		⑱	1		1	4	岩崎煉瓦明治23年か 貝塚煉瓦か		
19	丸梅											⑲				1	須永藤吉煉瓦製造所(足利市) 明治21年		
20	弧						⑳									1			
21	F-3									1						2	耐火煉瓦		
22	KANTO												㉒			1	耐火煉瓦 関東化粧煉瓦株式会社		
	無文	1				1						㉓ ㉔ ㉕ ㉖	7		1	14			
	不明	2	1				4	2	1							10			
	総数	8	26	1	1	0	1	2	1	4	2	2	8	12	50	0	2	11	132



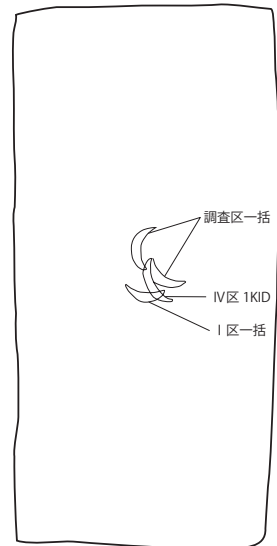
1 ひょうたん



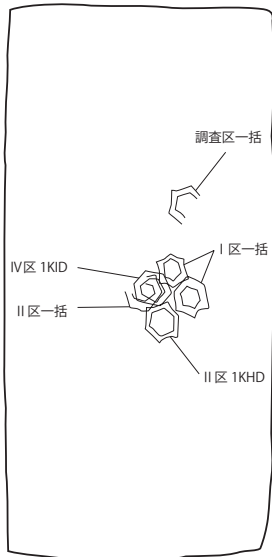
3 扇



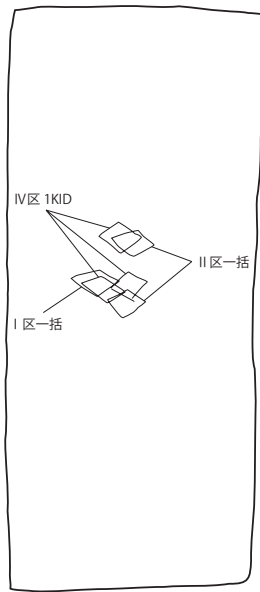
4 丸



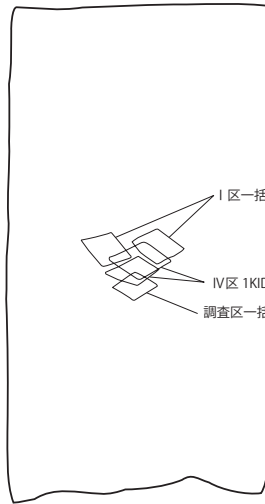
7 三日月



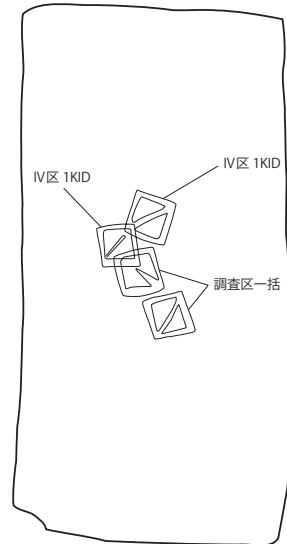
9 灯台



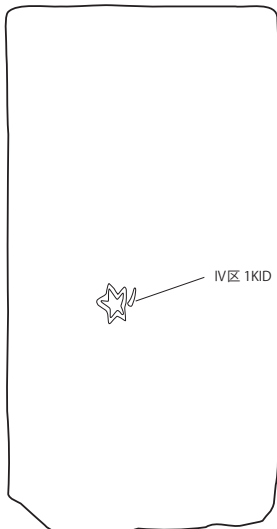
10 菱1



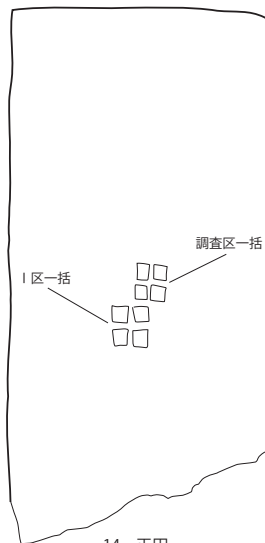
11 菱2



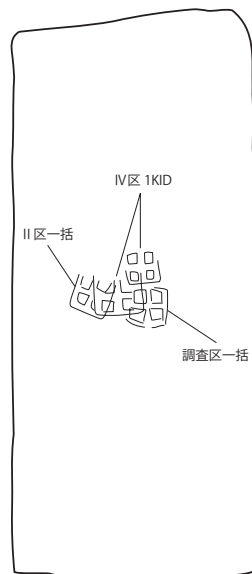
12 四角斜線



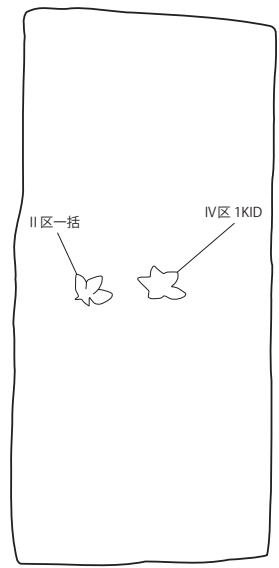
13 5望星点



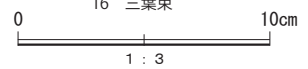
14 正田



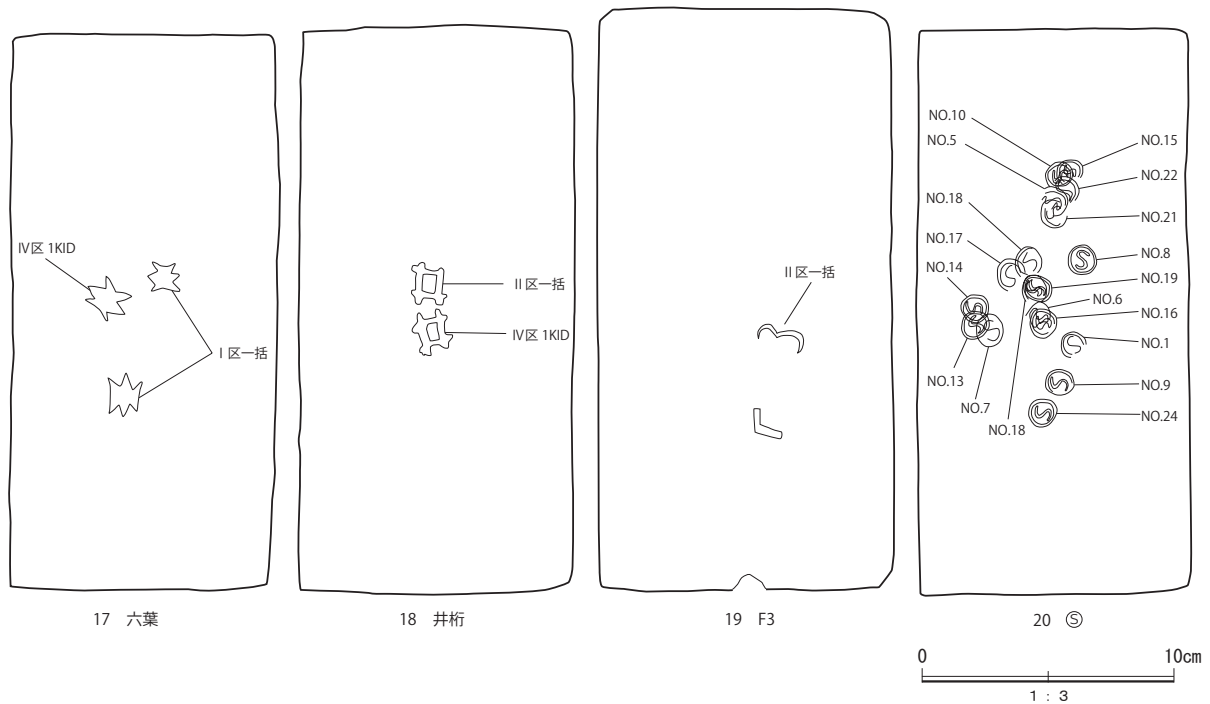
15 長方田



16 三葉束



第 141 図 煉瓦刻印位置図 (1)



第 142 図 煉瓦刻印位置図（2）

町の下野煉瓦，18の「丸梅」が栃木県足利市の須永藤吉煉瓦，20の「KANTO」は栃木県那珂川町の関東化粧煉瓦株式会社で製造された可能性がある。19の「F3」と20は耐火煉瓦である。製造年代は明治20年代以降と推定される。初期の煉瓦は型に粘土を入れて叩きしめて解放部をヘラ削りして成形しているが，下端隅に粘土を押圧してから中央に粘土をあんこ状に入れるものと，粘土塊を入れるものがある。前者は底板と枠が一体の箱で，後者は枠板のみで底板と分離していると推測される。

排水施設の煉瓦枡の煉瓦は機械抜きピアノ線で切断したものである。全て丸にSの刻印が押されている。北海道江別市の鈴木煉瓦の可能性もある。昭和初期の煉瓦の可能性もある。

煉瓦の刻印位置を図化してみたが明治時代の煉瓦の刻印はほぼ同位置に印刻されているものが多いが，昭和前期と推定される煉瓦のS刻印は3カ所に別れていることから，明治時代の職人は煉瓦を型抜きした人が印刻した可能性がある。昭和前期の煉瓦はトコロテン状に押し出されピアノ線で切断した煉瓦に3人の職人が印刻した可能性がある。

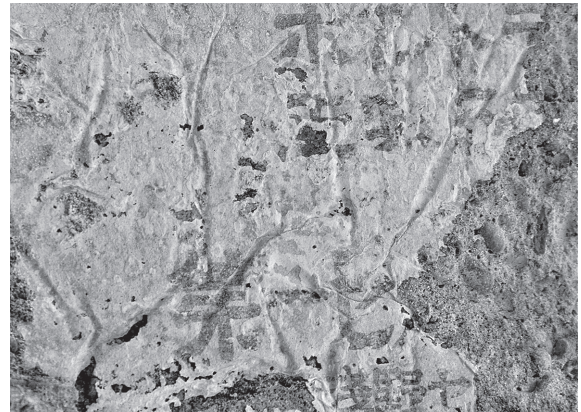
4 青磁（口絵2）

青磁は巻頭図版に写真掲載した。13世紀の同安窯の劃花文鎬連弁文碗，肥前の17世紀代の鉄絵皿，青磁の香炉・大皿・壺・八卦文の青磁角瓶・碗が出土した。

第2節 確認された遺構と生活面の様相

1 各生活面の様相

前記したように今回の調査では、おおよそ現代・近代・幕末明治・江戸一面・江戸二面と江戸前期以前に遡る造成遺構が確認された。遺構としては検出面でとらえたため若干疑問の残る遺構も存在するが、いくつかの遺構について補足してきたい。現代の遺構は現在の駐車場のアスファルト直下の整地に伴って掘り込まれ、さらに昭和20年8月の水戸大空襲の大量の焼土と炭化物層を掘り込んだ

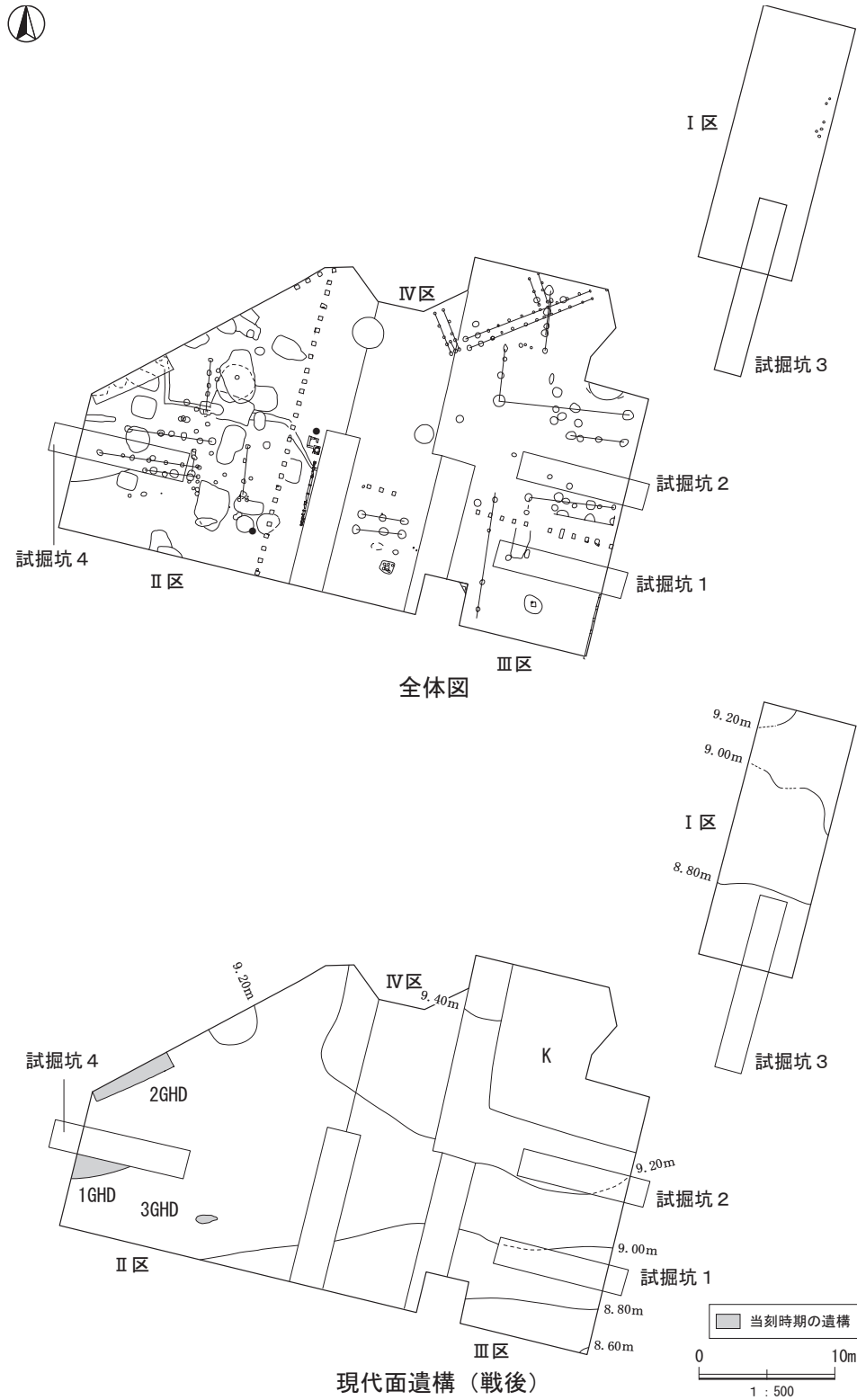


セメント袋反転写真

廃棄土坑で、実年代が解る資料は第1号近代廃棄土坑の9でバヤリースオレンジのビンに60/4とある。1960（昭和35）年4月である。また、第1号近代井戸（1KID）の8はカルピスKK・コーヒー缶に昭和56（1981）年、9のマックスコーヒー缶に昭和58（1983）年、11のKKアルファの鍵は昭和30（1955）年～昭和56（1981）年である。I区のコングリート躯体にセメント袋が張り付いていた。写真を反転して確認したところ「第一セメント・浅野セメント」とある。浅野セメントは大正6年に創業、昭和24（1949）年に第1セメント社名変更、平成15（2003）年に（株）デイ・シイになる。よって昭和24（1949）年～平成15（2003）年間となる。第1号近代井戸（1KID）廃棄年代は昭和50年代後半と考えられるが、第1号近代礎石建物（1KST）に東に位置し昭和20（1945）年8月の水戸大空襲の焼土層を切っていることからその間と考えられる。

近代の遺構の年代はⅢ区第1号近代廃棄土坑（1KHD）は第2号近代礎石建物（2KST）に切られている。推定年代は地図の変遷と切合関係から、大正12（1923）年9月の関東大震災から第1・2・3・6号近代礎石建物の建てられた昭和9（1934）年7月1日の間であろう。よって近代は大正12（1923）年から昭和9（1934）年の前半と昭和9（1934）年から昭和20（1945）年の後半に分けられ、前半は近代廃棄土坑、後半は近代礎石建物（川崎倉庫）と考えられる。この近代礎石建物の構造は推論ではあるが検討してみたい。大谷石の林立は第1号近代礎石建物と第2号と第6号近代礎石建物は連結していたと想定される。この礎石列が建物の棟方向で大棟と考えるかであるが、第1号近代礎石建物に相対するⅡ区第1・2号近代礎石、第1・6号近代礎石建物に相対するⅣ区第1号近代礎石礎石・Ⅲ区第1・3号近代礎石が相対している。この礎石も建物に関連していると考え、倉庫としての空間を確保することを考えると壁建の可能性が考えられる。とすると1号倉庫（Ⅱ区第1号近代礎石建物、第1・2号近代礎石）は、南北方向の建物で桁行13間以上×梁行6間の倉庫建物に復元できる。同じく2号倉庫（Ⅳ区第6号・Ⅲ区第2号近代礎石建物、Ⅳ区第1号近代礎石、Ⅲ区第1・3号礎石）は東西方向の建物で、桁行12間以上×梁行3間の倉庫建物に復元できる。この建物には1号排水施設（Ⅱ区第1号土管配管・第1号煉瓦柵）が伴うと考えられることから2号倉庫は西妻は1号排水施設の手前までと考えられる。

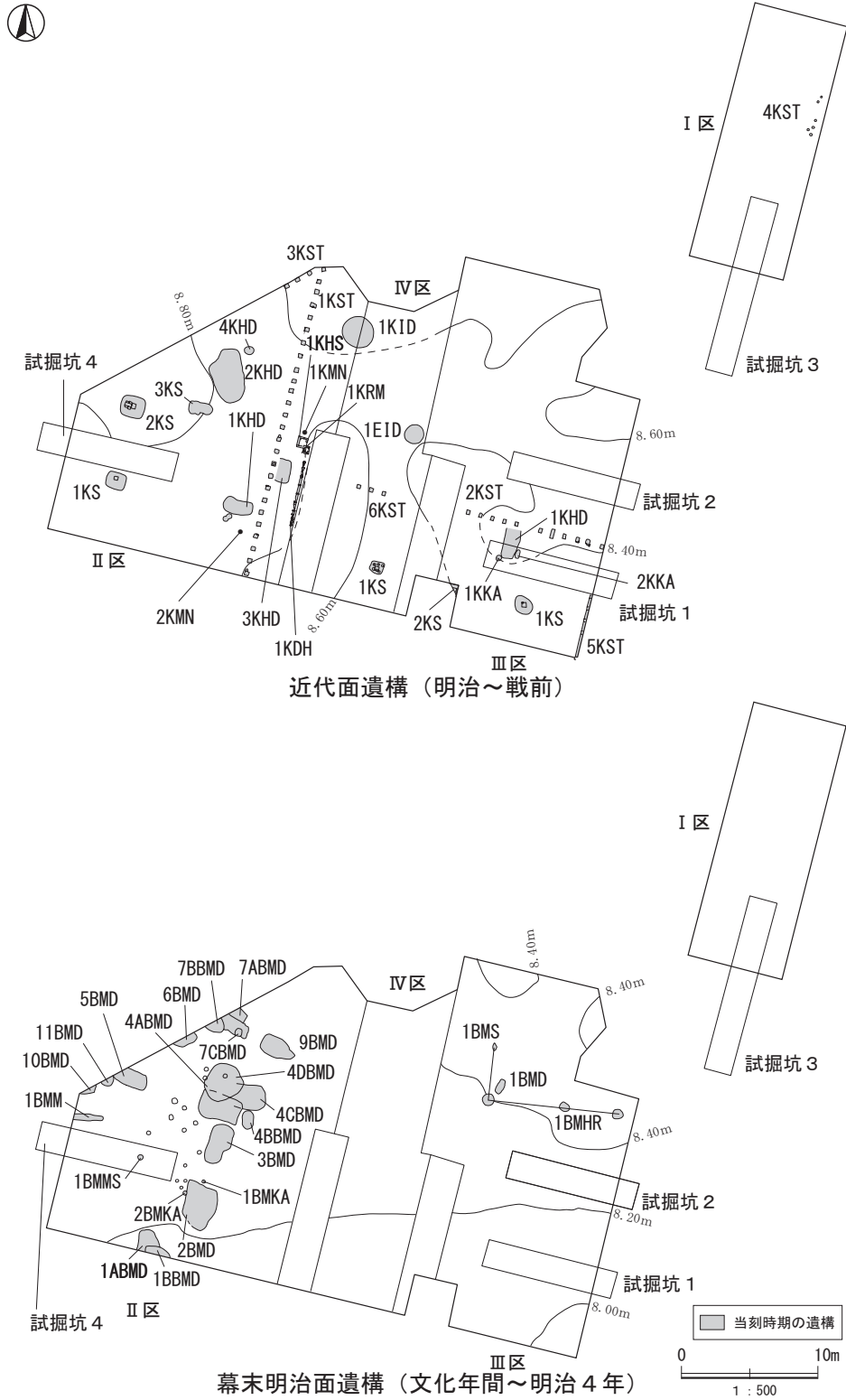
幕末明治の年代は大量の炭化物の層から、水戸城の三階楼を除き消失した明治4（1871）年から川崎倉庫が確認できる明治42（1909）年の間になる。また、江戸一面で確認した第1号江戸井戸（1EID）木製樽型井戸枠の裏込中から1銭銅貨が出土し明治18（1885）年とあることから、遺構名はそのままに近代に移動した。銅貨には「百枚を以て一円に換る」とあり当時の世相を感じる。それによって川崎倉庫の開設は明治18（1885）年から



第143図 遺構変遷図(1)

明治 42 (1909) 年の間に絞られることになる。調査では幕末明治としたが、実態は明治 4 (1871) 年から明治 18 (1885) 年の間の廃棄土坑が作られ廃墟と化した時期と思われる。

江戸一面は水戸城築城に伴う造成工事の完成面で、I 区の切土法面の 8.2 m を基準に整地されている。II 区の第 1・2・4 号掘立柱建物は近代礎石建物と工法と建物の軸が相違することから江戸期の建物で重構造から蔵と想定され、朝比奈邸の蔵であろう。幕末明治



第 144 図 遺構変遷図 (2)

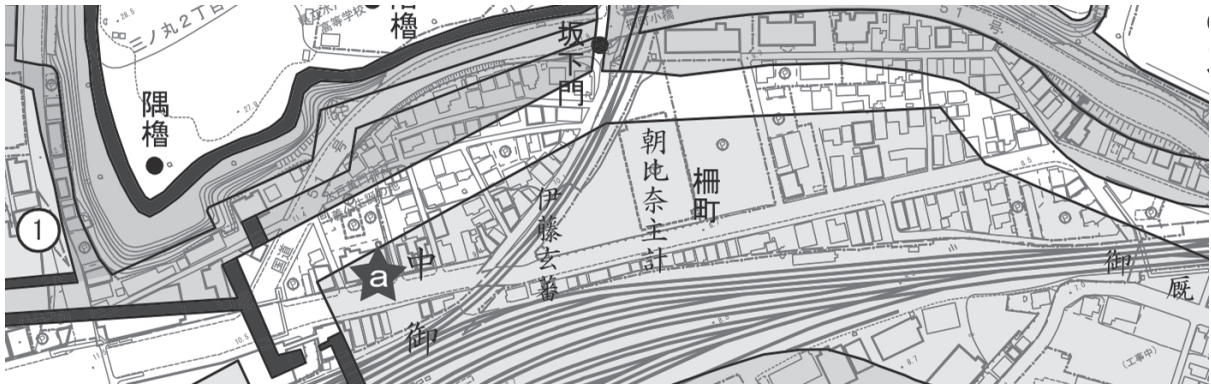
に固く叩きしめ版築状にしている。崩落等の危険が伴う事から土層は作図出来なかったが、状況は把握できた。近代礎石建物の打込み、杭は標高 8.5 mか約 3.0 mの杭を打込んでいるので砂利層近くまで達している。江戸期の掘立柱建物の杭は、標高 8.0 mから近代礎石建物より短い 7 尺～8 尺の杭を打込んでいた。江戸期の建物も砂利層近くまで打込まれていた。杭の打込みの周囲にはロームがグライ化し青色に変色している。人力で打込む工法の労力が思案される。

第3節 古地図からみた幕末から現代までの土地利用の変遷

江戸時代の絵図や近代の地図から遺跡の土地変遷を考えてみたい。公刊されている水戸城の絵図で最も古いのは天保元（1830）年の水戸絵図である。資料（※1）には朝比奈（主計）弥太郎の屋敷地とあるが、西に伊藤玄蕃の屋敷が隣接している。さらに西隣には中御殿があり徳川光圀の生誕地とされ、現在は「水戸黄門神社」となっている。屋敷境が明瞭でないため地図上で確認すると坂下門の東が朝比奈屋敷、西が伊藤屋敷の様である。屋敷表は水堀に沿っている道にあると考えられる。調査区は位置上からは伊藤玄蕃の屋敷地のように見えるが、朝比奈氏が家老で 1300 石、伊藤主殿友施が大番頭で 700 石であることを考えると屋敷地は朝比奈氏の方が広大であった可能性がある。また伊藤玄蕃は光圀の側近であった。

明治 23（1890）年の地図には鉄道が敷設された。水戸駅は明治 22（1889）年 1 月 16 日に水戸鉄道開通とともに開設された。また、水戸駅の住居表示が柵町であったことから、当初は「柵町停車場」とも言われた。明治 42（1909）年の地図には川崎倉庫の建物が道路側に 1 棟描かれている。明治 34（1901）年の地図には表示がなく、川崎倉庫は明治 34（1901）年から明治 42（1909）年の間に開設されていたようである。大正 4（1915）年には同一に同規模の建物が確認できる。大正 9（1920）年 7 月 20 日発行の地図には建物の規模が大きくなり倉庫内に水戸駅からの引込線路が敷設されたようである。調査では線路の枕木が出土した。大正 11（1922）年 10 月 15 日の地図には川崎倉庫の名称はあるが建物は表示されていない。大正 12（1923）年 1 月 1 日の地図には規模の大きい「工」字状の建物が建てられている。大正 9（1920）年 10 月 15 日から大正 12（1923）年 1 月 1 日の間に改築されたものであろう。大正 14（1925）年 6 月 17 日発行の地図には川崎倉庫はなく個人住宅の「川崎鉄五郎」「ささや旅館」「湊屋漬物店」の表示がある。次の昭和 9（1934）年 7 月 1 日発行の地図には大規模な倉庫群が建てられた。建物配置は、調査で確認した大谷石を林立する第 1・2・3・4・5・6 号近代礎石建物と合致する。Ⅱ区第 1・2 号近代礎石、Ⅳ区第 1 号近代礎石、Ⅲ区第 1・2 号近代礎石も建物構造として伴う。これは大正 12（1923）年 9 月の関東大震災で被災し一時期旅館が営まれ、昭和 9（1934）年までに再建されたのであろう。昭和 10（1935）年 8 月 5 日発行の地図には建物表記はないが、川崎倉庫の記載があり敷地内に道が整備されている。図示していないが昭和 15（1940）年の地図には川崎倉庫の建物表記があり、昭和 35（1960）年の地図には建物表記がない。調査では昭和 20（1945）年 8 月の水戸大空襲で焼失したと判断した。

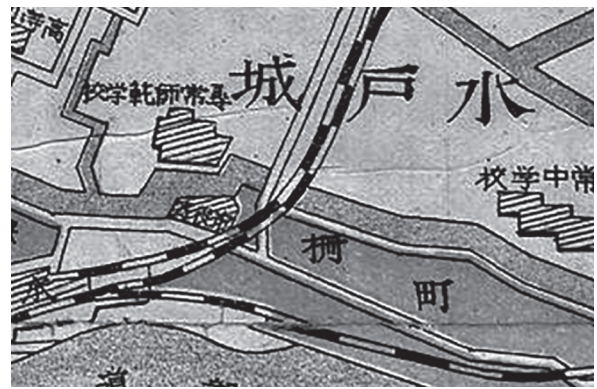
昭和 42（1967）年に調査区には「丸高冷凍 KK」が建設され、「酒の店夢路」が営業し



文久元年・嘉永4年により作成(茨城大学蔵)※1



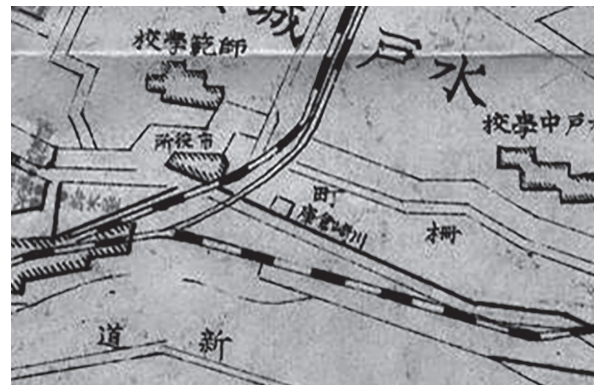
明治23年(水戸市立博物館蔵)※2



明治34年(水戸市立博物館蔵)※2



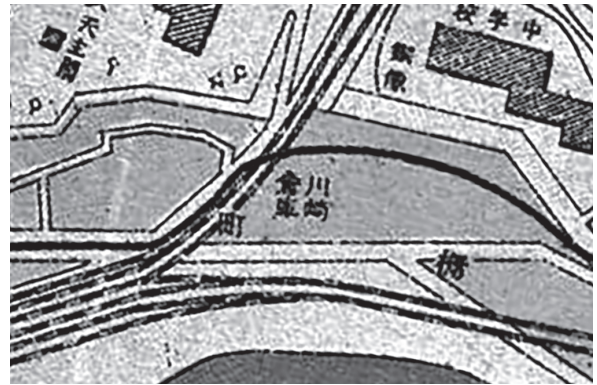
明治42年(水戸市立博物館蔵)※2



大正4年(水戸市立博物館蔵)※2

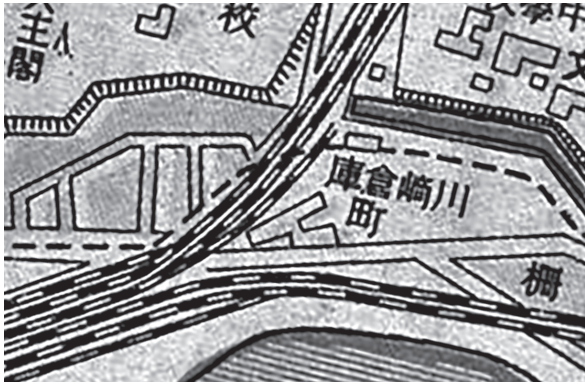


大正9年7月20日(水戸市立博物館蔵)※2

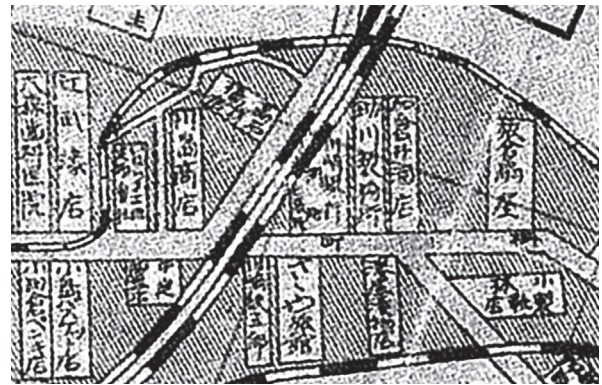


大正11年10月15日(水戸市立博物館蔵)※2

第146図 古地図変遷図(1)



大正 12 年 1 月 1 日 (水戸市立博物館蔵) ※ 2



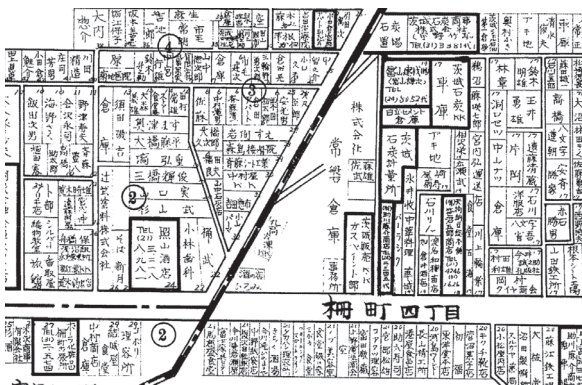
大正 14 年 6 月 17 日 (水戸市立博物館蔵) ※ 2



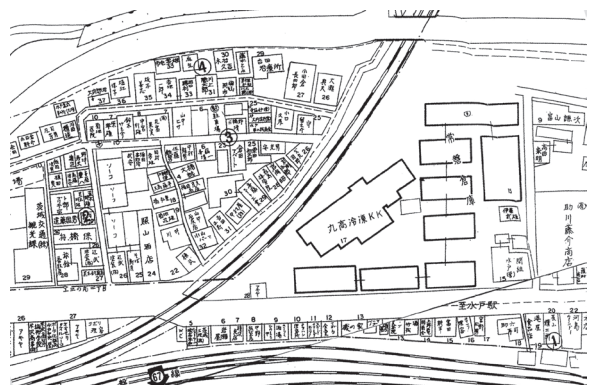
昭和 9 年 7 月 1 日 (水戸市役所蔵) ※ 3



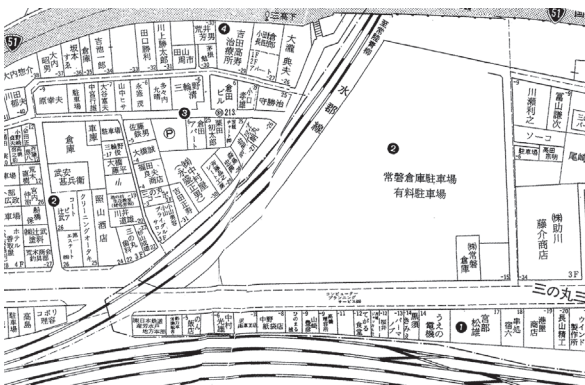
昭和 10 年 8 月 5 日 (水戸市立博物館蔵) ※ 2



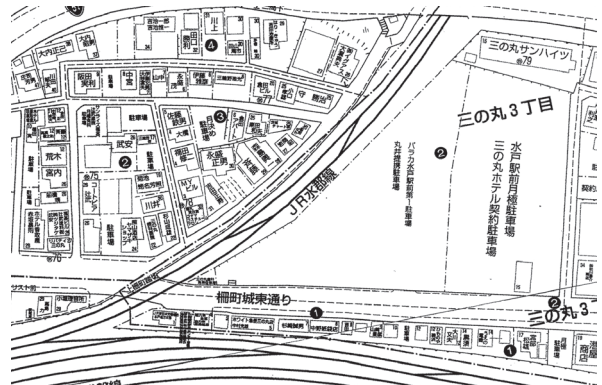
昭和 42 年 (ゼンリン住宅地図) ※ 4



昭和 50 年 (ゼンリン住宅地図) ※ 4



平成 2 年 (ゼンリン住宅地図) ※ 4



平成 17 年 (ゼンリン住宅地図) ※ 4

第 147 図 古地図変遷図 (2)

ている。川崎倉庫は常盤倉庫に名称変更され東に占地している。昭和 50（1975）年には調査区のⅠ区・Ⅲ区は「丸高冷凍 KK」の敷地と重なり、「酒の店夢路」は空き家になっている。Ⅰ区・Ⅲ区から出土した建物躯体は「丸高冷凍 KK」躯体と考えられる。躯体の浅野セメント袋反転資料は昭和 24（1949）年～平成 15（2003）年になる。冷凍倉庫の西に位置した第 1 号近代井戸の出土遺物の缶は昭和 56（1981）～58（1983）年、アルファアの鍵は昭和 30（1955）～56 年（1981）で「丸高冷凍 KK」は昭和 58（1983）年前後に解体されたと考えられる。平成 2（1990）年には常盤倉庫駐車場で有料駐車場となっている平成 17（2005）年にはパラカ株式会社に譲渡され駐車場として営業されていた。

- ※ 1 資料は、文久元（1861）年作成の「水戸家御屋敷割図」（茨城大学図書館蔵）と嘉永 4（1851）年作成の「好文亭四季模様之図」（大洗町幕末と明治の博物館寄託）を基に茨城大学が作成した地図である。
- ※ 2 資料は、水戸市立図書館が所蔵する明治 23 年・明治 34 年・明治 42 年・大正 4 年・大正 9 年 7 月 20 日・大正 11 年 10 月 15 日・大正 12 年 1 月 1 日・大正 14 年 6 月 17 日・昭和 10 年 8 月 5 日発行の古地図を使用した。
- ※ 3 資料は、水戸市役所が所蔵する昭和 9 年 7 月 1 日発行の古地図を使用した。
- ※ 4 資料は、昭和 42 年・昭和 50 年・平成 2 年・平成 17 年発行のゼンリン住宅地図を使用した。